高知県香美郡土佐山田町

KA MI　TOSAYAMADA

ひびのきサウジ遺跡
発掘調査報告書

（土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第８集）

土佐山田町教育委員会　1990

ひびのきサウジ遺跡
発掘調査報告書

（土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第８集）

ST 8

ST 8

SK 21　壺棺墓 4

SE 1

序

土佐山田町には，縄文時代から近世に至るまでの数多くの遺跡が分布しておりますが，中でも今まで調査した「ひびのき遺跡」「林田（はやしだ）遺跡」などに代表されます弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡は，高知県下でも有数の分布密度の高さを示しています。

埋蔵文化財は，古代住民の生活様式を解く鍵として貴重なものでありますが，各種開発事業により一朝にして破壊される恐れがあり，まことに憂慮すべき事態が，しばしば発生しております。今回の「ひびのきサウジ遺跡」の発掘調査もその例に洩れず住宅地造成によって影響を受ける範囲について，貴重な埋蔵文化財の保護と，記録保存に万全を期すため実施したものであります。

今次の本発掘調査によって当遺跡は，弥生時代から中・近世にかけての複合遺跡であることが，明らかになりました。竪穴住居や壺棺墓群と共に県内最古の井戸が検出され，平安時代の土器が多量に発見され，今後の研究に新たな資料を得ることができたのは最大の成果でありました。

終りに本調査で御指導をいただきました県教育委員会高橋啓明氏，暖かいご理解と，ご協力を載きました地権者の四国電力株式会社，炎熱酷暑の中で作業に従事されました皆様や，本調査にあたって何かとご協力いただいた関係者及び地域住民の方々に衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成２年３月

土佐山田町教育委員会教育長　岡本　章博

例　　言

1．本書は，四国電力株式会社山田寮新築事業にかかわる「ひびのきサウジ遺跡」の発掘調査報告書である。

2．遺跡は，高知県香美郡土佐山田町百石町２丁目に所在する。ひびのき遺跡群に所在することから小字の「サウジ」をとって「ひびのきサウジ遺跡」と呼称することとする。

3．調査対象面積は，約2,600㎡であり，第１次調査1,400㎡終了後引き続いて第２次調査1,200㎡の調査を実施した。

4．調査は，土佐山田町教育委員会の依頼により，高知県教育委員会が行った。

調査顧問　岡本　健児　（高知県文化財保護審議会会長）

調 査 員　高橋　啓明　（高知県教育委員会・文化振興課・社会教育主事）

事務担当　吉村　泰典　（土佐山田町教育委員会・社会教育課・係長）

5．本書の執筆・編集は高橋が行った。執筆に際しては，調査顧問の岡本健児氏の御指導を得た。

6．遺構については，ＳＴ（竪穴住居），ＳＢ（掘立柱建物），ＳＫ（土坑），ＳＥ（井戸），ＳＤ（溝），ＳＡ（柵列），Ｐ（柱穴）で標示した。

7．出土遺物の図版番号については，実測図の番号と一致している。

8．調査にあたっては，四国電力株式会社，土佐山田町農業協同組合，付近の住民の方々等の協力を得た。また吉原達生氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。

9．測量では，小松幹典氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。

10．測量補助及び資料整理では，吉成承三・小松幹明・大原喜子・山中美代子・吉本睦子・谷相祐子・矢野雅・山本裕美子・浜田雅代・竹村延子・山本利恵・松木富子等各氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。

11．火山灰分析については，株式会社京都フィション・トラックに依頼した。

12．遺物は，土佐山田町教育委員会及び高知県教育委員会で保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　発掘調査に至る経過 …… 2

第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　調査の方法と調査区の概要 …… 5

1．調査の方法 …… 5

2．調査区の概要 …… 5

第Ⅳ章　基本層序と包含層出土の遺物 …… 7

1．基本層序 …… 7

2．包含層出土の遺物 …… 7

第Ⅴ章　遺構と遺物 …… 12

1．弥生時代 …… 12

2．古墳時代 …… 47

3．平安時代 …… 60

4．中世～近世 …… 78

第Ⅵ章　総　　括 …… 97

1．遺物について …… 97

2．遺構について …… 102

火山灰分析結果報告書 …… 130

図 版 目 次

Fig 1　周辺の遺跡分布図 …… 1
Fig 2　遺跡周辺地名図 …… 3
Fig 3　発掘調査位置図 …… 6
Fig 4　トレンチ・グリッド・セクション位置図 …… 8
Fig 5　基本層序 …… 9
Fig 6　包含層出土遺物 …… 11
Fig 7　ＳＴ１実測図 …… 13
Fig 8　ＳＴ３実測図 …… 14
Fig 9　ＳＴ６実測図 …… 15
Fig 10　ＳＴ８実測図 …… 17
Fig 11　ＳＴ９実測図 …… 19
Fig 12　ＳＫ３・33・37，ＳＤ２・６・７・10-Ａ・12・13・15・23実測図 …… 20
Fig 13　壺棺墓群位置図 …… 23
Fig 14　ＳＫ８-壺棺墓１実測図と出土遺物 …… 25
Fig 15　ＳＫ12-壺棺墓２，ＳＫ19-壺棺墓３実測図と出土遺物 …… 26
Fig 16　ＳＫ20-壺棺墓６実測図と出土遺物 …… 28
Fig 17　ＳＫ21-壺棺墓４実測図と出土遺物 …… 29
Fig 18　ＳＫ21-壺棺墓４出土遺物 …… 30
Fig 19　ＳＫ22-壺棺墓５実測図と出土遺物 …… 32
Fig 20　ＳＫ23-壺棺墓７，ＳＫ24-壺棺墓８，ＳＫ32-壺棺墓９実測図と出土遺物 …… 34
Fig 21　ＳＴ１出土遺物 …… 35
Fig 22　ＳＴ３・６出土遺物 …… 36
Fig 23　ＳＴ６出土遺物 …… 37
Fig 24　ＳＴ８出土遺物 …… 38
Fig 25　〃 …… 39
Fig 26　〃 …… 40
Fig 27　〃 …… 41
Fig 28　〃 …… 42
Fig 29　〃 …… 43
Fig 30　〃 …… 44
Fig 31　〃 …… 45
Fig 32　ＳＴ９，ＳＫ３・33，ＳＤ12，Ｐ213・832・1021・1166・1500出土遺物 …… 46

Fig 33　ＳＴ２実測図 …… 48
Fig 34　ＳＴ４実測図 …… 49
Fig 35　ＳＴ５実測図 …… 50
Fig 36　ＳＴ７実測図 …… 51
Fig 37　ＳＴ10実測図 …… 53
Fig 38　ＳＫ７・13・14・27・28・30・35・38，ＳＤ３・４・８・14・20実測図 …… 54
Fig 39　ＳＴ２・４・５・７出土遺物 …… 58
Fig 40　ＳＴ７・10，ＳＫ14，ＳＤ４，Ｐ1803出土遺物 …… 59
Fig 41　ＳＢ１実測図 …… 61
Fig 42　ＳＢ２，ＳＡ１実測図 …… 62
Fig 43　ＳＢ３・４実測図 …… 63
Fig 44　ＳＫ５・６・17・29，ＳＤ１・10-Ｂ・11実測図 …… 64
Fig 45　ＳＥ１実測図 …… 66
Fig 46　ＳＥ１出土遺物 …… 71
Fig 47　〃 …… 72
Fig 48　〃 …… 73
Fig 49　〃 …… 74
Fig 50　〃 …… 75
Fig 51　〃 …… 76
Fig 52　ＳＥ１，ＳＤ，Ｐ出土遺物 …… 77
Fig 53　ＳＢ５・７実測図 …… 79
Fig 54　ＳＢ６実測図 …… 80
Fig 55　ＳＢ８実測図 …… 81
Fig 56　ＳＢ９実測図 …… 83
Fig 57　ＳＢ10・12実測図 …… 84
Fig 58　ＳＢ11実測図 …… 85
Fig 59　ＳＫ１・２・４・９～11・15・16・18・25・26・31・34・36実測図 …… 88
Fig 60　ＳＤ５・９・10-Ａ・16～19・21・22・24実測図 …… 91
Fig 61　ＳＢ，ＳＫ，ＳＤ，Ｐ出土遺物 …… 95
Fig 62　ＳＫ，ＳＤ，Ｐ出土遺物 …… 96
Fig 63　全体図　（別　添）

表　目　次

第１表　周辺の遺跡分布表
第２表　ＳＥ１出土・黒色土器椀法量表 …… 99
第３表　〃　皿法量表 …… 99
第４表　〃　杯法量表 …… 99
第５表　〃　椀法量表 …… 99
第６表　緑釉陶器・二彩陶器県内出土地 …… 104
第７表　古代「墨書・刻書土器」県内出土地 …… 104
第８表　遺物観察表（包含層出土遺物） …… 107
第９表　〃　（　〃　） …… 108
第10表　〃　（ＳＴ１・３出土遺物） …… 109
第11表　〃　（ＳＴ３・６出土遺物） …… 110
第12表　〃　（ＳＴ６・８出土遺物） …… 111
第13表　〃　（ＳＴ８出土遺物） …… 112
第14表　〃　（　〃　） …… 113
第15表　〃　（　〃　） …… 114
第16表　〃　（　〃　） …… 115
第17表　〃　（　〃　） …… 116
第18表　計測表　（　〃　） …… 116
第19表　遺物観察表（ＳＴ９，ＳＫ３・33，ＳＤ12，Ｐ213・832・1021・1166・1500） … 117
第20表　〃　（ＳＴ２・４・５・７出土遺物） …… 118
第21表　〃　（ＳＴ７・10，ＳＫ14，ＳＤ４，Ｐ1803出土遺物） …… 119
第22表　〃　（ＳＥ１出土遺物） …… 120
第23表　〃　（　〃　） …… 121
第24表　〃　（　〃　） …… 122
第25表　〃　（　〃　） …… 123
第26表　〃　（　〃　） …… 124
第27表　〃　（　〃　） …… 125
第28表　〃　（　〃　） …… 126
第29表　〃　（ＳＥ１，ＳＤ１・11，Ｐ586・683・1649・588・
591・500・116出土遺物） …… 127
第30表　遺物観察表（ＳＢ９・11，ＳＫ15・18・36，ＳＤ10-Ａ・17～19，
Ｐ103出土遺物） …… 128

第31表　遺物観察表（Ｐ105・746・778・1135・1494・1544・1802・1804出土遺物）…… 129
第32表　土錘・釘・砥石計測表（ＳＢ９・ＳＫ４・ＳＤ５・10，Ｐ409・1711・1135出土遺物）…… 129

写　真　目　次

ＰＬ１　Ａ区完掘状態
ＰＬ２　Ｂ区完掘状態
ＰＬ３　調査前全景 …… 135
ＰＬ４　ＳＴ１検出状態，完掘状態 …… 136
ＰＬ５　ＳＴ２検出状態，完掘状態 …… 137
ＰＬ６　ＳＴ３検出状態，完掘状態 …… 138
ＰＬ７　ＳＴ４・５検出状態 …… 139
ＰＬ８　ＳＴ６検出状態，遺物出土状態 …… 140
ＰＬ９　ＳＴ７完掘状態，ＳＴ８検出状態 …… 141
ＰＬ10　ＳＴ８バンク …… 142
ＰＬ11　ＳＴ８・９完掘状態 …… 143
ＰＬ12　ＳＴ10完掘状態，北壁セクション …… 144
ＰＬ13　ＳＢ１・２検出状態，完掘状態 …… 145
ＰＬ14　ＳＫ３・４検出状態，ＳＫ11完掘状態 …… 146
ＰＬ15　ＳＫ15遺物出土状態，ＳＤ１セクション …… 147
ＰＬ16　ＳＥ１遺物出土状態，完掘状態 …… 148
ＰＬ17　ＳＤ10-Ａ・Ｂ検出状態，ＳＤ10-Ａバンク …… 149
ＰＬ18　ＳＴ１・２，包含層遺物出土状態 …… 150
ＰＬ19　ＳＴ３・４，包含層遺物出土状態 …… 151
ＰＬ20　ＳＴ４・５遺物出土状態 …… 152
ＰＬ21　ＳＴ６・９・10遺物出土状態 …… 153
ＰＬ22　ＳＴ８遺物出土状態 …… 154
ＰＬ23　ＳＴ８遺物出土状態 …… 155
ＰＬ24　ＳＫ３・37完掘状態，ＳＫ３・36・ＳＤ11・18遺物出土状態 …… 156
ＰＬ25　ＳＫ８-壺棺１，ＳＫ21-壺棺４遺物出土状態 …… 157

ＰＬ26　ＳＫ８-壺棺１，ＳＫ12-壺棺２，ＳＫ21-壺棺４，ＳＫ22-壺棺５，
ＳＫ20-壺棺６遺物出土状態 …… 158
ＰＬ27　ＳＫ23-壺棺７，ＳＫ24-壺棺８，ＳＫ32-壺棺９，Ｐ遺物出土状態 …… 159
ＰＬ28　ＳＥ１遺物出土状態 …… 160
ＰＬ29　ＳＥ１，Ｐ，ＳＢ１遺物出土状態 …… 161
ＰＬ30　包含層出土遺物 …… 162
ＰＬ31　壺棺出土遺物 …… 163
ＰＬ32　壺棺，ＳＴ１・３出土遺物 …… 164
ＰＬ33　ＳＴ３出土遺物 …… 165
ＰＬ34　ＳＴ８出土遺物 …… 166
ＰＬ35　〃 …… 167
ＰＬ36　〃 …… 168
ＰＬ37　〃 …… 169
ＰＬ38　〃 …… 170
ＰＬ39　〃 …… 171
ＰＬ40　〃 …… 172
ＰＬ41　ＳＴ５・８出土遺物 …… 173
ＰＬ42　ＳＴ７・９，ＳＫ３・33，Ｐ213・1021・1500出土遺物 …… 174
ＰＬ43　ＳＴ２・４・５・７・10出土遺物 …… 175
ＰＬ44　ＳＥ１出土遺物 …… 176
ＰＬ45　〃 …… 177
ＰＬ46　〃 …… 178
ＰＬ47　〃 …… 179
ＰＬ48　〃 …… 180
ＰＬ49　〃 …… 181
ＰＬ50　〃 …… 182
ＰＬ51　〃 …… 183
ＰＬ52　〃 …… 184
ＰＬ53　〃 …… 185
ＰＬ54　〃 …… 186
ＰＬ55　〃 …… 187
ＰＬ56　ＳＥ１，ＳＫ15，ＳＤ19，Ｐ116・591出土遺物 …… 188
ＰＬ57　ＳＫ36，ＳＤ10-Ａ・18，ＳＴ３・５出土遺物 …… 189
ＰＬ58　ＳＴ４～６・８，ＳＢ９，Ｐ58出土遺物 …… 190

ＰＬ59　ＳＴ10，包含層出土遺物 …… 191
ＰＬ60　ＳＥ１出土遺物 …… 192
ＰＬ61　ＳＥ１出土遺物，鉄器 …… 193
ＰＬ62　土錘・砥石 …… 194
ＰＬ63　壺棺３，Ｐ1166，ＳＴ１～３，ＳＤ13，表採出土遺物 …… 195

★ひびのきサウジ遺跡

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	西佐古遺跡	平安～中世	13	松原丸遺跡	奈良～平安	25	タンガン古窯址	古墳
2	大領遺跡	古墳～中世	14	東臼井遺跡	古墳	26	植カドタ遺跡	弥生～古墳
3	高柳遺跡	弥生～中世	15	山田三ツ又遺跡	古墳～平安	27	須江上段遺跡	古墳～平安
4	原遺跡	弥生～近世	16	伏原遺跡	弥生～平安	28	須江北遺跡	古墳～平安
5	古町西遺跡	弥生～平安	17	大塚遺跡	弥生～近世	29	ワラハラ神社遺跡	奈良～中世
6	稲荷前遺跡	弥生～近世	18	大塚古墳	古墳	30	南ケ内遺跡	弥生～古墳
7	楠目遺跡	弥生～近世	19	楠目城跡	中世	31	新改古墳群	古墳
8	大西土居遺跡	弥生	20	予岳古窯址群	古墳～平安	32	新改古窯址群	古墳～平安
9	前の芝遺跡	弥生～平安	21	前行古墳群	古墳	33	大谷古窯址群	奈良～平安
10	下タ野遺跡	古墳～中世	22	モジリカワ遺跡	弥生～近世	34	三反山田古窯址	平安
11	野々下遺跡	古墳～平安	23	西クレドリ遺跡	弥生～古墳	35	大法寺古窯址群	古墳～平安
12	坂西遺跡	古墳～中世	24	植村城跡	中世	36	ひびのき遺跡	弥生～近世

第１表　周辺の遺跡分布表

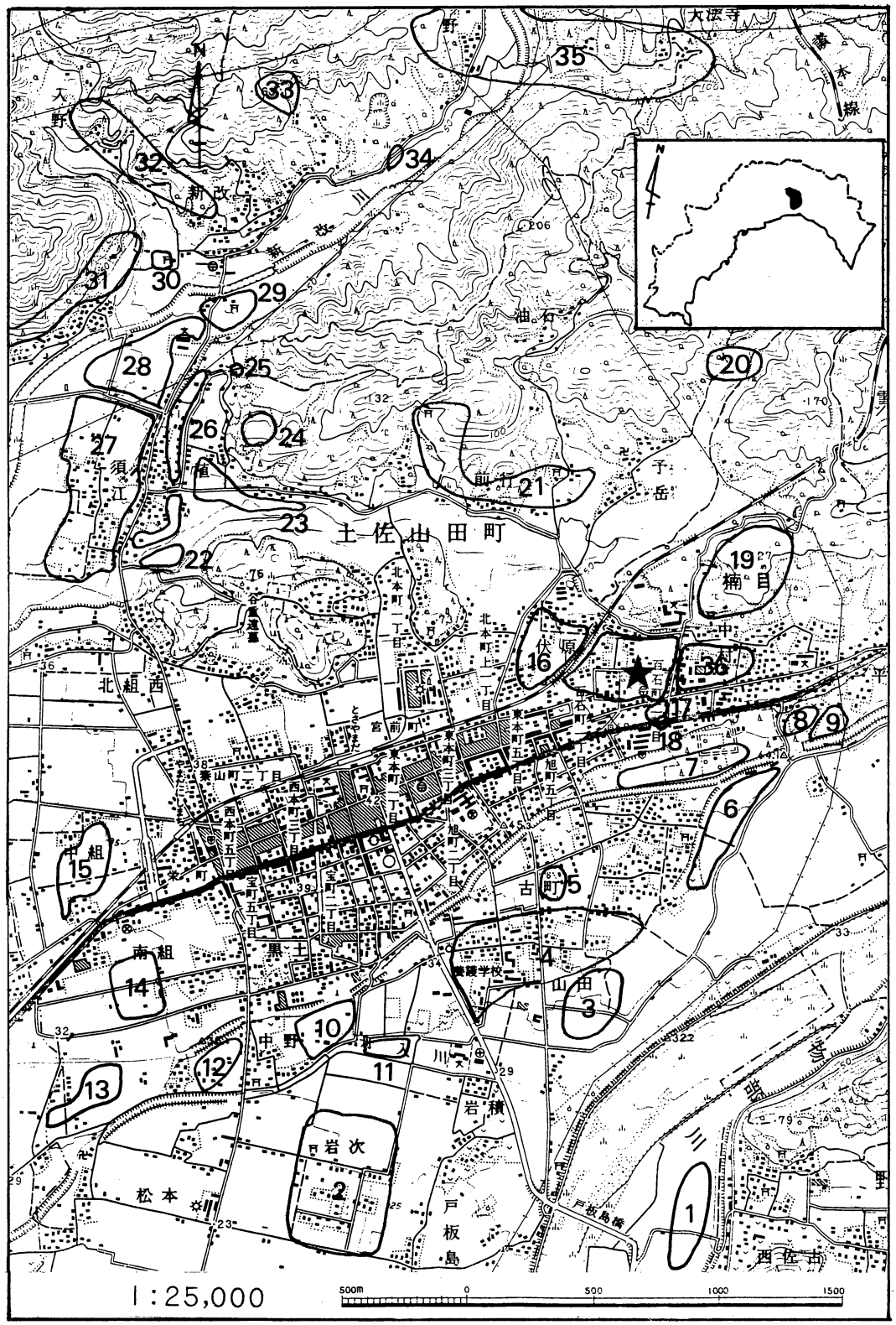


Fig 1　周辺の遺跡分布図

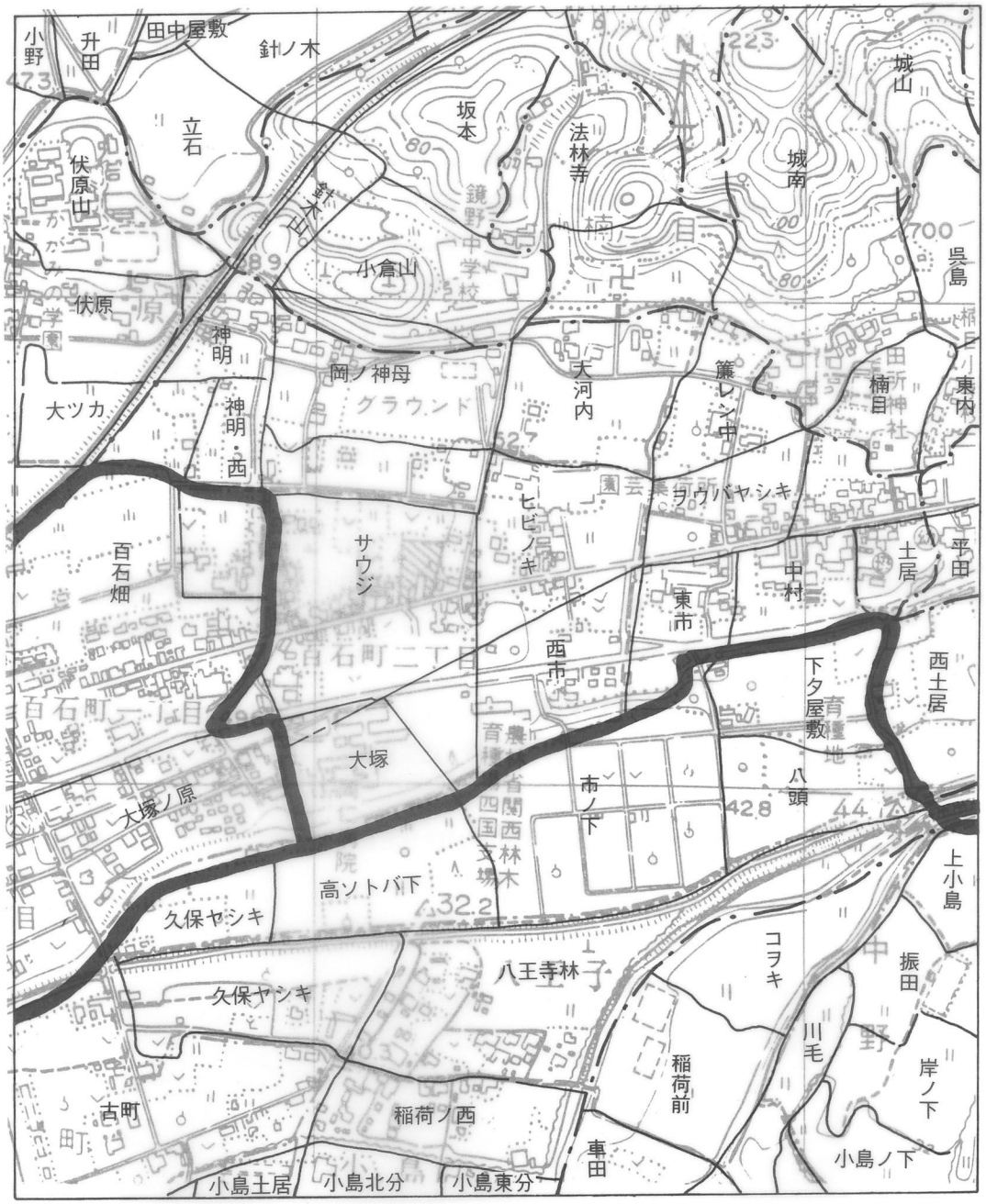
第Ⅰ章　発掘調査に至る経過

四国電力株式会社山田寮新築事業は，独身社員の福利厚生を目的として計画された。

一方，当事業対象地区は昭和57年に土佐山田農業協同組合本部建設に伴い緊急発掘調査の行なわれた「ひびのき遺跡」(1)に隣接し，「ひびのき遺跡群」のほぼ中央に位置する。現況は，畑及び「うばめがし」の苗木床となっており，弥生土器，土師器，須恵器等，弥生時代から中・近世にかけての遺物の散布がみられる。いわば古代より今日の土佐山田町を築き上げた祖先の営みの足跡ともいうべき埋蔵文化財が確認されており，当事業が施行せられれば，現状は大きく変更され，地下の埋蔵文化財は極めて甚大な影響を受けることは必定である。かかる意味において，以下の如き試掘調査を実施することとなった。

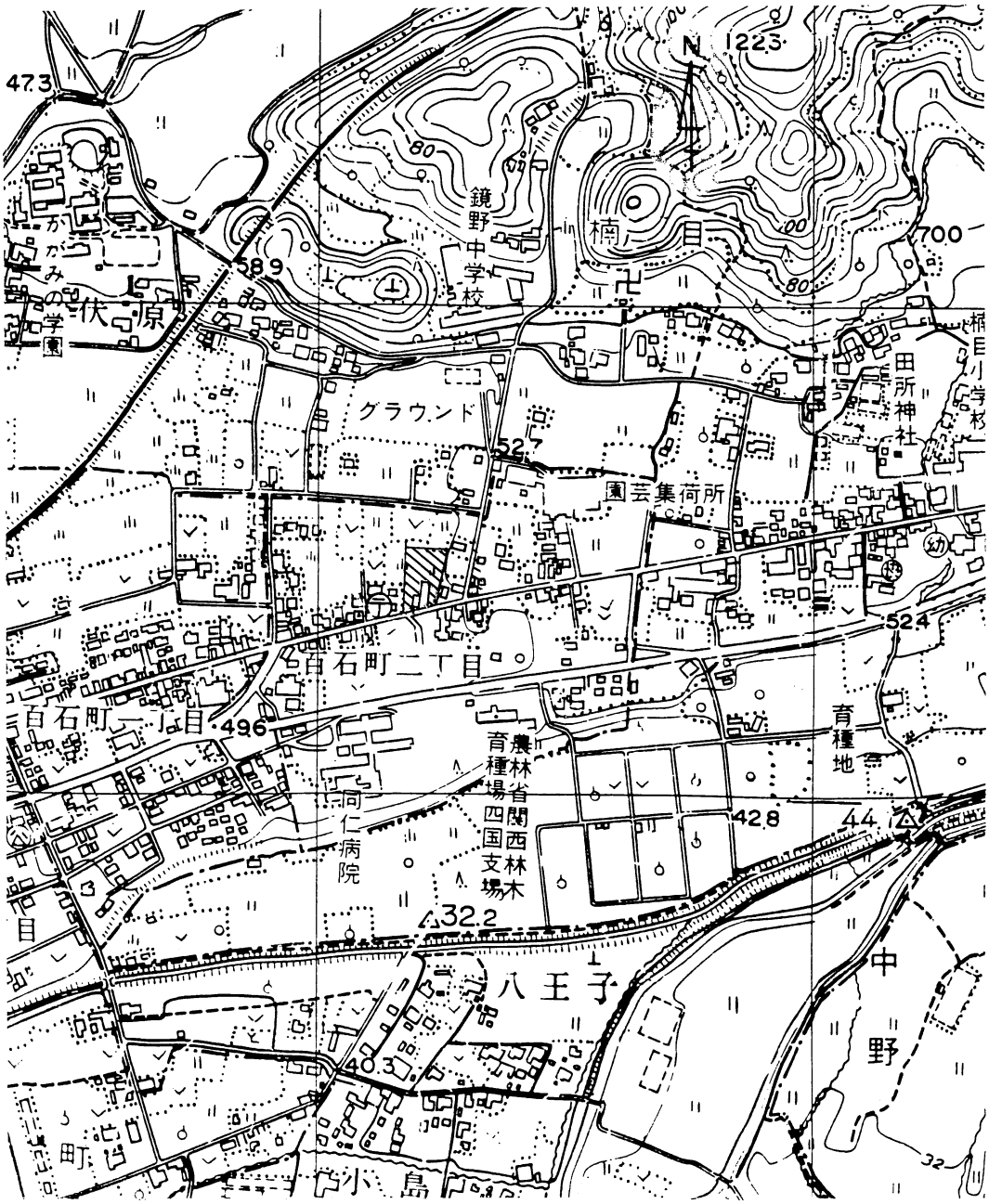
遺跡の性格，範囲，遺物，遺構の深度や残存の状況を把握する目的で平成元年４月26日から５月10日まで試掘調査を実施した。調査はＡ（２×32ｍ），Ｂ（２×27ｍ），Ｃ（２×40ｍ）の３本のトレンチ及び２×２ｍのグリッド２箇所，２×３ｍのグリッド１箇所を設定し一部拡張して，遺構及び遺物等の確認を行った。その結果，遺構として竪穴住居３棟，土坑５基，溝５条，柱穴多数が検出され，また遺物として弥生土器，土師器，須恵器，瓦質土器等が出土した。これらのことにより同遺跡は，弥生時代後期から中・近世の集落跡所在の可能性があることが確認された。

こうして，工事によって影響を受ける範囲について，四国電力株式会社の全面的協力によって，平成元年７月14日から10月30日まで緊急発掘調査を実施した。



1:10,000

Fig 2　遺跡周辺地名図



1:10,000

Fig 2　遺跡周辺地名図

第Ⅱ章　周辺の地理的，歴史的環境

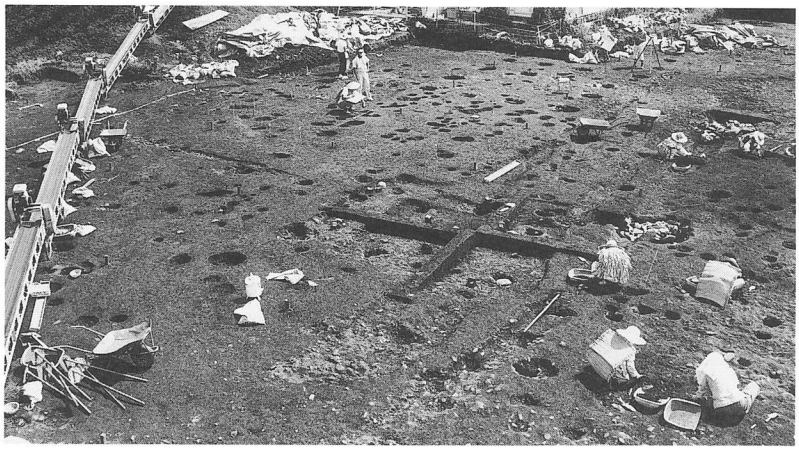
「ひびのきサウジ遺跡」は，県下三大河川の１つである全長70.5㎞の物部川の西岸の河岸段丘上に位置し，北部は山，東部は急激に下降，西部は緩やかに下降する台地状を呈する。高知市から東へ約15㎞の弥生土器が水汲みの途中で忘れ去られた「神の壺」で有名な龍河洞のある土佐山田町の市街地の東端部に所在する。土佐山田町は，東西に弧状の長い海岸線を有する高知県のほぼ中央部にあり，県下最大の平野である高知平野の東部に位置する。高知平野の中でも南国市・土佐山田町・野市町及びその周辺の平野部は，香美郡と長岡郡に属していたことから香長平野とも呼ばれており，本県最大の穀倉地帯を誇っている。

土佐山田町では，その上限を「飼古屋岩陰遺跡(2)」の遺物から縄文時代早期に求めることができる。弥生時代中期の「稲荷前遺跡(3)」「龍河洞遺跡(4)」，弥生時代後期には「林田遺跡(5)」弥生時代後期の土器型式，ひびのきⅠ式，同Ⅱ式の標準遺跡である「ひびのき遺跡(6)」等が営まれるようになる。

古墳時代になると「ひびのき遺跡」をはじめとして，本遺跡の南側20ｍに隣接する県下で唯一現存する前方後円墳の「大塚古墳(7)」や北側約200ｍの山手にある小倉山古墳，鏡野学園古墳，前行古墳群などが所在し，又須恵部の里として知られる「須江遺跡群」等がみられるようになる。

律令体制下においては，土佐最古の寺院跡である比江廃寺跡の瓦を焼いた植タンガン窯跡，香美郡衙推定地である「大領遺跡」「須江遺跡群」に入る推定「駅跡」等が所在するようになり，要所となる。

室町時代には，本遺跡の東北側約300ｍに山田城跡が所在し，西側に西ノ市，東ノ市の小字が残る等，当地域における継続的な発展を示している。



Ａ区の調査

第Ⅲ章　調査の方法と調査区の概要

1．調査の方法

凹状の調査区全域に遺構がみられるため全面発掘を実施したが，廃土置場確保のため便宜上Ａ区（第１次調査）とＢ区（第２次調査）とに分けて実施した。Ａ区は「うばめ樫」の植木床があり，深く根を降していたため，いわゆる包含層は攪乱を受けており，調査区の中央より北側等に第Ⅱ～Ⅲ層が部分的に残存するにすぎなかった。又Ｂ区は畑地であったが，遺物はあまり見られず包含層の様相を呈しておらず，わずかに残存する第Ⅲ層のみが包含層としてとらえることが出来る。遺構検出面は削平を受けており，竪穴住居の壁高は数センチを測るものが多く，中世以前の生活面は現地表とほぼ同じ程度の標高を有していたことが考えられる。

発掘調査の実施にあたっては，第Ⅲ層上面まで除去した後，遺構検出を行った。包含層の遺物取り上げや遺構検出は，地積測量図の境界点（10）Ｘ＝43.081，Ｙ＝11.012を発掘調査基準点（Ｘ＝100.000，Ｙ＝100.000）とし，磁北方向を基準線（０°－０′－０″）とする任意座標で，４×４ｍを最小単位とするグリッドを設定して記録を取った。標高については，二等水準点（Ｎ1889）ＧＨ＝49.736ｍを基準とした。

なお調査中は，雨の多い異状気象と好景気に伴う作業員不足に悩まされた。

2．調査区の概要

今回の発掘調査によって検出された遺構は，竪穴住居10棟，掘立柱建物12棟，土坑38基（壺棺墓９基を含む），溝24条，井戸１基，柵列１条，及び柱穴群である。出土遺物は，約7,000点で，弥生土器，土師器が大半を占めており須恵器等は少ない。遺物は包含層に少なく，遺構から多く検出された。遺構では，弥生時代の竪穴住居（ＳＴ８），平安時代の井戸（ＳＥ１）からまとまって遺物が検出されている。また掘立柱建物（ＳＢ１～３），柵列（ＳＡ１）は，時期は不明といわざるを得ないが，説明は平安時代の項で行なった。

遺構は，発掘区の全域から検出されたが，標高のやや高い中程から北部に集中していた。当遺跡の地形は，北部及び東部から南部へ緩やかに下降傾斜する。

当遺跡の遺構・遺物は，弥生時代後期から中世にかけてのものが大半を占める。

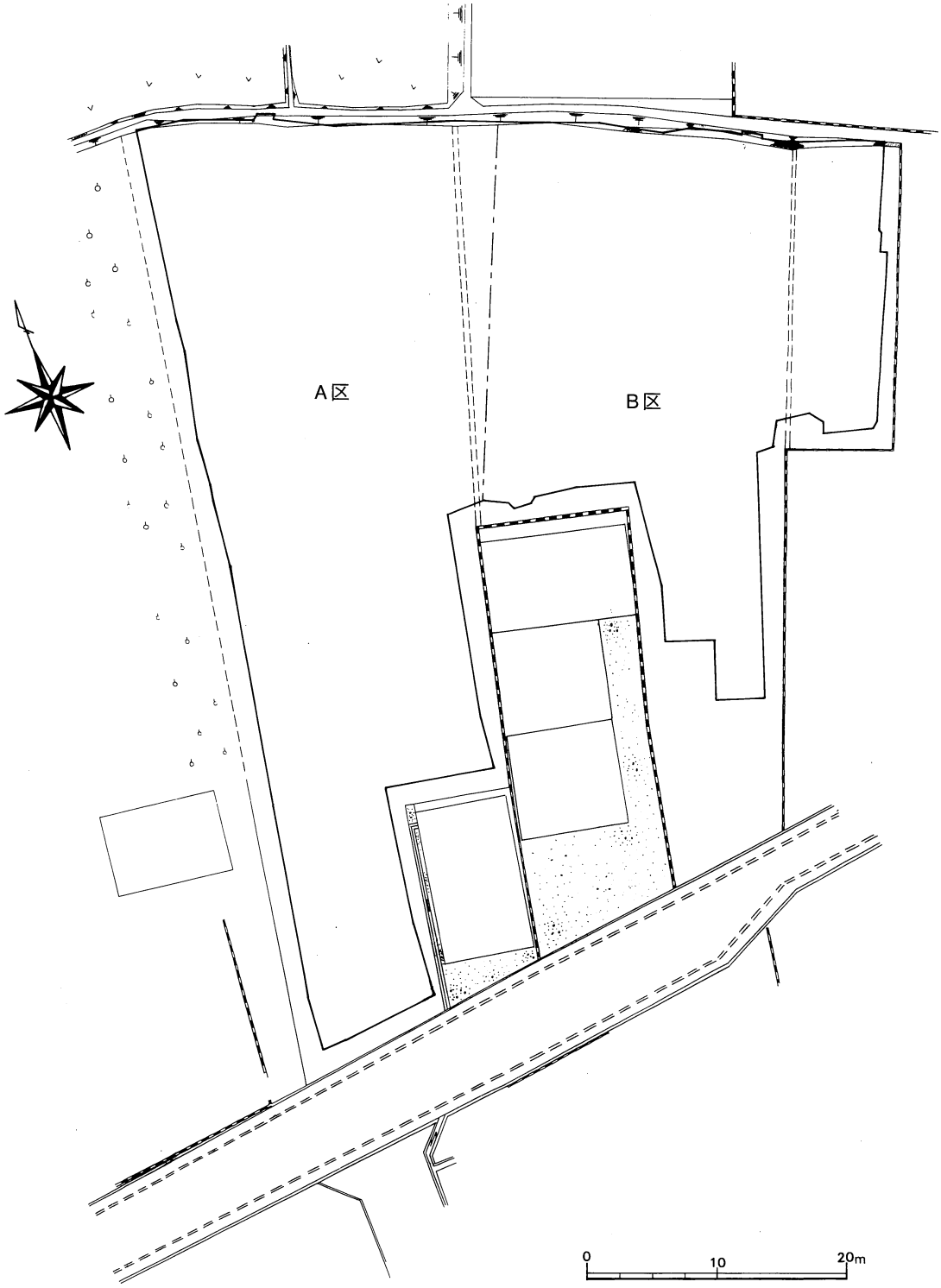


Fig 3　発掘調査位置図

第Ⅳ章　基本層序と包含層出土の遺物

1．基本層序（Fig 5）

基本層序は，Ⅰ層：耕作土，Ⅱ層：暗茶灰色粘質土，Ⅱ′層：淡茶灰色粘質土，Ⅲ層：黒色土（黒ボク(8)），Ⅳ層：暗黄茶色粘質土（地山）（1～15cmの礫混り）である。Ⅲ層とⅣ層との間には部分的に焼土の混る所がある。又，Ⅳ層地山は，調査区の中央部分に礫は少ないが，北部及び南部は3～20cm大の河原石が混り，弥生時代以前には氾濫原であったことを考えさせる。

Ⅲ層は，弥生時代から中世の遺物を含むが，北部には比較的残存し，他は部分的に残るのみである。又セクションではとらえられていないが，西南端部付近では部分的にⅢ層の下に黄茶色の火山灰である音地(9)が20～30cmの厚さで残る。Ⅳ層地山は東部から西部へ，北部から南部へ緩やかに下降傾斜する。

2．包含層出土の遺物

遺物の大半はⅢ層で出土した。出土遺物は，弥生土器，土師器，須恵器，緑釉陶器，黒色土器，瓦質土器，青磁等である。以下Ⅱ・Ⅲ層出土の遺物について延べる。

(1)　Ⅱ層出土の遺物（Fig 6－1～3）

1は緑釉陶器皿でありＳＢ４とＳＫ８との中間付近で出土した，貼付輪高台を有す。平底から内湾気味に立ちあがる。底部内面に凹線を施す。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。全面施釉。釉は黄緑色で緑色の斑点を認める。2は土師器椀である。平底から内湾気味に立ちあがる。3は土師器羽釜である。

(2)　Ⅲ層出土の遺物（Fig 6－4～32）

4～5は須恵器蓋である。4は内傾して直線的に立ちあがり稜をなして頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。7～9は須恵器杯である。7は外反気味に立ちあがり端部は丸くおさめる。たちあがりは短く内傾して端部は丸くおさめる。10は土師器皿である。平底から僅かに段をもって直線的に立ちあがり口縁部に至る。11～14は土師器杯である。11はベタ高台気味の平底から斜上外方へ直線的に立ちあがる。12は平底から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。底部外面は回転ヘラ切り。13はベタ高台気味の平底から内湾気味に立ちあがる。底部外面回転ヘラ切り。14は平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。底部外面は回転糸切り。15は土師器皿である。中央が僅かに凹む底部から外反気味に立ちあがる。底部外面はヘラ切り。16～19は土師器皿である。内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。内外面共に指頭圧痕が顕著で手捏ねである。20は須恵器高杯脚である。脚部に長方形の透かしが穿たれる。21は弥生土器鉢である。僅かに突出気味の平底から内湾して立ちあがる。22～25は弥生土器甕である。22は平底から直線的に立ちあがる。胴部外面下半は縦方向のハケ調整を施す。23は平底から内湾気味に立ちあがる。24の口縁部は「く」の字状に外反し，口縁端部は下方に肥厚して口唇部は

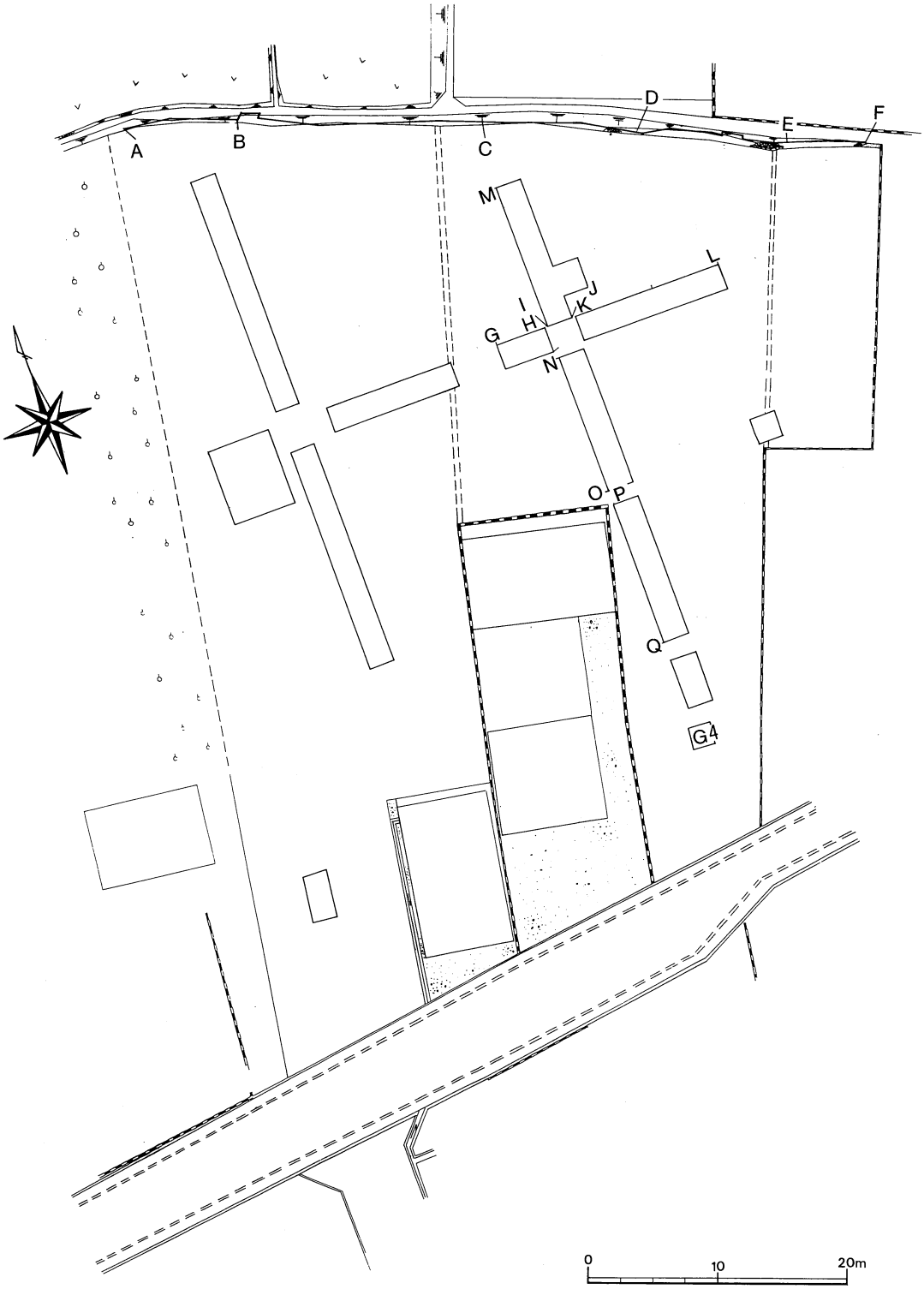
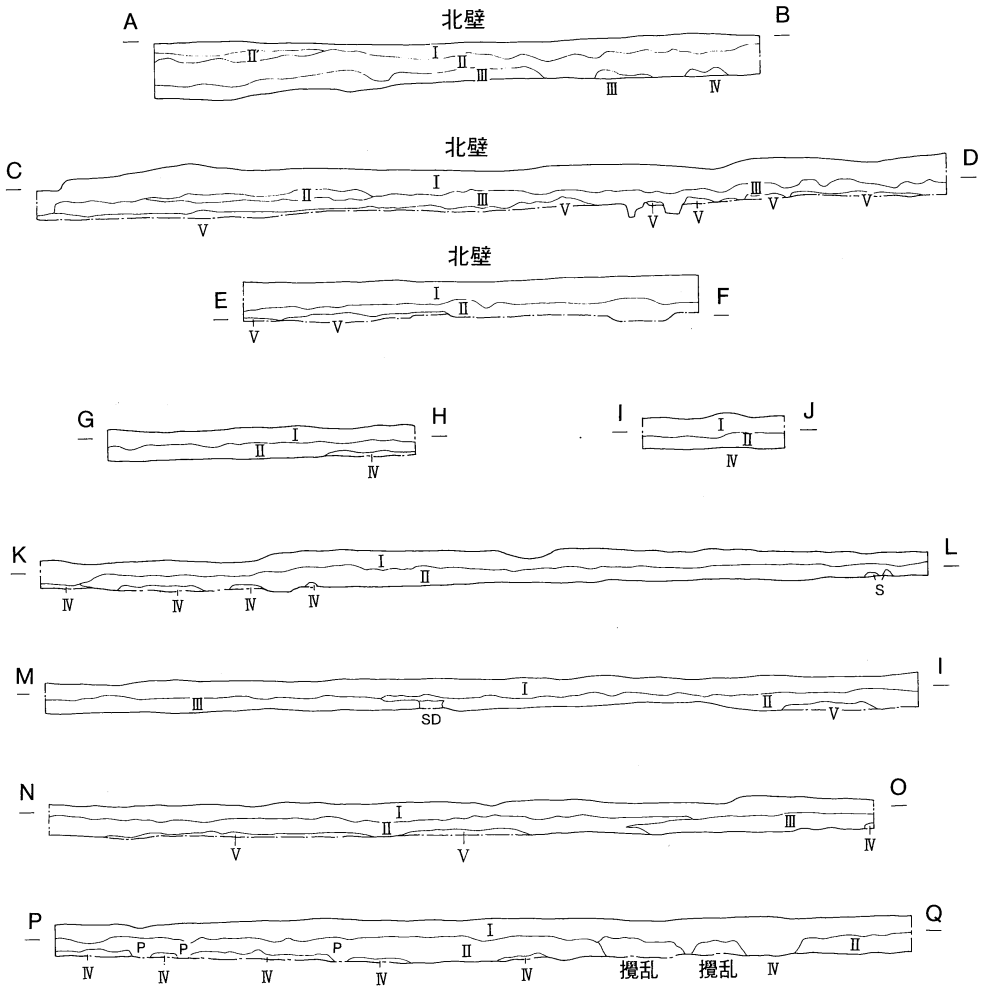
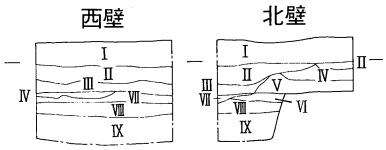


Fig 4　トレンチ・グリッド・セクション位置図



Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：暗茶灰色粘質土
Ⅱ'層：淡茶灰色粘質土
Ⅲ層：黒灰色土(黒ボク)
Ⅳ層：焼土
Ⅴ層：暗黄茶色粘質土(地山)(1～15cm礫混り)



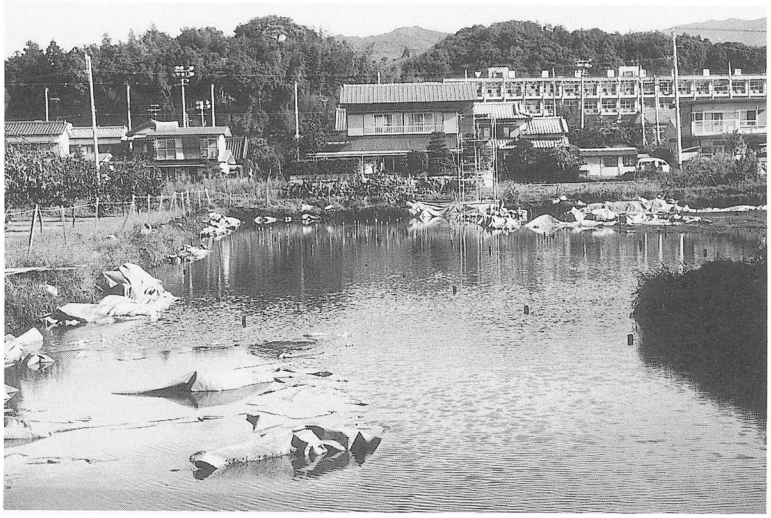
G 4

Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：黒色土
Ⅲ層：暗茶灰色土
Ⅳ層：黄茶色粘質土
Ⅴ層：暗黄茶色粘質土
Ⅵ層：暗茶灰色粘質土(小礫混り)
Ⅶ層：暗茶灰色粘質土(砂礫混り)
Ⅷ層：暗黄茶色砂礫土
Ⅸ層：黄茶色砂礫土

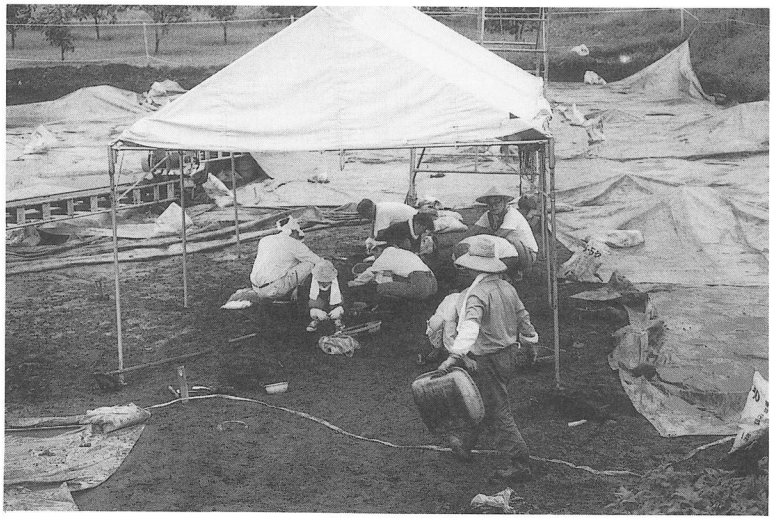
DL＝51.00m　0　4m

Fig 5　基本層序

丸くおさめる。25は内湾して立ちあがり屈曲して口縁部に至る。口縁部は外反して，口唇部は面をなす。胴部外面は横方向及び右下りの叩き調整を施す。26は土師器甕である。27は土師器甑である。単孔の甑である。外反気味に立ちあがり，その後内湾気味になり貼付把手に至る。貼付把手は欠損。28・29は平瓦である。凹面は細い布目，29の凸面は縄目の叩きを施す。30は弥生土器器台である。僅かに外反気味に垂直に立ちあがる。内面絞り目を認める。31は近世陶磁器下ろし皿である。32・33は円筒形の土錐である。なお33は表採である。



水没した調査区



雨の日の作業風景

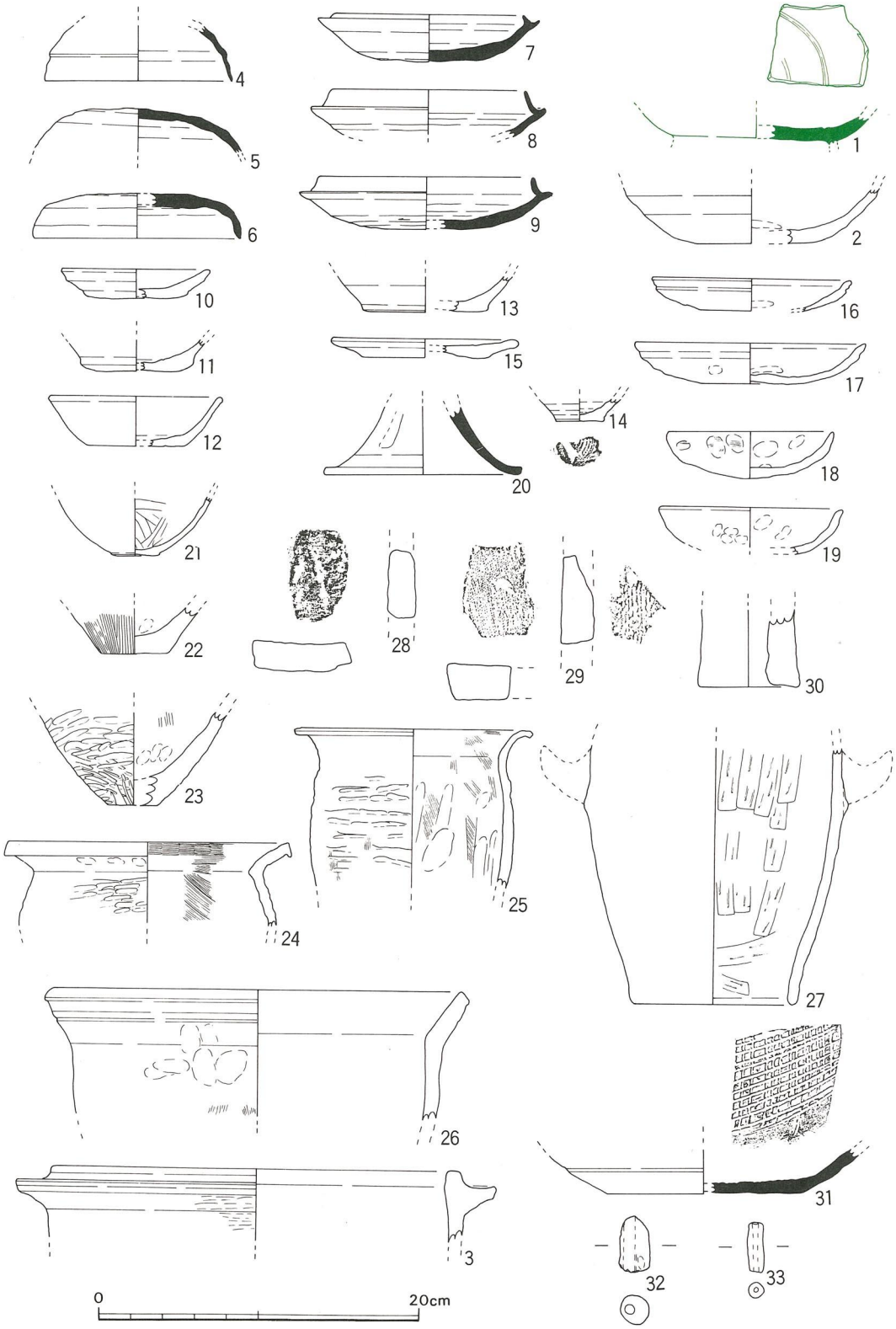


Fig 6　包含層出土遺物(Ⅱ層1～3，Ⅲ層4～32，表採33)

第Ⅴ章　遺構と遺物

1．弥生時代

弥生時代の遺構として竪穴住居５棟，土坑12基，溝６条，柱穴多数を検出した。遺構の組合せやその変遷等については，次章に譲る。

竪穴住居

ＳＴ１（Fig 7）

調査区の西南端部に位置し，西部は調査区外に出ている。平面プランは隅丸方形を呈し，ベッド状遺構を伴う。長径4.6m，短径3.0mまで確認できる。検出面からの深さ10.0～13.0cm，面積は13.8m²まで測れる。長軸方向は不明である。南側・東側にベッド状遺構を設けているが，全周するものと考えられる。ベッド状遺構は地山成形で，幅0.81～0.98m，検出面からの深さ4.0～6.0cmを測る。埋土はⅠ～Ⅴ層である。Ⅰ層：黒色土（黒ボク），Ⅱ層：淡灰色粘質土（黒ボク混り），Ⅲ層：黄茶色粘質土，Ⅳ層：黄茶色砂礫土，Ⅴ層：暗灰黒色土である。柱構造については不明である。Ｐ３は中央ピットと考えられ径0.82m，深さ15.5cmを測る。他の柱穴は径18.5～48.0cm，検出面からの深さ8.1～25.3cmを測る。ＳＤ４，ＳＤ12，ＳＤ13及び柱穴に切られる。

出土遺物（Fig 21－34～47）

鉢（35～38）は埋土から出土した。35は丸底気味の底部から内湾して立ちあがり，36は平底から内湾して立ちあがる。37は内湾気味に立ちあがり，口縁部は薄くなり口唇部は面をなす。体部外面は指頭による強い横方向のナデ調整を施し，内面は縦方向のハケ調整を施す。38は平底から内湾して立ちあがり口縁端部は上方に僅かに肥厚し，口唇部は丸くおさめる。鉢（34）はＰ３から出土した。平底から内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。体部外面は右下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。壺（39）は埋土から出土した。甕（40）は床面から出土した。口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，端部は下方に僅かに肥厚し口唇部は丸くおさめる。甕（41～46）は埋土から出土した。41・42・46の口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，口唇部は面をなす。47は砥石で，埋土から出土した。片面のみを使用する。

ＳＴ３（Fig 8）

調査区の西部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、ベッド状遺構を伴う。長径5.74m，短径5.1m，検出面からの深さ18.0～29.0cm，面積は約29.27m²を測り，長軸方向はＮ－90.0°－Ｅとなっている。床面は平坦面をなし，Ｐ１～Ｐ14の14個の柱穴を検出したが，Ｐ１～Ｐ４を主柱穴とする４本柱構造が推測される。主柱穴の直径は25.0～50.0cm，深さ23.0～36.0cm，柱間距離は2.54～2.58mを測る。ベッド状遺構は四辺を全周し，地山成形であるが，東南端部で緩やかな傾斜で床面に下ることから出入口の可能性を有する。ベッド状遺構の幅は北側がやや狭いが0.66～1.10m，検出面からの深さは2.0～12.0cmを測る。中央ピットの平面プランは

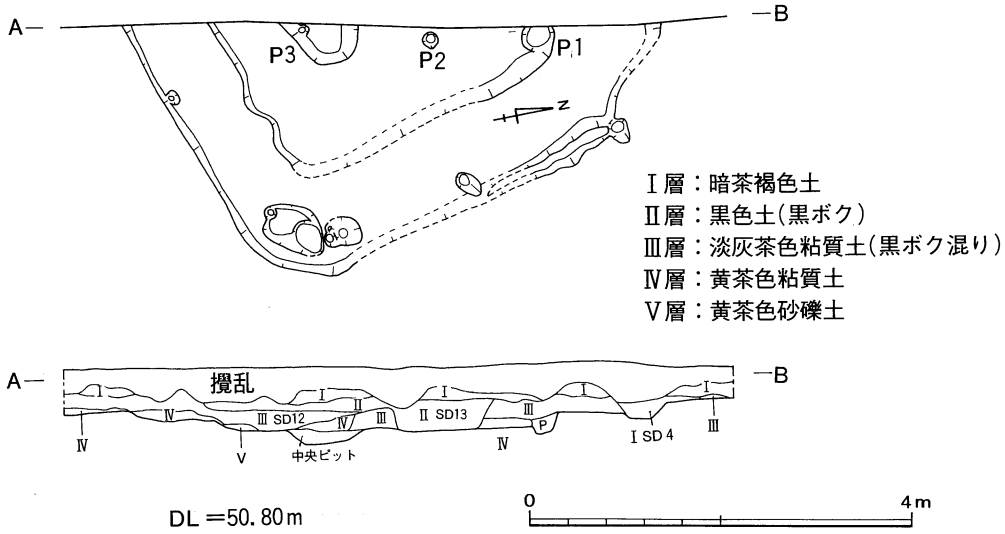
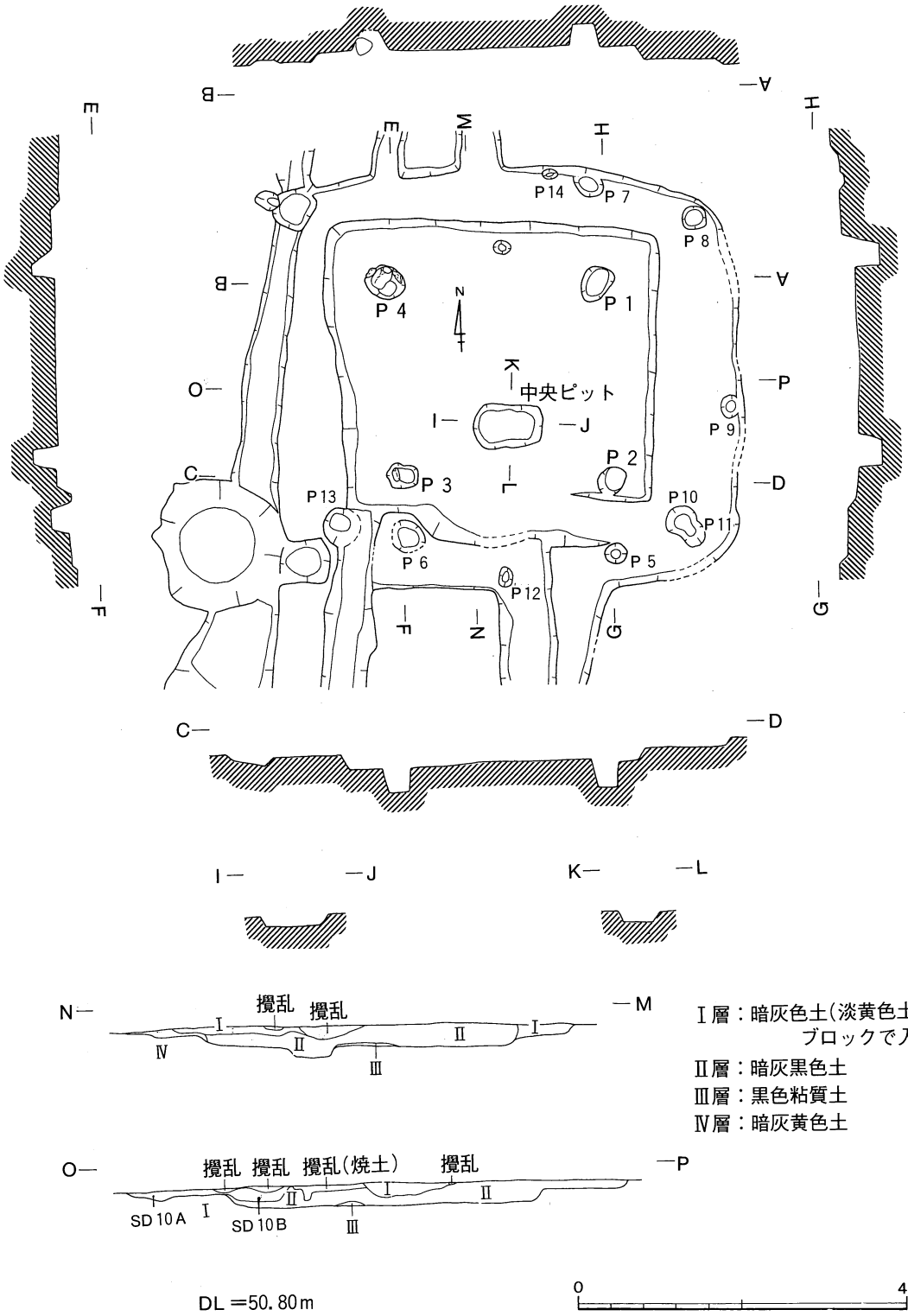


Fig 7　ST 1　実測図

隅丸長方形を呈し，長径0.84m，短径0.49m，深さは12.0～14.0cmを測る。埋土はⅠ～Ⅳ層である。Ⅰ層：暗灰色粘質土（淡黄色土がブロックで入る），Ⅱ層：暗灰黒色土，Ⅲ層：黒色粘質土，Ⅳ層：暗灰黄色土である。ＳＡ１，ＳＥ１，ＳＤ10－Ａ，ＳＤ10－Ｂ，ＳＤ11及び柱穴に切られる。

出土遺物（Fig 22－48～63）

48～57は鉢である。49・53・54・57は東側のベッド状遺構の床直上から，52は床面から出土した。49は平底から内湾して立ちあがり，口唇部は面をなす。体部外面は不定方向のナデ調整，内面は横方向のハケ調整を施すが部分的に不定方向のナデ調整を施す。51は突出気味の平底から内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。体部外面は横方向の叩き調整の後ナデ調整を施す。52は丸底気味の底部から僅かに内湾気味に立ちあがり，口唇部は面をなす。体部外面は左下りの叩き調整の後不定方向のナデ調整を施す。体部内面は上半は不定方向のハケ調整，下半は不定方向のナデ調整を施す。54は平底気味の底部から内湾して立ちあがり，口唇部は面をなす。体部外面はナデ調整を施し，多数の指頭圧痕を認める。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。56は平底気味の底部から内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。体部内面上端は右下りのハケ調整を施すが他は内・外面共に丁寧なナデ調整を施す。58～60は甕である。59・60の口縁部は「く」の字状に屈曲して外半し，口唇部は面をなす。59の口縁部内面は不定方向のハケ調整，外面はナデ調整を施す。胴部外面は横方向の叩き調整を施す。60は叩き出し口縁である。外面は右下りの叩き調整を施す。61は碧石製の管玉である。埋土から出土した。62は鉄族で全長5.3cm，全幅1.8cm，全厚0.2cm，重量5.0ｇを測り，床面から出土した。63の鉢は



中央ピット
P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P 10
P 11
P 12
P 13
P 14
N
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
攪乱
攪乱(焼土)
SD 10 A
SD 10 B
Ⅰ層：暗灰色土(淡黄色土がブロックで入る)
Ⅱ層：暗灰黒色土
Ⅲ層：黒色粘質土
Ⅳ層：暗灰黄色土
DL =50.80m
0
4m

Fig 8　ST 3　実測図

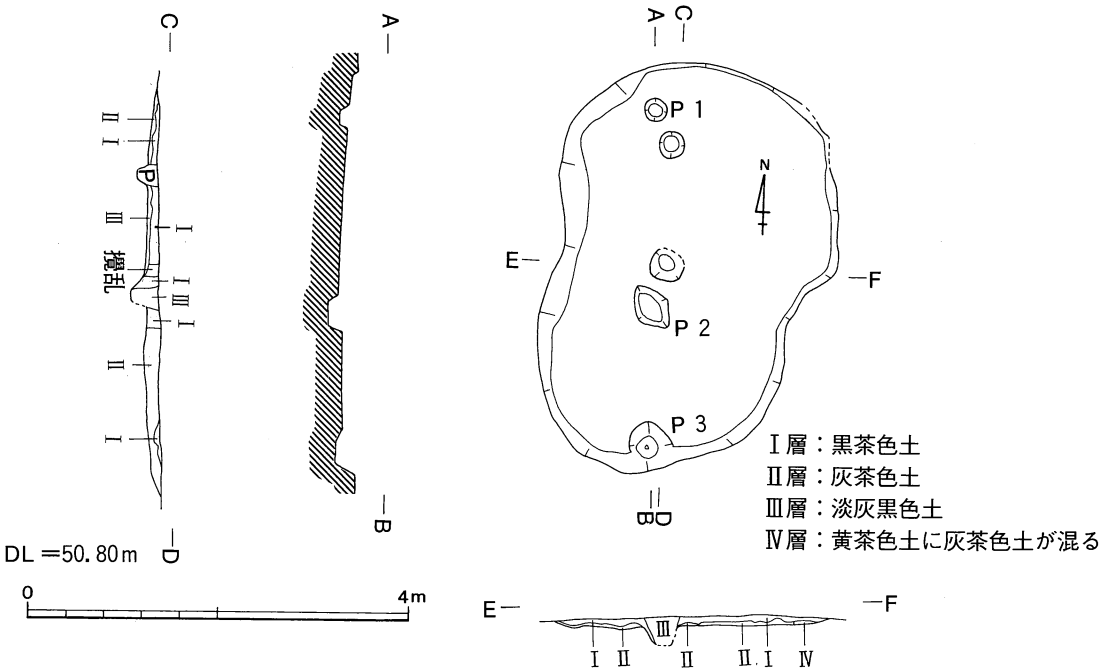


Fig 9　ST 6　実測図

中央ピットから出土した。内湾して立ちあがり，口縁端部は外側及び上に僅かに肥厚して口縁部は面をなす。

ＳＴ６（Fig 9）

調査区の西端部でＳＴ４の南側に位置する。平面プランは瓢箪形を呈す。長径4.5m，短径2.5m，検出面からの深さ12.0～18.0cm，面積は約11.25m²を測る。長軸方向はＮ－13.9°－Ｅを示す。床面はほぼ平坦面をなす。Ｐ１～Ｐ３を主柱穴とする３本柱構造と推測される。主柱穴の径は24.0～54.0cm，深さ8.0～14.0cm，柱間距離は1.5～2.0mを測る。住居址としては規模が小さい，また床面の砥石（75）等から作業小屋的利用が考えられる。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 22－64～68・Fig 23－69～75）

73・74の支脚以外はすべて床面から出土した。64～68は鉢である。65は平底気味の底部から内湾して立ちあがり，口唇部は僅かに凹んで面をなす。体部外面は横及び左下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。口縁部内面は横方向のハケ調整を施すが他は横方向のナデ調整を施す。66は突出した平底から内湾気味に立ちあがり，口縁端部は僅かに上方に肥厚して口唇部は外傾して面をなす。体部外面は横方向及び右下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。67はＰ１の検出面で出土した完形品である。丸底から内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。体部外面は

左下りの叩き調整の後不定方向のナデ調整を施す。68は丸底気味の底部から外反気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。体部外面は不定方向の叩き調整の後ナデ調整を施す。69～71は甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。70は口縁端部でさらに僅かに外反する。72は壺である。内湾して立ちあがり口縁部は屈曲して大きく立ちあがる。73・74は土製支脚であるが同一個体のものと考えられる。75は砥石である。四面共表面は滑らかであり，使用によって凹む。

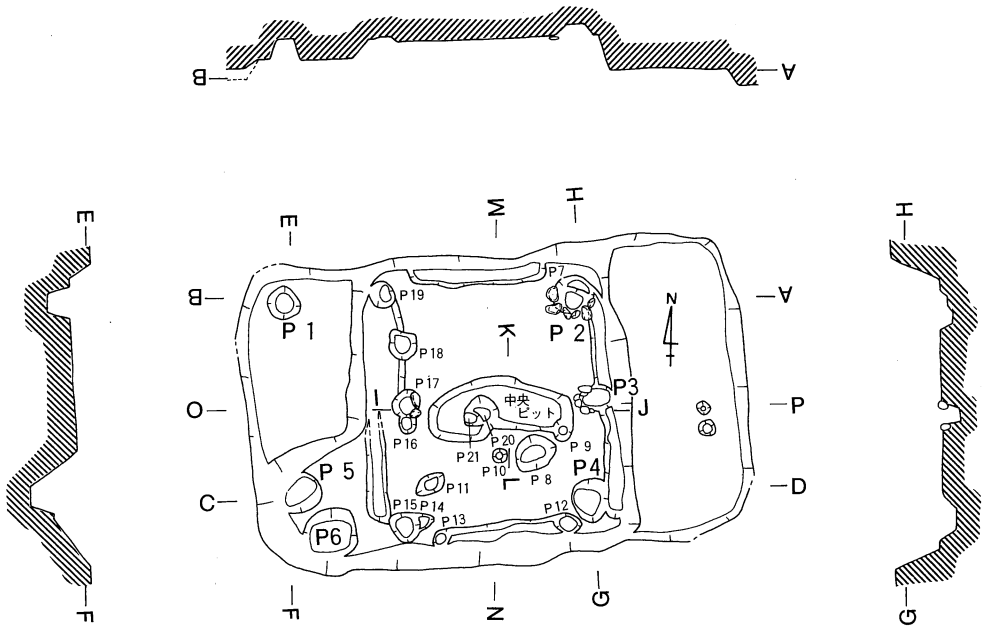
ＳＴ８（Fig 10）

調査区の東北端部に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し，ベッド状遺構を伴う。長径5.32m，短径3.2m，検出面からの深さ42.0～52.0cm，面積は約17.02m²を測る。長軸方向はＮ－82.8°－Ｅを示す。床は平坦面をなしＰ１～Ｐ21の21個の柱穴を検出したが，Ｐ１～Ｐ５を主柱穴とする５本柱構造が推測される。主柱穴の径は35.0～47.0cm，深さ8.0～23.0cm，柱間距離は1.05～3.17mを測る。Ｐ６は貯蔵穴と考えられ，長径50.6cm，短径50.0cm，深さ18.3cmを測る。またＰ２は建替えが考えられるベッド状遺構は東壁側と西壁側の半分に造り出している。ベッドは地山成形で，ベッドの幅は1.25～1.35m，検出面からの深さ11.0～17.0cmを測る。ベッド内側及び南・北の壁の側に周溝が全周する。中央部に中央ピットを設けており若干の炭化物を検出した。長径1.53m，短径0.56m，深さ6.0～10.0cmを測り，断面逆台形を呈す。

埋土はⅠ～Ⅱ層である。Ⅰ層：淡灰黒色粘質土（砂混り）……ＳＤ17である。Ⅱ層：黒色土（1.0～1.5cmの礫混り）である。なおＳＤ17に切られる。

出土遺物（Fig 24－76～94・Fig 25－95～106・Fig 26－107～111・Fig 27－112～115・Fig 28－116～124・Fig 29－125～129・Fig 30－130～135・Fig 31－136～148）

遺物が集中廃棄されており，良好な一括資料としてとらえることができる。76～94は鉢である。76は平底から内湾して立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は面をなす。口縁部外面は縦方向，内面は右下りのハケ調整を施す。体部外面は右下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。体部内面は上半右下りのハケ調整，下半は指頭による不定方向のナデ調整を施す。77・79・81・90・92・93は突出気味の平底から内湾又は内湾気味に立ちあがる。90の体部外面は左下りの叩き調整の後，口縁端部外面は縦方向のハケ調整の後丁寧なナデ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部外面は指頭による軽い押圧を施し，７つの突起状を形成する。78・80・83・85・87・89・94は平底から内湾して立ちあがる。83の体部外面は右下りの簡単なヘラ磨き，内面は指頭によるナデ調整を施す。87の体部外面は左下りの叩きの後ナデ調整を施し，体部内面は不定方向のハケ調整を施す。94の口縁部は僅かに肥厚して，口唇部は外傾して面をなす。体部外面不定方向のハケ調整の後上端は横方向，それ以外は不定方向のヘラ磨きを施す。体部内面は右下りのハケ調整の後不定方向のヘラ磨きを施す。84・86は平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。84の体部外面は縦方向のハケ→ナデ→ヘラ磨きの順で仕上げる。体部内面は不定方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。86の口縁部は僅かに内湾して，口唇部は



ST 8

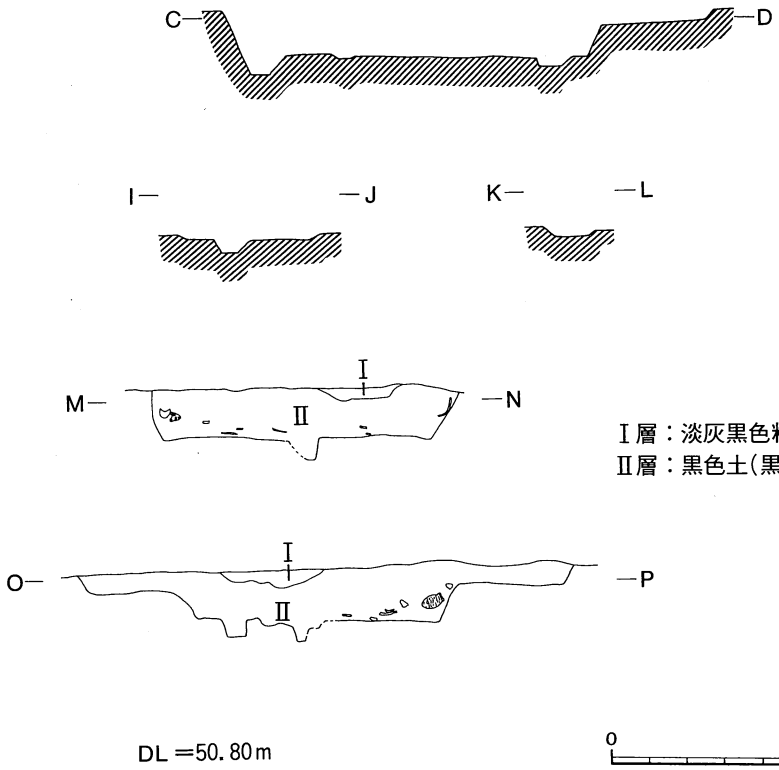


Fig 10　ST 8　実測図

内傾して面をなす。体部外面は叩き調整の後丁寧なナデ調整を施し，部分的にハケ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部内面に籾圧痕を認める。82・88・91は丸底から内湾して立ちあがる。95～97は高杯である。95の杯部は内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。脚部は「ハ」の字状に開き，４孔を穿つ。杯部の内・外面及び脚部の外面は丁寧なヘラ磨きを施す。96の全外面及び脚部内面は不定方向のハケ調整，杯部内面は右下りのハケ調整の後横ナデ調整を施す。97は脚部に７孔を穿つと思われる。98は蓋である。外面は縦方向のハケ調整の後上半は縦方向のヘラ磨き，下半は横方向のヘラ磨きを施す。頂部は未調整である。99は甑である。内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。底部は焼成後１孔を穿つ。口唇部及び口縁端部外面はナデ調整を施す。それ以外の外面は右下りのハケ調整を施す。100・101・103～114は壺である。100は器高11.3cmの小さな壺である。104は二重口縁である。107の口縁部はラッパ状に大きく外反し，端部は下方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。108は球状の胴部から頸部は直立気味に立ちあがり，口縁部はラッパ状に大きく外反し，口唇部は面をなす。胴部外面は縦方向及び右下りのハケ調整の後，不定方向のナデ調整を施す。さらに胴部外面上端に放射状の暗文的なヘラ磨きを施す。110は平底気味の底部を有する。口縁部はラッパ状に外反して端部は上・下に肥厚する。口唇部は面をなす。口唇部及び口縁部外面はナデ，内面は横方向の丁寧なハケ調整を施す。頸部は内・外面共右下りのハケ調整を施す。胴部外面は縦及び右下りのハケ調整を施す。胴部内面は荒いハケ原体によるハケ調整の後指頭によるナデ調整を施す。112～114は平底から内湾して立ちあがり，口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は上・下に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。102・115～143は甕である。115は搬入土器である。平底から内湾して立ちがあり，口縁部は強く屈曲して外反する。口縁端部は僅かに上・下に肥厚する。口唇部は僅かに凹んで面をなす。口縁部は内・外面共強い横方向のナデ調整を施す。下胴部外面は縦及び左下りの丁寧なヘラ磨き，それより上は縦方向ハケ調整を施すが，一部に下地の叩き調整を認める。下胴部内面は縦方向のヘラ削り，中位は右下り及び横方向のヘラ削り，上位は指頭によるナデ調整を施す。116～120・122は器高が20cm未満，121・123～129・131は20cm以上30cm未満の器高を有し，133・134は30cm以上の器高を有す。116・119～121・123・124・129・130は叩き出し口縁である。144は土錘，145は鉄鎌である。146は叩石，147・148は砥石である。

ＳＴ９（Fig 11）

調査区の東端部に位置する。南側は削平を受けており検出できなかったが平面プランは円形を呈すと考えられる。長径6.3m，短径5.32m，検出面からの深さ4.0～24.0cm，面積は約26.0m²を測る。床はほぼ平坦面をなす。Ｐ２～Ｐ７を主柱穴とする６本柱構造と推測される。Ｐ２・Ｐ４・Ｐ７は柱穴の切り合い及び近接した柱穴を有することから建替えが考えられる。主柱穴の径17.0～52.0cm，深さ6.0～28.0cm，柱間距離1.70～2.18mを測る。埋土はⅠ～Ⅲ層である。Ⅰ層：暗灰黒色土，Ⅱ層：黄茶色粘質土（黒ボク混り），Ⅲ層：黒色土（黒ボク）である。

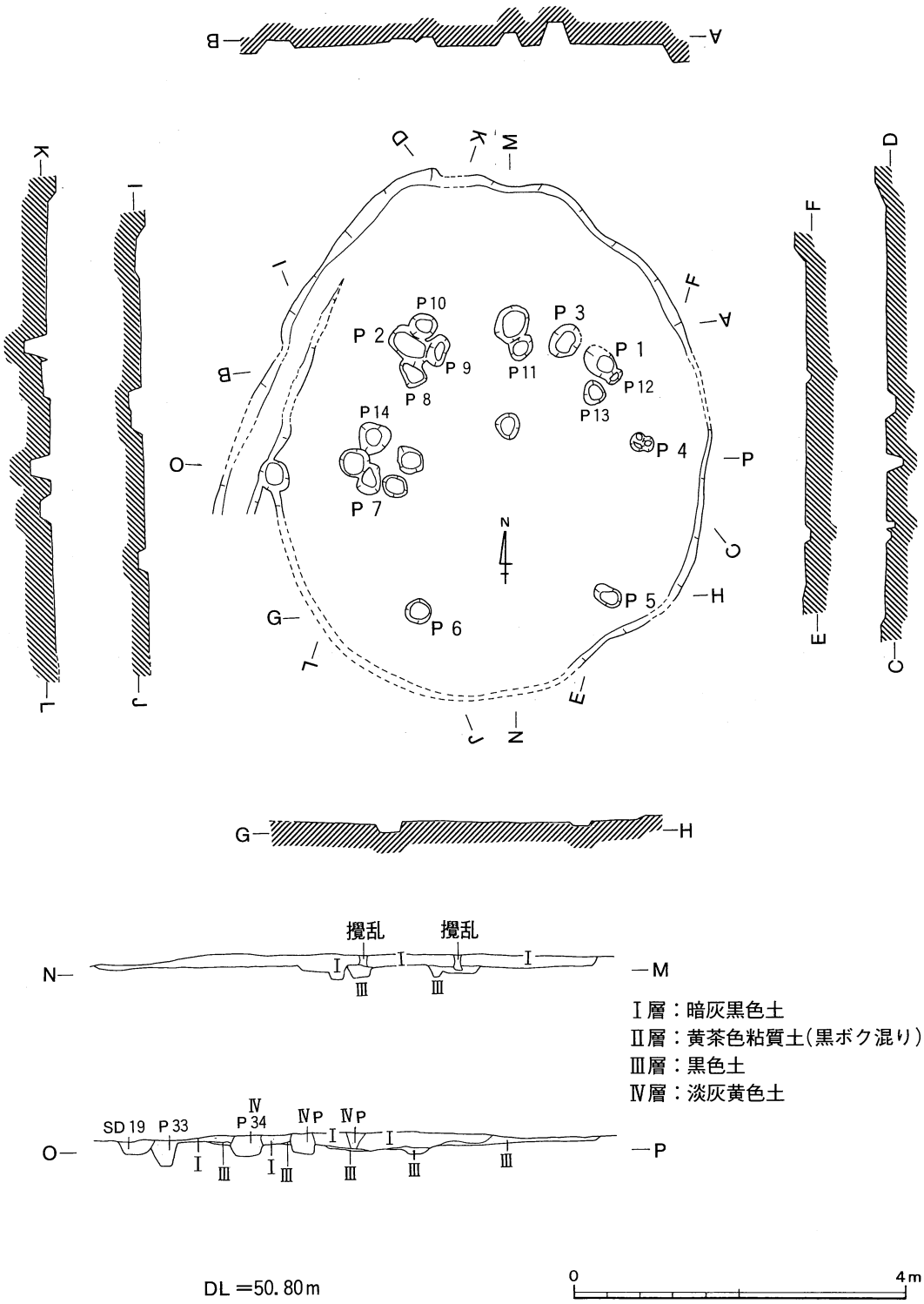


Fig 11　ST 9　実測図

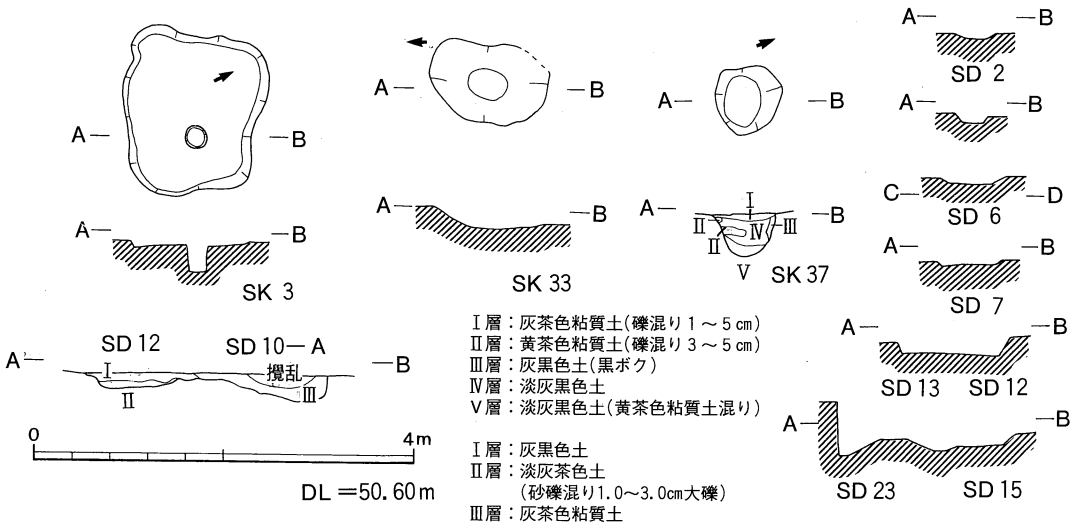


Fig 12　SK 3，33，37，SD 2，6，7，10 A，12，13，15，23実測図

なおＳＫ33，ＳＤ19及び多数の柱穴に切られる。又ＳＢ９，ＳＢ11と重複関係にあるが出土遺物からＳＢ９，ＳＢ11がより新しいことが判明している。

出土遺物（Fig 32－149～155）

壺（149）は平底から外反して立ちあがる。甕（150）と鉢（155）は共にＰ１から出土した。150は平底から斜上外方へ直線的に立ちあがる。外面は不定方向の叩き調整の後，縦方向のハケ調整を施す。甕（151・152）は床面から出土した。151は平底から段をなして内湾気味に立ちあがる。胴部外面は右下りの荒い叩き調整の後，下端はナデ調整を施す。152の口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。153は鉢である。内湾して立ちあがり口唇部は面をなす。154は高杯である。杯部は内湾して立ちあがり，脚部は「ハ」の字状に大きく開く。杯部及び脚部外面はヘラ磨きを施す。

土　坑

ＳＫ８・12・19～24・32は壺棺墓であり，次項で述べる。

ＳＫ３（Fig 12）

調査区の西部で，ＳＫ４の南側に位置する。平面プランは南東部が僅かに突出した隅丸方形を呈す。長径1.72m，短径1.30mを測る。長軸方向はＮ－59.0°－Ｗとなっている。検出面からの深さ3.0～6.0cmを測り床面は南壁側が高く，北壁側が低い。壁は急傾斜で立ち上がる。ほぼ中央に直径20.0cm，深さ27.0cmを測る柱穴があり，ＳＫ３に伴うと考えられる。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 32－156）

鉢（156）は床面から出土した。平底から僅かに内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。体部外面はナデ調整を施し，口縁部は摘んで押圧して調整する。

ＳＫ33（Fig 12）

調査区の東端部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径0.62ｍ，短径0.21ｍを測る。長軸方向はＮ－16.8°－Ｅとなっている。検出面からの深さ10.0㎝を測り，断面形は船底状を呈す。埋土は黒色土単純一層である。なおＳＴ９を切る。

出土遺物（Fig 32－157）

鉢（157）のみが，完形に近い状態で出土した。僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがり口縁部に至る。口唇部は面をなす。体部外面は叩きの後ナデ調整を施す。

ＳＫ37（Fig 12）

中央よりやや西方北端部に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径0.72ｍ，短径0.66ｍを測る。長軸方向はＮ－5.5°－Ｅとなっている。検出面からの深さ45.0㎝を測る。断面形はＵ字形を呈す。埋土はⅠ～Ⅴ層である。Ⅰ層：灰茶色粘質土（１～５㎝の砂混り），Ⅱ層：黄茶色粘質土（３～５㎝の礫混り），Ⅲ層：灰黒色土（黒ボク混り），Ⅳ層：淡灰黒色土（黒ボク混り），Ⅴ層：淡灰黒色土に黄茶色粘質土混りである。出土遺物は弥生土器片が多く出土したが，いずれも細片で図示できるものはない。

溝

ＳＤ２（Fig 12）

調査区の西南端部に位置する。Ｎ－67.5°－Ｗで東西に2.57ｍ延び，西は調査区外に出る。幅0.3～0.45ｍ，検出面からの深さ10.1㎝を測る。床面の東端の標高は50.327ｍ，西端の標高は50.364ｍを測る。埋土は黒色土単純一層である。弥生時代の柱穴及びＳＫ２に切られる。出土遺物は弥生土器の細片が出土したが図示できるものはない。

ＳＤ６（Fig 12）

調査区の西南部に位置する。東から0.45ｍＮ－83.0°－Ｗで北西に延び，わずかに西に曲って1.5ｍ延びる。幅0.26～0.57ｍ，検出面からの深さは7.0～9.0㎝を測る。床面の東端の標高は50.369ｍ，西端の標高は50.40ｍを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＤ10－Ａに切られる。出土遺物は埋土中より弥生土器の細片が少量出土したが図示できるものはない。

ＳＤ７（Fig 12）

調査区の西南部に位置する。Ｎ－16.5°－Ｅで南北に3.45ｍ延びる。幅0.60～0.90ｍ，検出面からの深さは3.0～7.0㎝を測る。床面の北端の標高は50.244ｍ，南端の標高は50.384ｍを測る。断面形は中央部が僅かに高い逆台形を呈す。埋土は黒色土単純一層である。なお，ＳＤ５に切られる。出土遺物は弥生土器細片が１点のみ出土しているが図示できるものではない。

ＳＤ12（Fig 12）

調査区の南西部に位置する。Ｎ－41.3°－Ｅで南北方向に11.15ｍ延びた所で西にやや曲ってＮ－69.0°－Ｅの方向で4.0ｍ延びる。西側は調査区外に出る。幅0.89～1.15ｍ，検出面からの深さは20.0㎝，床面の北端の標高は50.386ｍ，西南端の標高は50.261ｍを測る。埋土はⅠ～Ⅱ

層である。Ⅰ層：淡灰色粘質土（黒ボク混り）Ⅱ層：黄茶色砂礫土（1～3㎝の砂礫を含む）である。ＳＤ９・ＳＤ10－Ａ・ＳＤ13に切られ，ＳＴ１を切る。

出土遺物（Fig 32－158～160）

壺二重口縁（158）と甕（159）はⅠ層から出土した。甕（160）はⅡ層から出土した。二重口縁（158）は外反して立ちあがり稜をもって屈曲し内湾気味に立ちあがる。口唇部は外傾して面をなす。159の甕の口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。胴部上端外面は右下りのハケ調整，内面ナデ調整を施す。口縁部外面はナデ調整，内面は右下りのハケ調整を施す。160は平底から外反して立ちあがる。摩耗が著しく観察不可能である。Ⅱ層出土遺物はすべて摩耗している。

ＳＤ15（Fig 12）

調査区の西北端部に位置し，Ｎ－81.5°－Ｗで東西方向に3.35ｍ延びる。西側は調査区外に出るため断定はできないが東壁の緩やかな立ちあがり具合などから溝の端部であろうと考えられる。断面形は南が一段高い段状を呈す。幅11.4㎝検出面からの深さは11.0～17.0㎝，床面の東端の標高は50.317ｍ，西端の標高は50.40ｍを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。出土遺物は弥生土器細片が出土しているが図示できない。

ＳＤ23（Fig 12）

調査区の西北端部に位置する。大部分は調査区外に出るため断定は出来ないが溝の端部であろうと考えられる。全長3.36ｍまで，幅0.20～0.53ｍまで，検出面からの深さは17.0㎝まで確認できる。埋土は黒色土単純一層で埋土中より遺物はなかった。なお，古代の柱穴に切られる。

柱穴

Ｐ213（Fig 63）

調査区の西端部，ＳＴ６の南西側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径60.0㎝，短径45.0㎝，検出面からの深さは20.3㎝を測る。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 32－161）

鉢（161）は丸底から内湾して立ちあがり，口唇部は僅かに凹んで面をなす。口縁端部は摘んでナデ調整を施す。

Ｐ832（Fig 63）

調査区の西北端部，ＳＫ８の東側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径38.0㎝，検出面からの深さは22.1㎝を測る。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 32－162）

甕（162）の口縁部は胴部上端から大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。

Ｐ1021（Fig 63）

調査区の中央北部，ＳＫ17の東側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径30.0㎝，検出面からの深さは15.1㎝を測る。埋土は黒色土単純一層である。

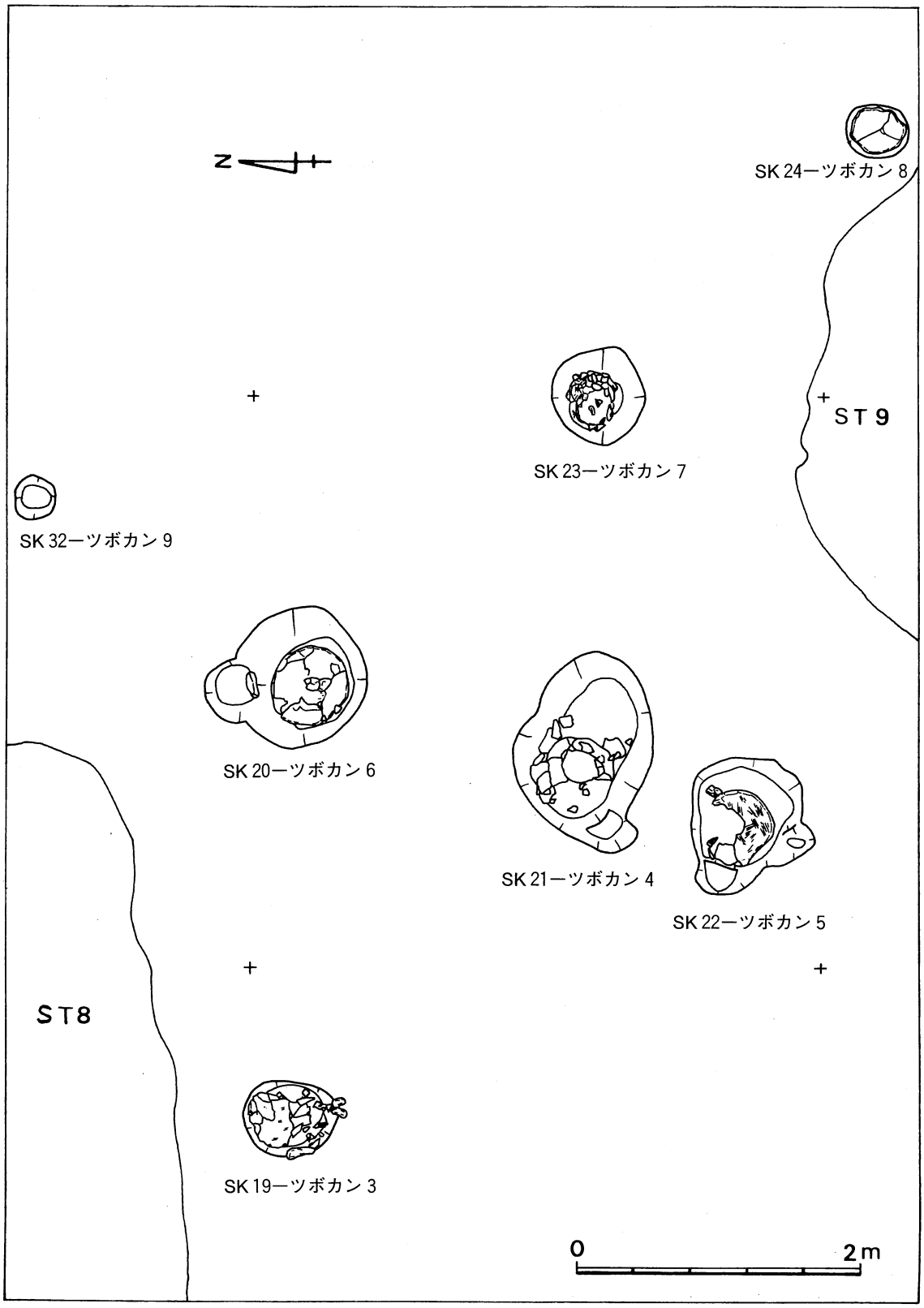


Fig 13　壺棺墓群位置図

出土遺物（Fig 32－163）

甕（163）は平底から内湾気味に立ちあがる。胴部外面は縦方向のハケ調整を施す。

Ｐ1166（Fig 63）

調査区の東北端部，ＳＫ22の南東側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径55.0cm，検出面からの深さは26.1cmを測る。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 32－164）

甕（164）の口縁部は胴部上端部から斜上外方に外反し，端部は下方に僅かに肥厚する。

Ｐ1500（Fig 63）

調査区の東端部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径28.0cm，検出面からの深さは22.0cmを測る。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 32－165）

鉢（165）は完形で出土した。突出気味の僅かに残る底部から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。体部外面は縦方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。

壺棺墓

壺棺墓は，９基検出したがＳＫ８（壺棺墓１），ＳＫ12（壺棺墓２）は調査区の中央部より西側で検出した。ＳＫ19（壺棺墓３），ＳＫ20（壺棺墓６），ＳＫ21（壺棺墓４），ＳＫ22（壺棺墓５），ＳＫ23（壺棺墓７），ＳＫ24（壺棺墓８），ＳＫ32（壺棺墓９）は，調査区の東北部でいずれも検出し，壺棺墓群といえよう。壺棺墓の埋土はすべて黒色土単純一層である。

ＳＫ８－壺棺墓１（Fig 14）

調査区の西部北端に位置する。壺棺は複棺（覆口式）であるが削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは楕円形を呈し，長径1.1m，短径0.81mを測る。長軸方向はＮ－84.0°－Ｅとなっている。検出面からの深さは20.0～31.5cmを測る。墓壙の立ち上がりは東は緩やかに，西は急傾斜で立ちあがる。床面は東から西へやや下る。埋置方位は，ほぼ東向きで据置角度は67.0°傾斜をもっている。なお，ＳＤ16に切られる。

壺棺（Fig 14－166・167）

166は下壺である。底部外面中央が凹む平底から大きく内湾して立ちあがる。胴部外面叩きの後右下りのハケ調整を全面に施す。胴部内面は右下りのハケ調整を全面に施す。167は166の上壺と考えられる。平底から斜上外方に直線的に立ちあがり，胴下端で内湾して立ちあがる。胴部外面は叩き→ハケ→ヘラ磨きの順で仕上げる。底部外面ナデ調整を施す。内面は指頭による不定方向の強いナデ調整を施す。

ＳＫ12－壺棺墓２（Fig 15）

調査区の中央よりやや西の北端付近に位置する。壺棺は削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは楕円形を呈し，長径0.93m，短径0.82mを測る。長軸方向はＮ－

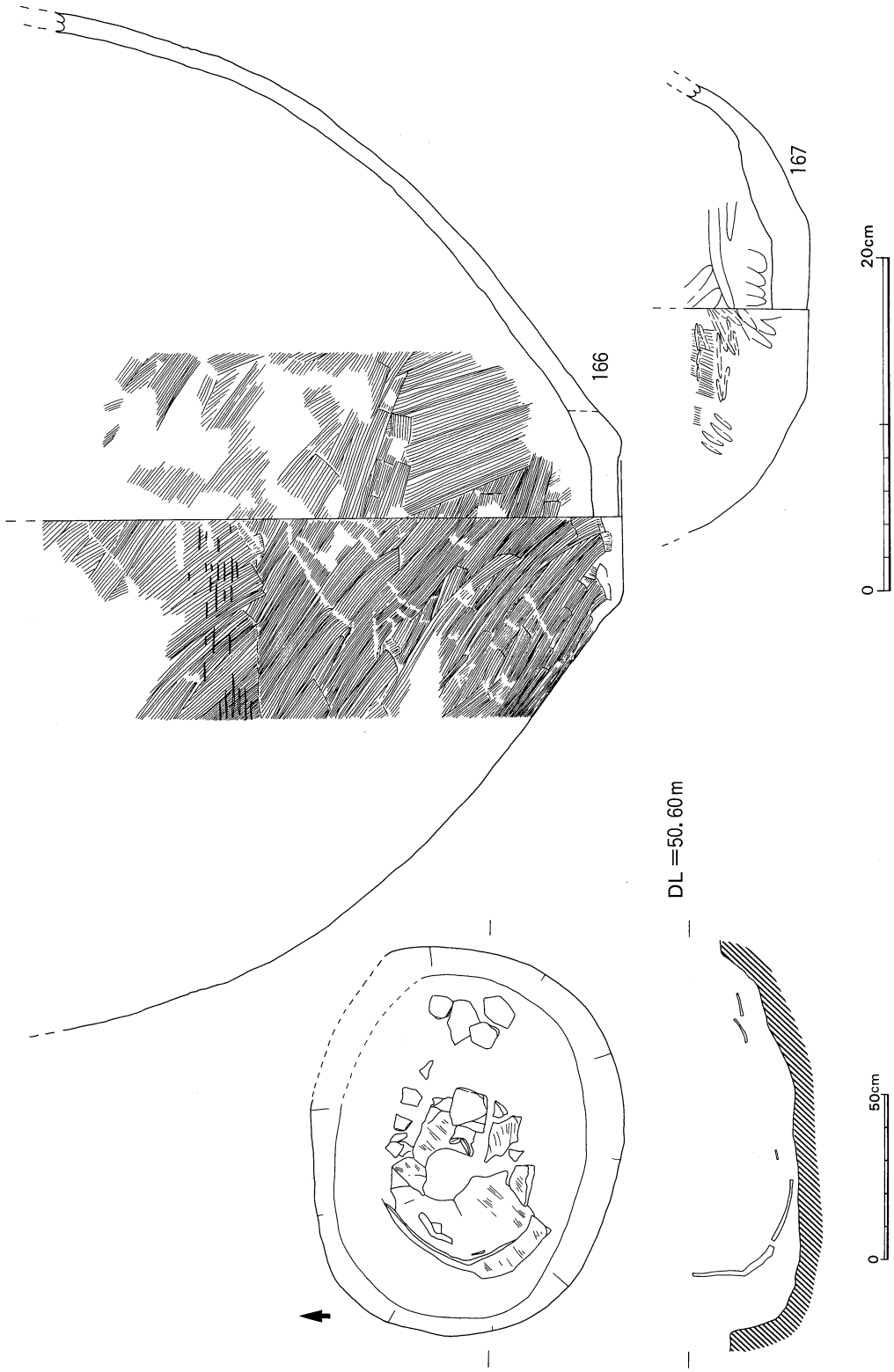


Fig 14　SK 8（壺棺墓１）実測図と出土遺物(166・167)

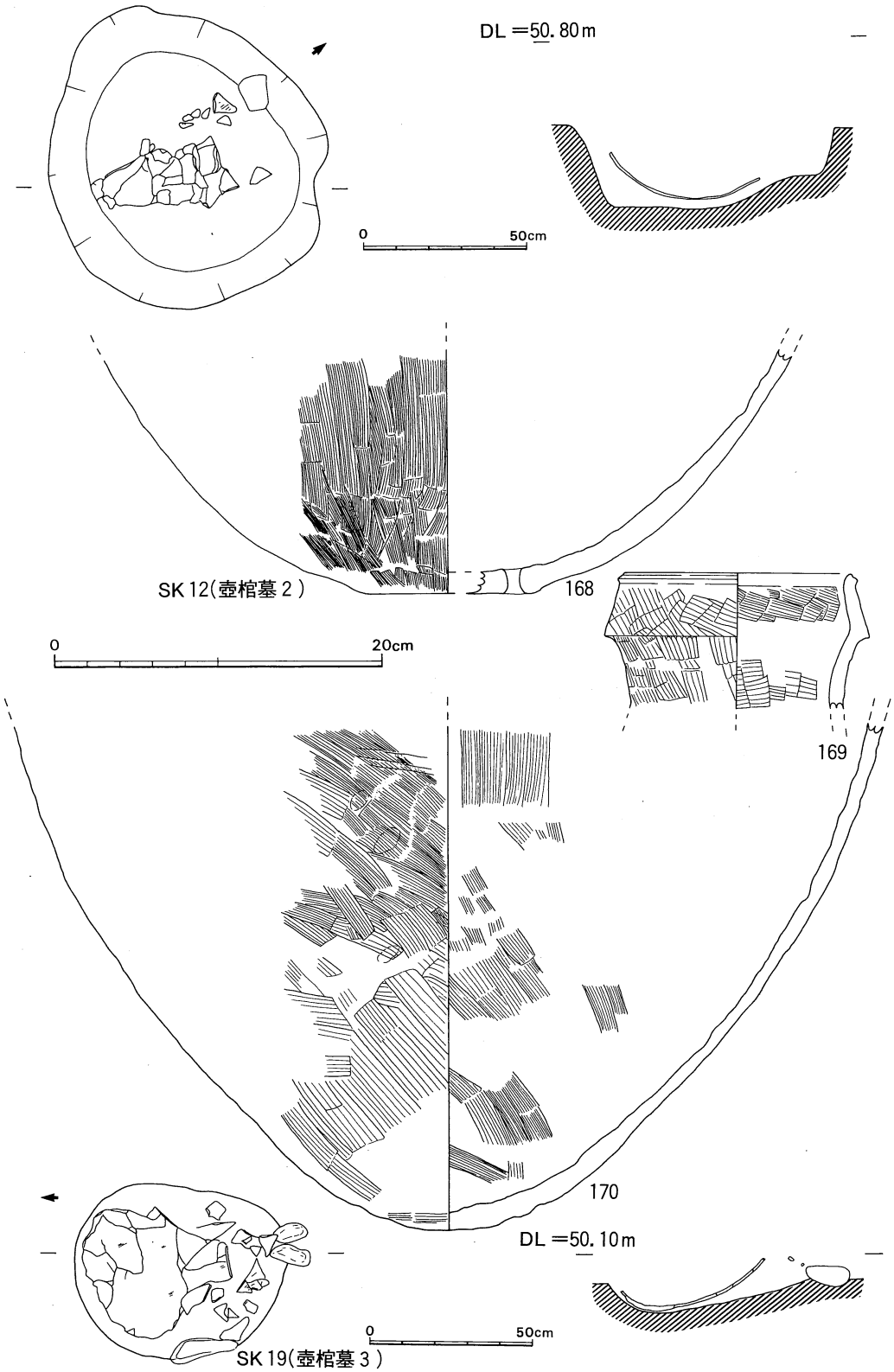


Fig 15　SK 12(壺棺墓２)SK 19(壺棺墓３)実測図と出土遺物(168～170)

90.0°－Ｅとなっている。検出面からの深さは14.5～24.5cmを測る。墓壙の立ち上がりは急傾斜で，床面は北が高く低い段状を呈す。埋置方位は北向きの可能性がある。据置角度は不明である。

壺棺（Fig 15－168）

168は平底から内湾して立ちあがる。底部は１孔を焼成後穿つ。胴部外面は丁寧な縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は摩耗が著しく観察不可能である。

ＳＫ19－壺棺墓３（Fig 15）

調査区の東北部でＳＴ８の南側に位置する。壺棺は削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは楕円形を呈し，長径0.65ｍ，短径0.53ｍを測る。長軸方向はＮ－2.5°－Ｗとなっている。検出面からの深さは9.0cmを測り，断面形は北側がやや下がった凸レンズ状呈す。埋置方位は，ほぼ南向きで据置角度は31.50°傾斜をもっている。なお，柱穴に切られる。壺口縁（169）が出土したが壺棺に伴うかどうかは不明である。

壺棺（Fig 15－170）

170は僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがる。胴部外面は叩き→ハケ調整の順で仕上げていき，胴部下端外面はさらにナデ調整を加えて仕上げる。胴部下端と底部の境外面に叩き目が歪んで残る。内面は摩耗しているが，ハケ調整を施す。169は壺口縁で，二重口縁である。外反して立ちあがり稜をもって内傾し，口縁端部は外反する。口唇部は外傾して面をなし僅かに凹む。口縁端部は横方向のナデ調整，他は荒いハケ原体によるハケ調整を施す。内面右下りのハケ調整，稜の内面は横方向のナデ調整を施す。169はＳＫ32（壺棺墓９）出土のものと接合できた。

ＳＫ20－壺棺墓６（Fig 19）

調査区の東北部でＳＫ21－壺棺墓４の北側に位置する。壺棺は複棺（覆口式）であり削平のため½程度の残存状態で残存状況は不良である。下壺の中に上壺片が埋土と共に入っていた。墓壙の平面プランは楕円形を呈し，長径0.92ｍ，短径0.79ｍを測る。長軸方向はＮ－72.5°－Ｗとなっている。検出面からの深さ30.0cmを測る。墓壙の断面形は柱穴に切られているがＵ字状を呈すと考えられる。埋置方向はほぼ垂直で据置方向は４°傾斜をもっている。なお，壺棺の埋土の中から鉢が出土しているが伴うものかどうかは不明である。

壺棺（Fig 19－175・176）

176は下壺である。底部外面中央が僅かに凹む平底から直線的に斜上外方に立ちあがり胴部中位よりやや下で内湾して立ちあがる。胴部中位よりやや下に最大径を有す。胴部外面中位より上半は右下りのハケ調整の後縦方向の荒いヘラ磨きを施し，下半は不定方向のハケ調整を施す。胴部内面中位より上半は指頭による強い横方向のナデ調整，他はハケ調整の後ナデ調整を施す。175は176の上壺と考えられ176の埋土から出土した。平底から斜上外方に内湾気味に立ちあがる。外面はハケ調整の後丁寧なヘラ磨きを施す。内面は摩耗が著しく観察不可能である。

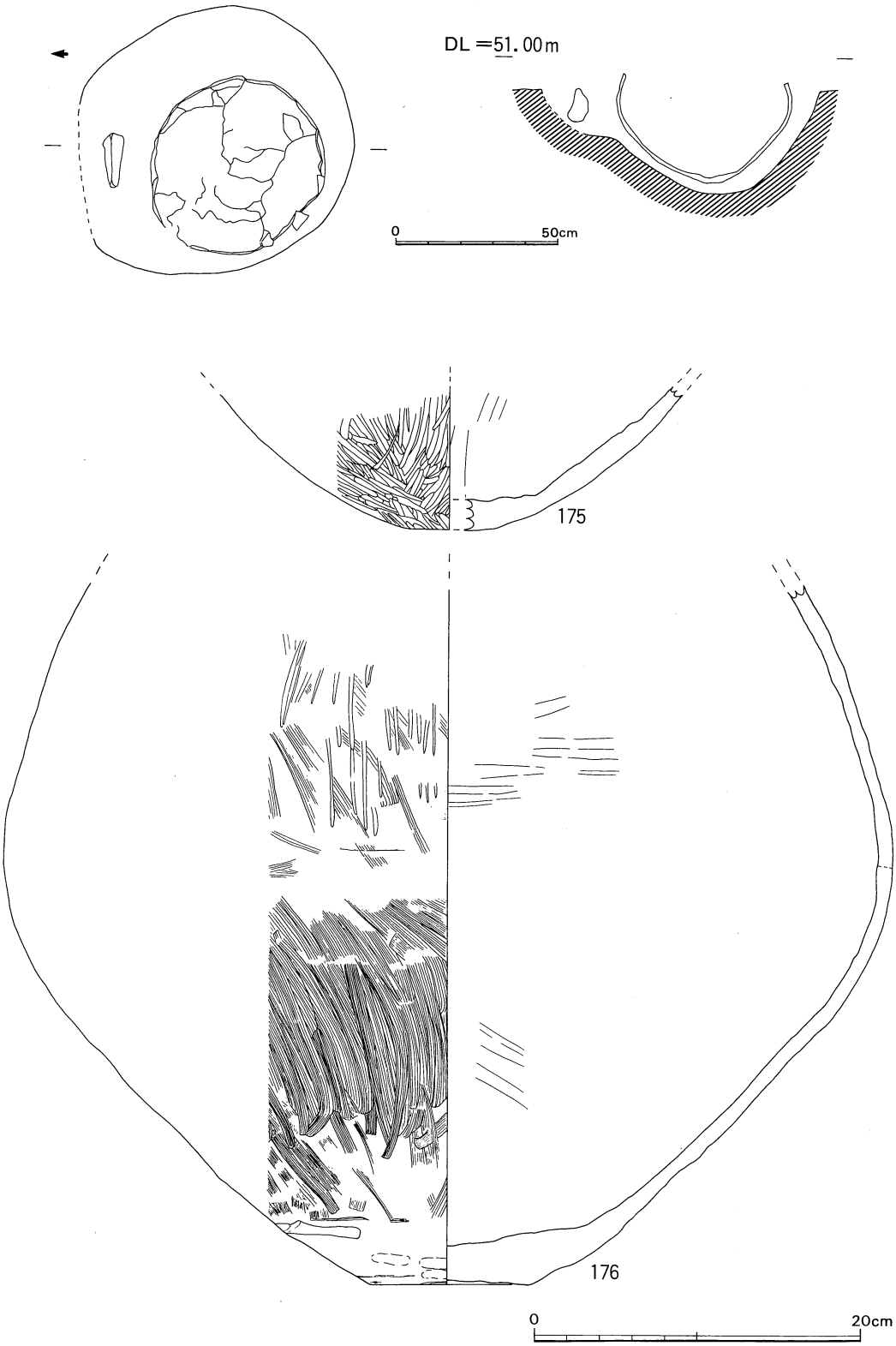


Fig 16　SK 20(壺棺墓６)実測図と出土遺物(175・176)

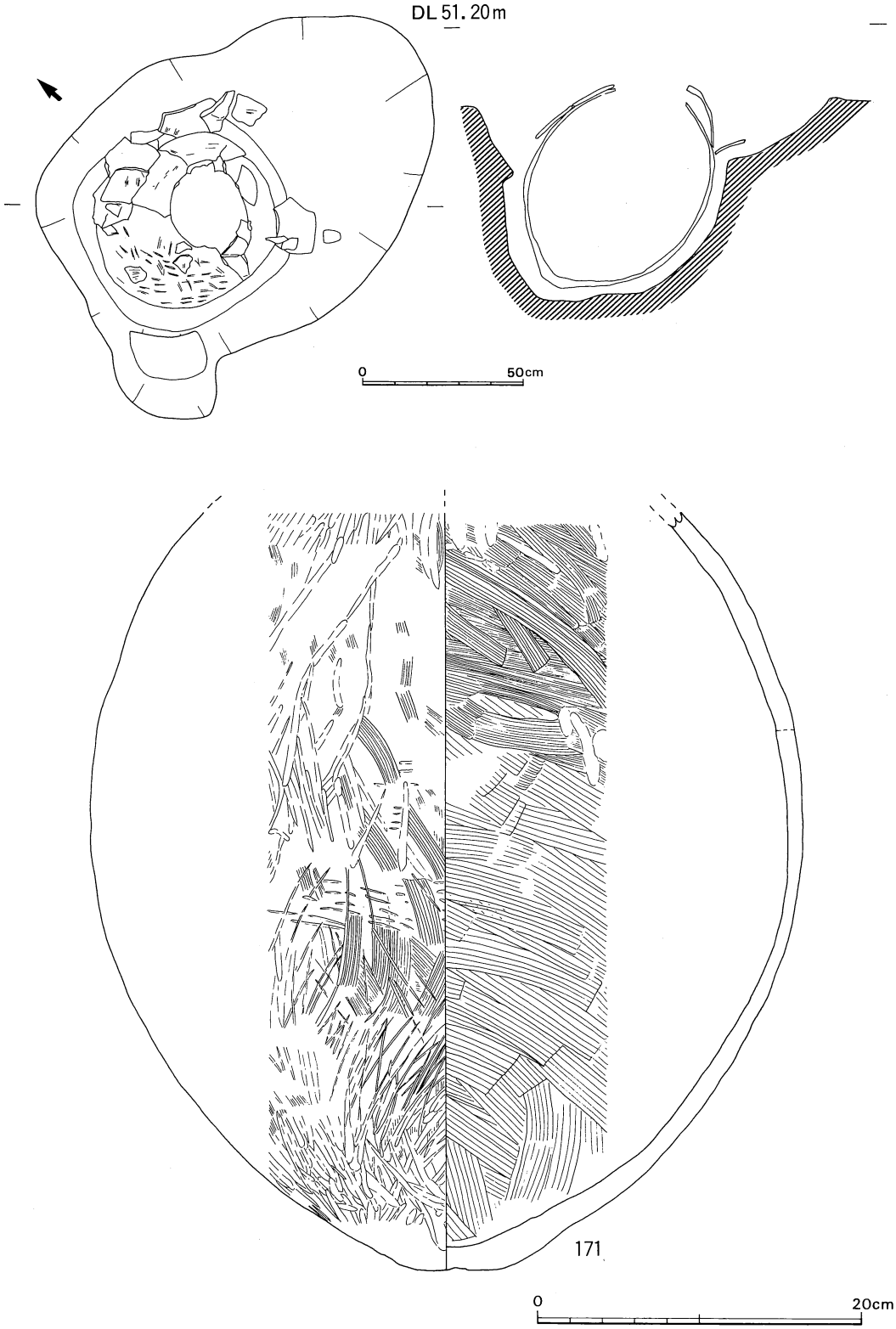


Fig 17　SK 21（壺棺墓４）実測図と出土遺物（171）

Fig 18　SK 21（壺棺墓４）出土遺物（172）

ＳＫ21－壺棺墓４（Fig 16）

調査区の東北部でＳＫ20－壺棺墓６の南側に位置する。壺棺は複棺（覆口式）であり残存状況は良好で，下壺を上壺が覆う状態で検出した。下壺の内部底に径0.3㎝程の玉状の灰黒色土が厚さ５㎝程度留まっているのみで空洞の状態であった。墓壙の平面プランは不整形を呈し，長径1.27ｍ，短径0.93ｍを測る。長軸方向はＮ－77.0°－Ｗとなっている。検出面からの深さ61.0㎝を測る。墓壙の立ちあがりは下壺とほぼ同じ傾斜をもち，検出面から18㎝の深さから広がりをもって急傾斜で立ちあがる。埋置方向はほぼ東向きで据置方向は32.7°傾斜をもっている。下壺は頚部及び口縁部を他の場所で意識的に打ち欠いで持ってきたと考えられ，又，胴上端部は打ち欠いで壺に貼りつけるように置いてある。又，上壺も同様に埋葬時に打ち欠きながら下壺と合わせていったと考えられ，破片は下壺に貼りつけるように置いてあった。

壺棺（Fig 16－171，Fig 17－172）

172は下壺である。平底気味の底部から内湾して立ちあがり頚部に至る。胴部中位に最大径を有す。卵型のプロポーションを有す。胴部外面は平行及び右下りの叩き調整の後ハケ調整を施す。胴部外面端部から下は横方向のナデ調整を施す。胴部外面中位よりやや下で部分的に粘土を補い上を指頭による強いナデ調整を施す。胴部上端部内面は指頭による強いナデ調整，他は不定方向のハケ調整を施す。底部内面は指頭による強いナデ調整を施す。胴部は６ケ所の粘土接合帯を認める。171は上壺である。平底から内湾して立ちあがる。胴部外面は叩き→ハケ→ヘラ磨き調整の順で仕上げる。胴部内面中位より上は細いハケ原体で，下は荒いハケ原体で不定方向のハケ調整を施す。中位より上は部分的に指頭による強いナデ調整を施す。

ＳＫ22－壺棺墓５（Fig 18）

調査区の東北部でＳＫ21－壺棺墓４の南側に位置する。壺棺は削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは不整形を呈し，長径0.78ｍまで確認でき，短径0.755ｍを測る。長軸方向はＮ－38.0°－Ｗとなっている。検出面からの深さ22.0㎝を測る。墓壙の立ちあがりは緩やかな傾斜をもつ。埋置方向はほぼ東向きで据置方向は46.7°傾斜をもっている。なお，柱穴とＳＢ９に切られる。又，鉄器（174）が壺棺の埋土から出土しているが，壺棺に伴うものかどうかは不明である。

壺棺（Fig 18－173・174）

173は僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがる。胴部中位よりやや上で最大径を測る。胴部外面の上３分の２は叩き→荒いハケ原体によるハケ→ナデ→ヘラ磨き調整の順で，下３分の１は叩き→荒いハケ原体によるハケ調整の順で，下端はハケ→ナデ調整の順で仕上げている。胴部上端内面は指頭による強いナデ調整を施し他は荒いハケ原体によるハケ調整を施す。底部内面はナデ調整及び指頭圧痕を認める。底部と胴部下端の境に粘土接合帯を認める。174は鉄製鎌の可能性を有す。幅2.6㎝，長さ3.0㎝，厚さ0.35㎜である。

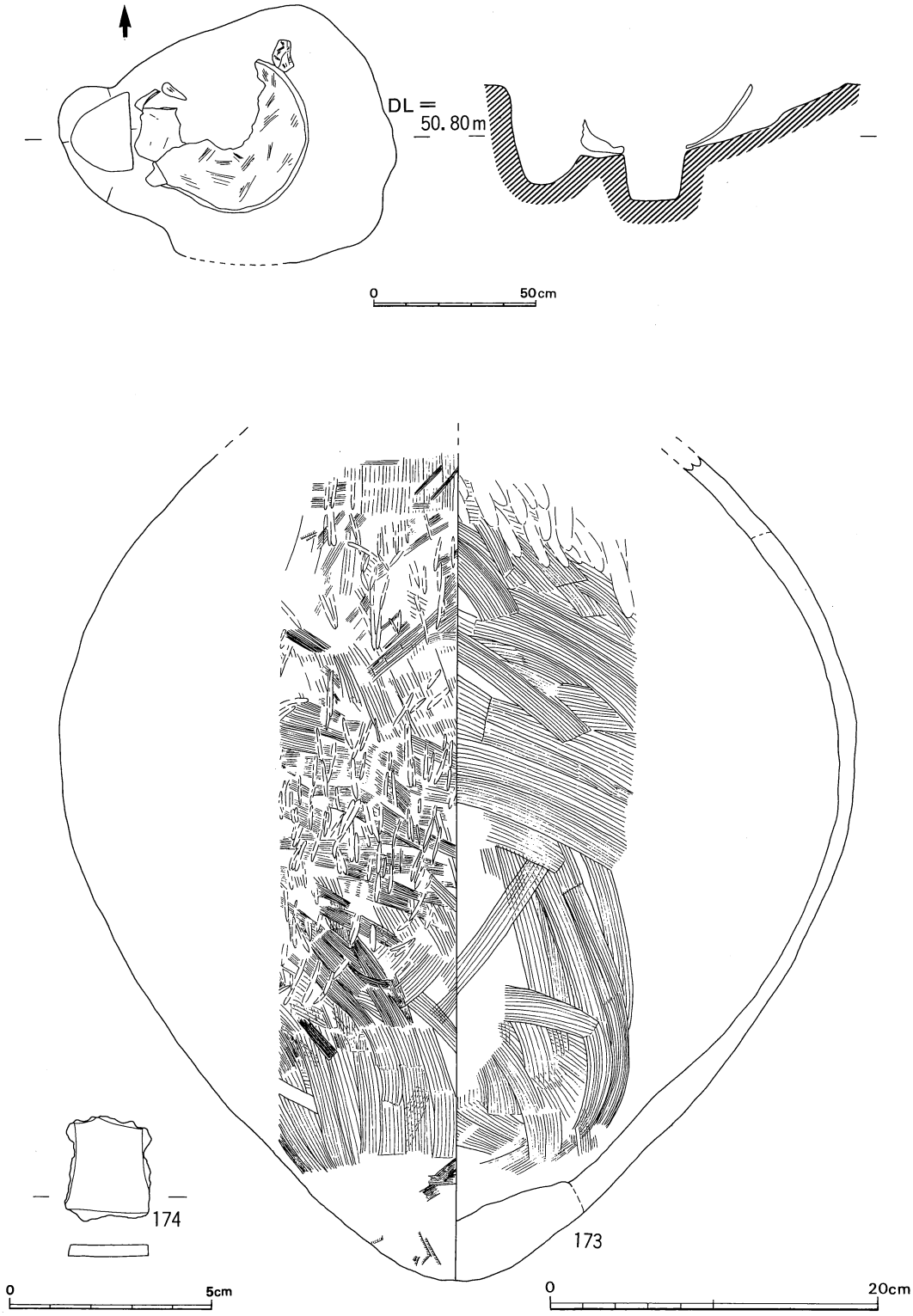


Fig 19　SK 22(壺棺墓５)実測図と出土遺物(173・174)

ＳＫ23－壺棺墓７（Fig 20）

調査区の東北部でＳＫ21－壺棺墓４の東側に位置する小さい壺棺である。壺棺は複棺（覆口式）であり削平のため残存状況は不良である。墓壙は東北側が柱穴に切られているが，平面プランは円形を呈すと考えられる。長径は0.675ｍまで確認できる。短径は0.575ｍを測る。長軸方向はＮ－72.0°－Ｗとなっている。検出面からの深さ38.5㎝を測り，断面形はＵ字形で東北方向は西南方向に比べやや緩やかに立ちあがる。埋置方位はほぼ東北向きで据置角度は62.5°傾斜をもっている。

壺棺（Fig 20－178）

178は僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがる。胴部中位で最大径を測る。胴部下端外面は叩き→ハケ→縦方向及び右下りの丁寧なヘラ磨きの順で仕上げる。胴部上端内面は、ハケ調整の後指頭による強いナデ調整を施し，他は不定方向のハケ調整の後ナデ調整を部分的に施す。胴部外面に黒斑を認める。

ＳＫ24－壺棺墓８（Fig 20）

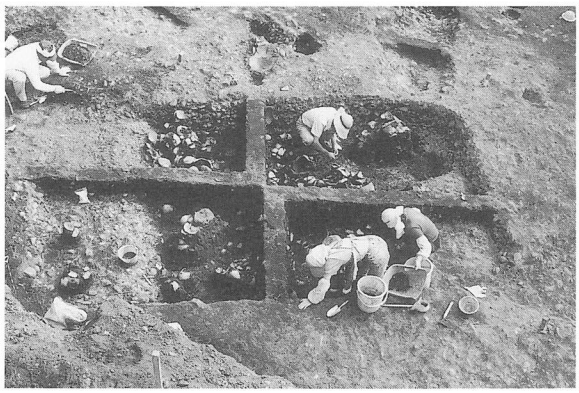
調査区の東北部に位置し，ＳＴ９の北側に隣接する。壺棺は削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面プランは円形を呈し，長径0.43ｍ，短径0.38ｍを測る。長軸方向はＮ－10.2°－Ｅとなっている。検出面からの深さ8.5㎝を測り，断面形は舟底状を呈す。埋置方位はほぼ東向きで据置角度は8.5°傾斜をもっている。

壺棺（Fig 20－177）

177は平底から内湾気味に立ちあがる。胴部は叩きの後不定方向のハケ調整を施す。底部外面はナデ調整を施す。内面はハケ調整の後指頭による強いナデ調整を施す。

ＳＫ32－壺棺墓９（ＰＬ27）

調査区の東北部でＳＴ８の東側に位置する。壺棺は削平を受けており残存状況は壺棺の中で最も不良で僅かに一部が残るのみである。墓壙の平面プランは円形状であったと考えられる。長径0.28ｍ，短径0.25ｍを測る。長軸方向は不明である。深さ2.0㎝を測り墓壙の基底部のみの残存である。埋置方位はほぼ北向きで据置角度は不明である。



住居址の検出

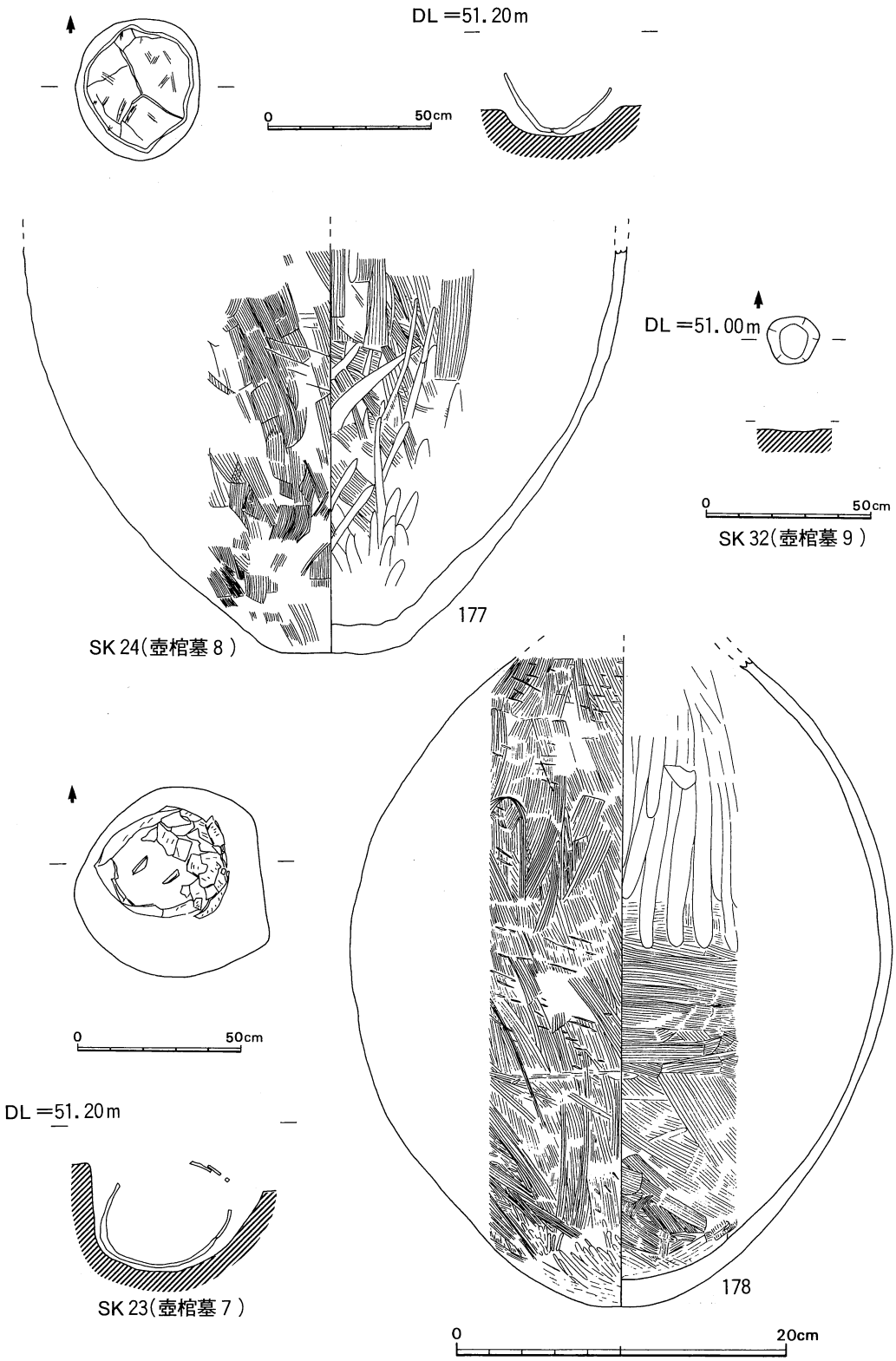


Fig 20　SK 23・24・32(壺棺墓 7 ～ 9)実測図と出土遺物(177・178)

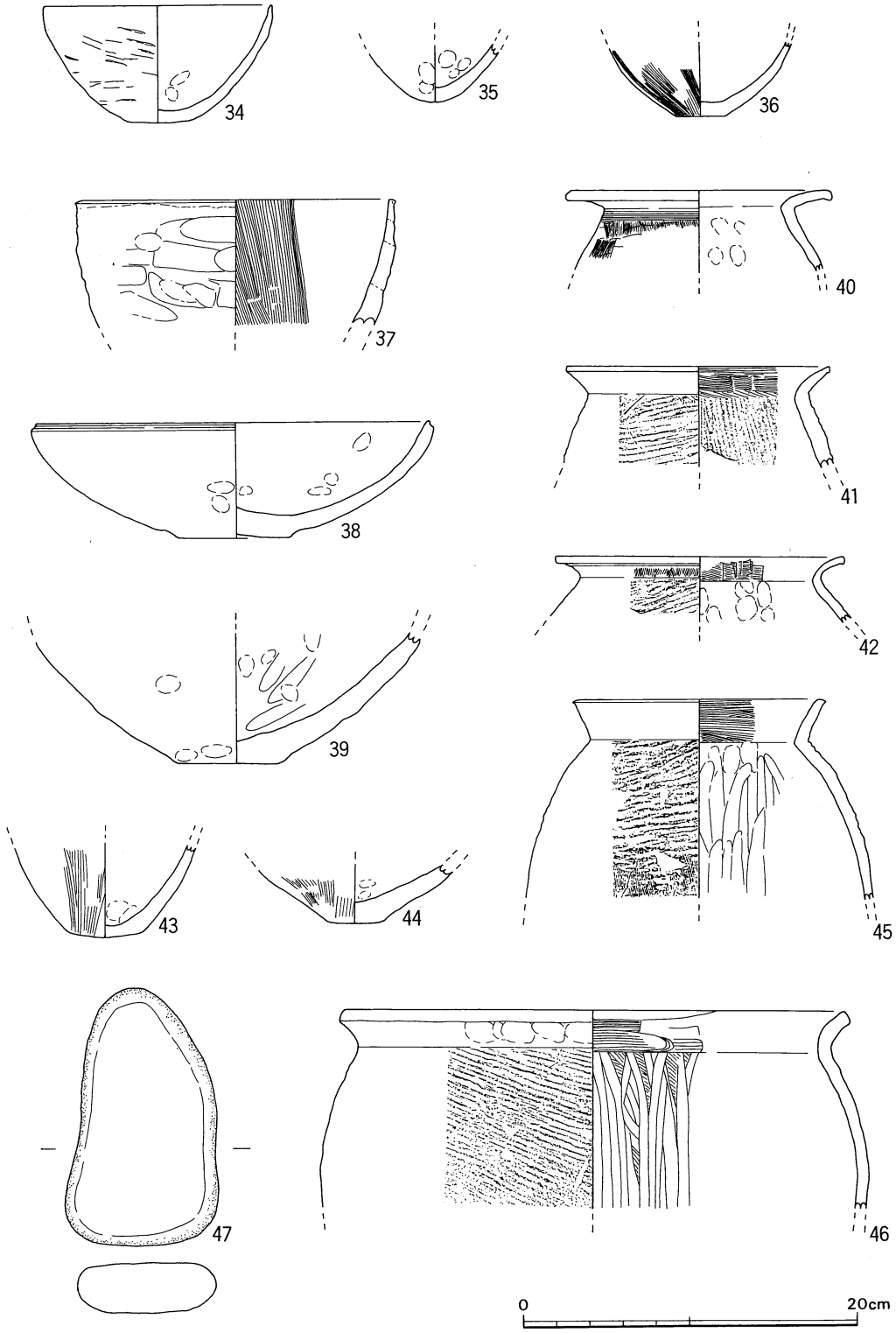


Fig 21　ST 1 (34～47)出土遺物

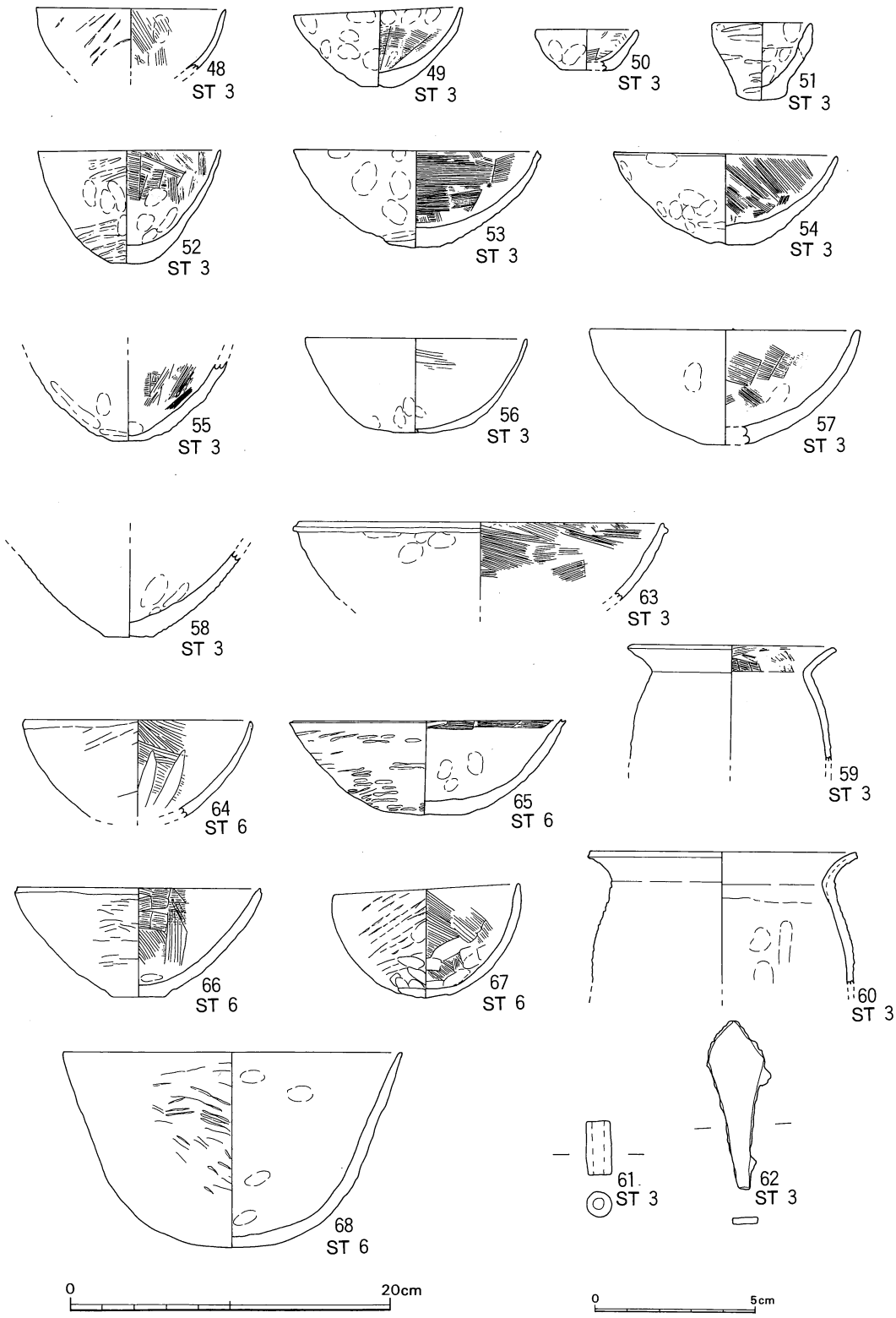


Fig 22　ST 3 (48～63)・ST 6 (64～68)出土遺物

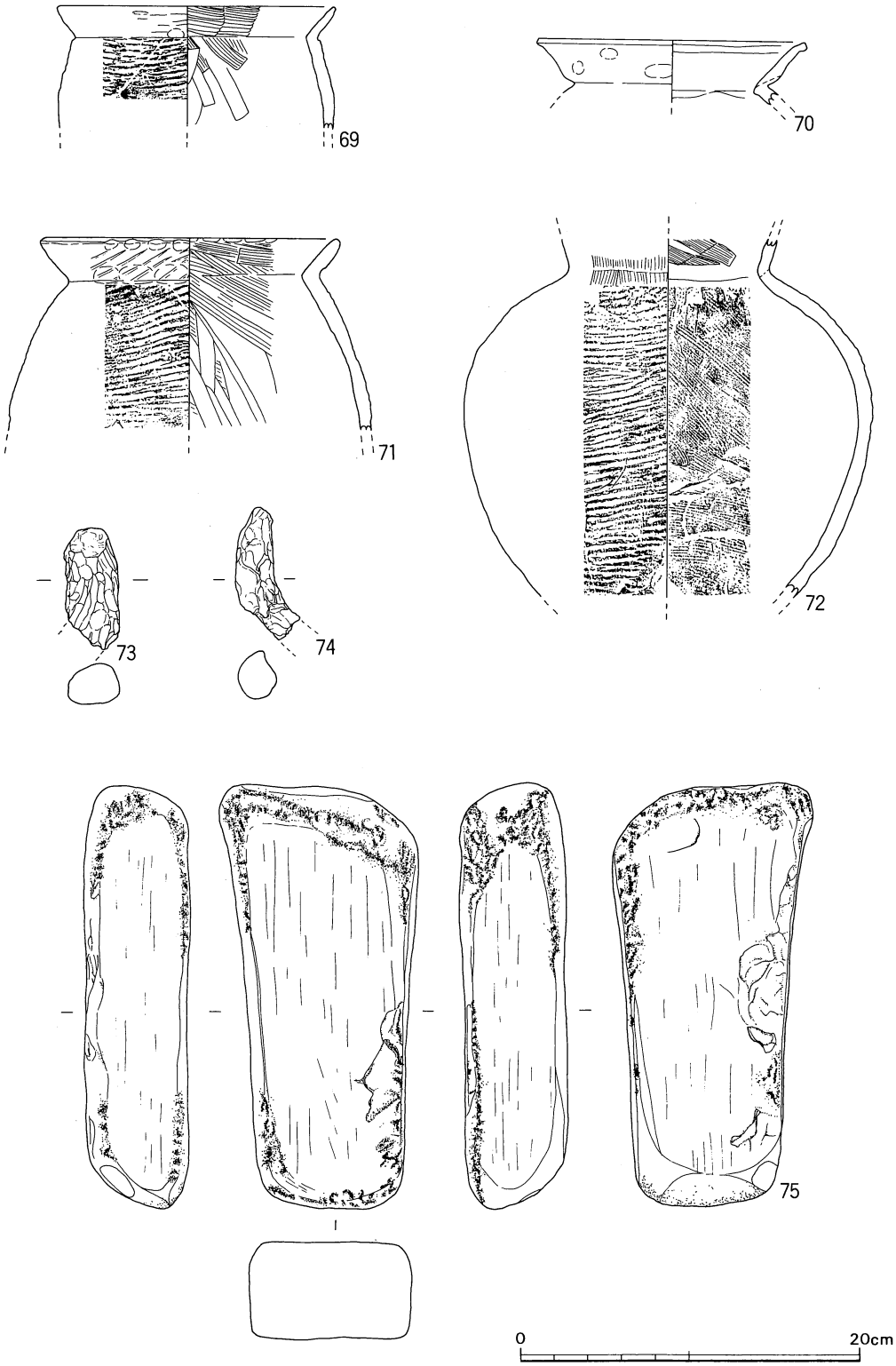


Fig 23　ST 6 (69～75)出土遺物

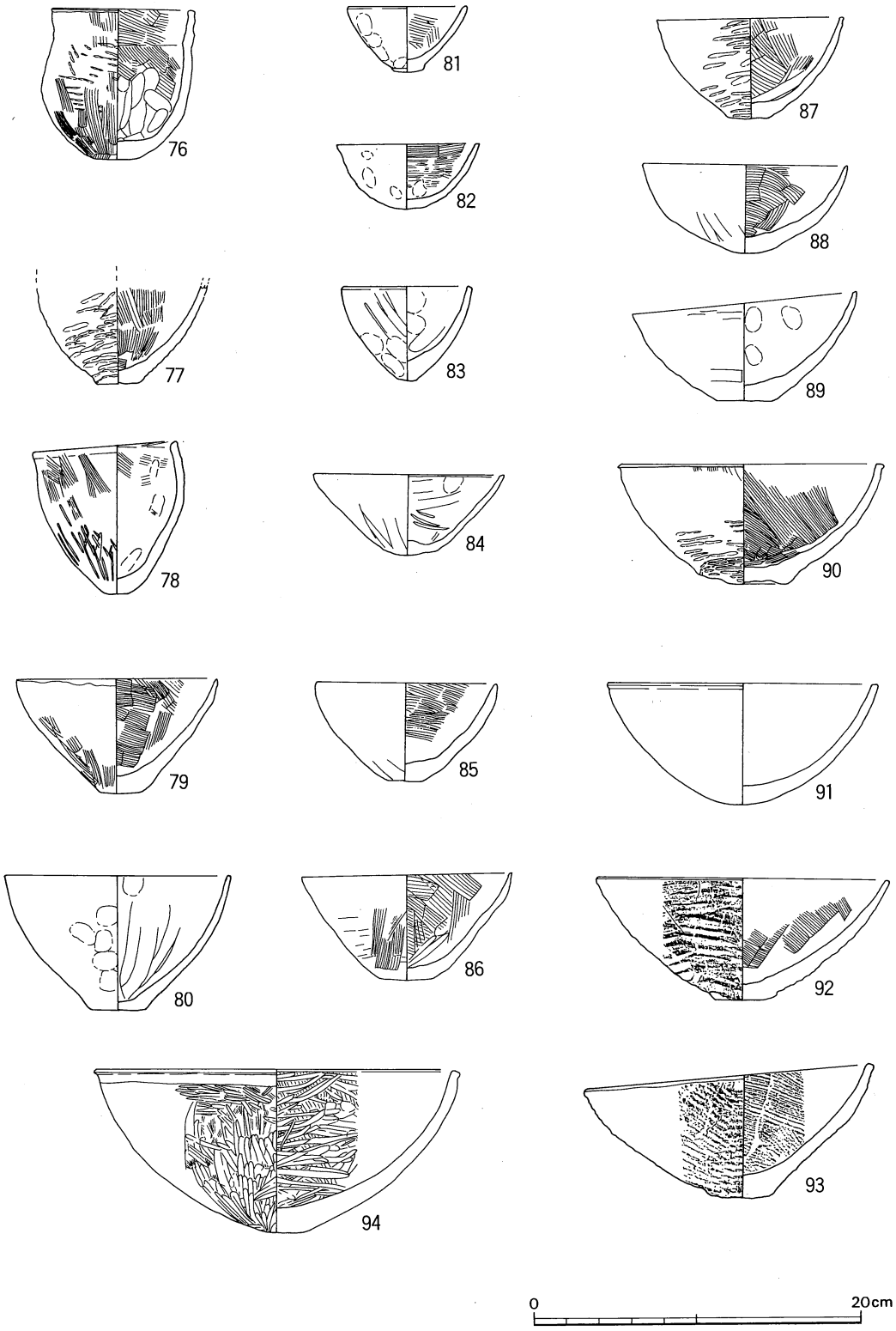


Fig 24　ST 8 (76～94)出土遺物

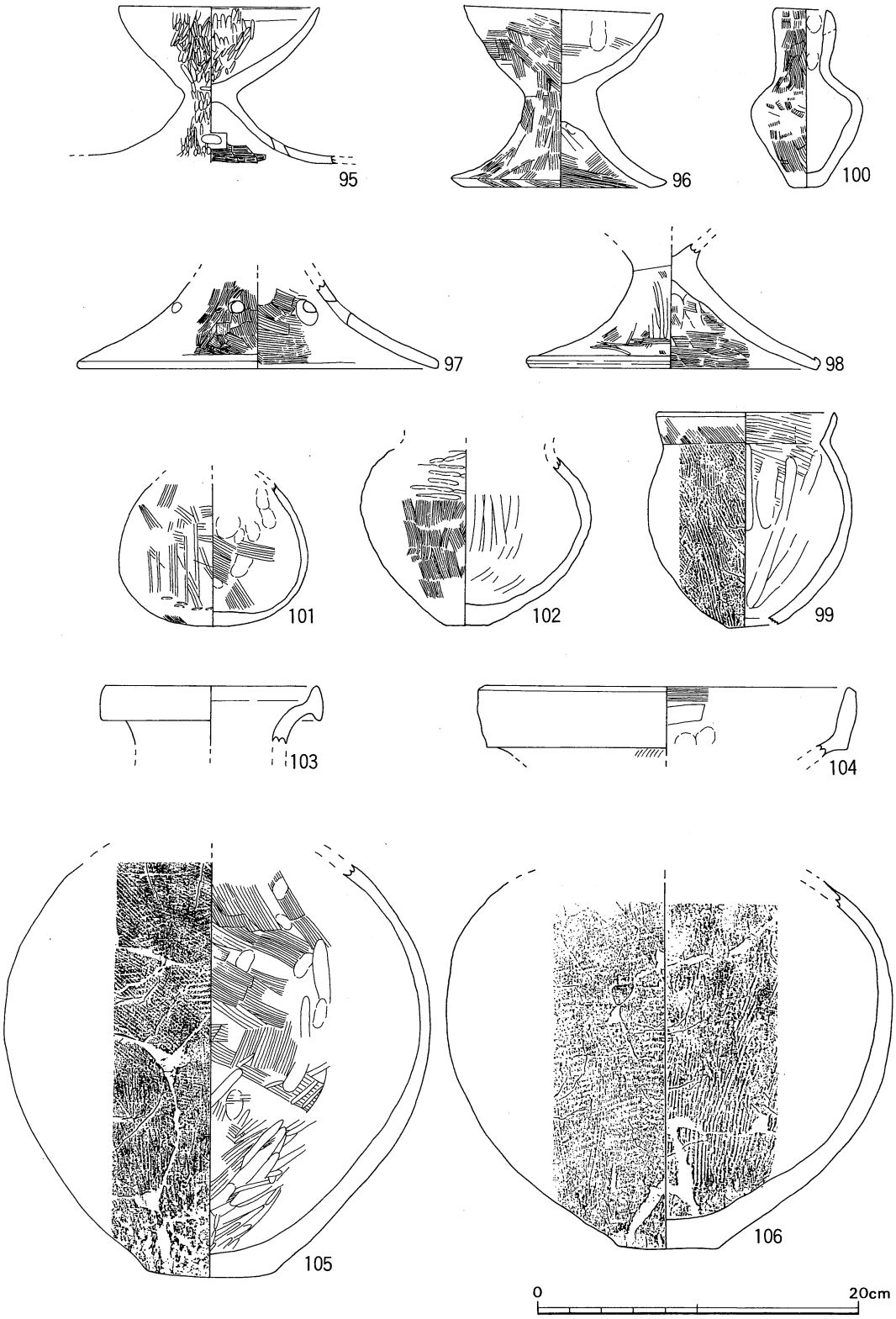


Fig 25　ST 8 (95～106)出土遺物

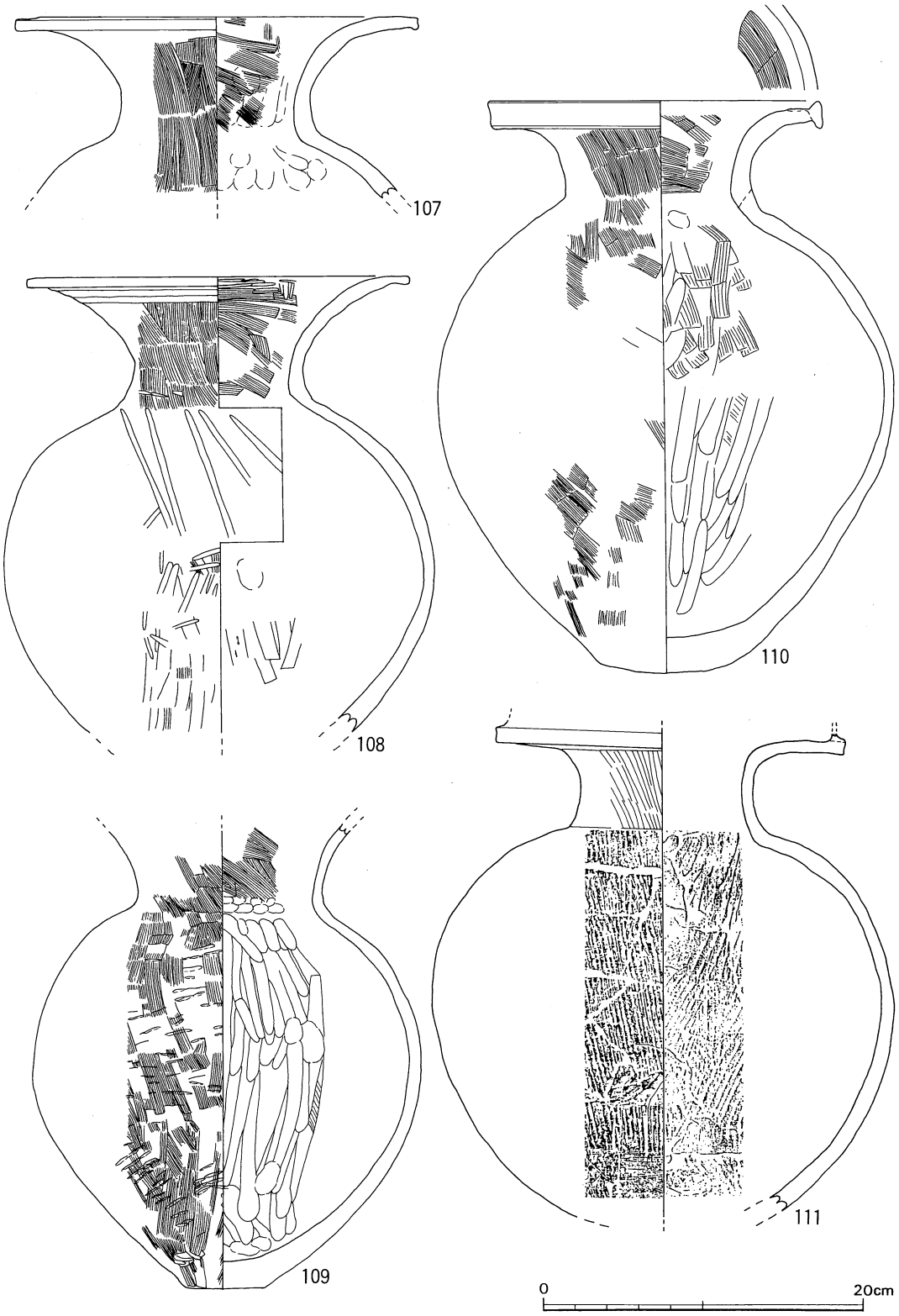


Fig 26　ST 8 (107～111)出土遺物

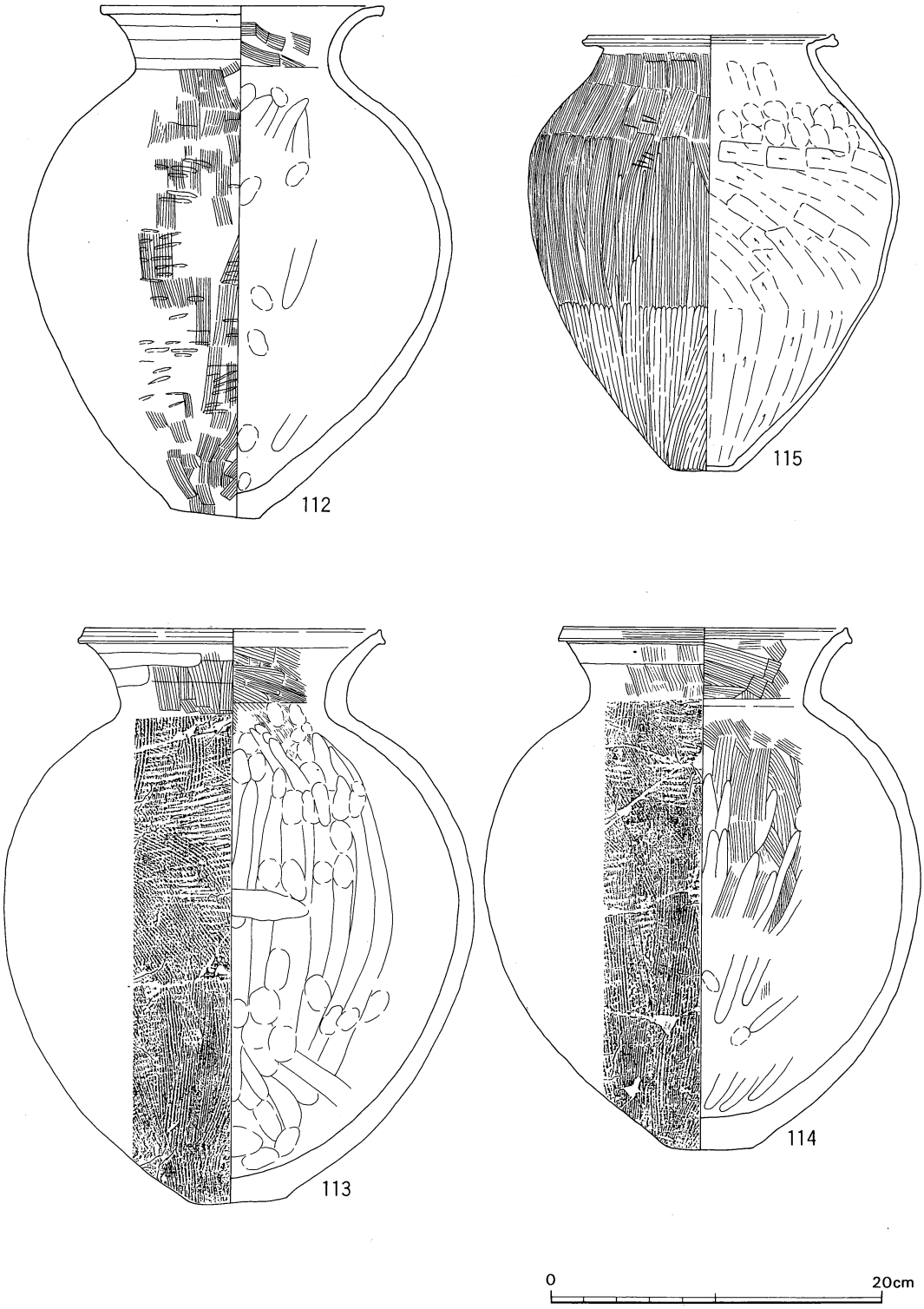


Fig 27　ST 8 (112～115)出土遺物

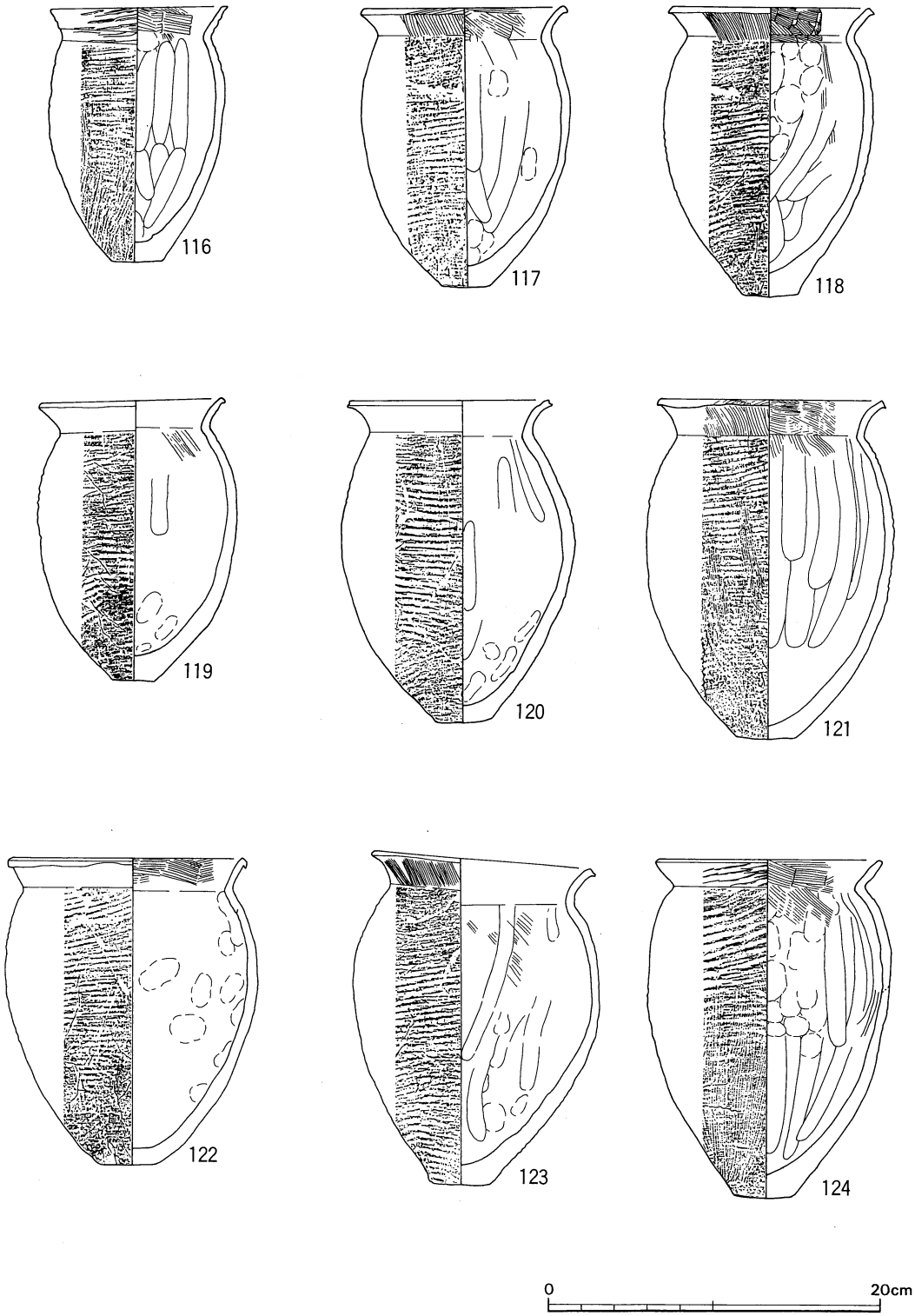


Fig 28　ST 8 (116～124)出土遺物

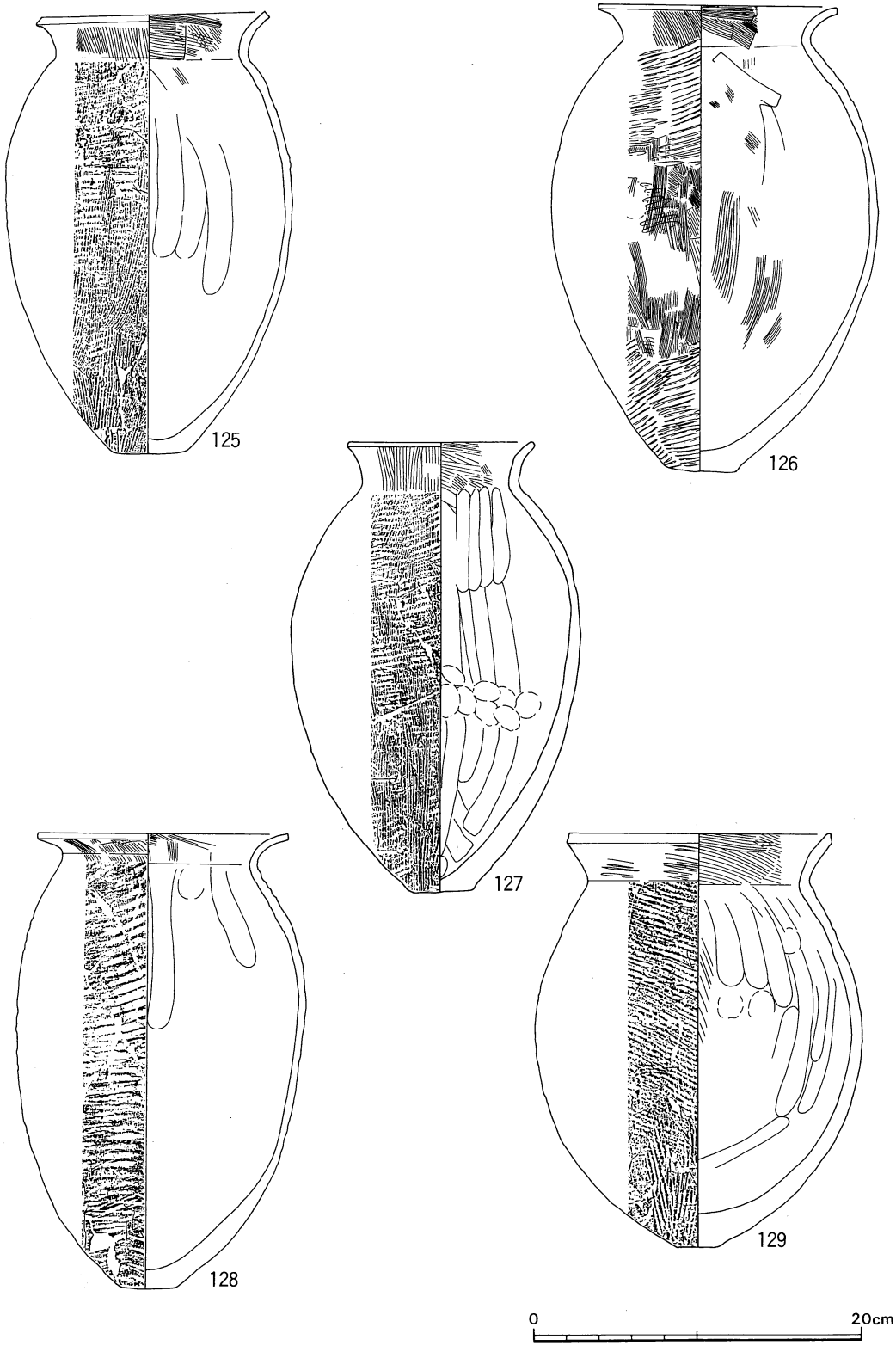


Fig 29　ST 8 (125～129)出土遺物

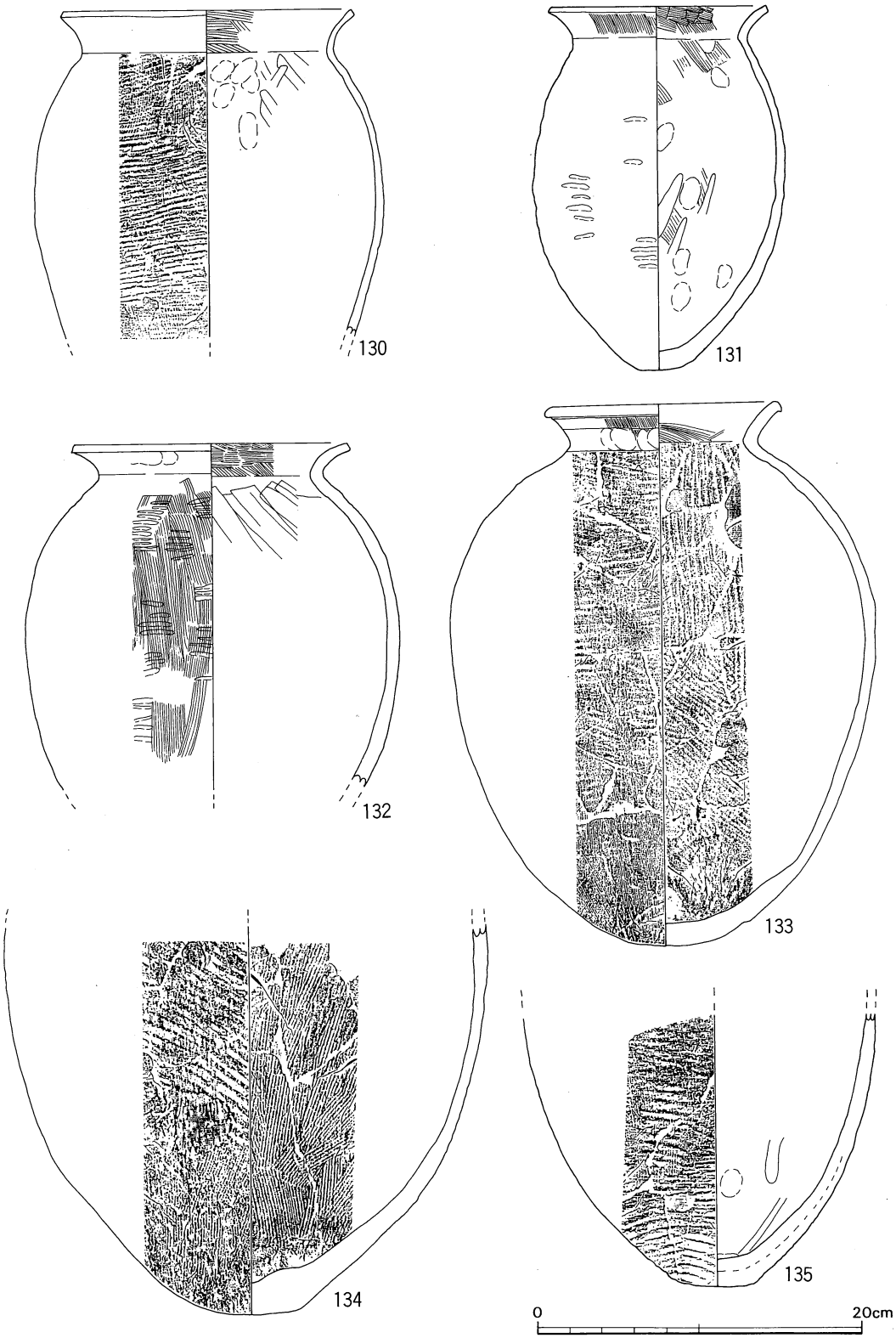


Fig 30　ST 8 (130～135)出土遺物

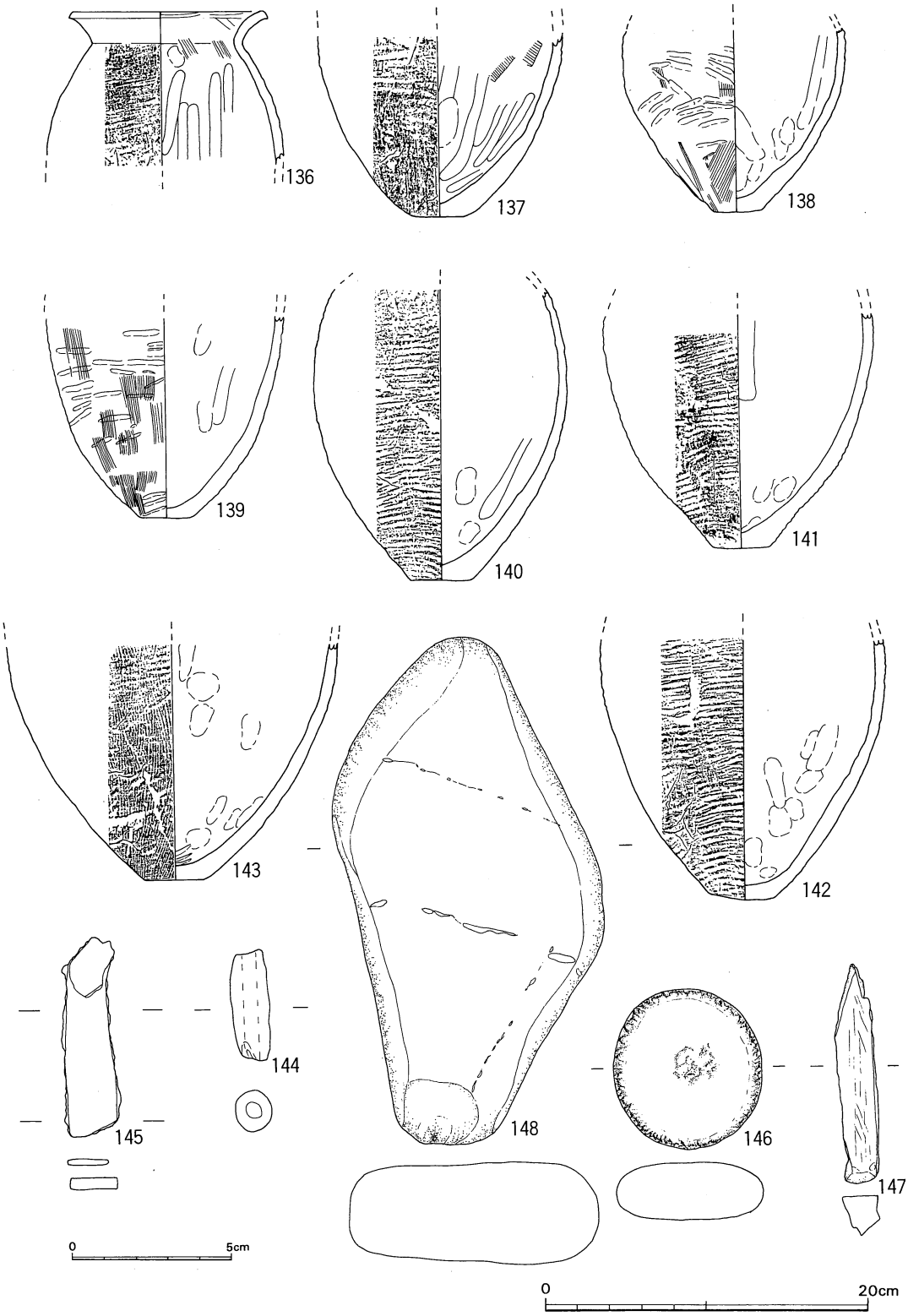


Fig 31　ST 8 (136～148)出土遺物

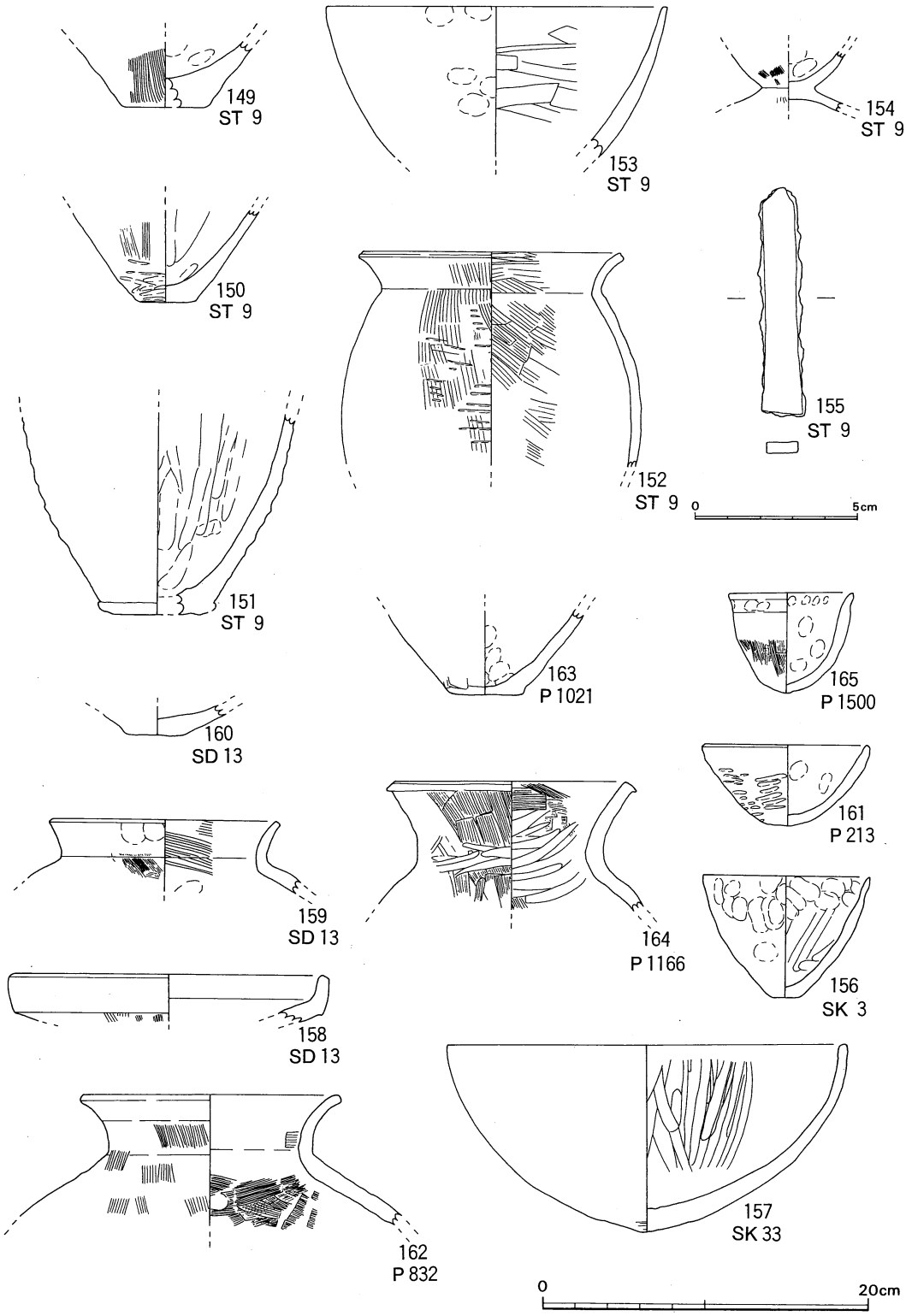


Fig 32　ST 9，SK 3・33，SD 12，P 213・832・1021・1166・1500出土遺物

2．古墳時代

古墳時代の遺構として竪穴住居５棟，土坑８基，溝７条，柱穴多数を検出した。以下各遺構とその出土した遺物の概要を述べることにする。

竪穴住居

ＳＴ２（Fig 33）

調査区の中央部南端に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径5.02m，短径4.86m，検出面からの深さは8.0～12.0cm，面積は約24.40m²を測る。長軸方向はＮ－7.2°－Ｗとなっている。埋土はⅠ～Ⅳ層である。Ⅰ層：灰黒色土，Ⅱ層：灰茶色粘質土，Ⅲ層：焼土，Ⅳ層：灰である。床面はほぼ水平な面をなし，Ｐ１～Ｐ９の９個の柱穴を検出したがＰ１～Ｐ４を主柱穴とする４本柱構造と推測されるがＰ１はＳＢ６－Ｐ９と重複しており，Ｐ２～Ｐ４は柱穴の切り合いがみられ建て替えが考えられる。これらの柱穴の直径は19.0～35.0cm，検出面からの深さは8.0～32.0cm，主柱穴の柱間距離は2.32～2.88mを測る。柱穴の埋土は灰黒色土単純一層である。又，中央ピットの平面プランは不整形を呈し，長軸1.65m，短軸0.30m，検出面からの深さ5.0～7.0cmを測り，床面は東壁側が１段高い段状を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，北側中央の壁際で焼土を確認したことからカマドの可能性を有するが平面プランをとらえることはできなかった。出土遺物から６世紀後半と考えられる。

出土遺物（Fig 39－179～182）

土師器高杯（179～180）は焼土から出土した。179は杯部は内湾気味に立ちあがり口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。内・外面共に２次焼成で糸く発色する。180は杯部は内湾気味に立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。181は土師器甕である。182は須恵器蓋である。僅かに内湾して立ちあがり段をなして頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。

ＳＴ４（Fig 34）

調査区の西端部でＳＴ５の東側に隣接して位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径3.24m，短径2.7m，検出面からの深さは3.0～9.0cm，面積は8.75m²を測る小さな住居址である。長軸方向はＮ－14.5°－Ｅとなっている。埋土は黒色土単純一層である。床面はほぼ水平な面をなし，Ｐ１～Ｐ６を主柱穴とする６本柱構造と推測される。これらの柱穴の直径は23.0～63.0cm，深さ8.0～13.0cm，柱間距離は0.5～2.2mを測る。又，Ｐ７は貯蔵穴と考えられ平面プランは円形を呈し，直径約49.0cm，検出面からの深さは14.0cmを測る。柱穴の埋土は黒色土単純一層である。出土遺物から４世紀初頭と考えられる。なお，古代～中世の多くの柱穴に切られる。

出土遺物（Fig 39－183～186）

土師器鉢（184・185），土師器甕（183・186）が床面から出土した。184の土師器鉢は丸底から内湾して立ちあがり，口縁部は屈曲して外反する。185は突出気味の平底から斜上外方に直

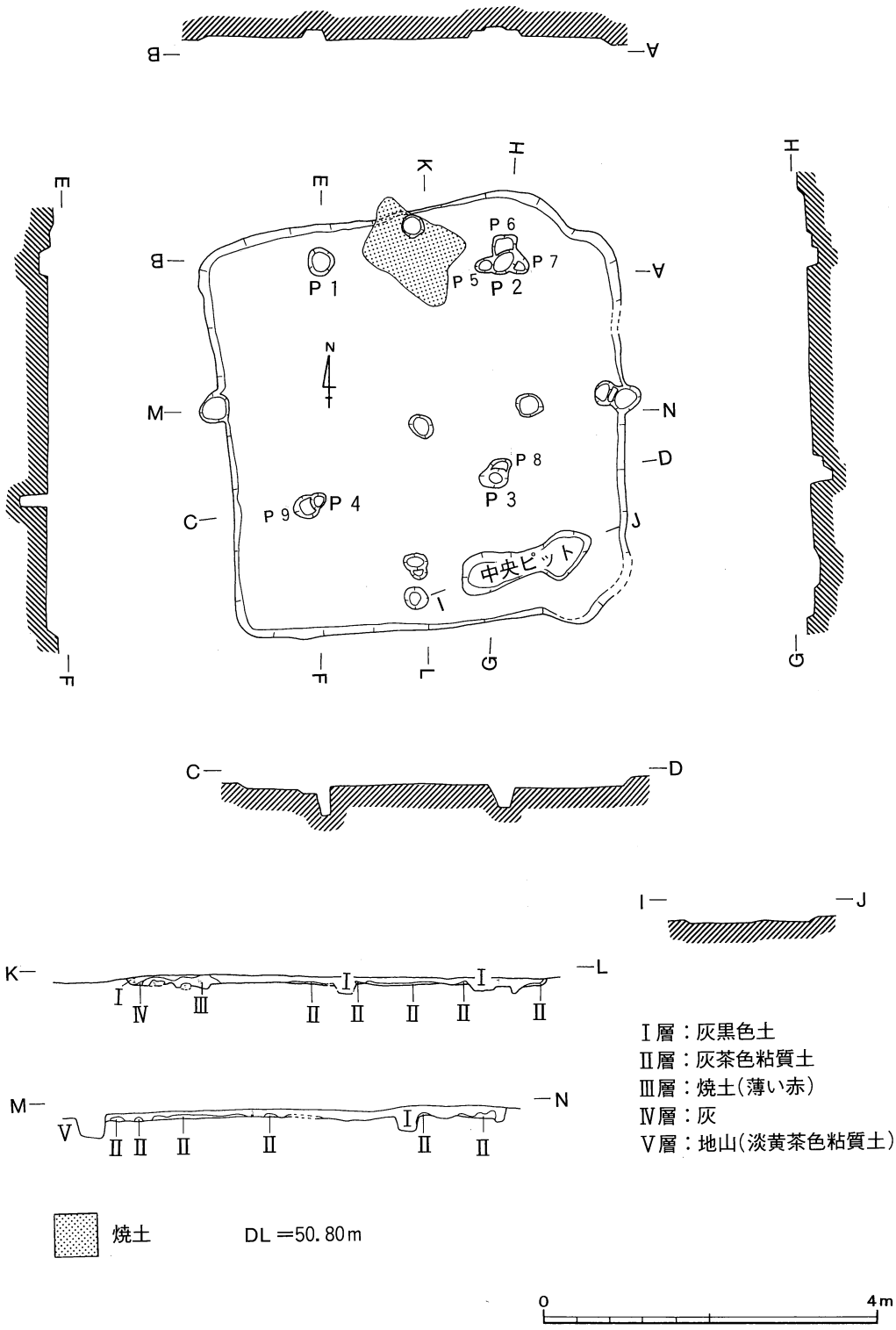


Fig 33　ST 2 実測図

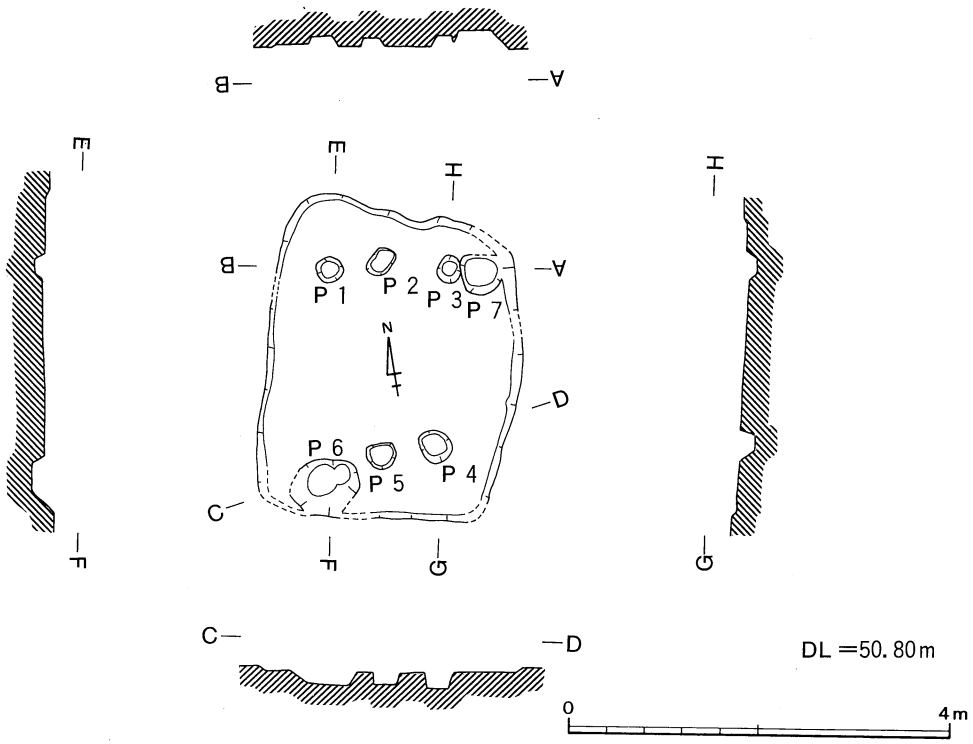


Fig 34　ST 4 実測図

線的に立ちあがる。183の甕は丸底気味の底部から内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は下方に僅かに肥厚して口唇部は外傾して面をなす。186は内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。

ＳＴ５（Fig 35）

調査区の西端部でＳＴ４の西側に隣接して位置する。西側は調査区外に出る。平面プランは扁平な隅丸方形を呈すると考えられベッド状遺構を伴う。長径は5.9ｍまで確認できる。短径4.93ｍ，検出面からの深さは11.0～20.0㎝，面積は約29.09㎡まで確認できる。長軸方向はＮ－67.5°－Ｗとなっている。埋土はⅠ～Ⅱ層である。Ⅰ層：黒色土，Ⅱ層：淡灰黒色土である。床面は３～10㎝の礫が多いがほぼ水平な面をなし，Ｐ１～Ｐ18の18個の柱穴を検出したがＰ１～Ｐ４を主柱穴とする４本柱構造と推測される。これらの柱穴の直径は30.0～49.0㎝，検出面からの深さ26.0～31.0㎝，柱間距離は1.95～2.83ｍを測る。なお，Ｐ１・Ｐ２は柱穴の切り合いが見られ建て替えが考えられる。ベッド状遺構は，南西部及び北東部に造っており，ベッドは地山成形で幅0.95～1.52ｍ，検出面からの深さは6.0～10.0㎝を測る。中央ピットは住居址の南側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径0.80ｍ，短径0.58ｍ，検出面からの深さ12.0㎝を測る。柱穴及び中央ピットの埋土は淡灰黒色土単純一層である。出土遺物から４世紀初頭と考えられる。古代～中世の多数の柱穴に切られる。

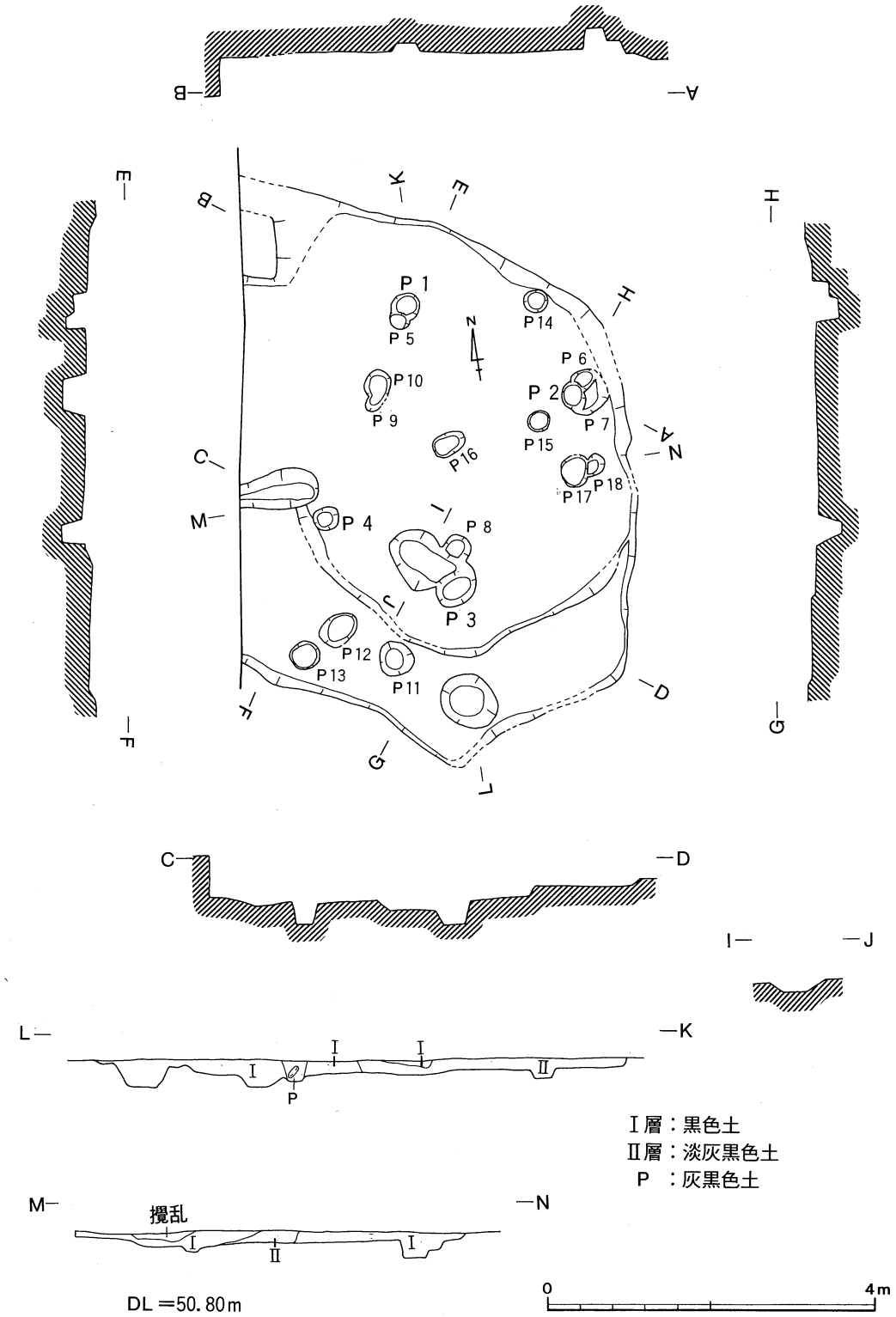


Fig 35　ST 5 実測図

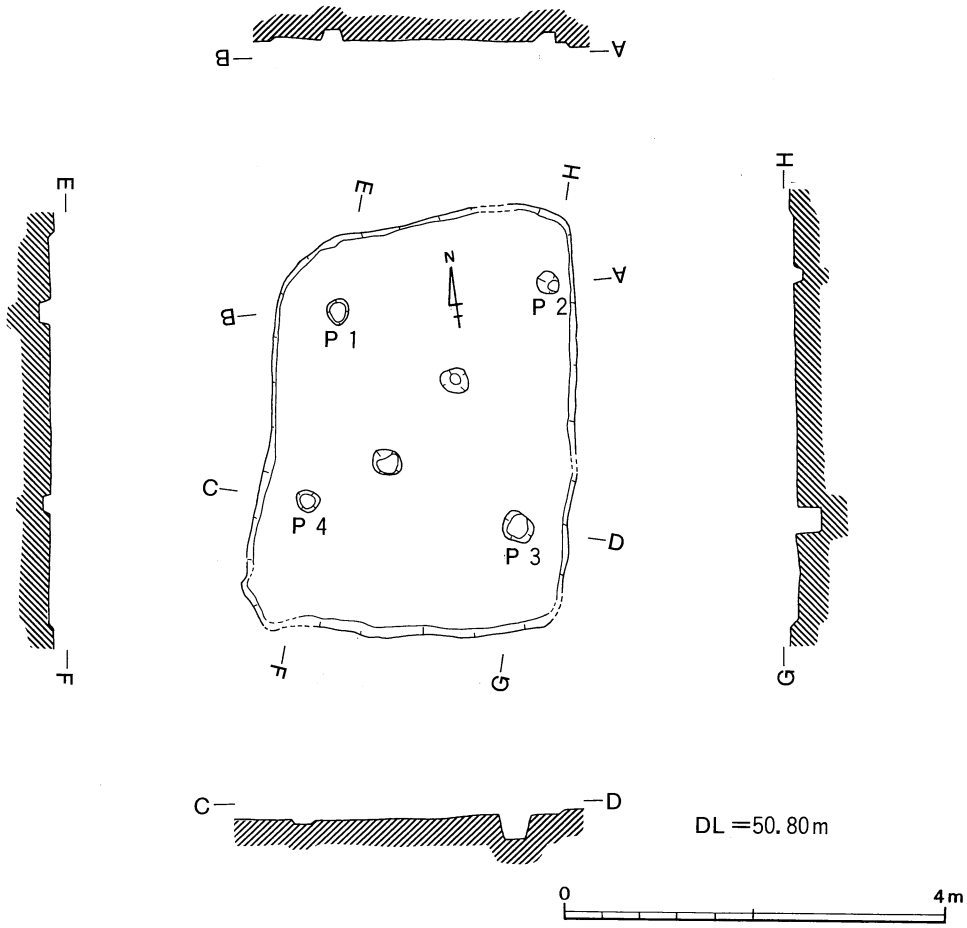


Fig 36　ST 7 実測図

出土遺物（Fig 39－187～192）

土師器鉢（187～189）は埋土から土師器鉢（190）はほぼ完形で床面から出土した。土師器坩（191），土師器甕（192）は床面から出土した。187は平底から斜上外方に僅かに外反して立ちあがる。190は丸底気味の底部から内湾して立ちあがり一端肥厚して口縁部に至る。口唇部は外傾して面をなす。体部外面に粍圧痕を認める。又，内面は有機物が付着する。191の土師器坩は内湾して立ちあがり屈曲して口縁部に至る。口縁部は斜上外方は直線的に長く立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。土師器甕（192）は口縁部は「く」の字状に外反して，口唇部は僅かに凹んで面をなす。

ＳＴ７（Fig 36）

調査区の中央部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径4.5m，短径3.34m，検出面からの深さは2.0～8.0cm，面積は15.03m²を測る。長軸方向はＮ－10.2°－Ｅとなっている。

埋土は黒色土単純一層である。床面はほぼ水平な面をなしＰ１～Ｐ４を主柱穴とする４本柱構造と推測される。これらの柱穴の直径は22.0～36.0㎝，検出面からの深さは4.0～26.0㎝，主柱穴の柱間距離は2.1～2.6ｍを測る。柱穴の埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 39－193・Fig 40－194～198）

須恵器蓋（194），須恵器杯（195），土師器甕（196～198）打製石庖丁（193）はいずれも床面より出土したが，打製石庖丁は古い時期の混入品と考えられる。須恵器蓋（194）は平坦な頂部から僅かに稜をもって下降し口縁部に至る。頂部外面はヘラ削りを施す。須恵器杯（195）は内湾気味に立ちあがり，受端部は丸くおさめる。立ちあがりは外反気味に短く内傾し，端部は丸くおさめる。196の土師器甕は内湾して立ちあがり，口縁部は屈曲して外反する。胴部内面は右下りのヘラ削りを施す。胴部外面は２次焼成で紅く発色する。土師器甕（197）は平底から内湾気味に立ちあがる。198の甕は内湾気味に立ちあがり，口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。内・外面共横ナデ調整を施す。

ＳＴ10（Fig 37）

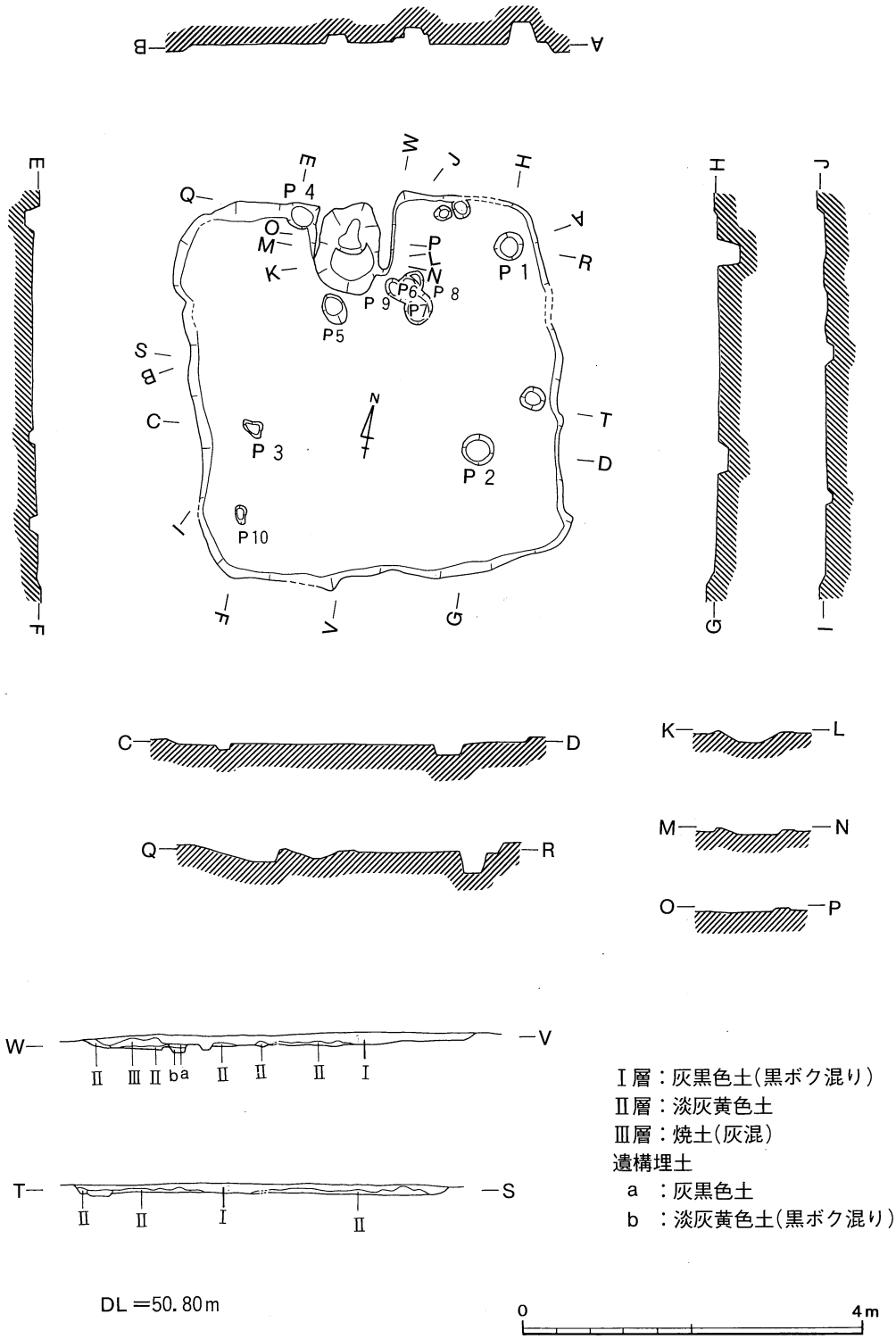
調査区の東南部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。北側の壁際のほぼ中央部にカマドが確認された。長径4.47ｍ，短径4.25ｍ，検出面からの深さは4.0～10.0㎝，面積は約19.00㎡を測る。長軸方向はＮ－15.0°－Ｗとなっている。埋土は黒色土単純一層である。床面はほぼ水平な面をなすが南半分は10㎝前後の礫が一面にあった。Ｐ１～Ｐ10の10個の柱穴を検出したがＰ１～Ｐ４を主柱穴とする４本柱構造が推測される。これらの主柱穴の直径は15.0～48.0㎝，検出面からの深さ7.0～26.0㎝，柱間距離は1.82～2.72ｍを測る。埋土は黒色土単純一層である。なお，中世の柱穴に切られる

カマド（Fig 37）

住居址の北側の壁際のほぼ中央に構築され，突出型と考えられる。右袖の長さは1.02ｍ，幅15.0㎝，左袖の長さ0.62ｍ，幅10.0㎝を測る。焼却部は僅かに凹む。埋土は焼土と灰が混じる。

出土遺物（Fig 40－199～207）

須恵器蓋(200)，須恵器杯(201～202)，古い時期からの混入品と考えられる弥生土器甑(204)，弥生土器壺（207）が埋土から，須恵器杯（203）は床面から，須恵器蓋（199），土師器甕（205・206）はカマドの埋土から出土した。須恵器蓋（200）は頂部から緩やかに下降し段をなして外方に開がり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。202の須恵器杯は住居址の全体に破片が散乱していたが，丸底気味の底部から内湾して立ちあがり受端部は丸くおさめる。立ちあがりは短く内傾して端部は丸くおさめる。底部内面は指頭による強い放射状のナデ調整を施す。土師器甕（205）は，口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。胴部外面は横方向の丁寧なハケ調整を施す。胴部内面は強い横ナデ調整を施す。



Ⅰ層：灰黒色土(黒ボク混り)
Ⅱ層：淡灰黄色土
Ⅲ層：焼土(灰混)
遺構埋土
a ：灰黒色土
b ：淡灰黄色土(黒ボク混り)

Fig 37　ST 10実測図

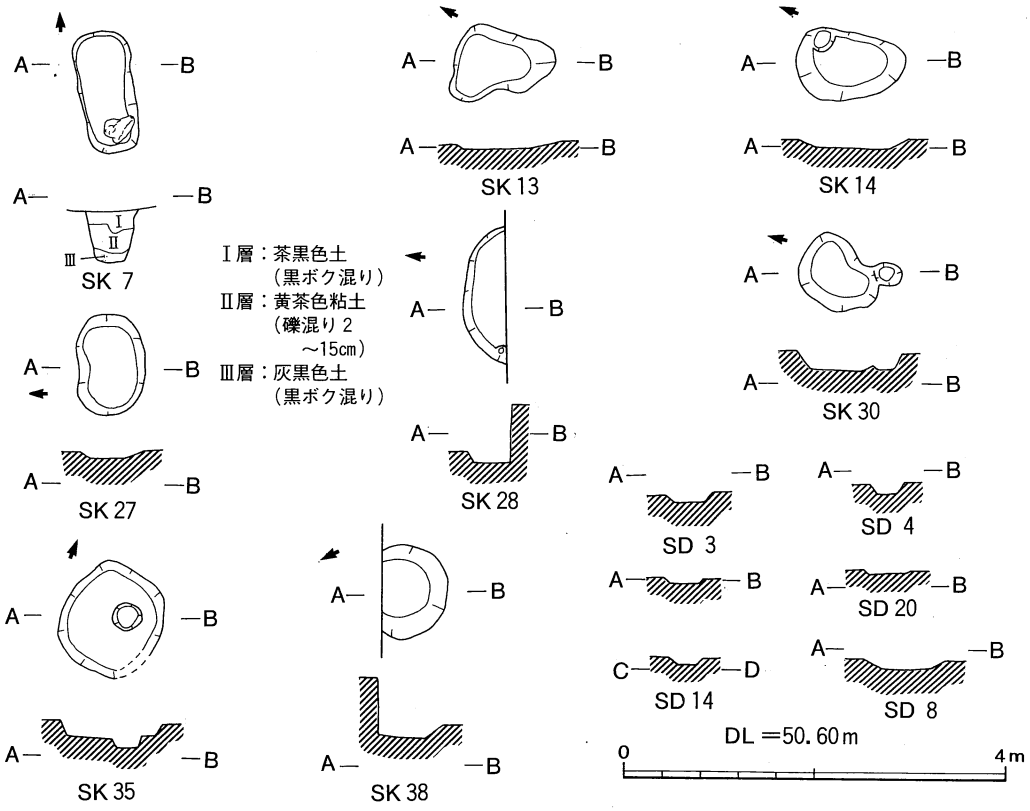


Fig 38　SK 7・13・14・27・28・30・35・38，SD 3・4・8・14・20実測図

土坑

ＳＫ７（Fig 38）

調査区の西端部，ＳＴ５の南側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径1.27m，短軸0.58m，検出面からの深さは55.0cmを測る。断面形はＵ字形を呈す。長軸方向はＮ－9.0°－Ｗとなっている。埋土はⅠ～Ⅲ層である。Ⅰ層：茶黒色土，Ⅱ層：黄茶色粘質土（2.0～15.0cmの礫混り），Ⅲ層：灰黒色土である。

出土遺物

弥生土器片，土師器片，須恵器甕片，杯片等が出土しているが図示できるものではない。

ＳＫ13（Fig 38）

調査区の中央北部，ＳＫ14の西側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径1.08m，短径0.59m，検出面からの深さは6.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－27.3°－Ｗとなっている。埋土は灰黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片，土師器甕片が少量出土しているが図示できるものではない。

ＳＫ14（Fig 38）

調査区の中央北部，ＳＫ13の東側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径1.15m，短径0.72m，検出面からの深さは8.0～10.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－10.0°－Ｗとなっている。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 40－208）

弥生土器片，土師器片及び須恵器甕片，高杯脚部（208）がある。

ＳＫ27（Fig 38）

調査区の東北部，ＳＫ22（壺棺墓５）の東側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径1.07m，短径0.70m，検出面からの深さは7.0～8.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－88.2°－Ｅとなっている。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物はなかった。

ＳＫ28（Fig 38）

調査区の西南端部に位置する。南側の半分程度調査区外に出る。平面プランは楕円形を呈すと考えられる。長径1.45m，短径0.46m以上，検出面からの深さ12cmを測る。長軸方向は不明である。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＫ２に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器片があるが図示できるものではない。

ＳＫ30（Fig 38）

調査区の東部，ＳＫ29の南側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径0.90m，短径0.64m，検出面からの深さは18.0～20.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－24.2°－Ｅとなっている。なお東南端が中世の柱穴に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器片があるが図示できるものではない。

ＳＫ35（Fig 38）

調査区の東南端部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径1.27m，短径1.07m，検出面からの深さは12.0～17.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－25.9°－Ｗとなっている。埋土は暗灰黒色土単純一層である。中央部に直径30.0cm，土坑の床面からの深さ12.0cmの円形のプランを呈す柱穴を確認したが先後関係は不明である。なお，ＳＢ12に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器片が少量あるが図示できるものではない。

ＳＫ38（Fig 38）

調査区の北東端に位置し，北側は調査区外に出る。平面プランは円形を呈すと考えられる。長径1.02m，短径0.70mまで確認できる，検出面からの深さは12.0～15.0cmを測る。断面形は

逆台形を呈す。長軸方向はN－57.8°－Wとなっている。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片，土師器片があるが少量で図示できるものではない。

溝

ＳＤ３（Fig 38）

調査区の西南端部に位置する。N－73.5°－Wで東西方向に3.6m延び，西側は調査区外に出る。幅0.40～0.62m，検出面からの深さは9.0cm，床面の東端の標高は50.325m，西端の標高は50.343mを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は灰黒色粘質土単純一層である。なお，ＳＫ11に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器片（内面青海波文を認める）が少量あるが図示できるものではない。

ＳＤ４（Fig 38）

調査区の西南部に位置する。N－84.0°－Wで東西方向に3.48m延び，西側は調査区外に出る。幅0.30～0.45m，検出面からの深さは12.0cm，床面の東端の標高は50.365m，西端の標高は50.934mを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は黒色土単純一層である。なお，ＳＴ１を切る。

出土遺物（Fig 40－209）

弥生土器片，土師器片，棒状叩石（209）が出土している。

ＳＤ８（Fig 38）

調査区の西南部に位置する。N－17.5°－Eで南北方向に3.8m延び，南側は調査区外に出る。幅0.7～0.92m，検出面からの深さは9.0～11.0cm，床面の北端の標高は50.376m，南端の標高は50.375mを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰黒色土単純一層である。なお，ＳＤ９に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器片，須恵器片が出土しているが細片で図示できるものではない。

ＳＤ14（Fig 38）

調査区の北部に位置する。東西方向に東から僅かにカーブを描いてN－81.5°－Wで26.35m延びる。東西両端部は検出できなかったが，これは削平の結果と考えられる。幅0.16～0.70m，検出面からの深さは7.0cm，床面の東端の標高は50.85m，西端の標高は50.567mを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＡ１，ＳＤ18・ＳＤ24に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器片が出土しているが細片で図示できるものではない。

ＳＤ20（Fig 38）

調査区の南東部に位置する。N－8.0°－Eで南北方向に5.9m延びた後分かれて南東方向に2.8m，西南方向に3.8m延びる。西南端部は調査区外に出る。北端及び南東端は検出できなか

ったがこれは削平の結果と考えられる。幅0.6～1.4m，検出面からの深さ7.0cm，床面の北端の標高は50.754m，南東端の標高は50.713m，西南端の標高は50.679mを測る。埋土はⅠ～Ⅱ層である。Ⅰ層：灰黒色粘質土（黒ボク混り）Ⅱ層：暗茶色砂礫土（1～3cmの砂礫を含む）である。

出土遺物

Ⅱ層より摩耗した弥生土器片，土師器片が多く出土したがいずれも細片で図示できるものではない。

ＳＤ24（Fig 60）

調査区の東部，ＳＤ18の西側に位置する。Ｎ－5.5°－Ｅで南北に3.0m延びる。南北両端は検出できなかったがこれは削平の結果と考えられる。幅0.28～0.43m，検出面からの深さ6.0cm，床面の北端の標高は50.78m，南端の標高は50.735mを測る。断面形は逆台形を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＤ14を切る。

出土遺物はなかった。

柱穴

Ｐ1803（Fig 63）

調査区の西端部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径55.0cm，短径35.0cm，検出面からの深さ26.3cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 40－210）

須恵器壺（210）が出土している。外面中央が凹む底部から内湾気味に立ちあがる。内・外面共丁寧な横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りである。

ローリングタワーからの撮影

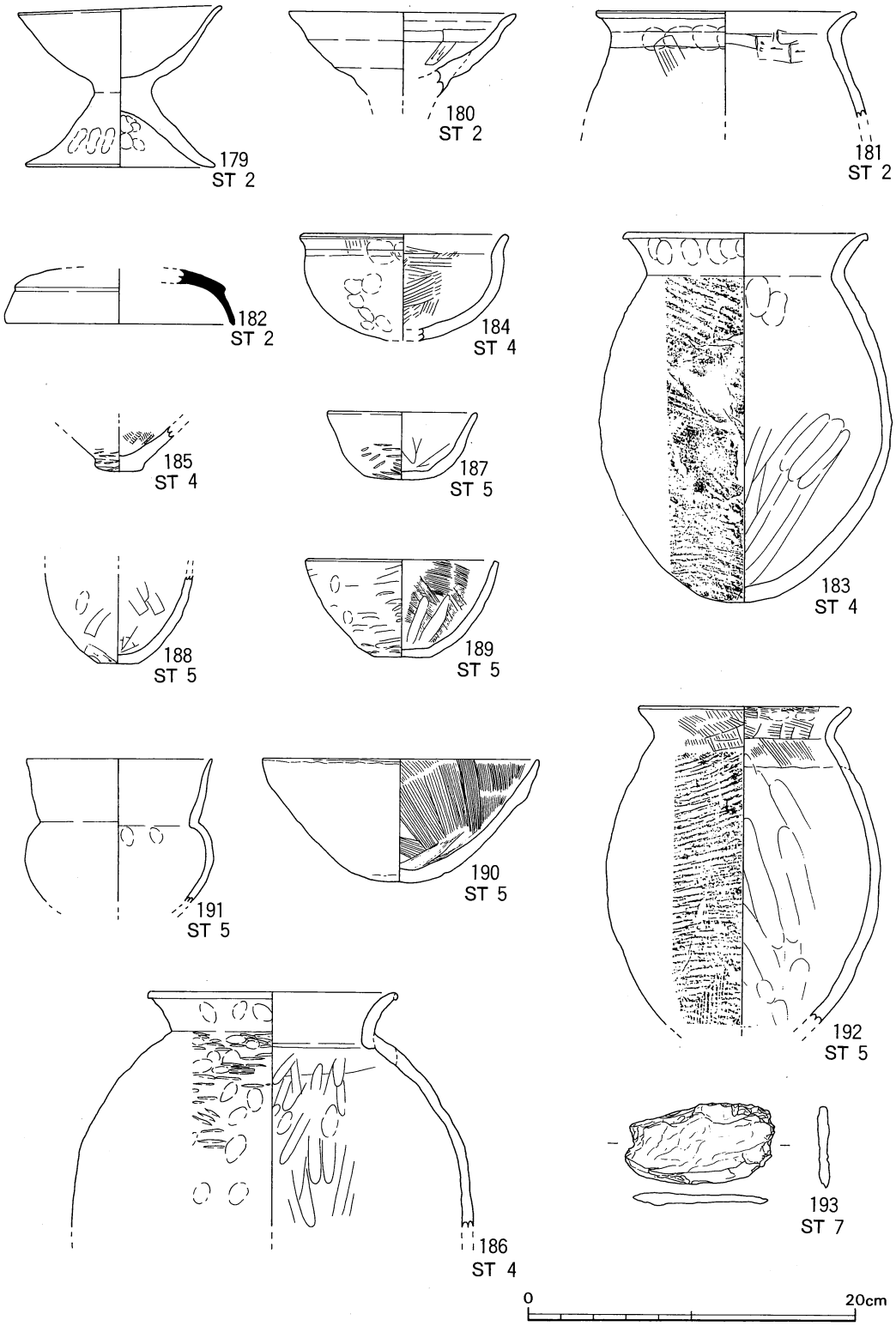


Fig 39　ST 2 (179～182) ST 4 (183～186) ST 5 (187～192) ST 7 (193) 出土遺物

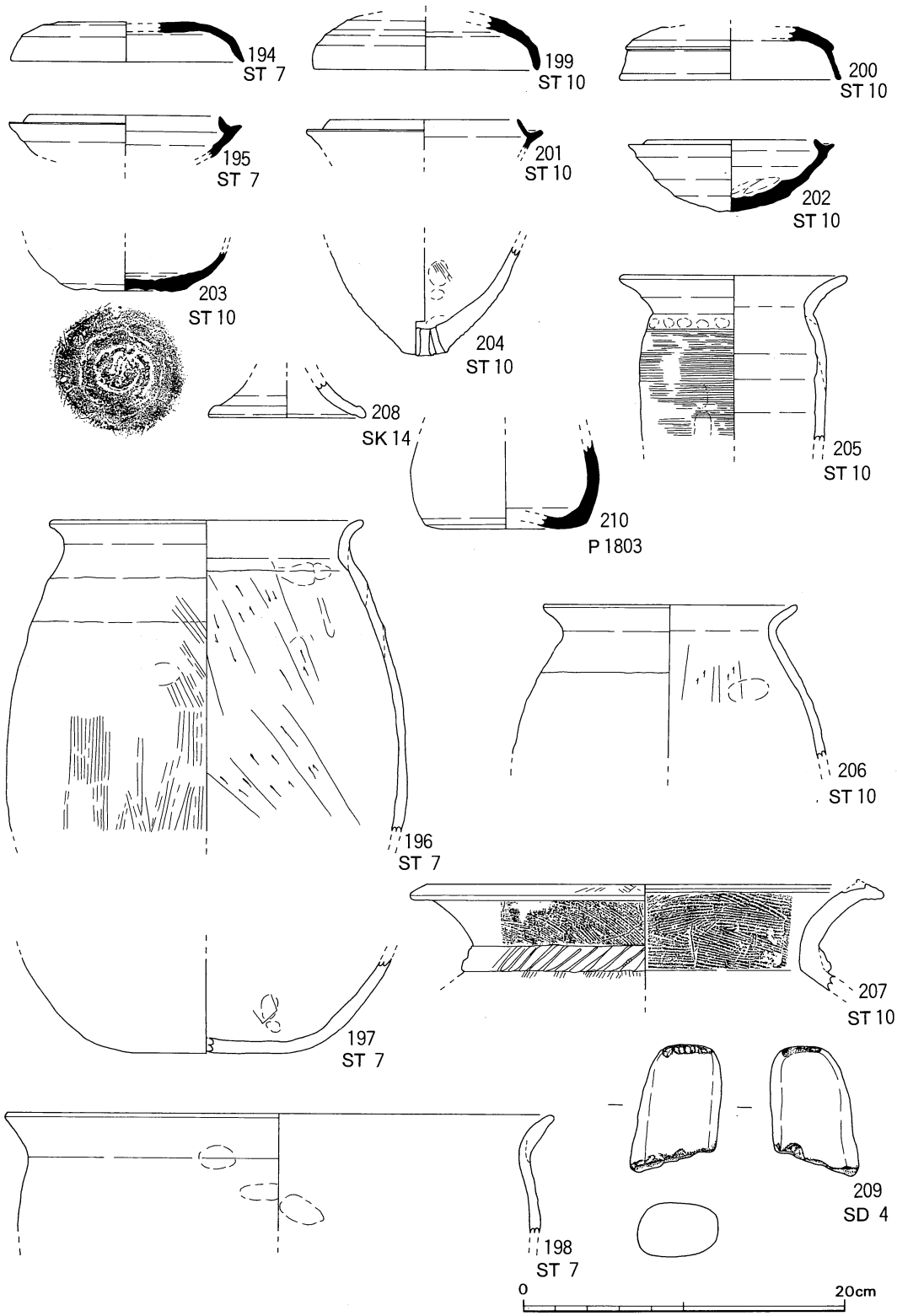


Fig 40　ST 7 (194～198) ST 10 (199～207) SK 14 (208) SD 4 (209) P 1803 (210) 出土遺物

3．平安時代

平安時代の遺構として，土坑３基，溝１条，井戸１基，柱穴多数を検出した。他に時期は不明であるが，井戸に伴う可能性のある掘立柱建物３棟，柵列１条を検出したので先述した如く本項で説明することとする。なお，遺構の組合せやその変遷については次章に譲る。

掘立柱建物

ＳＢ１（Fig 41）

ＳＢ１は調査区の中央部ＳＤ11の東側に位置する総柱建物である。建物は桁行３間（4.92m）×梁間２間（4.23m）の東西棟で，棟方向はＮ－83.0°－Ｗであり，面積は20.81㎡を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形及び円形を呈し，直径47.0～90.0㎝を測り，柱痕径は直径21.0～42.0㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは10.0～55.0㎝を測る。柱間距離は桁行1.52～1.72m，梁間2.07～2.11mとなっている。埋土は黒色土（黒ボクに１～４㎝の礫混り）単純一層である。

出土遺物

弥生土器片が各柱穴から多く出土した。又，Ｐ６の掘方の埋土から内面に青海波文の叩目を持つ須恵器甕破片が出土したが時期決定の決め手とはならない。

ＳＢ２（Fig 42）

ＳＢ２は調査区の中央部ＳＢ１の南側に位置する総柱建物と考えられる。南西部は調査区外に出る。桁行３間（5.48m）×梁間２間（4.49m）の東西棟で，棟方向はＮ－84.8°－Ｗであり，面積は24.61㎡を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形及び円形を呈し，直径47.0～80.0㎝を測り，柱痕径は約25.0㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは22.0～43.0㎝を測る。柱間距離は桁行1.70～1.98m，梁間2.2～2.25mとなっている。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片及び土師器片が出土したが図示できるものではない。

ＳＢ３（Fig 43）

ＳＢ３は調査区の中央部ＳＢ１の北側に位置する建物である。建物は桁行２間（3.67m）×梁間２間（3.49m）のほぼ正方形に近い東西棟である。棟方向はＮ－86.0°－Ｗであり，面積は12.81㎡を測る。柱穴の平面プランは円形及び楕円形を呈し，直径45.0～64.0㎝を測る。これらの柱穴の検出面からの深さは14.0～34.0㎝を測る。柱間距離は桁行1.6～1.97m，梁間1.5～1.98mとなっている。なお，北側は中央の柱穴が西側に寄っており，出入口の可能性を残す。又，ＳＴ３を切っている。埋土は黒色土（黒ボク）単純一層である。

出土遺物

弥生土器片が出土しているが図示できるものではない。

ＳＢ４（Fig 43）

調査区の西部に位置する。桁行３間（6.42m）×梁間２間（4.23m）の南北棟で，棟方向は

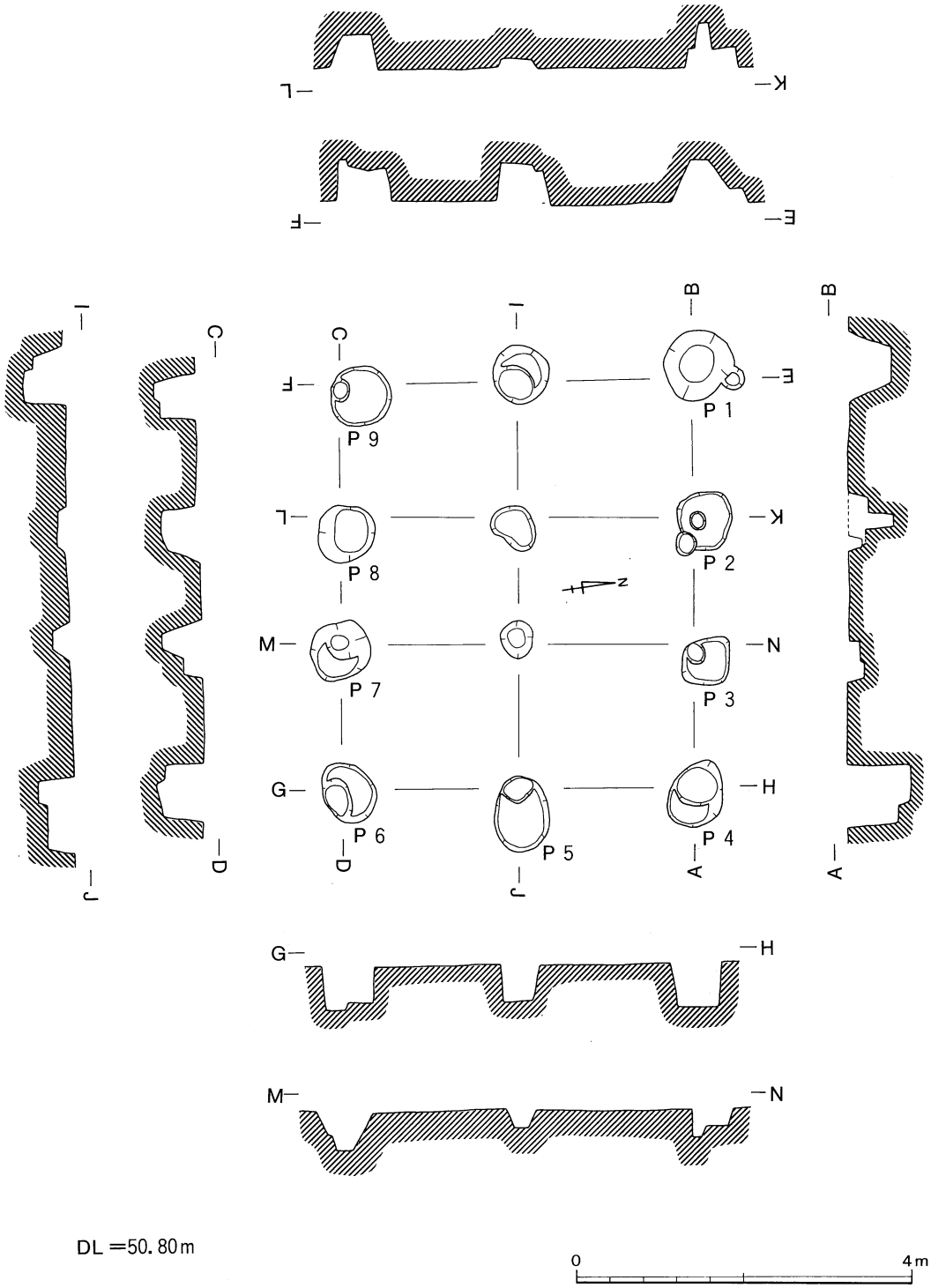


Fig 41　SB 1 実測図

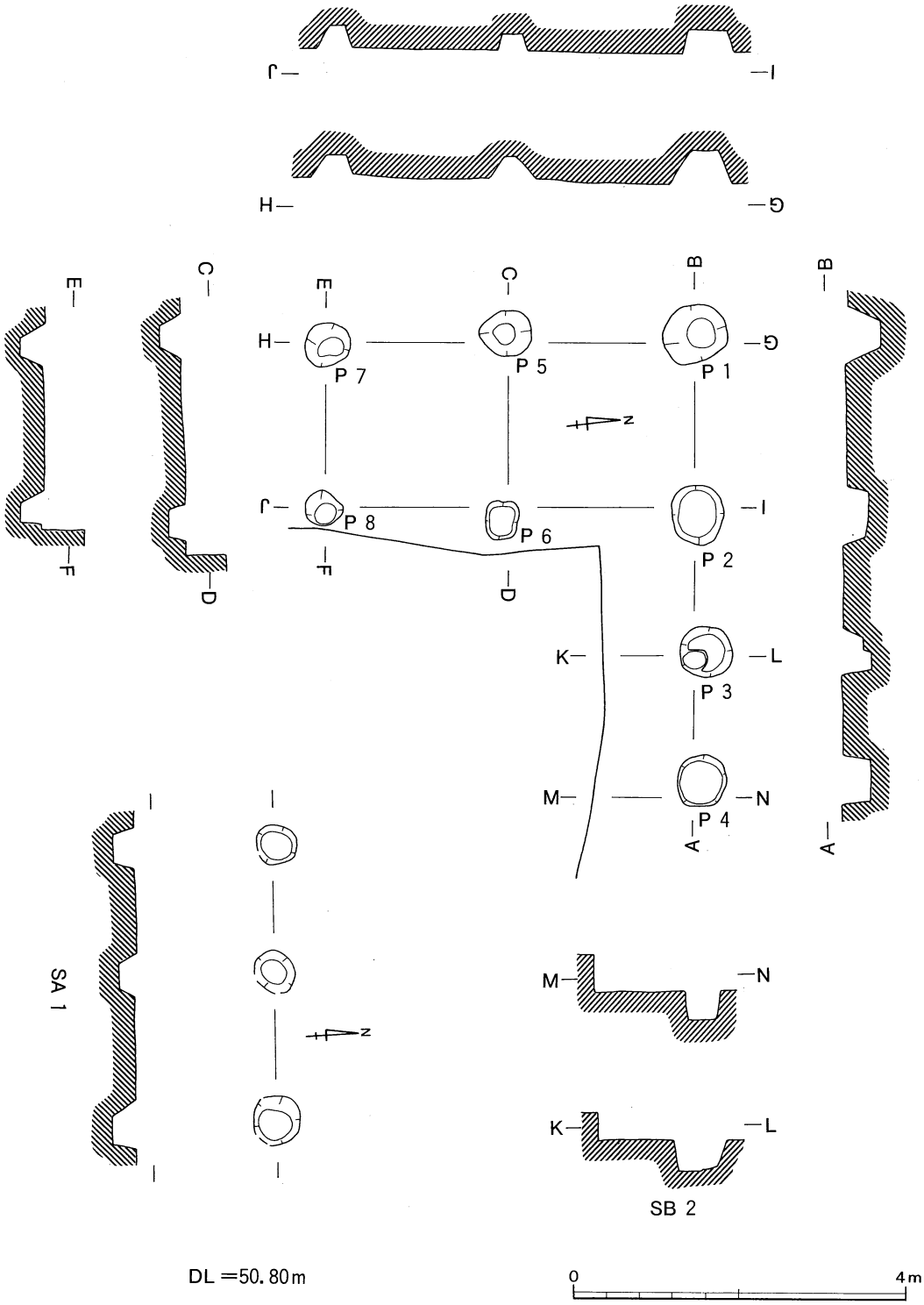


Fig 42　SB 2，SA 1 実測図

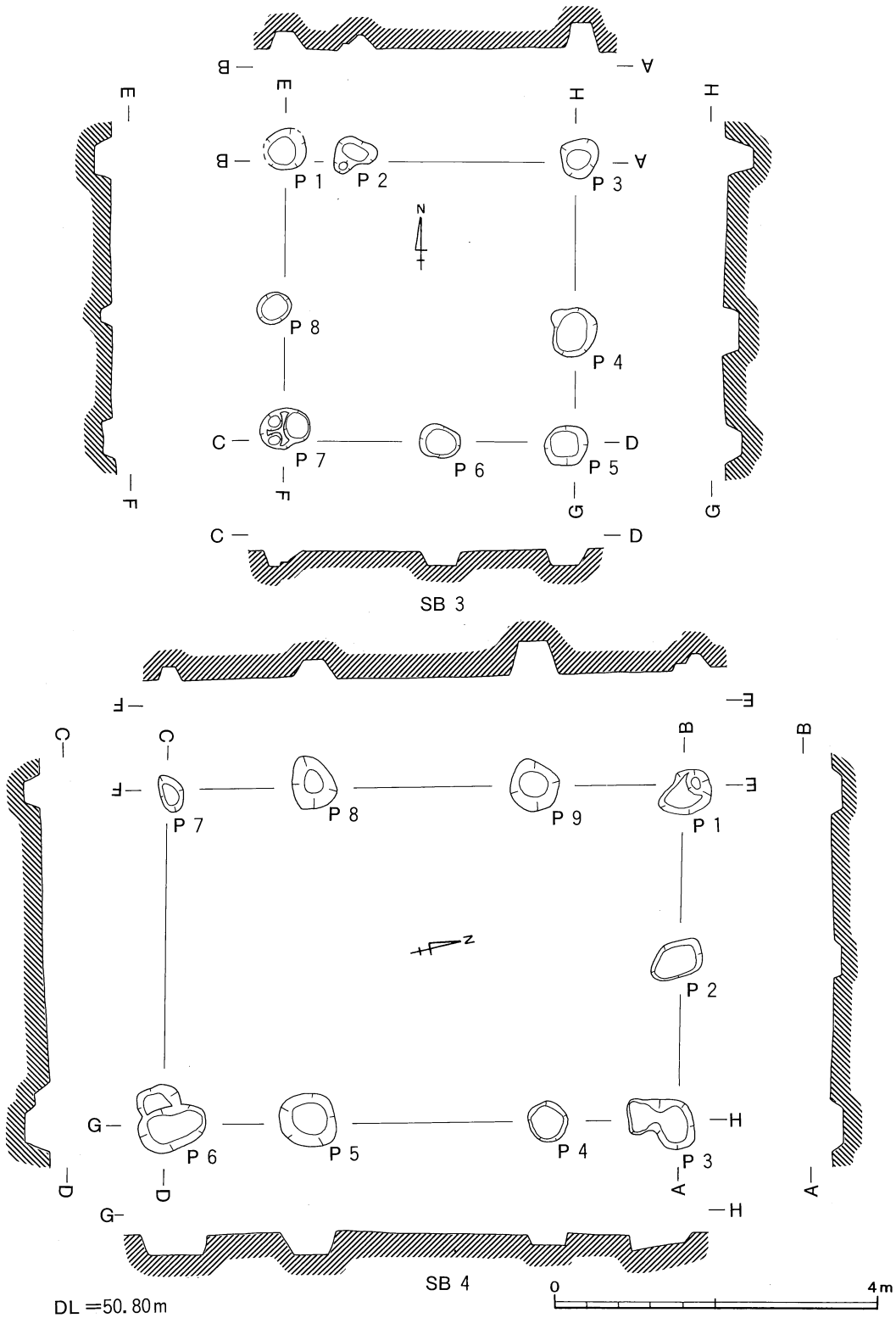


Fig 43　SB 3・4 実測図

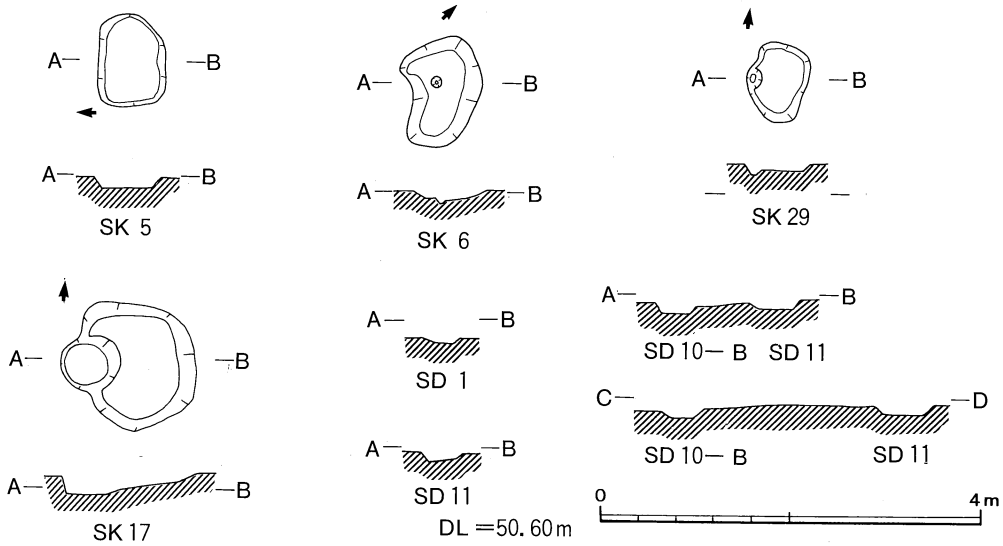


Fig 44　SK 5・6・17・29, SD 1・10— B・11実測図

N－12.8°－Eであり，面積は27.16m²を測る。柱穴の平面プランは隅丸方形及び円形・楕円形を呈す。直径50.0～89.0cm，検出面からの深さは8.0～43.0cmを測る。柱間距離は桁行1.82～2.62m，梁間2.16等間となっている。建物の南面中央の柱穴は確認できなかった。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＴ３を切り，ＳＤ10－Ｂに切られる又，ＳＤ11と重複するが出土遺物から，ＳＤ11が先行する。ＳＥ１と同時期と考えられる。

出土遺物

弥生土器片，土師器甕片・杯片が出土しているが図示することはできない。

土坑

ＳＫ５（Fig 44）

調査区の西側寄りの北端部ＳＫ16の北側に位置し，平面プランは隅丸方形を呈す。長径0.98m短径0.72m，検出面からの深さ12.0cmを測り，断面は逆台形を呈し，床面は水平な面をなす。壁は急傾斜で立ちあがり，長軸方向はＮ－88.5°－Ｅである。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片，土師器片，須恵器片が少量出土しているが図示できるものではない。

ＳＫ６（Fig 44）

中央より僅かに西側，ＳＴ３の東側に位置し，平面プランは不整形を呈す。長径1.17m，短径0.75m，検出面からの深さは8.0～10.0cmを測り，断面は舟底状を呈す。床面は南側が僅かに高い段状を呈す。ほぼ中央に直径7.0cm，深さ7.0cmを測る柱穴があり，ＳＫ６に伴うものと考えられる。長軸方向はＮ－44.0°－Ｗである。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片，土師器甕，輪高台付椀等が出土しているが図示できるものではない。ＳＥ１とほぼ同時期と考えられる。

ＳＫ17（Fig 44）

中央部の北側，ＳＴ７の北側に位置し，平面プランは楕円形を呈す。長径1.32ｍ，短径1.15ｍ，検出面からの深さは7.0～20.0㎝を測り，断面は逆台形を呈す。床面は僅かに東側が下る。壁は急傾斜で立ちあがり，長軸方向はＮ－45.0°－Ｗである。埋土は暗灰茶色土単純一層である。なお，西側の柱穴に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器皿，杯，甕，須恵器があるが図示できるものではない。なお，土師器皿，杯の底部外面はヘラ切りでありＳＥ１とほぼ同時期と考えられる。

ＳＫ29（Fig 44）

調査区の東部中央，ＳＫ30の北側に位置し，平面プランは不整形を呈す。長径0.87ｍ，短径0.60ｍ，検出面からの深さは7.0㎝を測る。断面形は逆台形を呈す。床面は水平な面をなす。壁は急傾斜で立ちあがる。長軸方向はＮ－20.2°－Ｗである。埋土は暗灰黒色土単純一層である。なお，西側は中世の柱穴に切られる。

出土遺物は無かった。

作業風景

井戸

ＳＥ１（Fig 45）

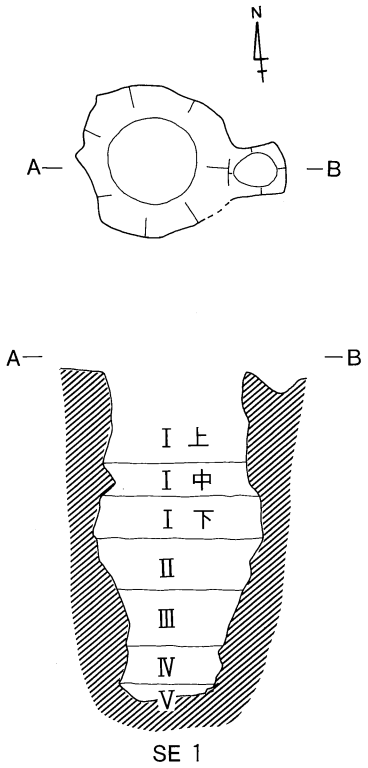
調査区の西部に位置する素掘りの井戸である。平面プランは円形を呈す。直径1.50～1.75m，検出面からの深さは3.45m，床面の直径は0.68mを測る。井戸は中位で膨れ，検出面下1.75mで最大径1.80mを測る。これは満水時の水位を示すと考えられ，壁の砂礫層が浸食された結果と考えられる。埋土はⅠ～Ⅴ層であるが，Ⅰ層は1.75mまでの厚さを測り，上部（検出面下0.9mまで）中部（検出面下0.9～1.30m）下部（検出面下1.30～1.75m）に分けて遺物を検出した。Ⅰ層：黒色土（人頭大の礫混り）Ⅱ層：灰黒色粘質土（人頭大の礫混り）Ⅲ層：砂礫土，Ⅳ層：暗灰黒色粘質土（砂礫及び黒色土混り），Ⅴ層：暗灰茶色砂礫土である。Ⅲ層の埋土は膨らんだ壁と同様のもので浸食により崩れて埋まり，井戸としての機能を果たさなくなり，その後は廃棄し土器溜りとして利用された可能性が強い。

出土遺物

出土遺物は多量で良好な一括資料を得た。大半はⅠ層からの出土であるが，中でもⅠ層の上層からのものが多いが，黒色土器椀，土師器皿・杯・椀・甕・羽釜・移動式竈・釜据，須恵器椀・片口鉢，刻書土器，鉄器，石製紡錘車，砥石，土錘等400点近い遺物が出土した。

Ⅰ層上出土遺物（Fig 46－211～237・Fig 47－238～261・Fig 48－262～282・Fig 49－283～289，305～307・Fig 50－290・291・303・304・Fig 51－292～299・Fig 52－300～302）

黒色土器は合計48個が出土し，中には２～３個が重なって出土したものもあるが，すべて貼付輪高台を有するいわゆるＡタイプのものであ



Ⅰ層：黒色土層(人頭大の礫混り)
Ⅱ層：灰黒色粘質土層(人頭大の礫混り)
Ⅲ層：砂礫層
Ⅳ層：暗灰黒色粘質土層(砂礫黒ボク混り)
Ⅴ層：暗灰茶色砂礫土層

DL＝50.60m

0　2m

Fig 45　SE 1 実測図

る。このＳＥ１から出土した黒色土器はその手法によって大きく３種にわけることができる。すなわち口縁端部内面に１条のヘラ削りを巡らすもの（212・213・219・226）。口縁部内面から体部上端内面にかけて１～３条のヘラ磨きを巡らすもの（217・221～223・230・231）。単位がわからないほど内面を丁寧にヘラ磨きを施したもの（214・216・218・220・224・227～229）がある。又，暗文を有するものとそうでないものとがある。232は土師器蓋である。環状の摘みを有す。233～236は土師器台付皿である。平底の外周の内側に足高の「ハ」の字状に大きく開く脚を有する。237は土師器脚付皿で，３脚は欠損する。238～244は土師器皿で完形が多い。底部外面は回転ヘラ切り。245～268は土師器杯であるが，247・249・259・266は完形で，263～265はⅠ層の上部・中部・下部出土のものを接合したものである。268～273・279はベタ高台を有する土師器椀である。268・269は杯と椀の中間型とも言えるもので，底部外面は回転ヘラ切りである。又，270の底部外面も回転ヘラ切りである。他の椀の底部外面は回転糸切りである。274～278・280～282はベタ高台を有する須恵器椀である。底部外面は回転糸切りである。283～285は貼付輪高台付土師器椀である。285は体部内面に型板痕を認め，口縁端部内面に１条の軽い沈線を巡らす。286・287は貼付輪高台付須恵器椀である。287は口線端部内面に１条の沈線を巡らす。体部内面ヘラ磨き，口縁部内面横方向のヘラ磨きを施す。288は須恵器片口鉢である。平底から内湾して立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口縁端部は外傾して口唇部は面をなし軽い沈線が巡る。口縁部に指頭による片口を設ける。水で約２升の容量を持つ。289～291は土師器甕である。291は口縁部内面は横方向のハケ調整を施し，「大」と思われる刻字を施す。292～297は羽釜である。鍔を有す。298は釜据である。直線的に立ちあがり，口縁部は「く」の字状に外反して端部は上方に僅かに肥厚する。299～302は移動式竈である。300の鍔は胴部に縦方向に延び胴部上端で屈曲して，中央で僅かに下方に緩やかなカーブを描いて延びる。303は甕である。胴部外面に三文字を認めるが中央は「木」又は「ホ」と思われる刻字を施す。304は砥石で一面のみを使用する。305は石製紡錘車で断面は台形状を呈す。306・307は土錘で紡錘形を呈す。又，古代モモの種子２個が出土した。

Ⅰ層中出土遺物（Fig 47－308～312，Fig 48－313・314）

308は土師器皿である。底部外面は回転ヘラ切りである。309～313は土師器杯であるが，平底から外反，あるいは直線的に立ちあがる。底部外面はすべて回転ヘラ切りである。314は土師器椀である。底部外面中央が僅かに凹むベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。

Ⅰ層下出土遺物（Fig 46－315，Fig 47－316～320，Fig 49－321～326，Fig 50－329・330，Fig 51－327・328）

315は足高貼付輪台付土師器椀である。体部は内・外面共ロクロ目が顕著である。316・317は土師器皿である。316は完形で底部外面は回転ヘラ切り。317はベタ高台気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。底部外面は回転糸切りである。土師器皿

で唯一の回転糸切りである。318～320は土師器杯である。321～323は須恵器杯である。322は，内・外面共に火襷を認める。324～325は土師器椀である。ベタ高台から内湾気味に立ちあがる。底部外面は回転糸切りである。326は貼付輪高台付土師器椀である。底部内面に丹が残る。327は土師器羽釜である。328・329は土師器甕である。330は鉄器である。楕円形の環から4.3㎝延び屈曲する。馬具と思われる。

Ⅱ層出土遺物

土師器及び須恵器の細片が僅かに出土したが図示できるものはない。

Ⅲ層出土遺物（Fig 49－331）

331は貼付高台付椀である。Ⅰ層下の破片と接合できた。体部は平底から稜をもって斜上外方に直線的に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。

Ⅳ層出土遺物（Fig 47－332）

黒色土器片，土師器片，土師器皿（332）が出土した。332は中央が僅かに凹んだ平底から外反気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。底部外面は回転ヘラ切りである。胎土は水簸を行い搬入品と思われる。

Ⅴ層出土遺物（Fig 49－333）

黒色土器椀片，土師器甕片があるが，図示できたのは床面直上から出土した須恵器椀（333）のみである。ベタ高台から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部外面は回転糸切りである。

溝

ＳＤ１（Fig 44）

調査区の西南端部に位置する。Ｎ－17.5°－Ｅで1.76ｍで南北方向に延び，南端は調査区外に出る。幅0.40～0.68ｍ，検出面からの深さは6.0㎝，床面の北端の標高は50.34ｍ，南端の標高は50.33ｍを測り，標高差はほとんどみられない。断面は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土単純一層である。なお，ＳＫ２，ＳＫ11に切られる。

出土遺物（Fig 52－334）

埋土から土師器椀（334）が出土している。ベタ高台気味の平底から内湾して立ちあがる。底部外面は回転糸切りである。

ＳＤ10－Ｂ（Fig 44）

調査区の西部に位置する。南北両端は削平のため検出できない。ＳＴ３の北側からＳＢ10－Ａとほぼ平行に東側をＮ－6.5°－Ｗで南下する。全長17.8ｍ，幅35.0～40.0㎝，検出面からの深さは7.0～10.0㎝，床面の北端の標高50.47ｍ，南端の標高50.46ｍを測り，標高差はほとんどみられない。なお，ＳＴ３，ＳＢ４を切り，ＳＤ10－Ａを切る。出土遺物からＳＥ１とほぼ同時期と考えられる。

出土遺物

弥生土器片，土師器椀片，羽釜片等が出土しているが図示できるものではない。

ＳＤ11（Fig 44）

調査区西部に位置し，ＳＴ３の北側からＳＤ10－ＢとＳＢ１～３の間をＮ－6.0°－Ｅで南へ26.35ｍ延びる。南・北両端部は検出できなかったが削平の結果と考えられる。ＳＴ３の南側で最大幅を認めるがやや西に曲るためであろう。幅0.31～1.25ｍ，検出面からの深さは8.0～11.0㎝，床面の北端の標高は50.41ｍ，南端の標高は50.47ｍを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土単純一層である。なお，ＳＴ３を切り，ＳＢ４と重複関係にあるが出土遺物からＳＤ11が古い。

出土遺物（Fig 52－335・336）

埋土中より土師器杯（336）須恵器杯（335）が出土している。336は，底部外面不定方向のヘラ削りを丁寧に施す。

柵列

ＳＡ１（Fig 42）

調査区の中央部，ＳＢ３の北側の柱筋に平行して位置する。規模は２間（3.42ｍ）の東西方向で長軸方向はＮ－85.5°－Ｗである。柱穴の平面プランは円形を呈し，直径49.0～60.0㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは20.0～29.0㎝である。柱間距離は1.71ｍ等間である。埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物は，弥生土器片，土師器片があるがいずれも細片で図示することはできない。

柱穴

Ｐ116（Fig 63）

調査区の西端部，ＳＫ３の南側に位置する。平面プランは円形を呈す，直径30.0㎝，検出面からの深さ14.80㎝を測る。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 52－343）

須恵器杯片と鉄製釣針（343）が出土している。釣針は扁平な棒軸からひねりをもって釣部を作り先端部に及ぶ。

Ｐ500（Fig 63）

調査区の西部，ＳＢ３の南側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径27.0㎝，検出面からの深さは19.6㎝を測る。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 52－342）

須恵器椀（342）が単独で出土した。ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。体部外面はロクロ目顕著，底部外面は回転糸切りである。

Ｐ586（Fig 63）

調査区の北西部，ＳＢ４の東側に位置する。平面プランは不整形を呈す。直径23.0㎝，検出面からの深さは9.4㎝を測る。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 52－337）

土師器皿（337）が出土した。平底から斜上外方に直線的に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。

P 588（Fig 63）

調査区の西北部，ＳＫ13の南西側に位置する。平面プランは不整形を呈す。直径45.0cm，検出面からの深さは14.8cmを測る。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 52，340）

土師器杯（340）が出土した。平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。底部外面は回転糸切り。

P 591（Fig 63）

調査区の西部，ＳＴ３の東側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径42.0cm，検出面からの深さは31.4cmを測る。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 52，341）

弥生土器片，土師器片の他黒色土器皿（341）が出土している。黒色土器皿は，いわゆるＡタイプで，断面逆三角形の貼付高台を有す。平底から内湾して立ちあがる。

P 683（Fig 63）

調査区の西北部，ＳＫ12の南側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径53.0cm，短径43.0cm，検出面からの深さは12.0cmを測る。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 52，338）

弥生土器片，土師器皿（338），杯が出土している。土師器皿（338）は平底状の底部から僅かに外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。底部外面ヘラ切り。

P 1649（Fig 63）

調査区の東部，ＳＴ10の西北側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径28.0cm，検出面からの深さは12.3cmを測る。埋土は暗灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 52，339）

土師器杯（339）が出土した。平底から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。

Ｂ区の調査

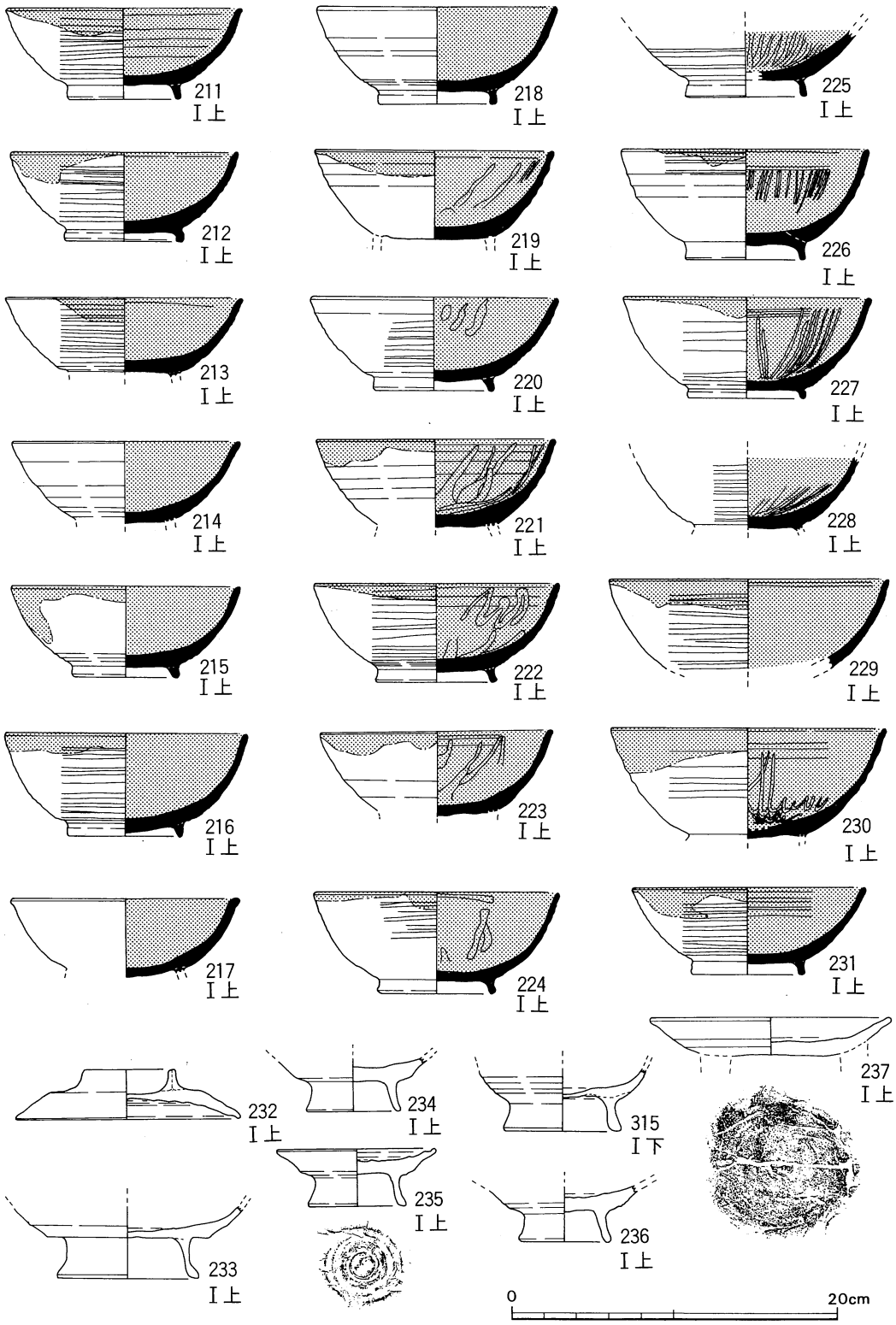


Fig 46　SE 1 出土遺物

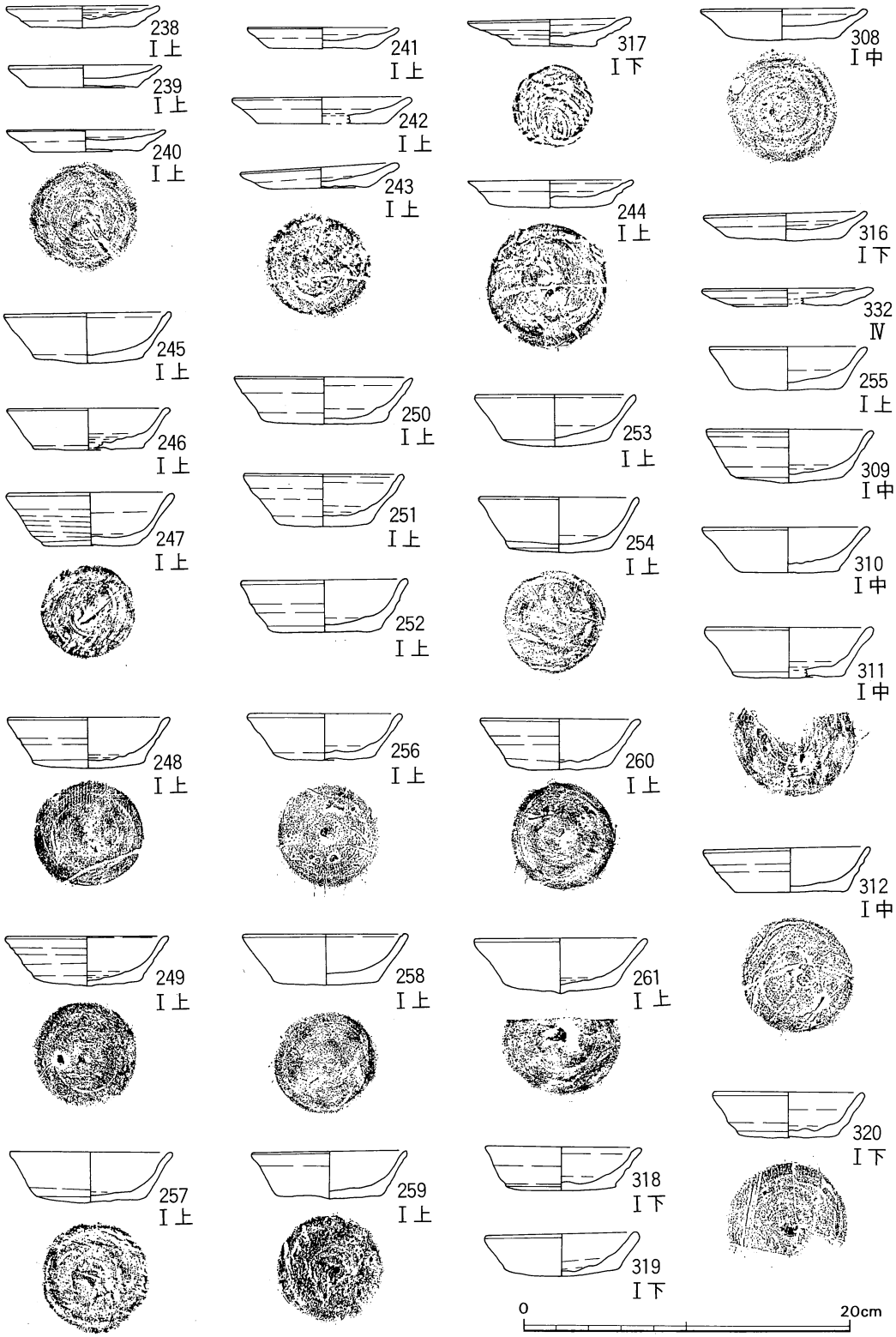


Fig 47　SE 1 出土遺物

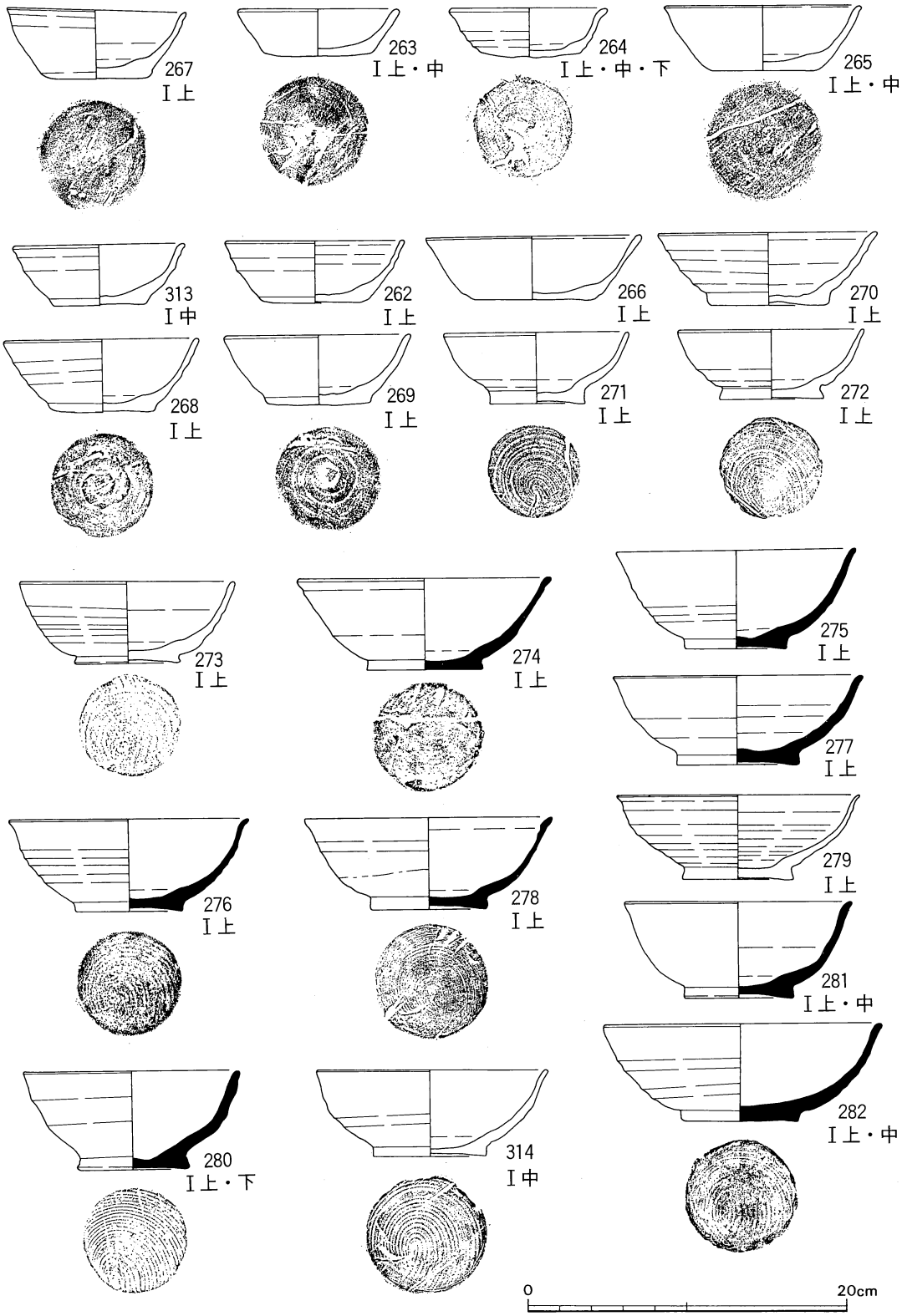


Fig 48　SE 1 出土遺物

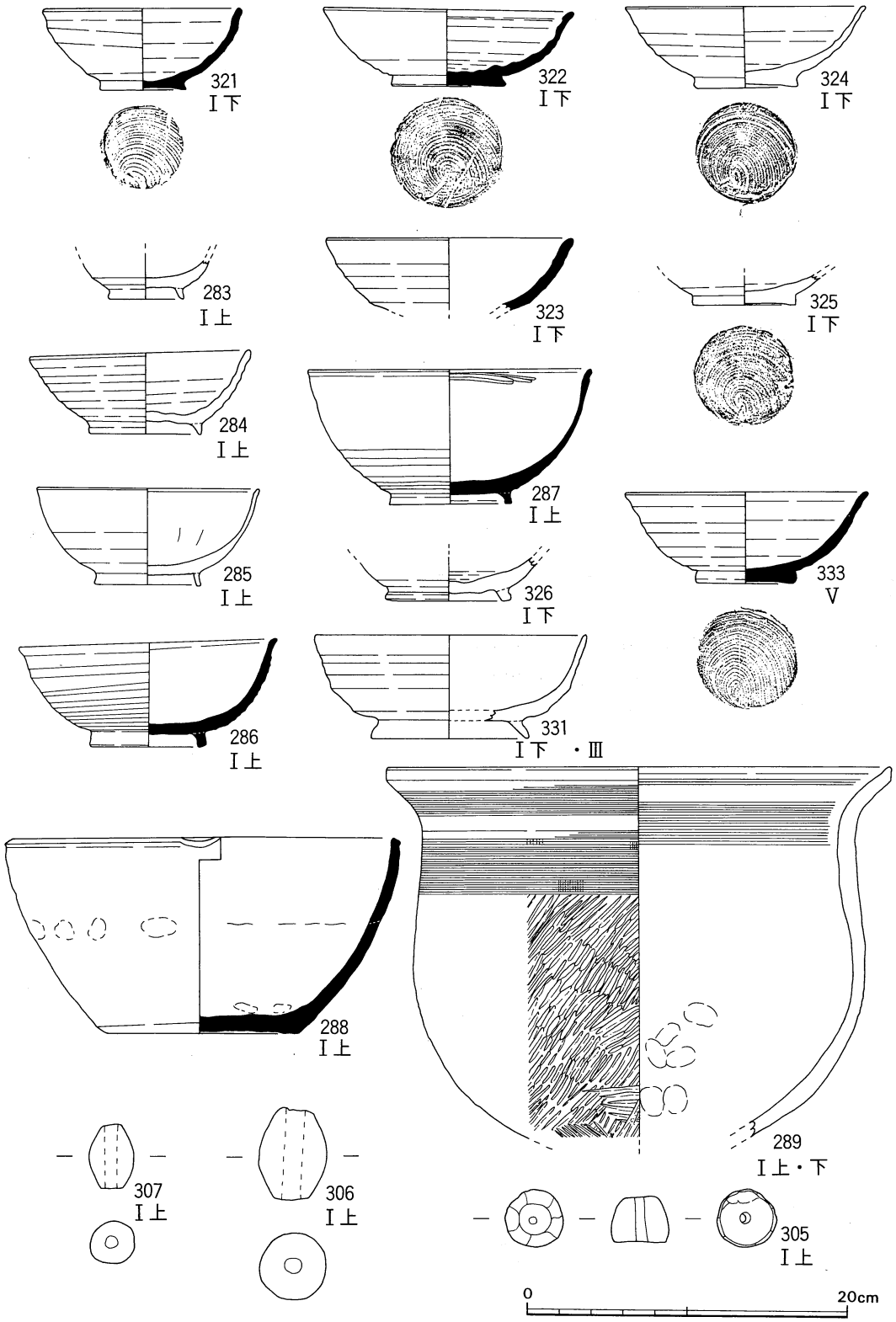


Fig 49　SE 1 出土遺物

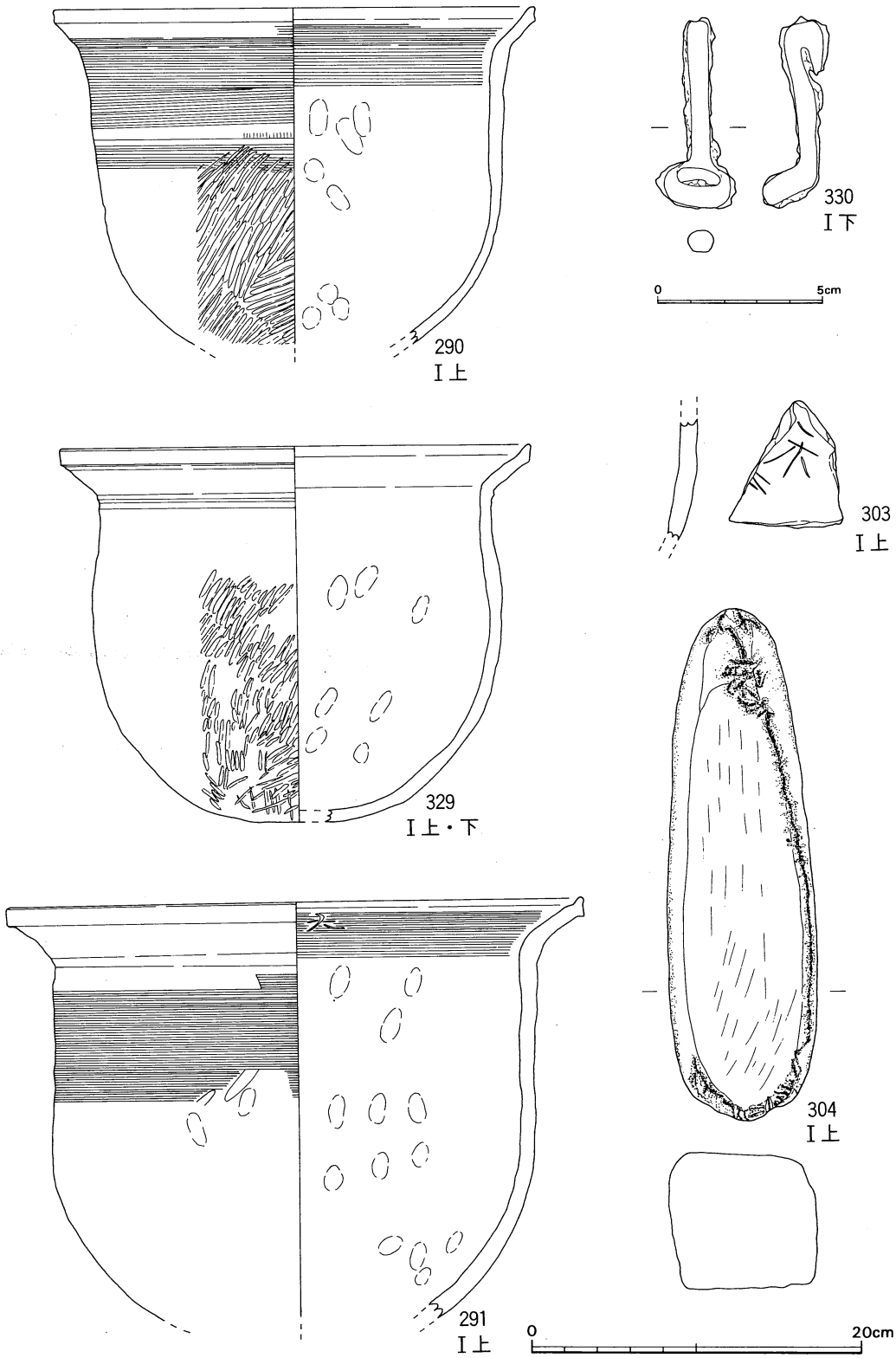


Fig 50　SE 1 出土遺物

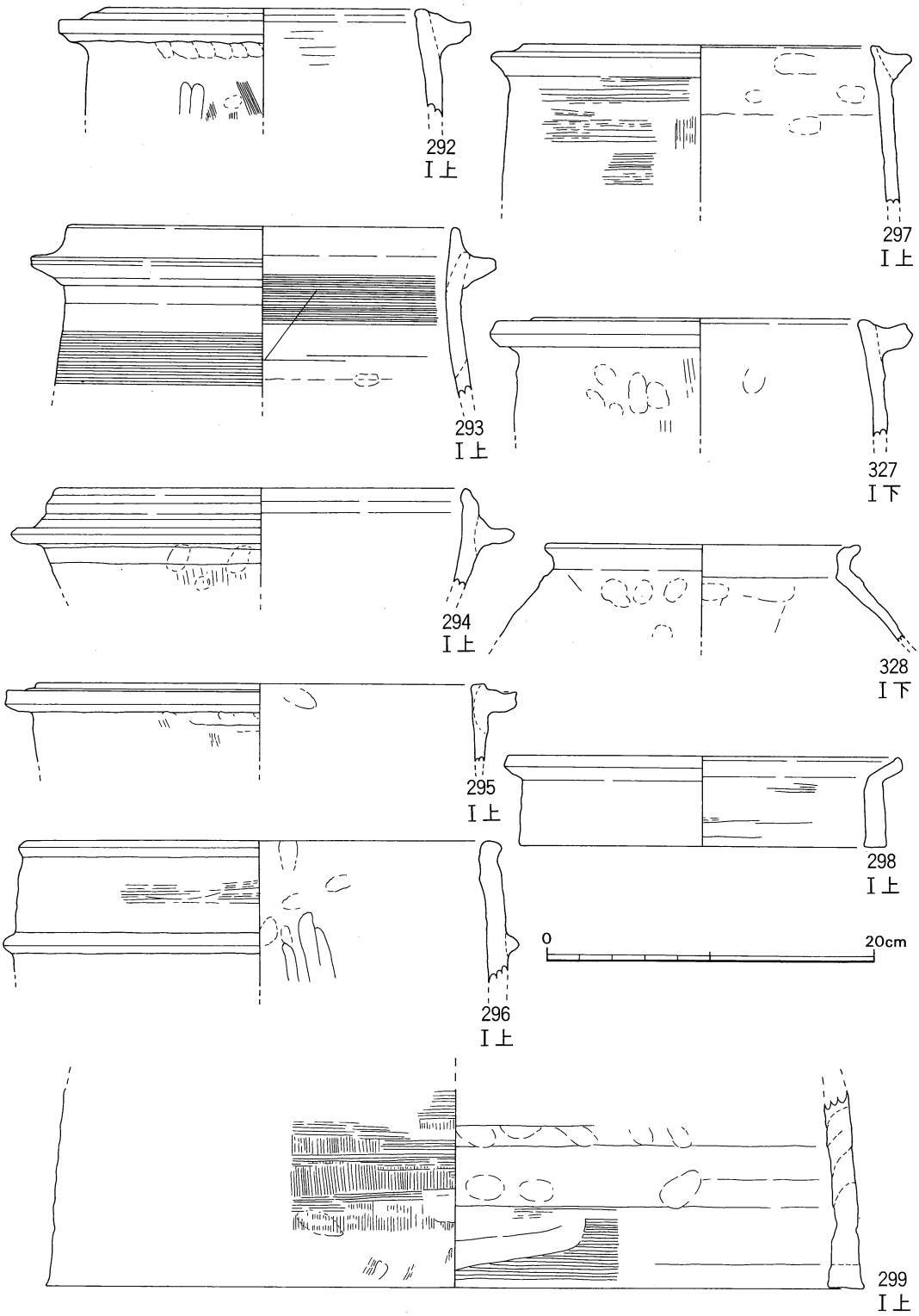


Fig 51　SE 1 出土遺物

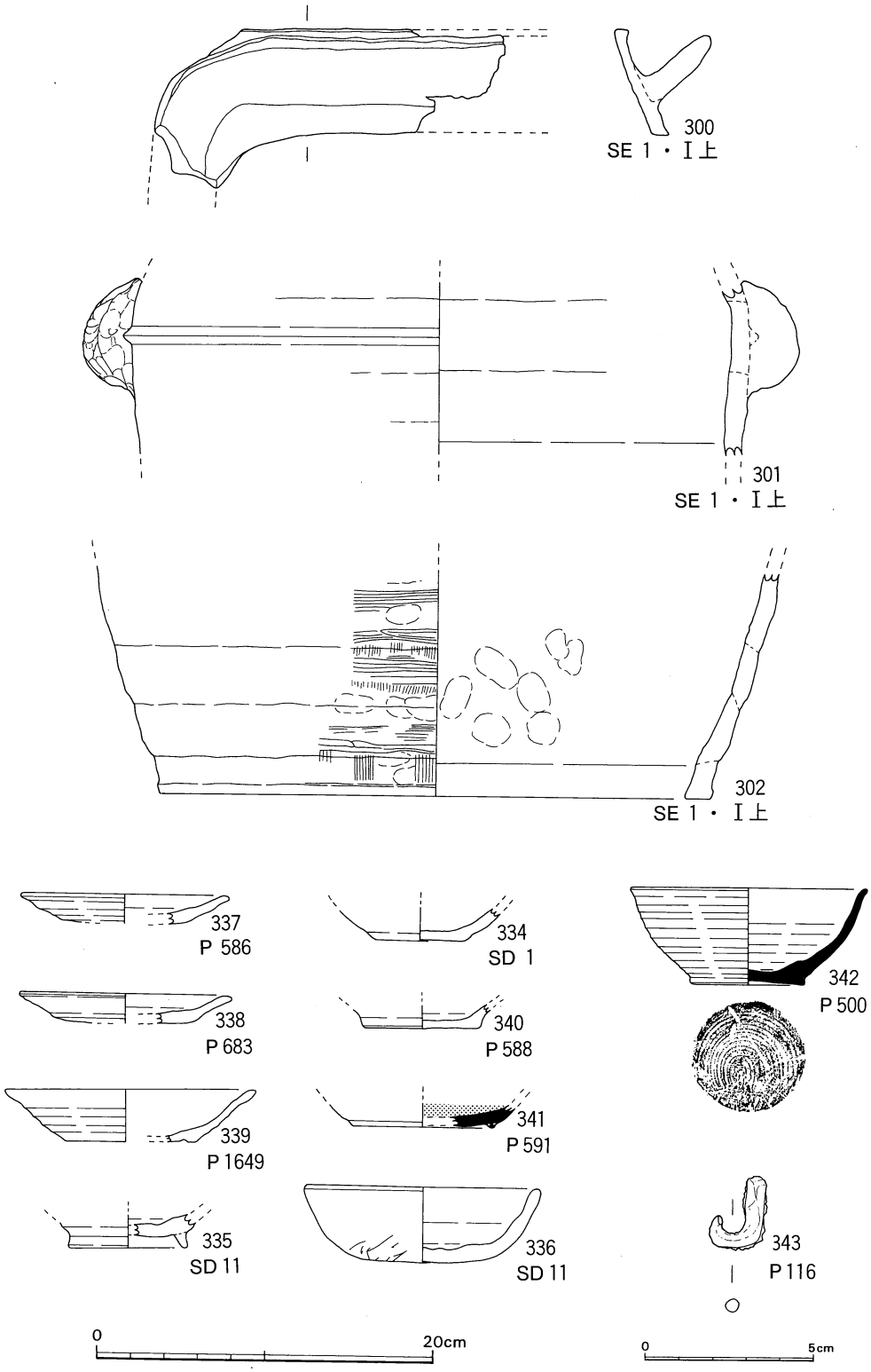


Fig 52　SE 1，SD，P出土遺物

4．中世～近世

中世～近世の遺構としては掘立柱建物８棟，土坑14基，溝10条，柱穴多数を検出した。以下各遺構とその出土した遺物の概要を述べることにする。

掘立柱建物

ＳＢ５（Fig 53）

調査区の西北端部に位置する。建物は桁行１間（4.06ｍ）×梁間２間（3.79ｍ）の東西棟で，棟方向はＮ－66.7°－Ｗであり，面積は15.39㎡を測る。桁行の中間の柱穴は削平のため欠損したと考えられる。柱穴の平面プランは円形及び楕円形を呈し，直径22.0～79.0㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは4.0～24.0㎝を測る。柱間距離は桁行4.06ｍ，梁間1.87～1.92ｍとなっている。埋土は暗茶灰色土単純一層である。なお，ＳＤ10－Ａを切る。

出土遺物

弥生土器片，土師器片があるが図示できない。

ＳＢ６（Fig 54）

調査区の中央南部，ＳＢ１の東側に位置する。建物は桁行３間（6.26ｍ）×梁間３間（5.48ｍ）の東西棟で，棟方向はＮ－79.1°－Ｗであり，面積は34.30㎡を測る。柱穴の平面プランは円形及び不整形を呈し，直径35.0～57.0㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは15.0～26.0㎝を測る。柱間距離は桁行1.86～2.52ｍ，梁間1.05～2.52ｍとなっている。なお，Ｐ９は，ＳＴ２－Ｐ１と重複すると考えられる。埋土は暗茶灰色土単純一層である。ＳＴ２と重複するが出土遺物からＳＢ６が新出のものであることは明確である。出土遺物から15世紀後半と考えられる。

出土遺物

弥生土器片，土師器皿片等が出土しているが図示できるものではない。

ＳＢ７（Fig 53）

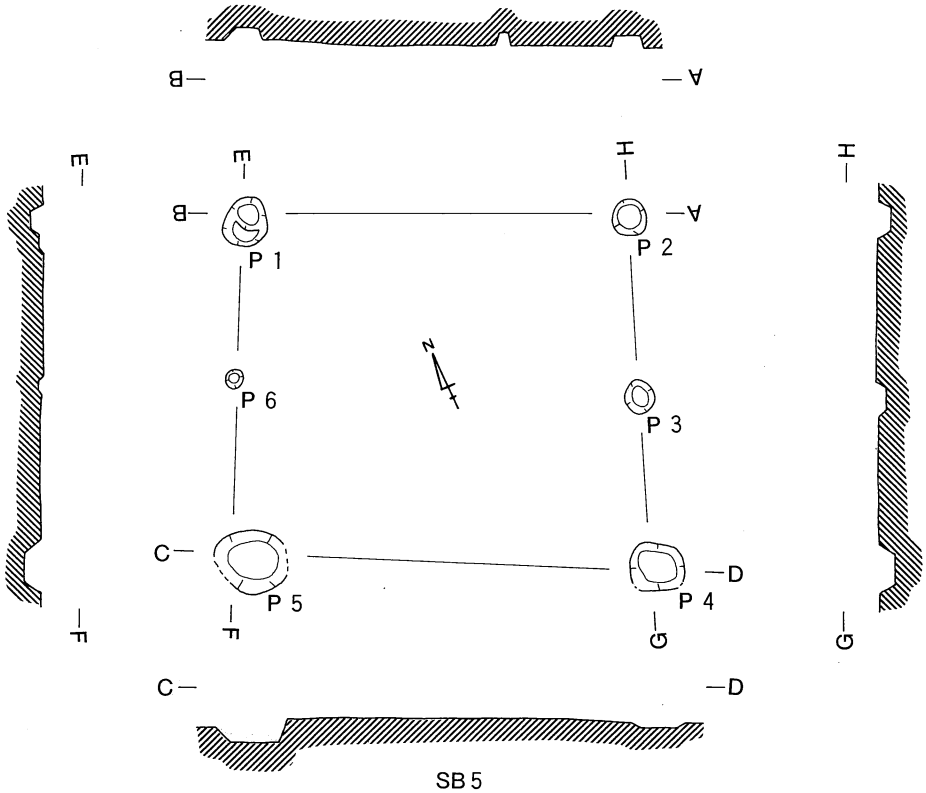
調査区の中央南部より僅かに東側に位置する。建物は桁行１間（3.52ｍ）×梁間２間（2.42ｍ）の東西棟で，棟方向はＮ－90.0°－Ｗであり，面積は8.52㎡を測る。柱穴の平面プランは円形及び不整形を呈し，直径30.0～60.0㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは10.0～25.0㎝を測る。柱間距離は桁行3.52ｍ，梁間1.05～1.36ｍとなっている。埋土は暗茶灰色土単純一層である。

出土遺物

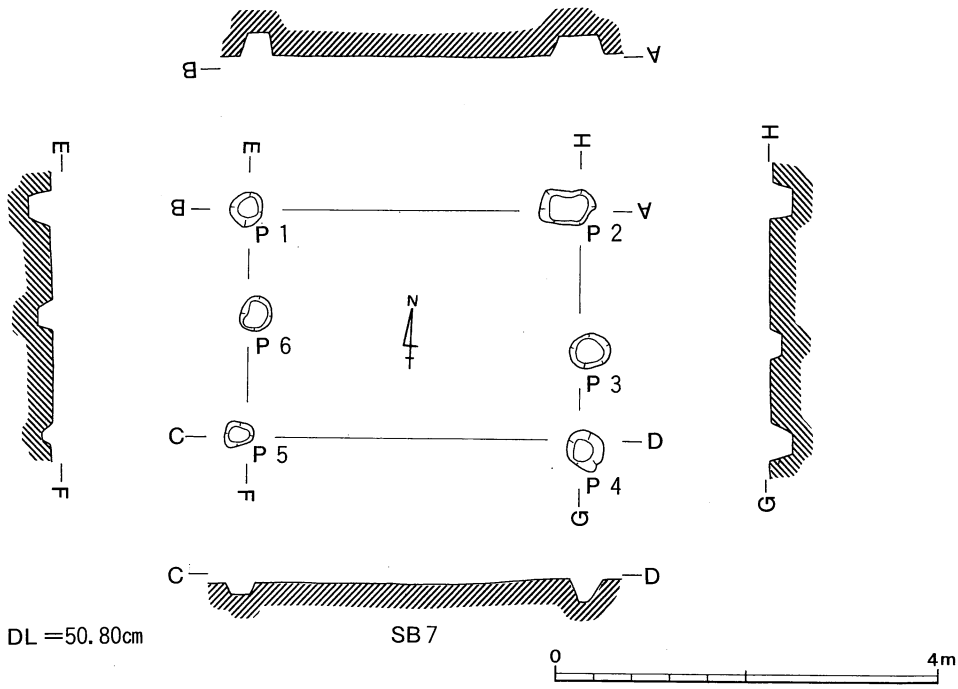
弥生土器片，土師器杯片が出土しているが図示できるものではない。

ＳＢ８（Fig 55）

調査区の東部，ＳＴ７の東側に位置する。建物は桁行２間（6.95ｍ）×梁間３間（6.16ｍ）の東西棟で，棟方向はＮ－79.0°－Ｅであり，面積は42.81㎡を測る。柱穴の平面プランは円形及び楕円形を呈し，直径33.0～54.0㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは4.0～37.0㎝



SB 5



DL =50.80cm

SB 7

Fig 53　SB 5・7　実測図

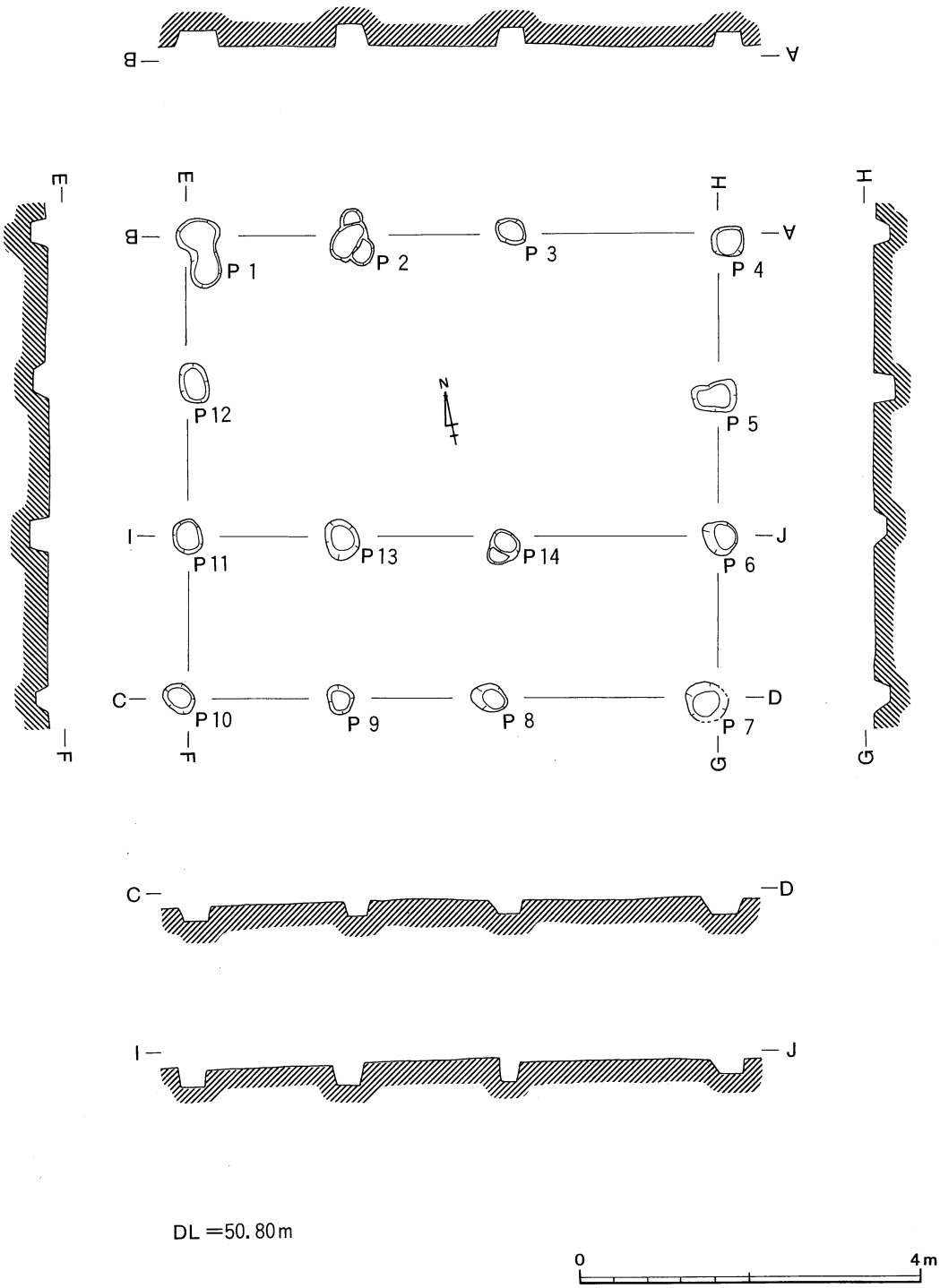
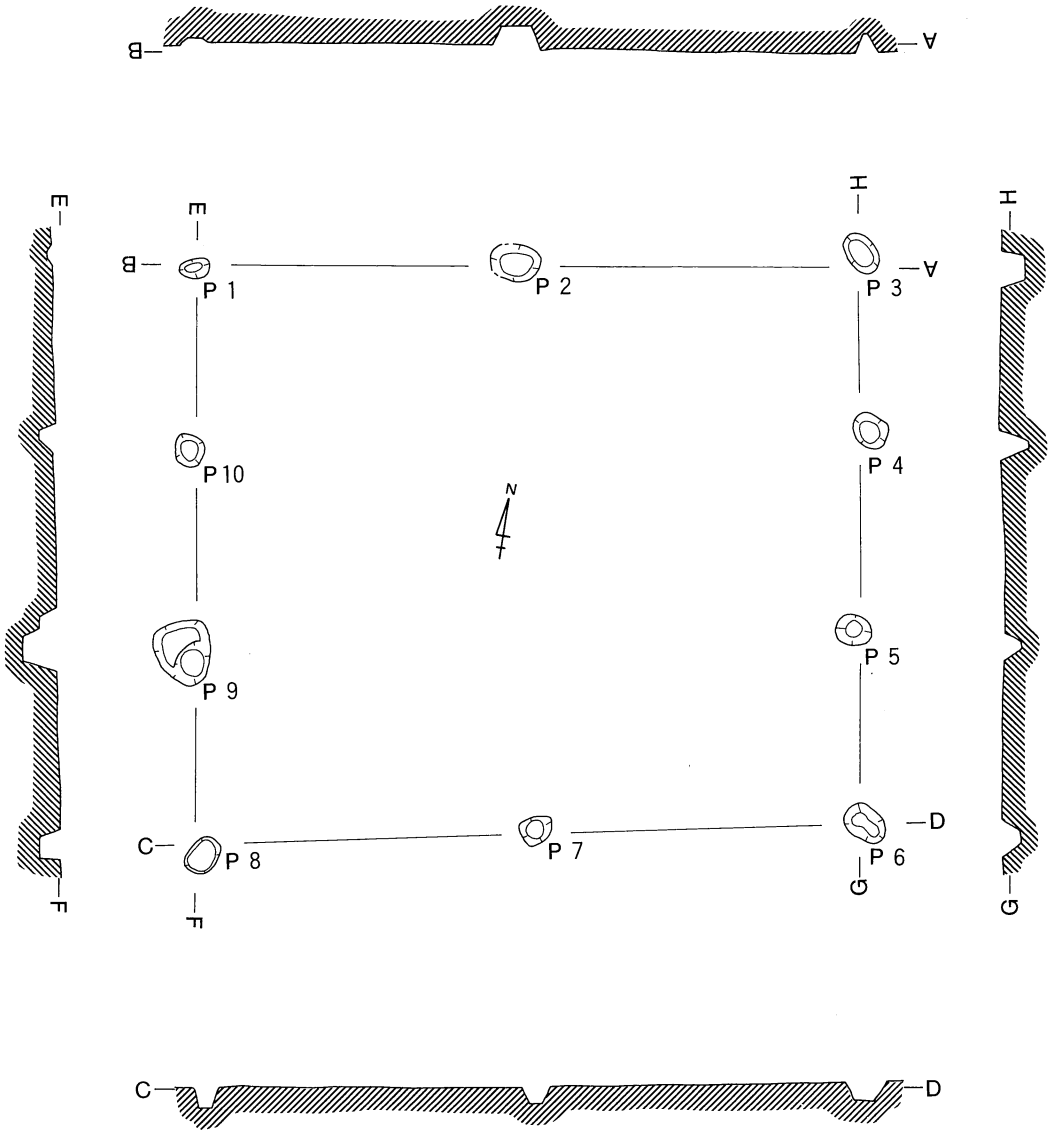


Fig 54　SB 6 実測図



DL＝50.80m

0　　4m

Fig 55　SB 8 実測図

を測る。柱間距離は桁行3.46～3.49m，梁間1.75～2.06mとなっている。埋土は暗茶灰色土及び灰黒色土の単純一層である。なお，ＳＢ９，ＳＫ25と重複するが先後関係は不明である。又，ＳＤ18を切る。

出土遺物

土師器片，須恵器片，瓦質土器鍋片が出土しているが図示できるものではない。

ＳＢ９（Fig 56）

調査区の東部に位置する。建物は桁行３間（6.1m）×梁間３間（5.78m）の南北棟で，棟方向はＮ－7.0°－Ｗであり，面積は35.26m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び楕円形を呈し，直径30.0～62.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは8.0～35.0cmを測る。柱間距離は桁行1.70～2.44m，梁間1.12～2.01mとなっている。埋土は暗茶灰色土及び灰黒色土の単純一層である。なお，ＳＴ９，ＳＫ22（壺棺墓５），ＳＤ19を切り，ＳＢ８，ＳＢ10，ＳＢ11と重複するが先後関係は不明である。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物（Fig 61，344・Fig 62，345）

瓦質土器片，土師器皿（344）がＰ11から，鉄器釘（345）はＰ１から，同じく鉄器釘（356）はＰ４から出土した。土師器皿（344）は，内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反し口唇部は丸くおさめる。体部は内・外面共横ナデ調整を施す。体部外面に指頭圧痕を認める。

ＳＢ10（Fig 57）

調査区の東部に位置する。建物は桁行３間（5.90m）×梁間３間（5.40m）の東西棟で，棟方向はＮ－56.0°－Ｗであり，面積は31.86m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び楕円形を呈し，直径27.0～39.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは6.0～32.0cmを測る。柱間距離は桁行0.7～2.8m，梁間1.23～2.72mとなっている。埋土は暗茶灰色土単純一層である。なお，ＳＴ９，ＳＫ31，ＳＤ19を切り，ＳＢ９，ＳＢ11，ＳＫ29と重複するが，ＳＢ９との先後関係は不明であるがＳＫ29は埋土からＳＢ10が新しいと思われる。又，ＳＢ11は古い。

出土遺物

弥生土器片，土師器片が出土しているが図示できるものではない。

ＳＢ11（Fig 58）

調査区の東部に位置する。建物は桁行４間（7.05m）×梁間４間（6.43m）の南北棟で，棟方向はＮ－33.8°－Ｅであり，面積は45.33m²を測る。柱穴の平面プランは円形及び楕円形を呈し，直径25.0～55.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは6.0～32.0cmを測る。柱間距離は桁行1.44～3.70m，梁間1.2～1.86mとなっている。埋土は暗茶灰色土単純一層である。なお，ＳＴ９，ＳＤ19を切る。ＳＫ29，ＳＫ30，ＳＫ34，ＳＢ９，ＳＢ10と重複するが，ＳＢ９との先後関係は不明であるが，ＳＢ10は新しく，ＳＫ29，ＳＫ30，ＳＫ34は古い。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物（Fig 61，346）

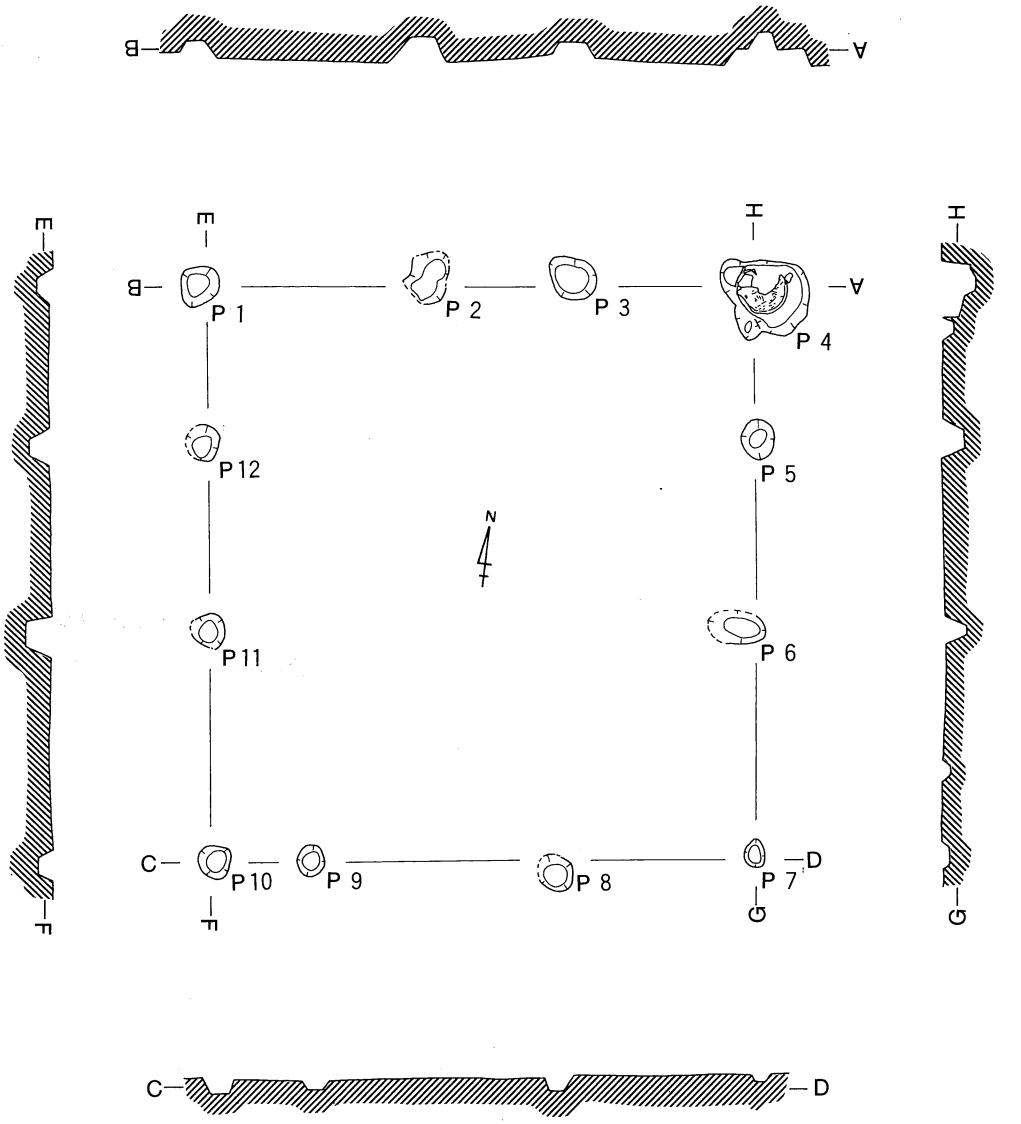


Fig 56　SB 9 実測図

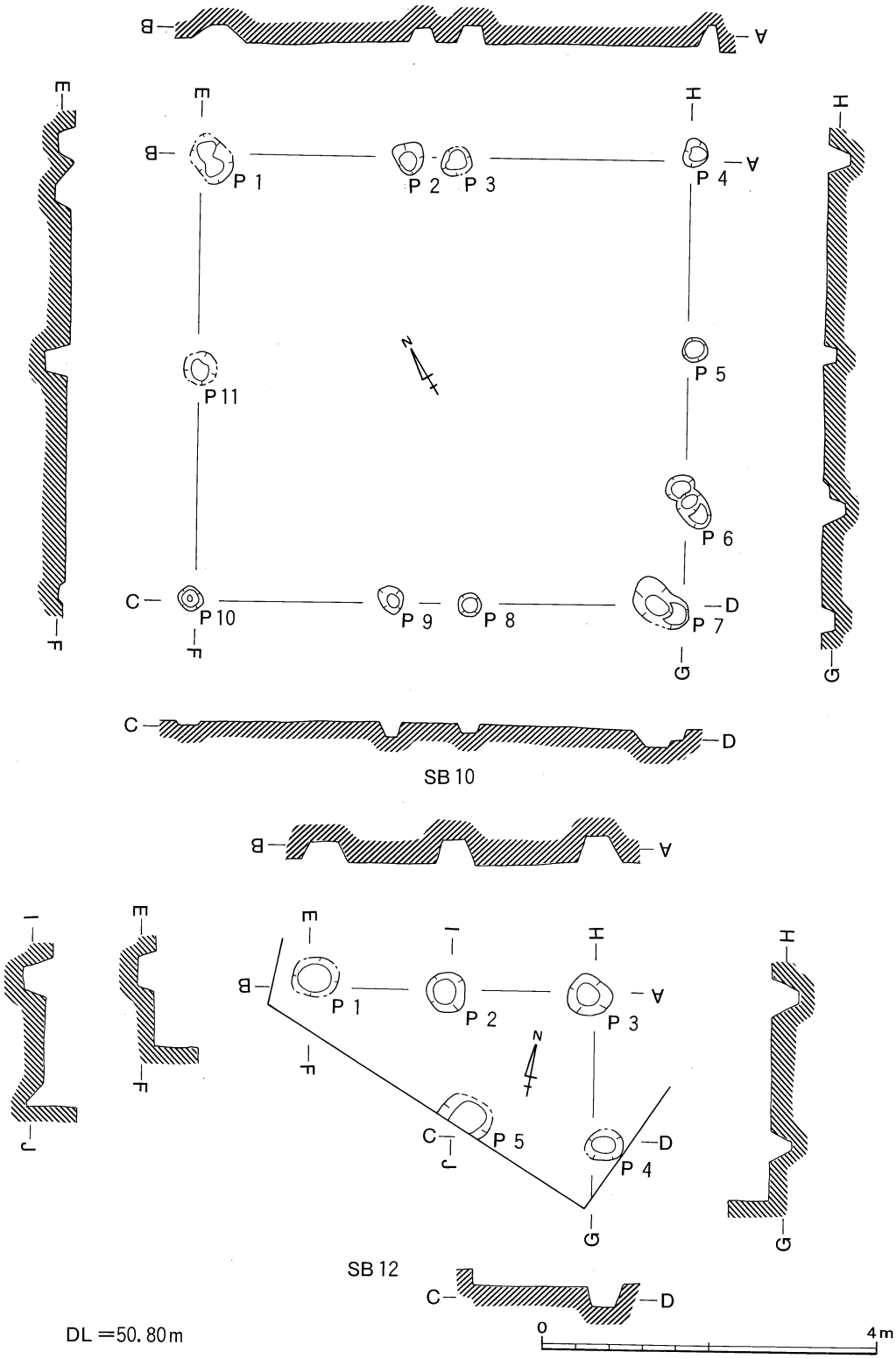


Fig 57　SB 10・12実測図

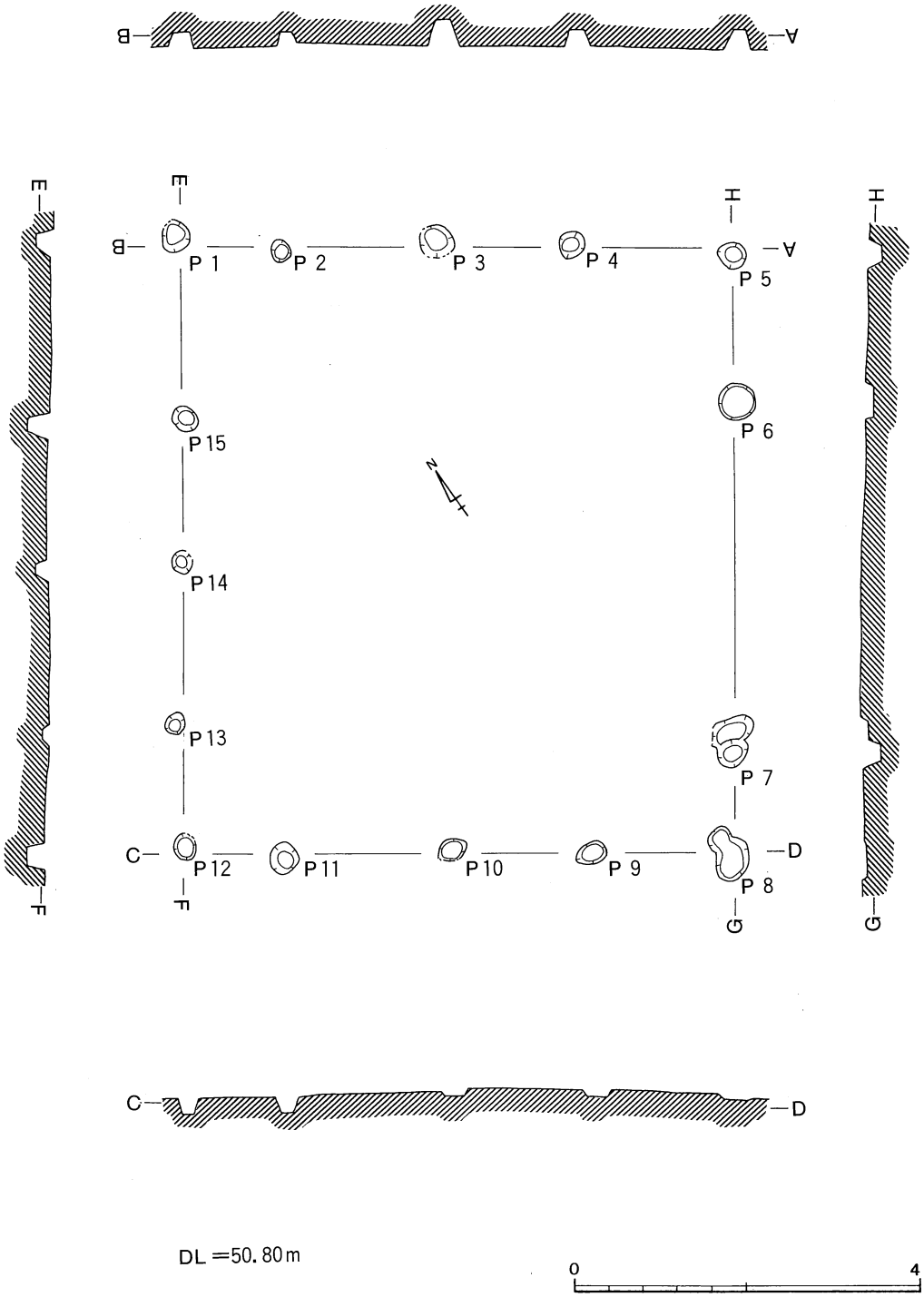


Fig 58　SB 11実測図

弥生土器片，土師器皿（346）がＰ14から出土した。346は内湾気味に立ちあがり口縁部は直立気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。体部は内・外面共に指頭圧痕を認める。

ＳＢ12（Fig 57）

調査区の東南端部に位置する。半分以上は調査区外に出る。建物は桁行２間以上（3.45ｍ以上）梁間２間以上（2.49ｍ以上）の規模と考えられる。柱穴の平面プランは円形及び不整形を呈し，直径45.0～63.0㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは20.0～32.0㎝を測る。柱間距離は1.72ｍ等間である。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＤ19，ＳＫ35を切る。

土坑

ＳＫ１（Fig 59）

調査区の西南部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径1.76ｍ，短径1.17ｍを測る。長軸方向はＮ－52.0°－Ｗとなっている。検出面からの深さは9.0～10.0㎝を測り，断面は逆台形を呈し床面は水平な面をなす。壁は急傾斜で立ちあがる。埋土は暗灰茶色土（１～３㎝の砂礫混り）単純一層である。なお，ＳＤ９を切る。

出土遺物

弥生土器細片が出土しているのみである。

ＳＫ２（Fig 59）

調査区の西南端部に位置する。半分以上が調査区外に出る。長径2.28ｍ，短径0.68ｍ以上を測る。検出面からの深さは22.0㎝を測る。床面はほぼ水平な面をなす。埋土は暗灰茶色土単純一層である。なお，ＳＫ28，ＳＤ１，ＳＤ２を切る。

出土遺物

土師器片及び炭化物が出土しているが図示できるものではない。

ＳＫ４（Fig 59）

調査区の西部，ＳＴ６とＳＫ３との間に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径1.65ｍ，短径1.25ｍを測る。長軸方向はＮ－18.0°－Ｗとなっている。検出面からの深さは7.0～20.0㎝を測り，断面は段状を呈す。床面は南壁側が低く，北壁側が高い。南壁は急傾斜，北壁は緩やかに立ちあがる。埋土は暗灰茶色粘質土単純一層である。

出土遺物（Fig 61－347・Fig 62－348）

弥生土器片，土師器片等のほか土錘（347），釘（348）が出土している。

ＳＫ９（Fig 59）

調査区の中央より僅かに西の北端部に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径0.40ｍ，短径0.37ｍを測る。長軸方向はＮ－9.5°－Ｅとなっている。検出面からの深さは7.0～14.0㎝を測り，断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰茶色土単純一層である。Ｐ1805と切り合うが先後関係は不明である。出土遺物は存しなかったが埋土から中世と推考される。

ＳＫ10（Fig 59）

調査区の西南端部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径0.92m以上，短径0.62mを測る。長軸方向はN－8.2°－Eとなっている。検出面からの深さは7.0cmを測り，断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰色粘質土（1～3cmの礫混り）単純一層である。SK11を切る。

出土遺物

近世陶磁器片が出土しているが図示できるものではない。

SK11（Fig 59）

調査区の西南端，SK2の北側に位置する。平面プランは半楕円形を呈す。長径3.6m，短径2.96mを測る。長軸方向はN－14.0°－Eとなっている。検出面からの深さは21.0～40.0cmを測り，断面形は舟底状を呈す。床面はほぼ水平な面をなす。床面のほぼ中央部に直径60.0～70.0cm，深さ12.0～13.0cmの円形の凹みがあり，竹と考えられる炭化物が多く出土した。埋土はⅠ～Ⅳ層である。Ⅰ層：暗茶褐色粘質土，Ⅱ層：暗茶褐色土に黄茶色粘質土が混る。Ⅲ層：暗茶褐色土，Ⅳ層：淡茶黄色粘質土である。工房跡と考えられる。なお，SD1，SD3，SD10－Aを切り，SK10に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器皿片及び炭化物が出土しているが図示できるものではない。

SK15（Fig 59）

調査区の西北端部，SD10－AとSD15との間に位置する。僅かに西側が調査区外に出る。平面プランは隅丸方形を呈すと考えられる。長径1.24m，短径0.57mを測る。長軸方向はN－10.5°－Eとなっている。検出面からの深さは15.0～18.0cmを測り，断面形は逆台形を呈すと考えられる。床面は水平な面をなす。埋土は茶黒色粘質土単純一層である。なお，P1806を切る。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物（Fig 61－349～353）

完形に近い土師器杯（349～353）が床面に1列状に並んで出土した。349～353は平底から外反して立ちあがり，口縁部は僅かに内湾して口唇部は丸くおさめる。体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。

SK16（Fig 59）

調査区の中央より僅かに西側，SK5の南側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径1.25m，短径0.64mを測る。長軸方向はN－64.5°－Wとなっている。検出面からの深さは12.0～12.3cmを測る。断面形は逆台形を呈す。床面は水平な面をなす。埋土は暗灰茶色土単純一層である。P840に切られる。出土遺物はないが埋土から中世と考えられる。

SK18（Fig 59）

調査区の東北部，ST8の南側に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈す。長径2.45m，短径0.97mを測る。長軸方向はN－15.5°－Eとなっている。検出面からの深さは11.0～17.0cmを測る。断面形は舟底状を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。柱穴が切る。

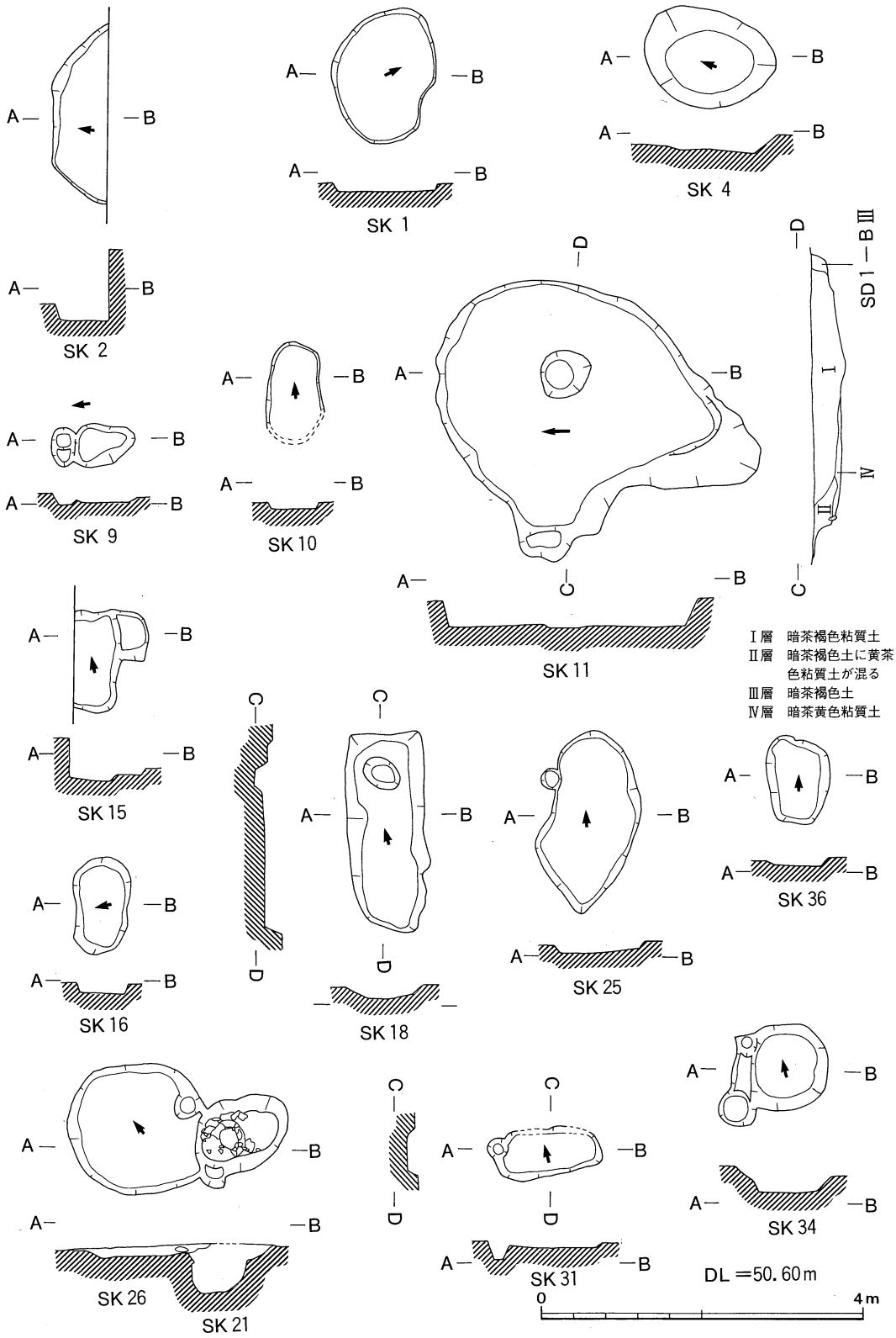


Fig 59　SK 1・2・4・9～11・15・16・18・25・26・31・34・36実測図

出土遺物（Fig 61－354・355）

弥生土器片，土師器皿（354），須恵器杯（355）が出土した。354は内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。外面は指頭圧痕が顕著である。

ＳＫ25（Fig 59）

調査区の東部，ＳＴ７の西側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径2.30ｍ，短径1.12ｍを測る。長軸方向はＮ－8.2°－Ｅとなっている。検出面からの深さは4.0～6.0㎝を測る。断面形は逆台形を呈す。床はほぼ水平な面をなし，壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は暗灰茶色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片，須恵器片，瓦質土器土鍋片が出土しているが図示できるものではない。

ＳＫ26（Fig 59）

調査区の東北部，ＳＴ８の南側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。長径1.81ｍ，短径1.58ｍを測る。長軸方向はＮ－45.2°－Ｗとなっている。検出面からの深さは12.0～13.0㎝を測る。断面形は東壁側が段をなし，床面はほぼ水平な面をなす。埋土は暗灰茶色土単純一層である。ＳＫ21（壺棺墓４）を切り，柱穴に切られる。

出土遺物

弥生土器片，底部外面回転糸切りの土師器杯片が出土しているが図示できるものではない。

ＳＫ31（Fig 59）

東端部に位置する。平面プランは隅丸方形を呈す。長径1.30ｍ，短径0.58ｍを測る。長軸方向はＮ－73.5°－Ｅとなっている。検出面からの深さは5.0～7.0㎝を測る。断面形は逆台形を呈す。床面はほぼ水平な面をなす。壁は急傾斜で立ちあがる。埋土は暗灰黒色土単純一層である。ＳＴ９を切り，ＳＢ10に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器片を出土したが図示できるものではない。

ＳＫ34（Fig 59）

調査区の東端部，ＳＴ９の南側に位置する。平面プランは円形を呈す。長径1.10ｍ，短径0.96ｍを測る。長軸方向はＮ－25.0°－Ｗとなっている。検出面からの深さは15.0～17.0㎝を測る。断面形は逆台形を呈す。床面はほぼ水平な面をなす。埋土は暗灰黒色土単純一層である。なお，ＳＤ19及び２つの柱穴に切られる。

出土遺物

弥生土器片，土師器片，瓦質土器片があるが図示できるものではない。

ＳＫ36（Fig 59）

調査区の中央よりやや東部，ＳＫ25の南側に位置する。平面プランは不整形を呈す。長径1.06ｍ，短径0.78ｍを測る。長軸方向はＮ－26.5°－Ｗとなっている。検出面からの深さは6.0

～10.0cmを測る。断面形は逆台形を呈す。床面は水平な面をなす。埋土は茶黒色粘質土単純一層である。出土遺物から15世紀後半から16世紀初めにかけてのものと考えられる。

出土遺物（Fig 61－357・358）

土師器杯（357・358）がある。平底から外反して立ちあがり，357の口縁部は僅かに内湾する。口唇部は丸くおさめる。内面はロクロ目顕著である。外面は横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切りである。

溝

ＳＤ５（Fig 60）

調査区の西南部に位置する。Ｎ－78.0°－Ｗで東西方向に2.0ｍ延びる。東端は調査区外に出る。幅0.34～1.48ｍ，検出面からの深さ7.0～9.0cmを測る。床面の東端の標高は50.38ｍ，西端の標高は50.32ｍを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＤ10－Ａに切られ，ＳＤ７を切る。ＳＤ13と同一の溝の可能性を有す。

出土遺物（Fig 62－359）

弥生土器片，底部外面回転糸切の杯片，釘（359）が出土している。

ＳＤ９（Fig 60）

調査区の西南部に位置する。Ｎ－49.5°－Ｗで東北に18.95ｍ延びる。両端は調査区外に出る。幅4.45～7.17ｍの大溝である。検出面からの深さ7.0～26.0cmを測る。床面の西端の標高は50.47ｍ，東端の標高は50.43ｍを測る。埋土は暗茶灰色粘質土（１～５cmの砂礫混り）単純一層である。なお，ＳＤ８，ＳＤ10－Ａを切り，ＳＫ１，柱穴多数に切られる。

出土遺物

出土遺物は少なく細片で，弥生土器片，土師器片，須恵器片が出土しているが，いずれもローリングを受けて摩耗している。

ＳＤ10－Ａ（Fig 60）

調査区の西部に位置する。両端は調査区外に出る。Ｎ－82.0°－Ｗで東西方向に10.8ｍ延びた所で南へほぼ直角に曲りＮ－14.0°－Ｅで南北方向に直走し，やや西に曲ってＮ－20.5°－Ｅでさらに南北方向に直走する。全長79.68ｍ，幅0.30～2.15ｍ，検出面からの深さ3.0～43.0cmを測る。床面の西端の標高は50.33ｍ，南端の標高は50.24ｍを測り，西から東，さらに北から南へ流水する。雨天時には充分排水路の役目を果たしたことを付記しておく。溝はＳＤ10－Ｂを切った付近で最も深く，水が溜まるようになっており生活用水として使用も考えられる。埋土は暗灰色粘質土単純一層である。なお，ＳＴ３，ＳＥ１，ＳＤ10－Ｂ，ＳＤ12，ＳＤ13を切り，ＳＢ５，ＳＤ９，ＳＫ11に切られる。出土遺物からＳＫ15とほぼ同時期と考えられ，15世紀に比定できる。

出土遺物（Fig 61－361・Fig 62－360）

備前焼甕片，瓦質土器鍋片，土師器杯（361），砥石（360）が出土している。361の杯は平底

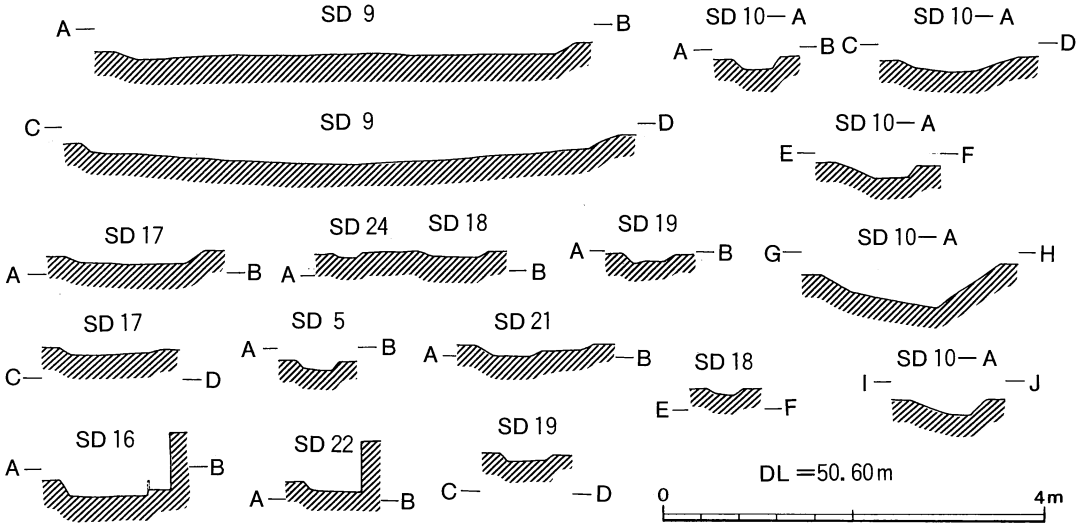


Fig 60　SD 5・9・10—A・16～19・21・22・24実測図

から外反して立ちあがり，口縁部は僅かに内湾して，口唇部は丸くおさめる。

ＳＤ13（Fig 12）

調査区の西南部に位置し，Ｎ－78.0°－Ｗで東西方向に5.25ｍ延びる。西側は調査区外に出る。幅0.93～1.10ｍ，検出面からの深さは12.0㎝，床面の東端の標高は50.317ｍ，西端の標高は50.32ｍを測る。埋土は黒色土単純一層である。ＳＤ５と同一の溝と考えられるが，ＳＴ１，ＳＤ７，ＳＤ12を切り，ＳＤ10－Ａに切られる。

出土遺物

弥生土器片等が出土しているが細片で図示できるものではない。

ＳＤ16（Fig 60）

調査区の西北端部に位置する。大半は調査区外に出る。東西方向に延びると考えられる。検出できたのは，全長1.25ｍ，幅0.23ｍ以上，検出面からの深さは12.0㎝を測る。埋土は暗灰色粘質土単純一層である。ＳＫ８（壺棺墓１）を切る。なお，出土遺物はなかった。

ＳＤ17（Fig 60）

調査区の北東部に位置する。Ｎ－67.5°－Ｗで東西方向に19.65ｍ延びる。東は調査区外に出る。西端は調査区外に出るが削平の結果と考えられる。幅0.92～1.67ｍ，検出面からの深さは5.0～13.0㎝を測る。床面の西端の標高は50.686ｍ，東端の標高は50.957ｍを測る。埋土は淡灰黒色粘質土（砂礫混り）単純一層である。なお，ＳＴ８を切り，ＳＤ18と交わるが切り合い関係は認められず，ほぼ同時期と考えられる。

出土遺物（Fig 61－362）

土師器杯（362）の他瓦質土器片，青磁片等が出土している。362は平底から外反して立ちあ

がる。底部外面は回転糸切りである。

ＳＤ18（Fig 60）

調査区の東部に位置する。Ｎ－13.0°－Ｅで南北方向に15.65ｍ延びる。南端は検出できなかったが削平の結果と考えられる。幅0.4～0.8ｍ，検出面からの深さは7.0㎝を測る。床面の南端の標高は50.766ｍ，北端の標高は50.782ｍを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，北端はＳＤ17と交わるが切り合い関係は認められず，ほぼ同時期と考えられる。又，ＳＤ14を切る。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物（Fig 61－363）

土師器杯片，瓦質土器鍋（363）が出土している。363は内湾して立ちあがり，口縁部近くに突帯を有す。口縁端部は内側に肥厚して，口唇部は面をなす。

ＳＤ19（Fig 60）

調査区の東端部近くに位置する。Ｎ－13.5°－Ｅで南北方向に14.75ｍ延びる。南端は調査区外に出る。幅0.35～0.67ｍ，検出面からの深さは6.0～10.0㎝を測る。床面の北端の標高は50.81ｍ，南端の標高は50.981ｍを測る。埋土は暗灰黒色粘質土単純一層である。なお，ＳＴ９，ＳＫ34，ＳＢ９，ＳＢ11を切り，ＳＢ10，ＳＢ12は切る。又，多数の柱穴に切られる。出土遺物から15世紀と考えられる。

出土遺物（Fig 61－364～366）

土師器杯（364），土師器皿（365），瓦質土器鍋（366）等が出土している。364は中央部が僅かに凹んだ平底から直線的に外反し，口唇部は丸くおさめる。365は平底から内湾気味に立ちあがり，口縁部は外反し，口縁端部は上方に肥厚する。口唇部は外傾して面をなす。古い時期からの混入と考えられる。366は内湾して立ちあがり，口縁端部は僅かに内傾して口唇部は面をなす。断面三角形の貼付鍔を有す。

ＳＤ21（Fig 60）

調査区の東南端部近くに位置する。Ｎ－59.5°－Ｗで東西方向に6.78ｍ延びる。東端は調査区外に出る。又，西端は検出できなかったが削平の結果と考えられる。幅1.15～1.90ｍ，検出面からの深さは7.0～12.0㎝を測る。断面形は南側が浅い段状を呈す。床面の東端の標高は50.61ｍ，西端の標高は50.566ｍを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。

出土遺物

弥生土器片，土師器片，瓦質土器土鍋片が出土しているが図示できるものでない。

ＳＤ22（Fig 60）

調査区の東南端部に位置する。大半が調査区外に出るため断定はできないが溝の端部であろうと考えられる。又，Ｎ－21.5°－Ｅで南北方向に延びると考えられる。検出できたのは，全長4.13ｍまで，幅0.5～0.9ｍまで，検出面からの深さは8.0～11.0㎝を測る。床面北端の標高は50.74ｍ，南端の標高は50.679ｍを測る。埋土は灰黒色粘質土単純一層である。

出土遺物

土師器片，瓦質土器土鍋片が出土しているが図示できるものでない。

柱穴

P 103（Fig 63）

調査区の西端部に位置する。平面プランは円形を呈す。直径33.0cm，検出面からの深さは10.1cmを測る。埋土は暗灰茶色土単純一層である。

出土遺物（Fig 61－367）

土師器皿（367）が出土している。内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。口縁端部内面は強いナデ調整を施す。外面は指頭圧痕が顕著である。

P 105（Fig 63）

調査区の西端部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径42.0cm，検出面からの深さは24.0cmを測る。埋土は暗灰茶色土単純一層である。

出土遺物（Fig 61－368）

備前甕片，土師器皿（368）等が出土している。368は中央部が凹んだ底部から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口縁部は摘んで強い横ナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕が顕著である。

P 746（Fig 63）

調査区の中央部に位置する。平面プランは円形を呈す。直径32.0cm，検出面からの深さは20.4cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＢ６に切られる。出土遺物から15世紀後半と考えられる。

出土遺物（Fig 61－370）

土師器鍋（370）等が出土している。370は，内湾して立ちあがり，口唇部より3.1cm下に断面三角形の鍔を有す。胴部外面は叩き調整を施すが他は内・外面共横ナデ調整を施す。

P 778（Fig 63）

調査区の西北端部に位置する。平面プランは円形を呈す。直径32.0cm，検出面からの深さは28.0cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 61－371）

弥生土器片，土師器杯（371）等が出土している。371は，平底から斜上外方に僅かに内湾気味に立ちあがる。体部は内・外面共ロクロ目顕著である。底部外面は回転糸切りである。

P 1135（Fig 63）

調査区の東部，ＳＫ26の南側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径35.0cm，検出面からの深さは20.4cmを測る。埋土は暗灰茶色粘質土単純一層である。

出土遺物（Fig 61－372・Fig 62－379）

土師器皿（372），瓦質土器片，明銭「洪武通宝」（379）等が出土している。372は中央部が

凹んだ平底から内湾気味に立ちあがり，口縁部は直上に直線的に立ちあがる。口縁部は摘んで横ナデ調整を施す。他は全面に指頭圧痕を認める。379は床直上から出土した。

P 1494（Fig 63）

調査区の東部，ＳＴ10の北西側に位置する。平面プランは円形を呈す。直径38.0cm，検出面からの深さは35.0cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。

出土遺物（Fig 61－373）

土師器皿（373）が出土した。373は口縁端部は摘んで強い横ナデ調整を施し，爪による凹線が外面にみられる。内・外面共に指頭圧痕顕著である。

P 1544（Fig 63）

調査区の中央よりやや東側に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径35.0～45.0cm，検出面からの深さ22.2cmを測る。埋土は暗灰茶色粘質土単純一層である。

出土遺物（Fig 61－374・375）

土師器皿（374・375）が出土している。内湾気味に立ちあがり，口縁部は374は外反し，375は直立気味に立ちあがる。374は内・外面共横ナデ調整を施す。

P 1802（Fig 63）

調査区の西端部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径30.0～37.0cm，検出面からの深さは11.7cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＴ５を切る。

出土遺物（Fig 61－377）

瓦質土器擂鉢（377）等が出土している。斜上外方に直線的に立ちあがり，口唇部は外傾して面をなす。

P 1804（Fig 63）

調査区の中央南端部に位置する。平面プランは楕円形を呈す。直径約28.0cm，検出面からの深さは10.6cmを測る。埋土は灰黒色土単純一層である。なお，ＳＴ２を切る。

出土遺物（Fig 61－378）

土師器小杯（378）が出土している。平底から斜上外方に段をもって立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。体部外面は強い横ナデ，内面は不定方向のナデ調整を施す。底部外面は糸切り及び板目痕を残す。なお，器形が全体的に歪む。

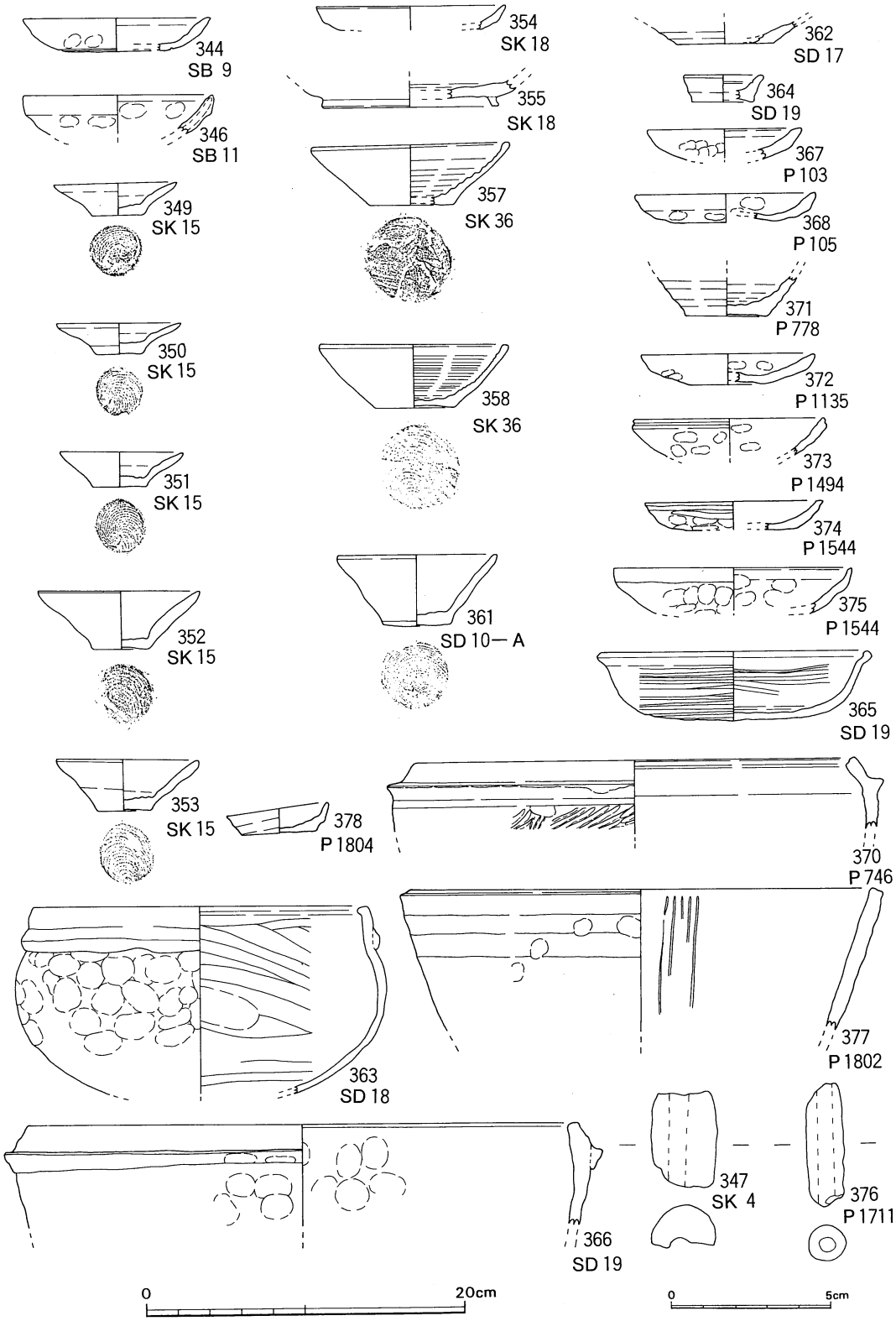


Fig 61　SB・SK・SD・Pの出土遺物

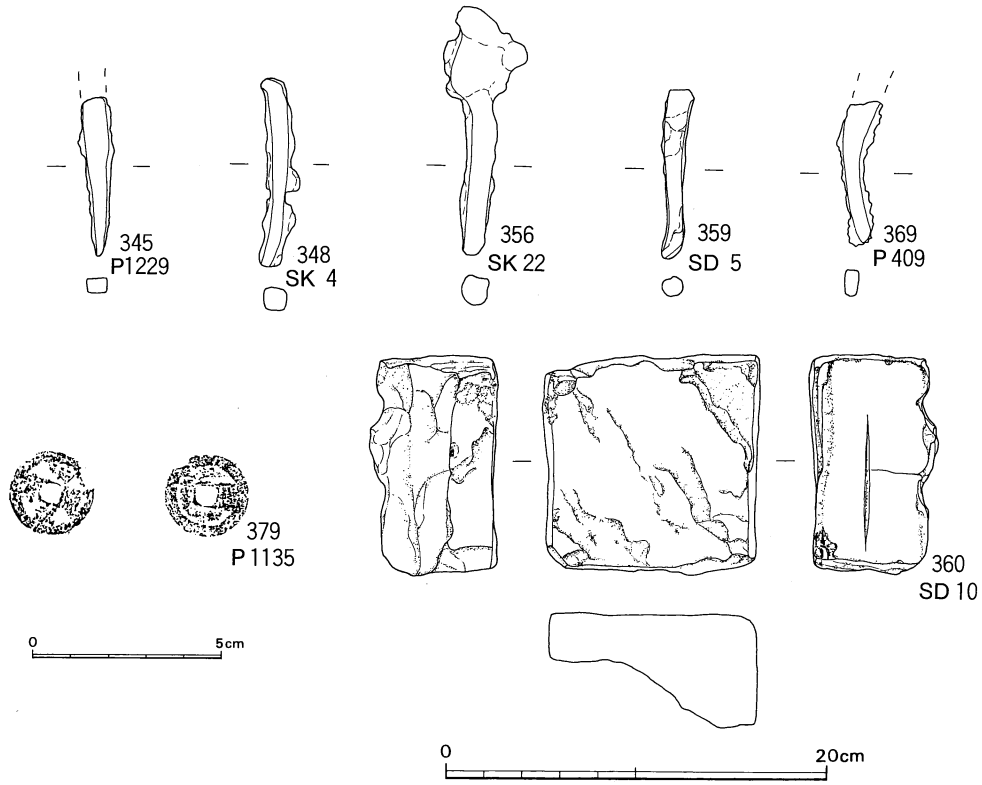


Fig 62　SK・SD・P 出土遺物

第Ⅵ章　総　　括

1．遺物について

本遺跡で出土した遺物は，土器が大半を占めるが他に陶磁器，鉄器，土製品，石製品等がある。土器には弥生土器，土師器，須恵器，黒色土器，瓦質土器等が，陶磁器には緑釉陶器，青磁，白磁等がある。鉄器には鎌，鉄鏃，鉈，馬具等が，石製品には紡錘車，管玉等があり，その他布目瓦片や自然遺物として古代モモの種子等がある。

これらの出土遺物は，弥生時代から中・近世のものであるが，特に弥生時代の竪穴住居であるＳＴ８と平安時代の井戸であるＳＥ１からは良好な一括資料を得ることができたので，ここではＳＴ８とＳＥ１の土器を中心に考察を述べることとする。

(1)　ＳＴ８出土の土器

竪穴住居に集中廃棄された一括資料であり，完形及び復元完形を多く含んでいる。これらの土器は編年を進める上での基準資料として大きな位置づけを有する。先ず土器組成を見ると，鉢30点（21.1％），高杯５点（3.5％），壺19点（13.4％），甕86点（60.6％），甑１点（0.7％），蓋１点（0.7％）である。以下各器種ごとにその特徴を見ることにする。鉢は法量から４つのタイプに分けることができる。すなわち口径20㎝以上の大型のもの94，16～18㎝の中型のもの90～92，10～13㎝の小型のもの79・80・84～89，７～９㎝の最小型のもの76・78・81～83である。高杯は杯部が椀状を呈する95・96，脚部を見てみると穿孔を施す95・97と図示しなかったが上・下２段に同じ大きさで穿孔を施したＰＬ35の脚，穿孔のない96がある。全体形の分かるものは杯部と脚部を分割成形している。壺はすべて平底で胴部中位に最大径を有す。頸部が直立気味に立ちあがる110・111は当該期に普遍的に存在するＡ類(10)である。104は二重口縁の土器でＢ類。胴部上端から大きくラッパ状に開がる口縁部を有するＣ類の107～109，短頸の口縁を有するＤ類の112～114がある。壺で注目すべきは108である。胴部上半に放射状の暗文を配す壺である。甕は法量から３つのタイプに分けることができる。すなわち器高15～21㎝の小型のもの116～124，22.9～29㎝の中型のもの125～129・131，34㎝前後の大型のもの130・132～134である。小型と中型のものは総じて砲弾型を呈し，口縁部は外反する。成形手法は116・118・119・122・127・128・131は叩き目の主軸方向の変化から分割成形Ｂ手法(11)の痕跡が見られる。116・117・123～130・132～135・137～139・143は胴部外面叩き調整の後下半を縦方向のハケ調整を施すものが多い。121の胴部外面は叩き調整の後，中位は部分的に縦方向のハケ調整を施し，下半は部分的にナデ調整を施す。118・119・122・142の胴部外面は叩き調整の後縦方向のナデ調整を部分的に施す。甕で注目すべきは115で，搬入品である。平底から内湾して立ちあがり，口縁部は強く屈曲して外反する。胴部外面上半は縦方向のハケ調整，下半は丁寧なヘラ磨きを施す。胴部内面はヘラ削りを施す。特徴から黒谷川郡頭遺跡土坑33出土の甕

(12)等と近似し阿波地方を含む瀬戸内地方との関連が窺える資料である。当地域においては，後期初めを除くと内面ヘラ削りはほとんど認められず，僅かに深渕遺跡ＳＴ３出土の甕(13)等に例を見つけるのみであり，影響が考えられる。

これらの特徴からＳＴ８の時期を決定しなければならない。南四国の土器編年で言えば，岡本健児氏が「叩き技法が本格的に定着しその全盛」を迎えるとしたヒビノキⅡ式であり，庄内式土器併行に位置ずけられるものである。深渕遺跡Ｃ区出土の飾った壺(14)は，ＳＴ８出土の飾りのない壺に比してやや古い時期に置くことができよう。

(2) ＳＥ１出土の土器

素掘りの井戸から出土した一括資料であり，完形及び復元完形を多く含んでいる。当地域における平安時代の土器資料は，土佐国衙跡(15)，曽我遺跡(16)，十万遺跡(17)等の出土によって徐々に増えつつあるが，土師器，須恵器の編年は出土土器の僅少さに因して未確立である。しかし漸く基準となる良好な資料を得ることができた。先ず土器組成を見ると，黒色土器椀47点・杯１点（12.9％）土師器杯150点（40.3％）土師器椀51点（13.7％）…輪高台33点・ベタ高台18点，須恵器椀28点（7.5％）…輪高台７点・ベタ高台21点，椀は合計79点（21.2％）土師器皿42点（11.3％）甕29点（7.8％）羽釜14点（3.8％）移動式竈４点（1.1％）その他６点（1.6％）…須恵器片口鉢，土師器釜据等，以上である。以下各器種ごとにその特徴を見ることにする。

黒色土器椀

すべて内面のみ黒色を呈するいわゆるＡタイプで，貼付輪高台を有する。又底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施すものと無調整のものとがある。法量から２つのタイプに分けることができる。口径13.9～15.2cmをⅠ，17.0～17.3cmをⅡとする。又，口縁端部内面に１条のヘラ削りを巡らすものをＡ，口縁部内面から体部上端内面にかけて１～３条のヘラ磨きを巡らすものをＢ，単位がわからないほど内面を丁寧にヘラ磨きを施したものをＣとし，ⅠＡ，ⅡＡというふうに記していく。

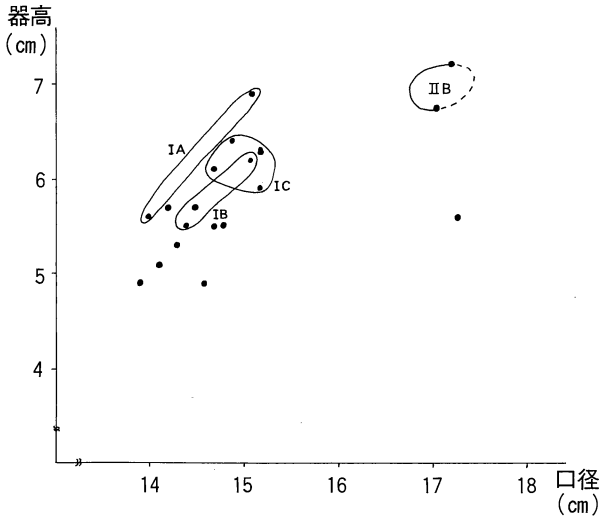
ⅠＡ類は，212・213・219・226で放射状に暗文を配すものがある。高台径は口径比の48.3～51.4％である。器高と口径の関係は比例する。

ⅠＢ類は，211・221・222・225・231で放射状の暗文と波状及び螺旋状の暗文を配すものとがある。高台径は口径の47.2～48.3％である。器高と口径の関係は比例する。

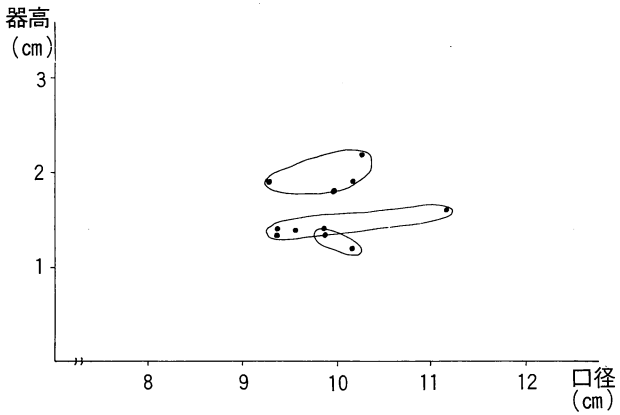
ⅠＣ類は，214・216・218・220・224・227・228で放射状の暗文と縦方向の暗文を配すものとがある。又214・216は口縁部外面，220・224・227は口縁部内面に横ナデ調整を施す。214・218及び摩耗して内面の調整は不明であるが215・218は体部外面にロクロ目が顕著である。高台径は口径の44.7～49.0％である。器高と口径の関係は比例しない。

ⅡＢ類は，229・230で放射状の暗文及び螺旋状の暗文を配すものとがある。229は口縁部外

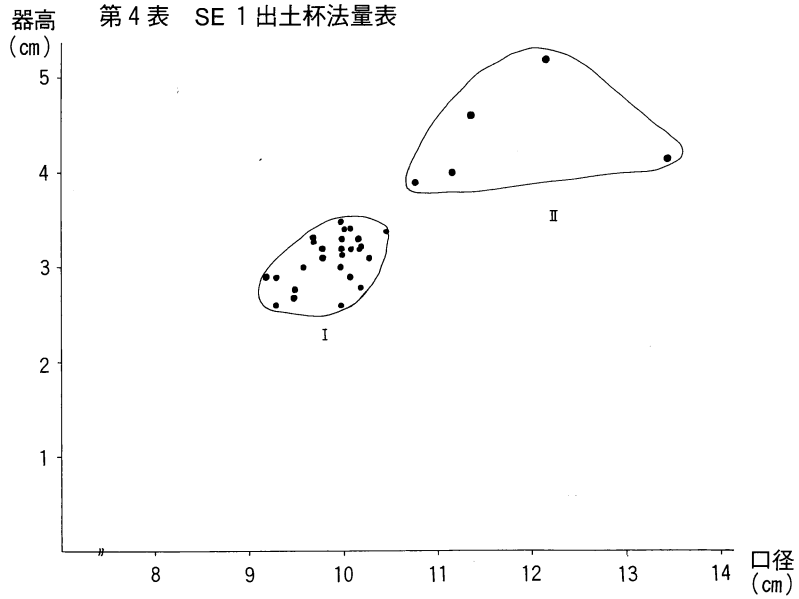
第２表　SE１出土黒色土器椀法量表



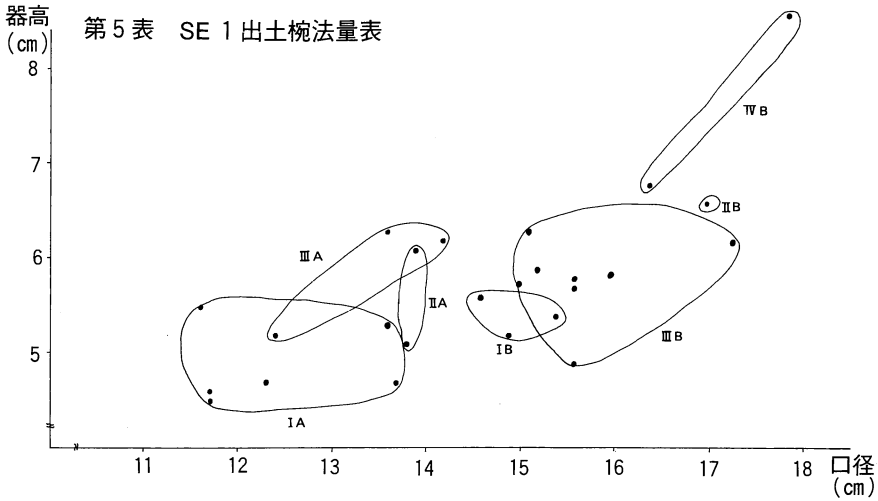
第３表　SE１出土皿法量表



第４表　SE１出土杯法量表



第５表　SE１出土椀法量表



面はナデ調整を施す。230は口縁部内面に軽い沈線を巡らす。輪高台が欠損しているので正確には不明であるが，高台径は口径の約41.8％である。器高と口径の関係は個体数が少なく不明である。

なお，図示していないが，体部内面に型板痕を認めるものがあり，土師器椀285と類似する。高台高が高くてしっかりしたものとなり，口縁部内面に軽い沈線を巡らすものがある。

皿

土師器皿は台付皿（233～236）脚付皿（237）と口径9.3～11.2cmを測る平底の皿（238～244・308・316），ベタ高台気味の底部を有する皿（317）の４つのタイプに分かれる。317の底部切り離しは，回転糸切りであるが他はすべて回転ヘラ切りである。平底の皿は器高指数11.5～12.1cm（316・332），14.1～14.9cm（238・240～242），18.0～21.3cm（239・243・244・308）にさらに分けることができる。底部内面にロクロ目を残すものが多い。なお，332の胎土は精選され砂粒を含まないことから搬入品と考えられる。

杯

すべて底部切り離しは回転ヘラ切りの後，荒いナデ調整を施すものが多い。法量から２つのタイプに分けることができる。口径9.3～10.5cmをⅠとし，底径は口径の60～70％の範囲にほとんど収まる。口径10.8～13.5cmをⅡとし，底径は口径の50％前後である。

Ⅰ類は，245～261・263・264・309～312・318～320で，器高は2.6～3.5cmを測る。245・253・258は口縁部内面に軽い沈線を巡らす。

Ⅱ類は，平底の262・265・266で，器高は4.0～5.2cmを測るものとベタ高台気味の底部の267・313で，器高は3.9～4.6cmを測るものとがある。なお266は口縁部内面に軽い沈線を巡らす。

椀

268・269は，杯と椀の中間型ともいえるものであるが，椀とした。厳密なものではない。椀は土師器ベタ高台のものをⅠ，輪高台のものをⅡ，須恵器ベタ高台のものをⅢ，輪高台のものをⅣに大別できる。さらに法量から２つのタイプに分けることができる。口径11.6～14.2cmをA，14.9～17.9cmをＢとする。以下ⅠA，ⅡAというふうに記していく。

ⅠA類は，268～273である。底径は口径の48.5～57.3％である。268～270は底部切り離しは回転ヘラ切りであり，271～273は回転糸切りである。268・271・272の底部内面は凹む。器高指数34.3～47.4である。

ⅠＢ類は，279・314・324である。底径は口径の41.6～49.3％である。底部切り離しは回転糸切りである。279の底部内面は凹む。器高指数34.8～38.4である。

ⅡA類は，284・285である。高台径は口径の47.5～50.7％である。284の底部外面に回転ヘラ切り痕を認める。285は口縁端部内面に１条の軽い沈線を巡らし，体部内面に型板痕を認める。型板痕は図示していないが黒色土器椀にも認められる。器高指

数37.0～43.9である。

Ⅱ B類は，331である。高台径は口径の57.6％である。体部は平底から稜をもって斜上外方に直線的に立ちあがる。器高指数38.8である。

Ⅲ A類は，280・281・321である。底径は口径の43.5～46.3％，器高指数41.9～46.3である。底部切り離しは，回転糸切りである。なお，口径と器高は比例関係にある。

Ⅲ B類は，274～278・282・322・333である。底径は口径の40.0～49.4％，器高指数31.4～41.7である。底部切り離しは，回転糸切りである。274・275・278の底部内面は凹む。

Ⅳ A類は，ない。

Ⅳ B類は，286・287である。底径は口径の43.0～45.7％，器高指数41.5～48.0である。286の底部切り離しは，回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。287の底部外面はロクロナデを施す。口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。口縁部及び体部内面はヘラ磨きを施す深い椀である。なお，口径と器高は比例関係にある。

甕

甕は全体の器形がほぼ分かるものは289～291・329の4点ある。ほぼ同じ器形であるが胴部上端部より下は叩き調整を施すもの（289・290・329）と，胴部中位から下は丁寧なナデ調整を施すもの（291）とがある。291は，口縁部内面に「大」と思われる刻字が施され祭祇的要素をもつものと考えられる。他に甕胴部片（303）外面に3文字の刻字を認め，やはり丁寧なナデ調整が施されている。同様の器形の甕は土佐国衙跡ＳＸ6(18)から出土している。

羽釜

口縁端部外面のやや下った部分に鍔を有する摂津C_1型（293(19)）口縁端部外面にそのまた鍔を有する摂津C_2型（292・295・297・327(20)），口縁部は僅かに内側に屈曲し，口縁端部よりやや下に鍔を有するもの(294)，口唇部より5.7㎝下に断面三角形の小さな鍔を有するもの(296)の4つのタイプにわけることができる。

以上ＳＥ1出土の土器の特徴の概略を述べてきた。まず，これらの土器の時期差について決定しなければならない。331はⅢ層から出土したがⅠ層下と接合できた。又，333の須恵器椀は床直上から出土したが，Ⅰ層から出土した椀類との間に時期差はほとんど認められないなど，全体の遺物は，ほぼ同時期のものと考えてよかろう。黒色土器Ａは，口縁部内面にヘラ削りを巡らすものであるが，器壁を薄くするためのヘラ削りを残すものとすれば興味深い。又，内面に炭素が充分吸着せず，黒色土器といいがたいものも図示していないが含まれる。先述したように土師器椀285等と器形及び手法が類似する。これらのことから黒色土器は在地系の可能性をもつ。畿内の黒色土器Ａタイプと同じ内黒黒色土器が，土佐に緑釉陶器と共に多量に移入されてくるのは9世紀中頃以降(21)であるが，土佐における黒色土器の生産は，このＳＥ1の時期から始まる可能性が強い。黒色土器を含めて輪高台の椀の底部切り離しは，回転ヘラ切り，

ベタ高台の椀は小型のものは回転ヘラ切りが残り，中型のものは回転糸切りとなっており，皿317を除いて他の皿，杯など小型のものは，回転糸切り出現後も回転ヘラ切りが残る(22)ようである。しかし曽我遺跡ＳＫ５(23)の11世紀末にはなくなる。以上出土遺物の特徴からＳＥ１の時期を10世紀後半から11世紀前半までと考えたい。

２．遺構について

当遺跡で検出した遺構は，竪穴住居10棟，掘立柱建物12棟，土坑38基（壺棺墓９基），溝24条，井戸１基，柵列１条，及び柱穴群である。これらすべてについての所属年代や性格を明確にすることはできないが時代順に諸検討を加えることとする。

弥生時代

竪穴住居は平面プランが円形を呈するもの（ＳＴ９），隅丸方形を呈するもの（ＳＴ１・３・８）瓢箪形を呈するもの（ＳＴ６）がある。南四国の竪穴住居の平面プランは，ヒビノキⅠ式(24)の段階までは円形が一般的であり，ヒビノキⅡ式(25)になると不整円形・隅丸方形が出現し，方形住居に統合されていく，検出した竪穴住居は，ヒビノキⅡ式期と考えられるが，ＳＴ９はＳＫ33に切られること等から僅かに時期が下るようである。他はほぼ同時期と見てよかろう。土器が集中廃棄されたＳＴ８は，他の住居址に比べて床面が深い位置にあること，平面プランが隅丸長方形を呈すること。出土した土器は，投げ込まれたのではなく据え置かれたと考えられること等々他の住居址と明らかに様相を異にすることから祭祀的意味をもつものとみてよかろう。壺棺墓については，ＳＴ３から11.35ｍ北に壺棺墓１（ＳＫ８），7.3ｍ北に壺棺墓２（ＳＫ12）が，位置し，壺棺墓２（168）は先述したように底部に一孔が穿たれており，葬送習俗の一つに該当し，西北九州地方に今も残存する甕棺の底部に体液を流すための一孔を穿つ(26)行為に類似するとも考えられる。又壺棺４（171・172）の出土状態は，土器片を胴部に貼りつける等，深渕遺跡出土の壺棺と類似しており葬送習俗に伴うと考えられ，壺棺２（168）と合わせて興味深いものである。壺棺墓群（壺棺墓３～９）は，ＳＴ８とＳＴ９との間に位置し，集落内に墓域が営まれていたことは明確である。壺棺は，すべて大きさから乳幼児又は小児用と解すべきであろう。居住区と墓域との距離で言えば，五軒屋(ごけんやしき)敷遺跡(27)・深渕(ふかぶち)遺跡(28)・香川県彼ノ宗遺跡(29)においても居住区と墓域が極めて近いことが言える。しかし，特に壺棺墓群域には成人墓群が全く見られず，その点で子供の墓域と成人の墓域を異にしていることは注目に値することである。又ほぼ同時期と考えられ，さらに祭祀的要素を多分に持ち，壺棺墓群に近接するＳＴ８との関係についても合せて今後充分なる検討を要することである。

古墳時代

検出された竪穴住居は５棟であるが，４世紀初頭と考えられるＳＴ４は規模からＳＴ５の付属的施設の可能性があり興味深いものである。又６世紀後半と考えられるＳＴ２・７・10はカマドを持つものと持たないものがあることや，その位置関係から集落を考える上で興味深い。

なおＳＴ10から約80ｍ南の県内唯一現存する前方後円墳である大塚古墳は６世紀前半と考えられるが，この時期のものは当遺跡にはない。大塚古墳の墓域周辺にその前後の集落が経営されるのは，その背景に首長の盛衰を物語るものであって，これまた興味つきないものである。

平安時代

当遺跡で検出した遺構は出土遺物から前後２時期に分けて考えることができる。前半期のものはＳＤ11・Ｐ488・591等，後半期のものはＳＢ４，ＳＥ１，ＳＤ10－Ｂ等である。前半期は335・336の杯，341の黒色土器，図示していないがＰ448から出土した緑釉陶器片から９世紀後半が考えられる。後半期の良好な一括遺物を出土したＳＥ１は，出土遺物からＳＢ４に伴うものと考えられるが，ＳＢ４は，井戸から約4.2ｍ北側に位置する。又ＳＢ４の南面中央の柱穴は検出されておらず，むしろ欠除の状況でそれがゆえに出入口であった可能性を持つ。これらのことからＳＢ４は厨の可能性をもつものではなかろうか。ＳＥ１出土の黒色土器は，県内での発見は現在のところ極めて少なく，土佐では，一般的な供膳形態の食器とは言えないようである。又291・303の刻字を施した甕は一般庶民のものとは考えられない。330の鉄器は馬具の可能性が極めて高く，以上のことから特に後半期のＳＢ４，ＳＥ１は有力豪族の館の一部とも考えられ，又地名の「サウジ」は「庄司」の訛ったものに結びつく可能性もあり興味深い。なお，調査区の北及び西側にも同時期の建物群が所在すると思われる。

中世

検出した遺構を出土遺物から次の表の様に大別できる。ＳＤ10－Ａは直角に曲って南下することから屋敷を区画する溝と思われるが，ＳＤ17と結びつく可能性があり，ＳＤ－10Ａ・17・18はほぼ同時期のものでＳＤ10－Ａ同様ＳＤ17・18は屋敷を区画する溝と考えられる。これらを含めて検出した遺構は15世紀から16世紀初頭までと考えられ，北側の山手に所在する山田城跡の盛えた時期であり，山田氏の家臣団の居館跡と考えられ，当遺跡の西側に所在したと言われる西の市，東の市を含めて戦国期城下町の初源的なものとも把握でき，今後周辺における調査によってより明らかになることが期待され得る。

	15世紀	16世紀	
遺構	ＳＤ17	ＳＢ９	ＳＢ６
	ＳＤ18	ＳＢ11	ＳＫ36
	ＳＤ19	ＳＢ10	
		ＳＫ15	
	ＳＤ10－Ａ		

第６表　緑釉陶器・二彩陶器県内出土地（平成２年３月現在）

器　　種	点数	出　土　地	報　告　書　等
緑釉陶器　皿	1	吾川郡春野町石屋敷	山根・石屋敷遺跡
〃　杯	1	南国市比江新ラ田	土佐国衙跡発掘調査報告書第１集　S55.3
〃　不明	1	〃　ダイリ	土佐国衙跡発掘調査報告書第２集　S56.3
〃　椀	1	〃　府中	土佐国衙跡発掘調査報告書第３集　S57.3
〃　皿	1	〃　前浜	田村遺跡群　S62
杯	2	〃　金星	土佐国衙跡発掘調査報告書第８集　S63.3
〃　椀・皿	6	香美郡野市町深渕	深渕遺跡発掘調査報告書　H１.３
二彩陶器　壺等	5	〃　〃	深渕遺跡発掘調査報告書　H１.３
緑釉陶器　皿・椀・壺	45	香美郡野市町曽我	曽我遺跡発掘調査報告書　H１.３
〃　皿	9	中村市森沢風指	後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　H１.３
〃　皿等	2	南国市国分	土佐国分寺発掘調査報告書　H１.３
〃　皿・椀等	20	南国市比江字金屋	土佐国衙跡発掘調査報告書第９集　H１.３
〃　皿	4	幡多郡大方町加持宮崎	宮崎遺跡　H１
〃　皿	1	吾川郡春野町西分増井	西分増井遺跡　H１
〃　皿	2	香美郡土佐山田町百石町	ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書　H２.３

第７表　古代「墨書・刻書土器」県内出土地（平成２年３月現在）

器　種	文字	出　土　地	期　間	報　告　書
須恵器底部(刻書)	「稜道」	南国市比江字松ノ下	S61.10.16～12.19	土佐国衙跡発掘調査報告書第７集　S62.3
土師器高杯脚(黒書)	「官」	〃　字宮ノ西	S54.8.20～9.12	土佐国衙跡発掘調査報告書第７集　S62.3
土師器杯(〃)	「水」	香美郡野市町深渕	S62.9.28～11.30	深渕遺跡発掘調査報告書　H１.３
須恵器蓋(〃)	「山」	〃　曽我	S62.3.7～5.7	曽我遺跡発掘調査報告書　H１.３
須恵器蓋(刻書)	「大」	〃　深渕	S63.6.22～8.13	深渕遺跡発掘調査報告書　H１.３
須恵器蓋(刻書)	「上」	〃　土佐山田町大法寺	不明	土佐山田町史・大法寺１号古窯址（大法寺古窯址群）
須恵器蓋(刻書)	「禾」	〃　〃	〃	土佐山田町史・大法寺１号古窯址(大法寺古窯址群)
須恵器蓋(刻書)	「力」	〃　〃	〃	土佐山田町史・大法寺１号古窯址（大法寺古窯址群）
土師器皿(墨書)	不明	幡多郡大方町加持字宮崎	S63.12.8～12.10	宮崎遺跡　H１.３
土師器皿(墨書)	「住」?	〃　〃	H１.３.６～３.10	〃
土師器甕(刻書)	「大」	香美郡土佐山田町百石町	H１.７.６～10.30	ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書　H２.３
土師器甕(刻書)	「ホ」?	〃　〃	〃	〃　〃

(註)

(1) 土佐山田町教育委員会『高知県ひびのき遺跡』1977年

(2) 高知県教育委員会『飼古屋岩陰遺跡発掘調査報告書』1983年

(3) 土佐山田町教育委員会『稲荷前遺跡発掘調査報告書』1990年

(4) 龍河洞保存会『龍河洞』1959年

(5) 土佐山田町教育委員会『土佐山田町林田遺跡発掘調査報告書』1985年

(6) (1)に同じ

(7) 土佐山田町教育委員会『土佐山田町史』1979年

(8) 火山灰に腐植土が混ったもの

(9) 黄茶色の火山灰

なお黒ボク及び音地の分析の結果，火山ガラスの含有率においてかなり異なるが，その主な含有火山ガラスは鬼界ーアカホヤ火山灰と考えられる。(分析結果を参照されたい。)

(10) 岡本健児「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念・古古化論集』下1982年

(11) 都出比呂志「畿内第5様式における土器の変革」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　1982年

(12) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡Ⅲ・Ⅳ』1989年

(13) 野市町教育委員会『深渕遺跡発掘調査報告書』1989年

(14) (13)に同じ

(15) 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第1～9集　1980～1989年

(16) 野市町教育委員会『曽我遺跡発掘調査報告書』1989年

高橋啓明「高知県・曽我遺跡」考古学ジャーナル　No.312，1989年

(17) 香我美町教育委員会『十万遺跡発掘調査報告書』1988年

(18) 高知県教育委員会『土佐国衙跡発掘調査報告書』第9集　1989年

(19) 管原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所1983年

(20) (19)に同じ

(21) (16)に同じ

(22) 小川貴司「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26巻第1号　考古学研究1979年

(23) (16)に同じ

(24) (1)に同じ

(25) (1)に同じ

(26) 井之口章次「葬儀の民俗学－4」『月刊歴史教育』通巻27号　東京法令出版1981年

(27) 高知県教育委員会『五軒屋敷発掘調査報告書』1984年

(28) (13)に同じ

(29) 善通寺市文化財保護協会『彼ノ宗遺跡』1985年

第8表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 6 1	Ⅱ層	緑釉陶器 皿	—— (1.6) —— 11.0	貼付高台を有す。平底から内湾気味に立ちあがる。底部内面に凹線を施す。	底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。全面施釉，釉は黄緑色で緑色の斑点を認める。	1～3㎜の砂粒を含む。軟質。
2		土師器 椀	—— (3.5) —— 7.0	平底から内湾気味に立ちあがる。	体部は内・外面共に横ナデ調整を施す。底部は内・外面共ナデ調整を施す。底部内面に指頭圧痕を認める。	
3		〃 羽釜	25.8 (3.5) —— ——	口縁端部に平行して鍔を貼付ける。鍔は上方に僅かに反り上がる。口唇部は僅かに外傾して面をなす。	内・外面共横ナデ調整を施す。	
4	Ⅲ層	須恵器 蓋	11.8 (3.5) —— ——	内傾して直線的に立ちあがり稜をなして頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。内面はロクロ目顕著。	
5		〃 蓋	—— (2.8) —— ——	僅かに突出した頂部から内湾して下降する。	頂部は内・外面共不定方向のナデ調整，体部は内・外面共に横ナデ調整を施す。頂部と体部との境はヘラ削りを施す。	
6		〃 蓋	13.0 2.8 —— 7.1	内湾気味に立ちあがり頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。	頂部外面はヘラ削りのあと不定方向のナデ調整，口縁部は内・外面共丁寧な横ナデ調整を施す。	
7		須江器 杯	12.0 4.0 —— 7.9	外反気味に立ちあがり受端部は丸くおさめる。たちあがりは短く，内傾し端部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。	
8		〃 杯	12.2 (2.9) —— ——	直線的に立ちあがり受端部は丸くおさめる。たちあがりは直線的に内傾し端部は丸くあさめる。	内面は横ナデ調整を施すが外面は灰色の自然釉のため観察不可能。	
9		〃 杯	13.4 3.3 —— ——	内湾気味に立ちあがり受端部は丸くおさめる。たちあがりは外反気味に内傾し端部は丸くおさめる。	受部は摘んで横ナデ調整を施す。杯部外面下半はヘラ削りを施す。	
10		土師器 皿	9.4 1.8 —— 6.4	平底から僅かに段をもって直線的に立ちあがり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切り。	
11		〃 杯	—— (2.0) —— 7.0	ベタ高台気味の平底から斜上外方へ直線的に立ちあがる。	内面は横ナデ調整を施す。外面は磨耗が著しく観察不可能	
12		〃 杯	11.0 3.2 —— 6.2	平底から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面回転ヘラ切り。	
13		〃 杯	—— (2.2) —— 8.0	ベタ高台気味の底部から内湾気味に立ちあがる。	体部は内・外面共に横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	
14		〃 杯	—— (1.4) —— 3.0	平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。	体部は内・外面共ロクロ目顕著。底部外面は回転糸切り。	
15		〃 皿	11.3 1.2 —— 8.0	中央が僅かに凹む底部から外反気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切り。	
16		〃 皿	12.6 2.0 —— 6.4	内湾気味に立ちあがり段をなして口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は摘んで強い横ナデ調整を施す。体部は内・外面共に横ナデ調整を施す。	
17		〃 皿	14.6 2.6 —— 6.5	中央が僅かに凹む底部から内湾気味に立ちあがり段をなして口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は摘んで強い横ナデ調整を施す。体部内面は横ナデ調整を施す。底部は内・外面共不定方向のナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を認める。	
18		〃 皿	10.4 3.2 —— ——	僅かに丸底味気味の底部から内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	内面は不定方向の荒いハケ調整を施す。内・外面共に指頭圧痕が顕著。	内面は煤ける。

第９表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 6 19		土師器 皿	11.8 (2.9) —— ——	内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を認める。	
20		須恵器 高杯脚	—— (4.3) —— 12.2	脚部は「ハ」の字状に下降し端部近くで外反し，端部は面をなす。脚部に長方形の透しが穿たれる。	内・外面共に横ナデ調整を施す。脚部の透しはヘラ切り。	
21		弥生土器 鉢	—— (3.8) —— 3.0	僅かに突出気味の平底から内湾して立ちあがる。	内・外面共不定方向のナデ調整を施す。	
22		〃 甕	—— (2.9) —— 4.2	平底から直線的に斜上外方に立ちあがる。	胴部外面下半は縦方向のハケ調整を施す。底部内面に指頭圧痕を認める。	
23		〃 甕	—— (5.9) —— 3.0	平底から内湾気味に立ちあがる。	外面は叩き調整を施す。胴部内面は上半縦方向のハケ調整を施し，下半には指頭圧痕を認める。	
24	Ⅲ層	〃 甕	17.6 (5.3) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反し，口縁端部は下方に肥厚して口唇部は丸くおさめる。頸部内面に稜を有す。	口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。胴部外面は叩き調整を施す。口縁部外面に指頭圧痕を認める。	
25		〃 甕	13.8 (10.0) —— ——	内湾して立ちあがり屈曲して口縁部に至る。口縁部は外反して，口唇部は面をなす。	胴部外面は横方向及び右下りの叩き調整を施す。口縁部外面はナデ調整を施す。内面は右下りのハケ調整で指頭圧痕顕著。	外面は煤ける。
26		土師器 甕	25.6 (8.0) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反し，口唇部は外傾して面をなす。	口縁部外面上半は強い横方向のナデ調整を施し僅かに凹む。胴部内面横ナデ調整を施す。口縁部下半から胴部にかけて縦方向のハケ調整を施す。頭部及び胴部上半に指頭圧痕を認める。	
27		〃 甑	—— (16.2) —— 10.2	単孔の甑である。外反気味に立ちあがりその後内湾気味になり貼付把手に至る。把手は欠損。	外面は剥離が著しいが一部丁寧な縦方向のヘラ磨きを残す。内面は不定方向のヘラ削りを施す。	
28		瓦	厚さ 2.3	平瓦	凹面は細い布目を有す。凸面は磨耗が著しく観察不可能。	軟質
29		瓦	厚さ 3.2	平瓦	凹面は細い布目を有す。凸面は縄目の叩きを施す。	硬質
30		弥生土器 器台	—— (5.0) —— 6.2	僅かに外反気味に垂直に立ちあがる。	内面絞り目を認める。摩耗が著しく観察不可能。	
31		近世陶滋器 下ろし皿	—— (2.8) —— 12.2	平底から斜上外方に段を有して直線的に立ちあがる。	底部内面にヘラ描きによる格子目を施す。体部上端内面に黄茶色の釉，外面に白色の釉を施す。	
32		土錘	全長(3.5) 全幅 1.9 重量 9.5ｇ	円筒形を呈す。		
33	表採	土錘	全長 3.2 全幅 1.0 重量 2.4ｇ	円筒形を呈す。		

第10表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 21 34	ＳＴ１ －Ｐ３	弥生土器 鉢	13.8 7.1 —— 4.2	平底から内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部外面は右下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。口縁部は摘んで調整を施す。	
35	ＳＴ１	〃 鉢	—— (3.5) —— 1.2	丸底気味の底部から内湾して立ちあがる。	内・外面共指頭圧痕が顕著。	
36		〃 鉢	—— (4.5) —— 3.0	平底から内湾して立ちあがる。	外面は縦方向のハケ調整を施す。	
37		〃 鉢	19.6 (7.5) —— ——	内湾気味に立ちあがり口縁部は薄くなり端部は外側に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	体部外面は指頭による強い横方向のナデ調整を施す。体部内面は縦方向のハケ調整を施す。体部に粘土接合帯を認める。	
38		〃 鉢	23.2 7.0 —— 6.4	平底から内湾して立ちあがり口縁端部は上方に僅かに肥厚し，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共ナデ調整を施す。口縁部は内・外面共指頭圧痕を認める。	
39		〃 壺	—— (7.9) —— 5.4	平底から内湾気味に立ちあがる。	内・外面共指頭によるナデ調整を施す。	
40		〃 甕	16.2 (5.0) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，端部は下方に僅かに肥厚し，口唇部は丸くおさめる。	胴部外面上端は横方向のハケ調整，他は叩きの後縦方向のハケ調整を施す。口縁部外面は横ナデ調整を施す。	外面全体が煤ける。床面より出土。
41		〃 甕	15.8 (6.2) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。胴部外面は左下りの叩き調整を施す。口縁部内面は荒いハケ原体による縦方向のハケ調整を施す。	
42		〃 甕	17.6 (4.0) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，端部は下方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。口縁部外面は叩き→横方向のハケ→縦方向のハケ調整の順で仕上げる。胴部外面は左下りの叩き調整。	
43		〃 甕	—— (5.6) —— 4.6	平底気味の底部から内湾して立ちあがる。	外面は縦方向のハケ調整を施す。内面は指頭圧痕顕著。	
44		〃 甕	—— (3.7) —— 3.4	平底から大きく開いて僅かに内湾して立ちあがる。	外面は縦方向のハケ調整を施す。内面は指頭圧痕を認める。	
45		〃 甕	15.4 (12.3) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反して口唇部は面をなす。	口縁部外面はナデ，内面は横方向のハケ調整を施す。胴部外面は横方向の叩き調整，中位から下はさらに縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は指頭による強い縦方向のナデ調整を施す。	
46		〃 甕	30.4 (12.0) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，口唇部は面をなす。	胴部外面は右下りのハケ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整の後，指頭による縦方向の強いナデ調整を施す。	外面は２次焼成で紅く発色し，口縁部外面は煤ける。
47		砥石	全長15.6 全幅 9.2 全厚 3.0 重量 745 g	片面は使用して滑かである。		
Fig 22 48	ＳＴ３	弥生土器 鉢	12.0 (3.8) —— ——	内湾して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	体部外面は左下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整の後横ナデ調整を施す。体部内面に指頭圧痕顕著。	
49		〃 鉢	10.5 5.2 —— 2.0	平底から内湾して立ちあがり，口唇部は面をなす。	体部外面は，不定方向のナデ調整，内面は横方向のハケ調整を施すが部分的に不定方向のナデ調整を施す。	
50		〃 鉢	6.2 2.6 —— ——	平底から内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面は，ナデ調整を施す。体部内面は，荒いハケ原体で不定方向のハケ調整を施す。	
51		〃 鉢	6.1 4.9 —— 3.2	突出気味の平底から内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめるぐ。	体部外面は横方向の叩き調整の後ナデ調整，内面は指頭によるナデ調整を施す。	

第11表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 22 52	ＳＴ３	弥生土器 鉢	11.5 7.2 —— 1.7	丸底気味の底部から僅かに内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面は左下りの叩き調整の後不定方向のナデ調整を施す。体部内面は中位より上は不定方向のハケ調整，下半は不定方向のナデ調整を施す。	床面より出土
53		〃 鉢	15.4 6.1 —— 3.3	丸底気味の底部から内湾して立ちあがる。口唇部は外傾して面をなす。	体部外面はナデ調整を施し，指頭圧痕を認める。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。	ベッド上
54		〃 鉢	14.0 5.7 —— 2.7	平底気味の底部から内湾気味に立ちあがり，口唇部は面をなす。	体部外面はナデ調整を施し，多数の指頭圧痕を認める。内面は不定方向のハケ調整，底部内面はナデ調整を施す。	〃
55		〃 鉢	—— (5.0) —— 2.1	平底から内湾して立ちあがる。	体部外面は全面ナデ調整を施す。体部内面上半は不定方向のハケ調整，下半はナデ調整を施す。	
56		〃 鉢	13.6 6.0 —— 2.5	平底気味の底部から内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部内面上端は右下りのハケ調整を施すが他は内・外面共に丁寧なナデ調整を施す。	
57		〃 鉢	17.0 7.3 —— ——	内湾して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	体部外面はナデ調整，内面上半は不定方向のハケ調整，下半はナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を認める。	ベッド上
58		〃 甕	—— (5.5) —— 3.1	平底から内湾して立ちあがる。	胴部外面は不定方向の叩き調整を施す。内面は不定方向のナデ調整を施し，指頭圧痕を認める。	
59		〃 甕	12.6 (7.2) —— ——	口唇部は「く」の字状に屈曲して外反し，口唇部は面をなす。頸部内面に稜をなす。	口縁部内面は不定方向のハケ調整，外面はナデ調整を施す。胴部外面は横方向の叩き調整，内面は荒いハケ原体で縦方向のハケ調整を施す。	胴部外面は２次焼成で紅く発色。
60		〃 甕	16.7 (8.4) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，口唇部は面をなす。頸部内面に稜をなす。	叩き出し口縁である。外面は右下りの叩き調整である。口縁部内面は横ナデ調整，胴部内面は指頭による強い縦方向のナデ調整を施す。	胴部外面は煤ける。
61		管玉	全長 1.7 全幅 0.8 全厚 0.2 全量 1.4ｇ 孔径 0.4	円筒形を呈す。		碧玉製で白黄色である。
62		鉄鏃	全長 5.3 全幅 1.8 全厚 0.2 重量 5.0ｇ			床面
63	ＳＴ３ 中央ピット	弥生土器 鉢	23.0 (4.9) —— ——	内湾して立ちあがり口縁端部は外側及び上に僅かに肥厚して，口唇部は僅かに凹んで面をなす。	体部外面はナデ調整を施し，指頭圧痕を認める。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。	
64	ＳＴ６	〃 鉢	14.4 (6.2) —— ——	内湾して立ちあがり口唇部は外傾して面をなす。	体部外面は左下りの叩き調整の後不定方向のナデ調整を施す。体部内面は右下りのハケ調整の後指頭による縦方向の強いナデ調整を施す。	
65		〃 鉢	17.3 6.1 —— 5.5	平底気味の底部から内湾して立ちあがり，口唇部は僅かに凹んで面をなす。	体部外面は横及び左下りの叩き調整の後ナデ調整を施す。口縁部内面は横方向のハケ調整を施すが他は横方向のナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を認める。	
66		〃 鉢	15.4 6.9 —— 3.2	突出した平底から内湾気味に立ちあがり，口縁端部は僅かに上方に肥厚して口唇部は外傾して僅かに凹んで面をなす。	体部外面は横方向及び右下りの叩き調整の後，不定方向のナデ調整を施す。底部内面は指頭による強いナデ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。	
67		〃 鉢	11.7 7.3 —— ——	丸底から内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面は左下りの叩き調整の後，不定方向のナデ調整を施す。内面は不定方向のハケ調整を施す。	
68		〃 鉢	21.2 12.3 —— 4.0	丸底気味の底部から外反気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	体部外面は不定方向の叩き調整の後ナデ調整を施す。口縁部内面は右下りのハケ調整の後ナデ調整を施す。	

第12表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 23 69	ＳＴ６	弥生土器 甕	16.6 (7.3) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。頸部内面に稜を有す。	叩き出し口縁である。外面は横方向の叩き調整を施す。口縁部内面及び胴部上端内面は右下りのハケ調整を施す。他は指頭による縦方向の強いナデ調整を施す。	
70		〃 甕	16.0 (3.7) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，端部でさらに僅かに外反する。口唇部は面をなす。	内・外面共横方向のナデ調整を施す。口縁部外面に指頭圧痕顕著。頸部内面に粘土接合帯顕著。	
71		〃 甕	17.8 (11.5) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。頸部内面に稜を有す。	叩き出し口縁である。外面は左下りの叩き調整を施す。内面は右下りのハケ調整の後，胴部は指頭による縦方向の強いナデ調整を施す。	
72		〃 壺	—— (21.5) 24.4 ——	内湾して立ちあがり，口縁部は屈曲して大きく立ちあがる。胴部中位に最大径を有す。	口縁部外面は縦方向のハケ調整，内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外面は左下りの叩き調整を施す。	
73		〃 支脚	全長 7.2 全幅2.5～3.2 重量 70ｇ	手捏ねである。三又型と考えられる。	指頭圧痕が顕著。	74と同一のものと考えられる。
74		〃 支脚	全長 7.9 全幅2.4～2.8 重量 50ｇ	手捏ねである。屈曲して立ちあがる。三又型と考えられる。	〃	73と同一のものと考えられる。
75		砥石	全長25.5 全幅11.7 全厚 5.0 重量2,900ｇ	断面長方形を呈す。四面共表面は滑かで，使用のために凹む。		
Fig 24 76	ＳＴ８	弥生土器 鉢	8.9 9.4 9.1 2.6	平底から内湾して立ちあがり口縁部は外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外面は縦方向，内面は右下りのハケ調整を施す。体部外面は右下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。体部内面は上半右下りのハケ調整，下半は指頭による不定方向のナデ調整を施す。	
77		〃 鉢	—— (6.0) —— 2.6	突出気味の平底から内湾して立ちあがる。	体部外面は左下りの叩き，内面は縦方向のハケ調整を施す。	
78		〃 鉢	8.9 9.1 —— 1.4	僅かに残る平底から内湾して立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面上半は右下りのハケ調整，下半は荒いハケ原体によるハケ調整を施す。体部内面上半は横及び右下りのハケ調整の後下半にかけて指頭による縦方向のナデ調整を施す。	
79		〃 鉢	12.5 7.2 —— 2.5	突出気味の平底から内湾気味に立ちあがり，口縁端部は僅かに外側に肥厚して口唇部は丸くおさめる。	体部外面は縦方向のハケ調整を施す。口縁部外面は横方向のナデ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部内面にしぼり目顕著。	
80		〃 鉢	13.8 8.4 —— 3.4	平底から内湾して立ちあがる。口唇部は面をなす。	体部は内・外面共ナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕顕著。	
81		〃 鉢	7.4 4.1 —— 1.9	僅かに突出気味の底部から内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面はナデ調整，内面は不定方向のハケ調整を施す。体部外面に指頭圧痕顕著。	
82		〃 鉢	8.9 4.1 —— ——	丸底から内湾して立ちあがり，口唇部は面をなす。	体部外面はナデ調整，内面は横方向のハケ調整を施す。底部内面はナデ調整を施す。	
83		〃 鉢	7.8 5.9 —— 1.0	僅かに残る平底から内湾して立ちあがり，口唇部は外傾して面をなす。	体部外面は右下りの簡単なヘラ磨き，内面は指頭によるナデ調整を施す。	
84		〃 鉢	11.9 4.9 —— 3.1	平底気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり，口唇部は内傾して面をなす。	体部外面は縦方向のハケ→ナデ→ヘラ磨きの順で仕上げる。体部内面は不定方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。	
85		〃 鉢	11.2 5.1 —— 2.0	平底から内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面はナデ調整，内面は右下りのハケ調整を施す。	

第13表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 24 86	ＳＴ８	弥生土器 鉢	12.0 6.7 —— 3.4	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり，口縁部は僅かに内湾して口唇部は内傾して面をなす。	体部外面は叩き調整の後丁寧なナデ調整を施し，部分的にハケ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部内面はナデ調整を施す。	底部内面に粗圧痕を認める。
87		〃 鉢	11.6 6.2 —— 2.6	平底から内湾して立ちあがり，口唇部は面をなす。	体部内面は左下りの叩きの後ナデ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。	
88		〃 鉢	12.6 5.5 —— 1.2	丸底気味の底部から内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面はナデ調整，内面は不定方向のハケ調整を施す。	
89		〃 鉢	12.8 6.8 —— 3.4	平底から内湾気味に立ちあがり口唇部は面をなす。	体部は内・外面共横方向のナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を認める。	
90		〃 鉢	16.4 7.0 —— 5.4	突出気味の底部から内湾して立ちあがり口縁端部は外側に僅かに肥厚して，口唇部は面をなす。	体部外面は左下りの叩き調整の後，口縁端部外面は縦方向のハケ調整の後丁寧なナデ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。底部外面は指頭による強い押圧を施し，７つの突起状を形成する。	
91		〃 鉢	16.6 7.5 —— ——	丸底から内湾して立ちあがり口唇部は面をなす。	全体ナデ調整を施す。	
92		〃 鉢	18.0 7.6 —— 2.7	突出気味の平底から内湾して立ちあがり，口唇部は面をなす。	体部外面は右下りの叩き調整，内面は右下りのハケ調整を施す。	
93		〃 鉢	17.4 8.4 —— 1.9	僅かに突出気味の平底から内湾気味に立ちあがり，口唇部は面をなす。	体部外面は右下りの叩き調整，内面は右下りのハケ調整を施す。	
94		〃 鉢	22.8 10.1 —— 3.0	僅かに残る平底から内湾して立ちあがり，口縁端部は僅かに肥厚して口唇部は外傾して面をなす。	体部外面不定方向のハケ調整の後上端は横方向，それ以外は不定方向のヘラ磨きを施す。体部内面は右下りのハケ調整の後不定方向のヘラ磨きを施す。	
Fig 25 95		〃 高杯	13.6 (9.9) —— ——	杯部は内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。脚部は「ハ」の字状に大きく開がり，４孔を穿つ。	杯部の内・外面共，及び脚部の外面は丁寧なヘラ磨きを施す。脚部内面は横方向のハケ調整を施す。	
96		〃 高杯	12.7 11.5 —— 11.7	杯部は内湾気味に立ちあがり，口唇部は面をなす。脚部は「ハ」の字状に開き端部は面をなす。	全外面及び脚部内面は不定方向のハケ調整，杯部内面は右下りのハケ調整の後横ナデ調整を施す。	
97		〃 高杯	—— (5.5) —— 23.0	脚部は「ハ」の字状に大きく開き端部は面をなす。脚部に７孔を穿つと思われる。	外面不定方向のハケ調整を施す。内面は荒いハケ原体で右下りのハケ調整を施す。	
98		〃 蓋	—— (7.8) —— 18.1	「ハ」の字状に開がり，端部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整の後上半は縦方向のヘラ磨き，下半は横方向のヘラ磨きを施す。頂部は未調整。	
99		〃 甑	11.1 13.8 —— 3.0	内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は外傾して面をなす。頸部内面に稜を有する。底部は焼成後１孔を穿つ。	口唇部及び口縁端部外面はナデ調整を施す。それ以外の外面は右下りのハケ調整を施す。口縁部から胴部上端内面にかけて荒いハケ原体による右下りのハケ調整の後指頭によるナデ調整を施す。	
100		〃 壺	3.3 11.3 7.0 2.0	最大径を胴部上端に有す。平底から斜上外方に直線的に立ちあがり，胴部上端で内側に屈曲して頸部に至る。頸部は垂直気味に立ちあがり，口縁部は内傾して口唇部は丸くおさめる。	外面は不定方向のハケ調整を施す。内・外面共指頭圧痕顕著。口縁部に粘土接合帯を認める。	
101		〃 壺	—— 9.1 —— 2.3	丸底気味の底部から立ちあがり，胴部は球状を呈す。	外面は叩き→不定方向のハケ→ナデの各調整で仕上げる。内面は上半ナデ調整，下半は右下りのハケ調整を施す。	

第14表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　　法	備　　考
Fig 25 102		弥生土器 甕	—— (11.2) —— 2.6	平底から内湾して立ちあがる。最大径を胴部上半に有す。	胴部外面上端は左下りの叩き，それより下，中位までは右下りの叩き調整，中位より下は縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は上半縦方向のハケ調整，下半ナデ調整を施す。	
103		〃 壺	13.5 (3.7) —— ——	口縁部は外反して端部を上・下に肥厚する。口唇部は面をなす。	口唇部は横方向のナデ調整を施す。他は摩耗が著しく観察不可能である。	
104		〃 壺	22.8 (4.4) —— ——	二重口縁である。口縁部は稜をもって屈曲し内湾気味に立ちあがり，口唇部は外傾して面をなす。	上口縁の外面は横方向のナデ，内面は横方向のハケ調整を施す。下口縁の外面は縦方向のハケ調整の後横ナデ調整を施す。	
105		〃 壺	—— (26.2) 27.1 8.2	平底から内湾して立ちあがる。胴部中位に最大径を有す。	胴部外面は左下り叩きの後，縦方向及び右下りのハケ調整を施す。胴部外面下端はヘラ磨きを施す。胴部内面は中位よりやや下まで不定方向のハケ調整を施すがそれより下はヘラ磨きを施こす。	胴部外面下端は煤ける。
106		〃 壺	—— (23.1) 28.3 6.2	平底から内湾して立ちあがる。胴部中位に最大径を有す。	胴部外面は横方向及び右下りの叩き調整の後，縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は荒いハケ原体による縦方向ハケ調整の後ナデ調整を施す。底部内面はナデ調整，外面はハケ調整を施す。胴部内面に指頭圧痕を認める。	
Fig 26 107	ＳＴ８	〃 壺	25.6 (11.6) —— ——	口縁部は胴部上端から大きく外反し，端部は下方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	口縁端部は摘んで横方向のナデ調整を施す。胴部外面は右下りの叩き調整の後丁寧に縦方向のハケ調整を施す。内面はナデ調整を施し，その後口縁部は不定方向のハケ調整を施す。	
108		〃 壺	24.2 (28.9) 27.1 ——	球状の胴部上端から口縁部はラッパ状に大きく外反し，口唇部は面をなす。胴部中位に最大径を有す。	胴部外面は縦方向及び右下りのハケ調整の後，不定方向のナデ調整を施す。さらに胴部外面上端に放射状の暗文を施す。頸部は内・外面共右下りのハケ調整を施す。口縁部内面はヘラ磨きを施す。胴部内面はハケ調整の後ナデ調整を施す。	
109		〃 壺	—— (29.7) 24.4 5.0	平底から内湾して立ちあがり，口縁部は大きく外反する。胴部中位に最大径を有す。	口縁部は内・外面共右下りのハケ調整を施す。胴部外面上半は左下り，中位は横方向，下半は左下りの叩き調整の後不定方向のハケ調整を施す。胴部内面は不定方向のハケ調整の後，指頭による強い縦方向のナデ調整を施す。	
110		〃 壺	20.6 31.6 28.6 8.2	平底気味の底部を有する。球形状の胴部から頸部は直立気味に立ちあがり，口縁部はラッパ状に外反して端部は上・下に肥厚する。口唇部は面をなす。胴部中位に最大径を有す。	口唇部及び口縁部外面はナデ，内面は横方向の丁寧なハケ調整を施す。頸部は内・外面共右下りのハケ調整を施す。胴部外面は，縦及び右下りのハケ調整を施す。胴部内面は荒いハケ原体によるハケ調整の後指頭によるナデ調整を施す。	
111		〃 壺	22.0 (31.1) 29.0 ——	球形の胴部から頸部は直立気味に立ちあがり，口縁部はラッパ状に外反する。口縁端部は上方に肥厚する。口唇部は面をなす。胴部中位に最大径を有す。	外面は頸部から胴部下端までは荒いハケ原体で縦方向のハケ調整を施す。胴部下端は細いハケ原体による不定方向のハケ調整を施す。胴部内面は荒いハケ原体による不定方向のハケ調整を施す。頸部内面は横方向のハケ調整の後ヘラ磨きを施す。	
Fig 27 112		〃 壺	17.2 31.6 26.0 5.4	平底から内湾して立ちあがり，口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は上・下に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。胴部中位に最大径を有す。	胴部外面は叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整の後指頭による縦方向のナデ調整を施す。口縁部外面は縦方向のハケ調整の後横方向のナデ調整，内面は右下りのハケ調整を施す。	

第15表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 27 113	ＳＴ８	弥生土器 壺	18.0 35.4 28.8 6.0	平底から内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，口縁端部は上・下に肥厚して，口唇部は面をなす。最大径を胴部中位に有す。	口縁部外面は縦方向のハケ調整の後横方向のナデ調整を施す。口縁部内面は右下りのハケ調整の後端部は横方向のナデ調整を施す。胴部外面上端は左下り，中位は横方向，下半は左下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は不定方向のハケ調整と不定方向のナデ調整を交互に施す。	
114		〃 壺	17.2 32.3 26.5 5.1	平底から内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，口縁端部は上・下に肥厚して，口唇部は面をなす。最大径を胴部中位に有す。	口縁部外面は縦方向のハケ調整の後横方向のナデ調整を施す。口縁部内面は右下りのハケ調整の後端部は横方向のナデ調整を施す。口唇部は横方向のハケ調整を施す。胴部外面上半は右下り，下半は左下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は不定方向のハケ調整と不定方向のナデ調整を交互に施す。	
115		〃 甕	15.0 26.6 22.8 4.1	平底から内湾して立ちあがり，口縁部は強く屈曲して外反する。口縁端部は僅かに上・下に肥厚する。口唇部は僅かに凹んで面をなす。最大径を中位より上に有す。	口縁部は内・外面共強い横方向のナデ調整を施す。下胴部外面は縦及び左下りの丁寧なヘラ磨き，それより上は縦方向のハケ調整を施すが，一部に下地の叩き調整を認める。下胴部内面は縦方向のヘラ削り，中位は右下り及び横方向のヘラ削り，上位は指頭によるナデ調整を施す。	搬入土器。 胴部外面全体が煤ける。
Fig 28 116		〃 甕	10.9 15.2 10.8 3.2	平底から内湾して立ちあがり口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。	叩き出し口縁である。口縁部内面は右下りのハケ調整を施す。外面は胴部上半は左下り，下半は右下りの叩き調整の後，下半は縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は縦方向の指頭によるナデ調整を施す。	胴部外面は２次焼成を受けて紅く発色すると共に煤ける。
117		〃 甕	12.2 17.1 12.8 3.0	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は外方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	口唇部は左下り，口縁部外面は縦方向のハケ調整を施す。口縁部内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外面は横方向の叩き調整の後縦方向のハケ調整，内面は縦方向のナデ調整を施す。	胴部外面は２次焼成を受けて紅く発色する。口縁部外面は煤ける。
118		〃 甕	12.0 17.7 12.8 3.4	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は外方に僅かに肥厚して，口唇部は面をなす。	口縁部外面は縦方向のハ調整，内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外面上半は左下り，下半右下りの叩き調整の後下半は荒いナデ調整を施す。胴部内面は縦方向のハケ調整の後指頭によるナデ調整を施す。	胴部外面は２次焼成を受けて紅く発色すると共に煤ける。
119		〃 甕	11.0 17.3 12.3 2.5	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は外方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。口縁部内・外面共縦方向のハケ調整を施す。胴部外面上半は左下り，下半は右下りの叩き調整の後下半は縦方向のナデ調整を荒く施す。胴部上端内面は右下りのハケ調整の後縦方向のナデ調整を全面に施す。	胴部外面は２次焼成を受けて紅く発色する。
120		〃 甕	12.2 19.6 14.4 3.5	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は凹んで面をなす。	叩き出し口縁である。口縁部外面は縦方向のハケ調整，内面はナデ調整を施す。胴部外面上半は左下り，中位は右下り，下半は左下りの叩き調整を施す。胴部内面は指頭による縦方向のナデ調整を施す。	
121		〃 甕	13.4 20.8 15.1 3.5	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は外方に僅かに肥厚して口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。口唇部は不定方向のハケ調整，口縁部外面は縦方向のハケ調整，内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外面は左下りの叩き調整の後中位は部分的に縦方向のハケ調整を施す。下半は部分的にナデ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整を施す。	外面全体煤ける。

第16表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 28 122	ＳＴ８	弥生土器 甕	13.3 18.9 15.4 3.2	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は外方に肥厚して，口唇部は面をなす。	口縁部外面はナデ，外面は不定方向のハケ調整を施す。胴部外面上半左下り，下半横方向及び右下りの叩き調整の後下半は縦方向のナデ調整を施す。胴部内面上半は右下り，下半はナデ調整を施す。	胴部外面は２次焼成を受けて紅く発色する。
123		〃 甕	17.9 25.7 20.1 2.6	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は上方に僅かに肥厚して，口唇部は外傾して面をなす。	叩き出し口縁である。口縁部外面はナデ調整，内面は荒いハケ原体による横方向及び右下りのハケ調整を施す。胴部外面は右下りの叩き調整を施し，下位は荒いハケ原体による縦方向のハケ調整を施す。内面は荒いハケ原体による横方向及び右下りのハケ調整を施す。	
124		〃 甕	13.4 21.0 14.8 3.6	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。口縁部内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外面上半は左下り，中位は横方向，下半は右下りの叩き調整を施し，下半はさらに縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は上端部は右下りのハケ調整，他は指頭による不定方向のナデ調整を施す。	
Fig 29 125		〃 甕	13.7 27.3 17.8 4.7	平底から内湾して立ちあがり口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は僅かに外方に肥厚して口唇部は面をなす。	口縁部外面は縦方向のハケ調整を施し，内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外面は左下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面上端は縦方向のハケ調整を施し，以下は指頭による縦方向のナデ調整を施す。	
126		〃 甕	14.6 29.0 20.1 4.0	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部は内・外面共ハケ調整を施す。胴部外面は左下りの叩き調整の後中位は不定方向のハケ調整を施し，内面は不定方向のハケ調整を施す。	胴部外面は煤ける。
127		〃 甕	11.2 28.1 17.8 4.0	平底から内湾して立ちあがり口縁部は屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外面は縦方向のハケ調整を施し，内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外面は上半左下り，下半右下り及び横方向の叩き調整の後，縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は指頭による縦方向のナデ調整を施す。	〃
128		〃 甕	15.4 28.3 17.9 3.4	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部は内・外面共右下りのハケ調整を施す。胴部外面は中位よりやや下は横方向，他左下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は縦方向のナデ調整を施す。	〃
129		〃 甕	17.9 25.7 20.1 2.6	平底から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は上方に僅かに肥厚して，口唇部は外傾して面をなす。	叩き出し口縁である。口縁部外面は叩きの後でナデ調整する。内面は荒いハケ原体による横方向及び右下りのハケ調整を施す。胴部外面は右下りの叩き調整の後下位は荒いハケ原体による縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は荒いハケ原体による横方向及び右下りのハケ調整の後指頭による縦方向のナデ調整を施す。	
Fig 30 130		〃 甕	18.2 (20.5) 22.0 ――	内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する口唇部は面をなす。	叩き出し口縁である。口縁部外面は叩きの後で縦方向のハケ調整を施す。内面は横方向及び右下りのハケ調整を施す。胴部外面は左下りの叩き調整の後上端及び下位は縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は右下りの指頭によるナデ調整を施す。	外面は全体が煤ける。
131		〃 甕	13.4 22.9 15.7 2.9	僅かに残る平底から内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部は内・外面共右下りのハケ調整を施す。胴部外面は叩き調整を施すが他は剝離して観察は不可能である。胴部内面は右下りのハケ調整の後ナデ調整を施す。	

第17表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 30 132		弥生土器 甕	17.2 (21.5) 23.6 ――	内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外面は縦方向，内面は横及び右下りのハケ調整を施す。胴部外面は上半左下り，中位右下り及び横方向，下半は横方向及び左下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整を施す。	外面全体が煤ける。
133		〃 甕	13.8 34.1 26.4 2.3	僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがり口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は外方に僅かに肥厚して，口唇部は面をなす。	口縁部外面は縦方向のハケ調整の後横方向のナデ調整を施す。内面は右下りのハケ調整を施す。胴部外面は叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は荒いハケ原体で不定方向のハケ調整を施す。	
134		〃 甕	―― (24.3) ―― 6.2	平底気味の底部から内湾して立ちあがる。	胴部外面は右下りの叩き調整の後下半は縦方向のハケ調整を施す。胴部内面はハケ調整の後軽いナデ調整を施す。	
135		〃 甕	―― (17.0) ―― 4.5	平底から内湾して立ちあがる。	胴部外面は叩き調整の後中位よりやや下まで縦方向のハケ調整を施す。胴部内面はナデ調整を施す。	胴部外面は煤ける。
Fig 31 136		〃 甕	12.0 (9.8) ―― ――	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は外方に僅かに肥厚して，口唇部は面をなす。	口縁部は内・外面共ナデ調整を施す。胴部外面は左下りの叩き調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整の後，縦方向のナデ調整を施す。	〃
137	ＳＴ８	〃 甕	―― (11.5) ―― 2.7	平底から内湾して立ちあがる。	胴部外面は右下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は中位まで右下りのハケ調整，下半は指頭による縦方向の強いナデ調整を施す。	
138		〃 甕	―― (11.5) ―― 3.0	〃	胴部外面は上半右下り，下半左下りの叩き調整の後不定方向のハケ調整を施す。胴部内面は指頭による強いナデ調整を施す。底部外面はハケ調整を施す。	胴部外面は２次焼成を受けて紅く発色する。
139		〃 甕	―― (12.6) ―― 3.6	〃	胴部外面中位は横方向，下半は左下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面は指頭による縦方向のナデ調整を施す。	
140		〃 甕	―― 18.4 16.0 3.7	〃	胴部外面は上半左下り，下半は横方向の叩き調整を施す。胴部内面は指頭による縦方向のナデ調整を施す。	
141		〃 甕	―― 14.7 17.0 3.7	〃	胴部外面は左下りの叩き調整，内面は縦方向のナデ調整を施す。	胴部外面は２次焼成を受けて紅く発色する。
142		〃 甕	―― (19.3) 18.0 3.6	〃	胴部外面は横方向の叩き調整を施した後部分的に縦方向のナデ調整を施す。胴部内面は縦方向のナデ調整を施す。	
143		〃 甕	―― (14.8) ―― 3.5	〃	胴部外面は叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。胴部内面はナデ調整を施す。底部外面はハケ調整を施す。	胴部外面は煤ける。

第18表　計　測　表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量 全長 cm 全幅 cm 全厚 cm 重量 g	備　考
Fig 31 144	ＳＴ８	土錘	3.5 1.2 0.4 37	円筒形を呈す。
145		鉄製 鎌	6.3 1.8 0.3 8.4	
146		叩石	10.0 9.3 3.6 515	砂岩製である。

挿図番号	遺構番号	器　種	法量 全長 cm 全幅 cm 全厚 cm 重量 g	備　考
Fig 31 147	ＳＴ８	砥石	13.3 2.4 2.5 119	２面使用する。粘板岩製である。
148		砥石	32.1 16.9 5.6 5,000	１面使用する。砂岩製である。

第19表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 32 149	ＳＴ９	弥生土器 壺	—— (4.1) —— 4.8	平底から外反して立ちあがる。	外面は縦方向のハケ調整を施す。内面は指頭圧痕を認めるが他は磨耗が著しく観察が不可能である。	
150	ＳＴ９ －Ｐ１	〃 甕	—— (5.7) —— 3.8	平底から斜上外方へ直線的に立ちあがる。	外面は不定方向の叩き調整の後，縦方向のハケ調整を施す。内面は指頭による縦方向の強いなで調整を施す。	
151	ＳＴ９	〃 甕	—— (12.5) —— 7.3	平底から段をなして内湾気味に立ちあがる。	胴部外面右下りの荒い叩き調整の後，下端はナデ調整を施す。胴部内面は指頭による強い縦方向のナデ調整を施す。	
152		〃 甕	16.0 (13.2) 18.6 ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	口縁部外面は縦方向のハケ調整，内面は不定方向のハケ調整を施す。胴部外面は右下りの叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。内面右下りのハケ調整を施す。	胴部外面は煤ける。
153		〃 鉢	20.7 (9.4) —— ——	内湾して立ちあがり，口唇部は面をなす。	体部外面はナデ調整を施し，指頭圧痕顕著。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。	
154		〃 高杯	—— (3.7) —— ——	杯部は内湾して立ちあがる。脚部は「ハ」の字状に大きく開く。	杯部外面は右下りのハケ調整の後ヘラ磨きを施す。杯部内面は指頭圧痕を認める。脚部外面は縦方向のヘラ磨きを施す。	
155	ＳＴ９ －Ｐ１	鉄器 鉈	全長 7.0 全幅 1.0 全厚 0.3 重量14.0 g			
156	ＳＫ３	弥生土器 鉢	10.3 7.6 —— 1.6	平底から僅かに内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面はナデ調整を施す。体部内面は縦方向のナデ調整を施す。口縁部は摘んで押圧して調整する。	
157	ＳＫ33	〃 鉢	25.0 11.7 —— ——	僅かに残る平底気味の底部から内湾して立ちあがり口縁部に至る。口唇部は面をなす。	体部外面は叩きの後ナデ調整を施す。体部内面は縦方向のハケ調整の後軽い横方向のナデ調整を施す。	
158	ＳＤ12	〃 壺	19.0 (2.9) —— ——	口縁部は外反して立ちあがり，稜をもって屈曲し内湾気味に立ちあがる。口唇部は外傾して面をなす。	口縁部外面は下半縦方向のハケ調整，上半は横方向のナデ調整を施す。内面は横ナデ調整を施す。	
159		〃 甕	13.8 (4.5) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	胴部上端外面は右下りのハケ調整，内面ナデ調整を施す。口縁部外面はナデ調整，内面は右下りのハケ調整を施す。	
160		〃 甕	—— (1.9) —— 3.8	平底から外反して立ちあがる。	内・外面共摩耗が著しく観察不可能である。	
161	Ｐ213	〃 鉢	10.0 5.0 —— 1.8	丸底から内湾して立ちあがり，口唇部は僅かに凹んで面をなす。	口縁端部は摘んでナデ調整を施す。体部外面は左下りの叩き調整，内面はナデ調整を施す。	
162	Ｐ832	〃 甕	15.8 (8.2) —— ——	口縁部は胴部上端から大きく外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部下半及び胴部外面は縦方向のハケ調整を施す。口縁部下端内面は横方向，胴部内面は不定方向のハケ調整を施す。	
163	Ｐ1021	〃 甕	—— (5.3) —— 4.6	平底から内湾気味に立ちあがる。	胴部外面は縦方向のハケ調整，内面は指頭圧痕顕著。	外面全体が２次焼成を受け紅く発色する。
164	Ｐ1166	〃 甕	14.2 (8.0) —— ——	口縁部は胴部上端部から斜上外方に外反し，端部は下方に僅かに肥厚する。口唇部は外傾して面をなす。	外面は右下りのハケ調整を施す。頸部外面は指頭による横方向のナデ調整を施す。口縁部内面は不定方向のハケ調整，胴部内面は荒いハケ原体で縦方向のハケ調整の後，頸部内面を中心に指頭による左下りのナデ調整を施す。	
165	Ｐ1500	〃 鉢	7.6 6.3 —— 0.7	突出気味の僅かに残る底部から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は横ナデ調整，体部外面は縦方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。全体に指頭痕を認める。	

第20表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 39 179	ＳＴ２	土師器 高杯	12.7 10.0 —— 11.8	杯部は内湾気味に立ちあがり口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。脚部は「ハ」の字状に開がり，端部は丸くおさめる。	内・外面共磨耗が著しく観察は不可能であるが，脚の内・外面共に指頭圧痕を認める。	内・外面共に２次焼成で紅く発色する。
180		〃 高杯	14.0 —— —— ——	杯部は内湾気味に立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面は不定方向のナデ調整を施す。体部内面は縦方向のヘラ削りの後ナデ調整を施す。口縁部内面は横ナデ調整を施す。	
181		〃 甕	16.2 (6.5) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反して端部は僅かに下方に脂厚する。頸部内面に稜を有する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は内・外面共横ナデ調整を施す。胴部外面は縦方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。胴部内面は不定方向のヘラ削りを施す。	
182		須恵器 蓋	—— (3.4) —— 14.2	僅かに内湾して立ちあがり段をなして頂部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。	
183	ＳＴ４	〃 甕	14.8 22.8 —— ——	丸底気味の底部から内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部は下方に僅かに肥厚して，口唇部は外傾して面をなす。頸部内面に稜をもつ。	叩き出し口縁である。胴部外面上半は右下り，中位は横方向の叩き調整の後ナデ調整を施す。胴部内面は左下りのナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕顕著。	
184		土師器 鉢	12.6 6.6 —— ——	丸底から内湾して立ちあがり，口縁部は屈曲して外反する。口唇部は面をなす。	体部外面はナデ調整，内面は不定方向のハケ調整を施す。口縁部外面は縦方向のハケ調整の後横ナデ調整，内面はハケ調整の後ナデ調整を施す。	
185		〃 鉢	—— (2.8) —— 3.0	突出気味の平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。	外面叩き調整。内面不定方向のハケ調整を施す。	
186		〃 甕	15.6 (14.5) —— ——	内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は内・外面共横ナデ調整を施す。胴部外面は横及び右下りの叩き調整の後不定方向のナデ調整を施す。胴部内面縦方向の強いナデ調整を施す。内・外面共に指頭圧痕顕著。	
187	ＳＴ５	〃 鉢	9.2 4.2 —— 4.4	平底から斜上外方に僅かに外反して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	外面叩きの後横ナデ調整を施す。内面不定方向のナデ調整を施す。	
188		〃 鉢	—— (5.5) —— 2.4	平底から内湾して立ちあがる。	体部は内・外面共ナデ調整の後部分的にハケ調整を施す。底部内面は放射状にハケ調整を施す。	
189		〃 鉢	11.4 6.0 —— 3.6	平底から内湾して立ちあがり，口唇部は外傾して面をなす。	体部外面は横方向の叩き調整の後ナデ調整を施す。体部内面は不定方向のハケ調整の後下半は指頭によるナデ調整を施す。	
190		〃 鉢	17.2 7.2 —— ——	丸底気味の底部から内湾して立ちあがり一端肥厚して口縁部に至る。口唇部は外傾して面をなす。	体部外面はナデ調整を施す。口縁部及び体部内面は右下りのハケ調整，底部内面は不定方向のハケ調整を施す。	体部外面に籾圧痕を認める。内面は有機物が付着する。
191		〃 坩	11.4 (9.0) —— ——	内湾して立ちあがり屈曲して口縁部に至る。口縁部は斜上外方に直線的に長く立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	内・外面共摩耗が著しく観察不可能。胴部上端内面に指頭圧痕を認める。	
192		〃 甕	13.0 (19.6) —— ——	口縁部は「く」の字状に外反して，口唇部は僅かに凹んで面をなす。頸部内面に稜を有す。	口縁部は内・外面共右下りのハケ調整を施す。胴部外面は左下りの叩き調整，下位はその後縦方向のハケ調整を部分的に施す。胴部上端内面は右下りのハケ調整を施し，それより下は縦方向の指頭による強いナデ調整を施す。	胴部外面は２次焼成で紅く発色。外面全体が煤ける。
193	ＳＴ７	打製 石庖丁	全長 9.1 全幅 6.0 全厚 0.7 重量　45ｇ	片刃を有する。	刃の部分は磨く。両端部を打ち欠く。	混入品
Fig 40 194		須恵器 蓋	—— 2.5 —— 14.6	平坦な頂部から僅かに稜をもって下降し口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。頂部外面はヘラ削りを施す。	

第21表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 40 195	ＳＴ７	須恵器 杯	12.0 (2.6) —— ——	内湾気味に立ちあがり，受端部は丸くおさめる。立ちあがりは外反気味に短く内傾し，端部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。	
196		土師器 甕	19.3 (19.8) —— ——	内湾して立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は内・外面共横ナデ調整を施す。胴部内面は右下りのヘラ削りを施す。胴部外面は不定方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。胴部に粘土接合帯を認める。	胴部外面は２次焼成で紅く発色し，煤ける。
197		〃 甕	—— (6.0) —— 10.0	平底から内湾気味に立ちあがる。	外面は丁寧なナデ調整を施す。内面は不定方向のハケ調整の後ナデ調整を施す。	
198		〃 甕	34.6 (7.5) —— ——	内湾気味に立ちあがり，口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕を認める。	
199	ＳＴ10	須恵器 蓋	14.2 (3.4) —— ——	頂部から稜やかに下降して端部に至る。口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。	
200		〃 蓋	13.8 (3.3) —— ——	頂部から稜やかに下降し段をなして外方に開がる。口唇部は丸くおさめる。	〃	
201		〃 杯	11.9 (1.9) —— ——	立ちあがりは薄く内傾して端部は丸くおさめる。	内面は横ナデ調整を施す。	外面は自然釉がかかる。内面は赤紫色に発色する。
202		〃 杯	10.7 4.5 —— 4.0	丸底気味の底部から内湾気味に立ちあがり，受端部は丸くおさめる。立ちあがりは短く内傾して端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラ削りを施す。底部内面は指頭による強い放射状のナデ調整を施す。	
203		〃 杯	—— (2.5) —— 7.3	平底から内湾して立ちあがる。	内面はロクロ目顕著。底部外面は回転ヘラ切り。	
204		弥生土器 甑	—— (6.7) —— 3.0	平底から内湾して立ちあがる。底部に焼成前に穿った２孔を認める。	胴部外面は不定方向の叩き調整を施す。胴部内面は右下りのハケ調整を施す。	
205		土師器 甕	14.0 (10.5) —— ——	口縁部は屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。	胴部外面は横方向の丁寧なハケ調整を施す。胴部内面は強い横ナデ調整を施す。胴部外面に指頭圧痕を認める。	
206		〃 甕	15.6 (9.7) —— ——	内湾して立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は丸くおさめる。頸部内面に稜を有する。	胴部外面は縦方向のナデ調整，内面は下から上方向のヘラ削りを施す。口縁部は内・外面共横ナデ調整を施す。	
207		弥生土器 壺	29.8 (6.7) —— ——	口縁部は「く」の字状に屈曲して外反し，端部は肥厚して口唇部は面をなし刻目を施す。頸部に突帯を有し木口で刻目を施す。	口縁部は内・外面共ハケ調整を施す。胴部上端外面は縦方向のハケ調整を施す。	
208	ＳＫ14	須恵器 高杯	—— (2.4) —— 9.9	「ハ」の字状に開き端部は僅かに肥厚する。	内・外面共横ナデ調整を施す。	
209	ＳＤ４	棒状 叩石	全長(8.1) 全幅(5.7) 全厚 3.5 重量218ｇ	断面楕円形を呈す。端部に打撃痕を認める。		
210	Ｐ1803	須恵器 壺	—— (5.6) —— 10.2	外面中央が凹む底部から内湾気味に立ちあがる。	内・外面共丁寧な横ナデ調整を施す。底部外面ヘラ切り。	

第22表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 46 211		黒色土器 椀	14.5 5.7 —— 7.0	外方に踏張る貼付輪高台から内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は横ナデ調整。体部外面は横方向のヘラ磨き，口縁部内面から体部上半まで3条の横方向のヘラ磨き，他は単位がわからないほど丁寧なヘラ磨きを施す。底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を施す。	Aタイプ
212		〃 椀	14.0 5.6 —— 7.2	内湾気味の貼付輪高台から内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁端部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面は横方向のヘラ磨き，内面は単位がわからないほど丁寧にヘラ磨きを施す。口縁端部内面は1条のヘラ削りを巡らす。	〃
213		〃 椀	14.6 (4.9) —— (7.1)	輪高台欠損。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面は横方向のヘラ磨き，内面は単位がわからないほど丁寧にヘラ磨きを施す。口縁端部内面は1条のヘラ削りを巡らす。	〃
214		〃 椀	14.1 (5.1) —— (6.2)	輪高台欠損。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部斜上外方に直線的に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は横ナデ調整を施すが，他は単位がわからないほど丁寧にヘラ磨きを施す。体部外面ロクロ目顕著。底部外面回転ヘラ切り後丁寧にナデ調整を施す。	〃
215		〃 椀	14.2 5.7 —— 6.4	外方に踏張る短い貼付高台を有す。端部は丸くおさめる。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面下端にロクロ目顕著他は内・外面共に摩耗し観察不可能である。	〃
216	SEI I層 上	〃 椀	14.9 6.4 —— 7.0	外方に踏張る貼付輪高台を有す。端部は丸くおさめる。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は斜上外方に直線的に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	口縁部外面は横ナデ調整，体部外面は横方向のヘラ磨き，内面は単位がわからないほど丁寧にヘラ磨きを施す。	〃
217		〃 椀	13.9 (4.9) —— (7.3)	輪高台欠損。内湾して立ちあがり，口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	底部外面は回転ヘラ切り，他は磨耗が著しく観察不可能である。	Aタイプ 体部外面は煤け，2次焼成を受けて紅く発色。
218		〃 椀	14.7 6.1 —— 7.2	外方に踏張る貼付輪高台を有す端部は面をなす。内湾して立ちあがり，口縁部は直線的に外方に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部外面はロクロ目顕著，内面は単位がわからないほど丁寧なヘラ磨きを施す。底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を施す。	Aタイプ
219		〃 椀	14.8 (5.5) —— (7.1)	輪高台欠損。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	口縁端部内面は1条のヘラ削りを巡らす。体部外面はロクロ目顕著。内面丁寧なヘラ磨きの後放射状の暗文を施す。	〃
220		〃 椀	15.2 5.9 —— 7.2	外方に踏張る貼付輪高台を有す。端部は面をなす。内湾して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は横ナデ調整の後，底部内面まで単位がわからないほど丁寧にヘラ磨きを施し，縦方向の暗文を施す。体部内面は横方向のヘラ磨きを施す。底部外面回転ヘラ切りの後丁寧にナデ調整を施す。	〃
221		〃 椀	14.7 (5.5) —— (7.5)	輪高台欠損。内湾して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面から体部上端内面にかけて3条の横方向のヘラ磨きの後放射状に暗文を施す。底部外面回転ヘラ切り。	Aタイプ 外面全体が煤ける。
222		〃 椀	15.1 6.2 —— 7.2	外方に踏張る貼付輪高台を有す。端部は面をなす。内湾して立ちあがり，口縁部は直線的に斜上外方に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は2条の横方向のヘラ磨きを巡らす。体部内面は丁寧なヘラ磨きを施した後上半は波状，下半は放射状の暗文を施す。	Aタイプ
223		〃 椀	14.3 (5.3) —— (7.5)	輪高台欠損。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は3条の横方向のヘラ磨きを巡らす。体部内面は丁寧なヘラ磨きを施した後放射状の暗文を施す。体部外面は磨耗が著しく観察不可能である。	Aタイプ 体部外面は煤ける。
224		〃 椀	15.2 6.3 —— 6.8	外方に踏張る貼付輪高台を有す。端部は面をなす。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は直線的に斜上外方に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面は横ナデ調整の後横方向のヘラ磨き，体部内面は丁寧なヘラ磨きの後縦方向の暗文を配す。	Aタイプ
225		〃 椀	—— (4.1) —— 7.2	細い貼付輪高台から内湾して立ちあがる。	体部外面は横方向のヘラ磨きを施す。体部内面はヘラ磨きの後放射状の暗文を配す。	〃

第23表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 46 226		黒色土器 椀	15.1 6.9 —— 7.3	垂直気味の細い輪高台を有す。端部は面をなす。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は斜上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部と体部内面の境に横方向のヘラ削りが一条巡り，その後横方向のヘラ磨きを施す。体部はヘラ磨きの後放射状の暗文を施す。底部と体部との境に粘土接合痕を認める。	Aタイプ
227		〃 椀	15.2 6.3 —— 7.2	短い輪高台を有す。端部は面をなす。内湾して立ちあがり，口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部内面はナデ調整，体部上端は横方向のヘラ磨きを巡らす。丁寧なヘラ磨きの後放射状に暗文を施す。	〃
228		〃 椀	—— (4.5) —— (6.7)	輪高台欠損。内湾して立ちあがる。	体部外面は横方向のヘラ磨きを施す。体部内面は丁寧なヘラ磨きの後放射状の暗文を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	〃
229		〃 椀	17.3 (5.6) —— ——	輪高台欠損。内湾して立ちあがり，口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	口縁端部内面は横方向のヘラ磨きを施し，他は単位がわからないほど丁寧なヘラ磨きを施す。体部外面は横ナデ調整の後横方向のヘラ磨きを施す。	〃
230		〃 椀	17.0 (6.9) —— (7.1)	輪高台欠損。内湾して立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口縁端部内面は軽い沈線が巡る。	体部外面は横方向のヘラ磨き，体部上端内面は横方向のヘラ磨きが2条巡り，その後放射状及びラ線状の暗文を施す。	〃
231		〃 椀	14.4 5.5 —— 6.8	外方に張り出す貼付輪高台から内湾して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	体部外面は横方向のヘラ磨きを施す。内面は口縁部から体部中位まで3条の横方向のヘラ磨きを施し他は丁寧な磨きを施す。	〃
232	ＳＥ Ⅰ層 上	土師器 蓋	14.0 3.1 —— 5.6	環状の摘みを有す。平坦な頂部から屈曲して下降し端部に至る。端部は丸くおさめる。	内面はロクロ目顕著。外面は横ナデ調整を施す。環状の摘みに粘土接合痕を認める。	
233		〃 台付皿	—— (4.5) —— 8.6	平底の外周の内側に足高の「ハ」の字状に大きく開く脚を有する。端部は肥厚して丸くおさめる。	底部と体部との境は強い横ナデ調整で僅かに凹む。内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切り。	
234		〃 台付皿	—— (3.3) —— 5.8	平底の外周の内側に足高の「ハ」の字状に大きく開く脚を有する。端部は面をなす。体部は斜上外方に外反気味に立ちあがる。	内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	
235		〃 台付皿	9.2 3.6 —— 6.0	底部外周のやや内側に足高の「ハ」の字状に大きく開く脚を有する。端部は面をなす。皿部は平底から外反気味に立ちあがり口縁部は丸くおさめる。口縁部内面は軽い凹線を巡らす。	内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	ほぼ完形
236		〃 台付皿	—— (3.5) —— 5.6	底部外周のやや内側に足高の「ハ」の字状に大きく開く脚を有する。端部は面をなす。皿部は平底から外反気味に立ちあがる。	内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	
237		〃 脚付皿	14.7 (2.4) —— ——	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部と体部との境の3脚は欠損。	内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後荒いナデ調整を施す。	
Fig 47 238		〃 皿	9.4 1.4 —— 6.4	平底から外反して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著底部外面は回転ヘラ切り，及び板目痕を認める。	
239		〃 皿	9.3 1.9 —— 6.7	平底から外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	内・外面共に横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	ほぼ完形
240		〃 皿	9.9 1.4 —— 6.5	中央が僅かに凹む平底から外反して立ちあがる。口縁部は僅かに内湾して口唇部は丸くおさめる。	内・外面共ロクロ目顕著。底部外面は回転ヘラ切り。	〃
241		〃 皿	9.4 1.35 —— 5.9	平底から斜上外方に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	口縁部は摘んで横ナデ調整，他横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	完形
242		〃 皿	11.2 1.6 —— 10.0	平底から外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。	

第24表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 47 243		土師器 皿	9.6 1.4 —— 5.9	中央が僅かに凹む平底から内湾気味に立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	完形 内面半分が煤ける。
244		〃 皿	10.3 2.2 —— 7.6	平底気味の平底から外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面は回転ヘラ切り及び板目痕顕著。	
245		〃 杯	10.3 3.1 —— 6.6	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがる。口縁部内面に軽い沈線を巡らす。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。	
246		〃 杯	10.0 2.6 —— 6.8	平底から僅かに段をもって内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部内面はロクロ目顕著。底部外面は回転ヘラ切りの後荒いナデ調整を施す。	
247		〃 杯	10.1 3.4 —— 5.3	平底から僅かに段をもって僅かに外反して立ちあがり，口縁部は肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面は回転ヘラ切り。	完形
248		〃 杯	10.0 3.2 —— 6.9	平底から僅かに段をもって斜上外方に直線的に立ちあがり，体部中位が僅かに凹む。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面は回転ヘラ切りの後荒い不定方向のナデ調整を施す。又板目痕を認める。	
249		〃 杯	10.0 3.1 —— 6.7	中央部が突出気味の平底から僅に段をもって外反気味に立ちあがり，肥厚して口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。	体部外面はロクロ目顕著。内面は横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	完形
250	ＳＥ１ Ⅰ層 上	〃 杯	11.0 2.9 —— 7.7	平底から僅かに段をもって斜上外方に直線的に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面はヘラ切り。	
251		〃 杯	9.7 3.3 —— 5.9	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり，口縁部は斜上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面は回転ヘラ切り後荒いナデ調整を施す。	外面橙色に対して内面はにぶい黄褐色を呈し一部煤ける。
252		〃 杯	10.2 3.3 —— 7.0	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目を認める。底部外面は回転しヘラ切りの後荒いナデ調整を施し，スサ圧痕を認める。	全体内・外面共煤ける。
253		〃 杯	10.0 3.2 —— 6.6	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。口縁部内面に軽い沈線を巡らす。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	
254		〃 杯	10.0 3.5 —— 6.4	平底気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施し，板目痕を認める。	体部内・外面共に煤ける。
255		〃 杯	9.5 2.7 —— 6.4	平底から外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後荒いナデ調整を施し，板目痕を認める。	
256		〃 杯	9.3 2.9 —— 6.1	平底気味の底部から外反気味に立ちあがり，口縁部は肥厚して僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。	体部内・外面共煤ける。
257		〃 杯	10.2 3.2 —— 6.9	平底気味の底部から外反して斜上外方に直線的に立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	
258		〃 杯	10.1 3.2 —— 6.4	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり，口縁部内面に軽い凹線を巡らす。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。	
259		〃 杯	9.6 3.0 —— 6.4	平底気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面にロクロ目を認める。体部内面は横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	完形

第25表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 47 260	ＳＥ１	土師器 杯	9.7 3.1 —— 6.2	平底から僅かに外反気味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部外面及び底部内面はロクロ目顕著。体部内面は横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切り。底部外面中央に指頭圧痕を認める。	
261	Ⅰ層 上	〃 杯	10.5 3.4 —— 6.9	中央が突出気味の平底から外反気味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り後荒いナデ調整を施す。	
Fig 48 262		〃 杯	11.2 4.0 —— 6.8	平底から内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面ヘラ切り。	
263	ＳＥ１ Ⅰ層 上・中	〃 杯	10.0 3.0 —— 7.0	平底から外反気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後荒いナデ調整を施す。	
264	ＳＥ１ Ⅰ層 上・中・下	〃 杯	9.8 3.1 —— 6.3	平底気味の底部から斜上外方に直線的に立ちあがり，口縁部は屈曲して外反する。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後荒いナデ調整を施す。底部と体部の境の外面は部分的にヘラ磨きを施す。	
265	ＳＥ１ Ⅰ層 上・中	〃 杯	12.2 5.2 —— 6.4	平底から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施し，板目痕を認める。	
266	ＳＥ１ Ⅰ層 上	〃 杯	13.5 4.1 —— 7.4	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。口縁部内面に軽い沈線を巡らす。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	完形
267		〃 杯	11.4 4.6 —— 5.6	平底から僅かに段をもって内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を施す。	
268		〃 椀	12.3 4.7 —— 6.5	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部外面はロクロ目顕著。体部内面横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	
269		〃 椀	11.7 4.5 —— 6.7	ベタ高台から内湾して立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部内面はロクロ目顕著。底部外面回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	
270		〃 椀	13.7 4.7 —— 7.5	外面中央が僅かに凹むベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面ヘラ切の後ナデ調整を施す。	
271		〃 椀	11.7 4.6 —— 6.0	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに外反気味である。口唇部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
272		〃 椀	11.6 5.5 —— 6.6	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は斜上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
273		〃 椀	13.6 5.3 —— 6.6	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は斜上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。底部内面は僅かに凹む。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面回転糸切り。	
274		須恵器 椀	16.0 5.8 —— 7.4	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり体部下半から斜上外方に直線的に立ちあがる。口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。体部内・外面共に火襷を認める。	体部外面は煤ける。
275		〃 椀	15.1 6.3 —— 6.4	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。底部内面は凹む。	体部外面はロクロ目顕著。体部内面横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	焼成不良
276		〃 椀	15.2 5.9 —— 6.8	ベタ高台から内湾して立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面はロクロ目顕著。体部内面は磨耗が著しく観察不可能。底部外面は回転糸切り。	〃
277		〃 椀	15.6 5.7 —— 7.7	ベタ高台から内湾して立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目顕著。底部外面は回転糸切り。	

第26表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 48 278	ＳＥ１ Ⅰ層 上	須恵器 椀	15.6 5.8 —— 7.4	ベタ高台から内湾して立ちあがり，口縁部は内面に僅かに肥厚して外反する。口唇部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。体部外面中位下に粘土接合帯を認める。底部外面は回転糸切り。内・外面共に「＋」の字の火襷を認める。	
279		土師器 椀	15.4 5.4 —— 7.0	ベタ高台から斜上外方に直線的に立ちあがり，体部上半で内湾し口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外面共ロクロ目顕著，底部外面は回転糸切り。	
280	ＳＥ１ Ⅰ層 上・下	須恵器 椀	13.6 6.3 —— 6.7	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁端部は細る。口唇部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部外面はロクロ目を認める。体部外面不定方向のナデ調整を施す。体部内面横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
281	ＳＥ１ Ⅰ層 上・中	〃 椀	14.2 6.2 —— 6.8	ベタ高台から内湾して立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部内面は凹む。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
282		〃 椀	17.3 6.2 —— 7.2	ベタ高台から内湾して立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面は上端から口縁部にかけて横方向のヘラ磨きを施す。底部外面回転糸切り。内・外面共に火襷を認める。	体部外面は煤ける。
Fig 49 283	ＳＥ１ Ⅰ層 上	土師器 椀	—— (2.4) —— 4.6	外方に踏張る貼付輪高台から内湾して立ちあがる。	摩耗が著しく観察不可能	
284		〃 椀	13.8 5.1 —— 7.0	外方に踏張る貼付輪高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共ロクロ目顕著。底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を施す。	
285		〃 椀	13.9 6.1 —— 6.6	外方に踏張る細い貼付輪高台を有し，内湾して立ちあがり口縁端部内面に１条の軽い沈線を巡らす。	体部外面ロクロ目顕著。体部内面に型板痕を認める。	
286		須恵器 椀	16.4 6.8 —— 7.5	外方に踏張る貼付輪高台を有し，内湾気味に立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面はロクロ目顕著。内面は丁寧なナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を施す。内・外面に火襷を認める。	
287		〃 椀	17.9 8.6 —— 7.7	外方に踏張る貼付輪高台から内湾して立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。口縁部内面に一条の沈線を巡らす。	体部外面下半はロクロ目顕著で，他は丁寧な横ナデ調整を施す。体部内面はヘラ磨き，口縁部内面は横方向のヘラ磨きを施す。底部外面はロクロナデ調整を施す。内・外面共に火襷を認める。	
288		〃 片口鉢	24.0 12.4 —— 12.1	平底から内湾して立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口縁端部は外傾して，口唇部は面をなし軽い１条の沈線が巡る。口縁部に指頭による片口を設ける。	体部中位で粘土を接合し，指頭で押圧する。その後内・外面共横ナデ調整を施す。	
289	ＳＥ１ Ⅰ層 上・下	土師器 甕	32.0 (23.3) 23.5 ——	内湾して立ちあがり胴部中位から僅かに外反し，口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は上方に僅かに肥厚し，口唇部は面をなし僅かに凹む。胴部中位に最大径を有す。	口縁部は下半内・外面共横方向のハケ調整を施す。胴部外面上端は縦方向のハケ調整の後横方向のハケ調整を丁寧に施す。胴部外面は左下りの叩き調整。丸底気味の底部は不定方向の叩き調整を施す。胴部内面に指頭圧痕を認める。	外面は全体的に煤ける。
Fig 50 290	ＳＥ１ Ⅰ層 上	〃 甕	29.8 (20.5) 24.8 ——	内湾して立ちあがり胴部中位から直線状に立ちあがる。口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は上方に僅かに肥厚し，口唇部は面をなし僅かに凹む。	口縁部下半は内・外面共横方向のハケ調整。胴部上端は縦方向のハケ調整の後横方向のハケ調整を施し，以下は左下りの叩き調整，底部付近は不定方向の叩き調整を施す。胴部内面に指頭圧痕を認める。	
291		〃 甕 刻書土器	35.0 (25.6) 29.4 ——	内湾して立ちあがり胴部中位で真上に直線的に延び，口縁部は屈曲して外反する。口縁端部は上・下に僅かに肥厚して口唇部は面をなし僅かに凹む。	口縁部内面は横方向のハケ調整を施し，「大」と思われる刻書を施す。胴部中位より上は横方向のハケ調整，中位より下は丁寧なナデ調整を施す。胴部内面上端部より下はナデ調整を施す。胴部内・外面共に指頭圧痕を認める。	外面は全体的に煤ける。
292		〃 羽釜	19.8 (6.8) —— ——	大きく張り出す鍔を有す。内湾気味に立ちあがり口縁端部は内側に僅かに肥厚し，口唇部は面をなす。	鍔は摘んで強く横ナデを施す。鍔の接合部に指頭圧痕顕著。胴部上端から縦方向のハケ調整を施し，内面横ナデ調整を施す。	

第27表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 51 293		土師器 羽釜	24.0 (10.6) —— ——	断面台形の鍔を有する。鍔端部は僅かに凹む。鍔下端及び胴部下位に粘土接合帯を認める。胴部は外反気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	胴部上位は内・外面共横方向のハケ調整を施す。口縁部内面は横ナデ調整を施す。	胴部外面は煤ける。
294		〃 羽釜	25.2 (6.2) —— ——	鍔の端部は丸くおさめる。内湾して立ちあがり，口縁部は僅かに稜をもって内傾する。口唇部は丸くおさめる。	口縁端部及び鍔は摘んで強い横ナデ調整を施す。胴部上端は縦方向のハケ調整を施す。鍔の接合部に強い指頭圧痕を認める。	外面は2次焼成で紅く発色する。
295		〃 羽釜	27.6 (4.9) —— ——	断面長方形の鍔を有す。鍔の端部に粘土接合帯を認める。直線的に立ちあがり，口縁部は僅かに内湾する。口唇部は面をなす。	外面は縦方向のハケ調整を施す。鍔の接合部及び内面に指頭圧痕を認める。	外面は2次焼成で紅く発色する。内面は煮焦を認める。
296		〃 羽釜	28.8 (9.0) —— ——	口唇部より5.7cm下に断面三角形状の小さい鍔を有す。直線的に立ちあがり，口縁部は外反して口唇部は外傾して面をなす。	胴部上端部外面は横方向のハケ調整及びナデ調整を施す。胴部上端から上は横方向，下半は縦方向の指頭による強いナデ調整を施す。	内面は煮焦を認める。
297	ＳＥ１ Ⅰ層 上	〃 羽釜	21.0 (9.8) —— ——	断面三角形の鍔を口縁部に有す。端部は丸くおさめる。直線的に立ちあがり口縁部に至る。口縁部は僅かに内傾して，口唇部は丸くおさめる。	胴部外面横方向のハケ調整を施し，部分的に縦方向のハケ調整を施す。胴部上端から口縁部内面にかけて指頭圧痕顕著。	
298		〃 釜据	24.0 5.5 —— 20.2	直線的に立ちあがり，口縁部は「く」の字状に外反して端部は上方に僅かに肥厚する。口唇部は面をなす。	内面横方向のハケ調整を施す。他は剝離のため観察不可能。	全体が2次焼成を受け紅く発色する。
299		〃 移動式竈	—— (12.2) —— 45.6	平坦な端部から僅かに内湾気味に立ちあがる。	胴部外面は荒いハケ原体で縦方向のハケ調整の後，横方向のハケ調整を間隔をもって施す。胴部下端外面は指頭で強く下方にナデ，内面は荒いハケ原体で横方向のハケ調整を施し，その上を指頭による強いナデ調整を荒く施す。	内面は煤ける。全体に雑なつくりである。
Fig 52 300		〃 移動式竈	30.4 (8.5) —— ——	鍔は胴部に縦方向に延び胴部上端で屈曲して，中央で僅かに下方に緩やかなカーブを描いて延びる。鍔の着根に粘土接合を認める。	全体横方向の丁寧なナデ調整を施す。	鍔は煤ける。
301		〃 移動式竈	—— (10.4) 36.6 ——	胴部は直線的に立ちあがり，鍔直上から内湾する。胴部外面に断面三角形の鍔が巡る。鍔の上には耳状の把手が付く。	胴部外面は荒い縦方向のハケ調整の後横方向のハケ調整を施す。胴部内面は横方向のナデ調整を施す。	全体に雑なつくりである。302と胎土及び調整も同じであり同一個体と考えられる。
302		〃 移動式竈	—— (13.5) —— 32.6	斜上外方に直線的に立ちあがる。下端部は平坦な面をなす。胴部は内・外面共に粘土接合帯を認める。	胴部外面は荒い縦方向のハケ調整の後横方向のハケ調整を施す。胴部内面は横方向のナデ調整を施す。	全体に雑なつくりである。301と胎土及び調整も同じであり同一個体と考えられる。
Fig 50 303		〃 刻書土器	—— (7.4) —— ——	甕の上胴部片と思われる。三文字を認めるが中央は「木」と思われるが他は不明。	内・外面共横方向のハケ調整を施す。	
304		砥石	長径 31.6 短径 9.0 重量 5000 g	一面のみを使用，滑らかな面はやや凹む。		砂岩である。
Fig 49 305		石製紡錘車	全長 2.9 上底 2.1 下底 3.3 重量 50 g	断面は台形状を呈す。	下底面はよく磨く。	流紋岩である。
306		土錘	全長 4.1 全幅 2.8 孔径 0.8 重量 24 g	紡錘形を呈す。		
307		土錘	全長 5.9 全幅 4.3 孔径 1.1 重量 85 g	〃		
Fig 47 308	ＳＥ１ Ⅰ層 中	土師器 皿	10.2 1.9 —— 6.5	平底から外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	

第28表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 47 309	ＳＥ１ Ⅰ層 中	土師器 杯	10.0 3.3 —— 6.7	底部外面中央が僅かに突出する平底気味の底部から外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目を認める。底部外面は回転ヘラ切り。	
310		〃 杯	10.1 2.9 —— 6.1	平底から外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部上端及び底部内面にロクロ目を認める。体部内・外面共に横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り後荒いナデ調整を施す。	
311		〃 杯	10.2 3.2 —— 7.0	平底から僅かに段をもって外反して立ちあがり，口縁部は僅かに肥厚して口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り。	
312		〃 杯	10.2 2.8 —— 6.8	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共ロクロ目を認める。底部外面は回転ヘラ切り及び板目痕を認める。	
Fig 48 313		〃 杯	10.8 3.9 —— 5.8	ベタ高台気味の底部から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面ロクロ目顕著，内面は横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りの後荒いナデ調整を施し，板目痕を認める。	
314		〃 椀	14.6 5.6 —— 7.2	中央が僅かに凹むベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部内面が僅かに凹む。	体部下半外面にロクロ目顕著。体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
Fig 46 315	ＳＥ１ Ⅰ層 下	〃 椀	—— (3.9) —— 7.0	足高貼付輪高台を有す。高台は「ハ」の字状に踏張り，端部は僅かに肥厚して面をなす。底部から内湾して立ちあがる。	体部は内・外面共ロクロ目顕著。	
Fig 47 316		〃 皿	9.9 1.2 —— 7.1	平底から外反気味に立ちあがり，口縁部は僅かに内湾し，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共にロクロ目顕著。底部外面は回転ヘラ切り。	完形
317		〃 皿	10.0 1.8 —— 5.1	ベタ高台気味の底部から斜上外方に直線気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共にロクロ目顕著。底部外面は回転糸切り。	
318		〃 杯	9.5 2.7 —— 6.8	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがる。口縁部は内側に僅かに肥厚する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共にロクロ目顕著。底部外面は不定方向のナデ調整を施す。	
319		〃 杯	9.3 2.6 —— 6.9	平底気味の底部から外反気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共に横ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り後荒いナデ調整を施す。	体部は内・外面共に煤ける。
320		〃 杯	9.2 2.9 —— 6.0	平底から僅かに段をもって外反気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共ロクロ目顕著。底部外面回転はヘラ切りの後荒いナデ調整を施す。	
Fig 49 321		須恵器 椀	12.4 5.2 —— 5.4	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共にロクロ目を認める。底部外面は回転糸切り。	
322		〃 椀	15.6 4.9 —— 7.0	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに段をもって肥厚して外反する。口唇部は丸くおさめる。	底部及び体部内面ロクロ目顕著。体部外面は回転糸切り。内・外面共に「＋」字の火襷を認める。	
323		〃 椀	15.8 (4.5) —— ——	内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反して，口唇部は丸くおさめる。	体部外面はロクロ目顕著。体部内面はナデ調整を施す。	
324		土師器 椀	14.9 5.2 —— 6.2	中央が僅かに凹むベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。	体部外面はロクロ目顕著。底部外面は回転糸切り。	
325		〃 椀	—— (1.9) —— 6.4	ベタ高台から内湾気味に立ちあがる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
326		〃 椀	—— (2.8) —— 7.9	外方に踏張る断面箱形の輪高台を有す。底部から内湾して立ちあがる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。	底部内面に丹が残す。

第29表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 51 327	ＳＥ１ Ⅰ層 下	土師器 羽釜	19.8 (7.3) —— ——	大きく張りを出す鍔を有し，端部は僅かに凹み面をなす。内湾気味に立ちあがり，胴部上端から肥厚して口縁部に至る。口唇部は面をなす。	胴部内面は横ナデ調整，外面縦方向のハケ調整を施す。胴部内・外面共指頭圧痕を認める。	内・外面共煤け，外面は２次焼成で紅く発色する。
328		〃 甕	19.0 (5.8) —— ——	内傾して直線的に立ちあがり，口縁部は「く」の字状に屈曲して口縁端部は外方に肥厚する。口唇部は僅かに凹んで面をなす。	口縁部は内・外面共に横ナデ調整を施す。胴部内面不定方向のナデ調整を施す。胴部内・外面共指頭圧痕顕著。	外面全体が煤ける。
Fig 50 329		〃 甕	29.0 23.0 25.2 ——	丸底気味の底部から内湾して立ちあがり，胴部上端部から僅かに外反して，口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は上方に肥厚して，口唇部は面をなす。胴部と口縁部との境に２条の沈線が巡る。	外面は，胴部上端から上は内・外面共に横ナデ調整を施すが，下は左下りの叩き調整を施し，底部は不定方向の叩き調整を施す。内面は，不定方向のハケ調整の後丁寧にナデ調整を施す。胴部内面に指頭圧痕を認める。	胴部内面は煤ける。底部内面に焦げ付きを認める。
330		鉄製品	全長 5.9 全幅 2.1 重量13.5ｇ	楕円形の環から4.3cm延び屈曲する。		馬具と思われる。
Fig 49 331	ＳＥ１ Ⅰ層 下 Ⅲ層	土師器 椀	17.0 6.6 —— 9.8	「ハ」の字状に外方に踏張る貼付輪高台を有す。体部は平底から稜をもって斜上外方に直線的に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面は横ナデ調整を施す。体部内面は摩耗が著しく観察不可能。	
Fig 47 332	ＳＥ１ Ⅳ層	〃 皿	10.4 1.2 —— 6.4	中央が僅かに凹んだ平底から外反気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面ヘラ切り。	
Fig 49 333	ＳＥ１ 床面直上	須恵器 椀	15.0 5.7 —— 6.0	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共ロクロ目顕著。体部外面は部分的に不定方向のナデ調整を施す。底部外面回転糸切り，内面に火襷を認める。	
Fig 52 334	ＳＤ１	土師器 椀	—— (2.0) —— 5.2	ベタ高台気味の平底から内湾して立ちあがる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面回転糸切り。	
335	ＳＤ11	須恵器 杯	—— (2.0) —— 7.0	底部外周端部に踏張る貼付輪高台を有す。端部は面をなす。	磨耗が著しく観察不可能。	
336		土師器 杯	13.9 4.6 —— 8.0	平底から内湾気味に斜上外方に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面不定方向のヘラ削りを丁寧に施す。底部内面ナデ調整を施す。	
337	Ｐ586	〃 皿	12.6 (1.7) —— ——	平底から斜上外方に直線的に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面ロクロ目顕著，内面は剥離が著しく観察不可能。	
338	Ｐ683	〃 皿	12.8 (1.8) —— 8.8	平底状の底部から僅かに外反して立ちあがり口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共丁寧な横ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切り。	
339	Ｐ1649	〃 杯	15.6 3.1 —— 6.4	平底から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面ロクロ目顕著，内面横ナデ調整。底部外面はヘラ切り。	
340	Ｐ588	〃 椀	—— (1.4) —— 7.0	平底から斜上外方に直線的に立ちあがる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
341	Ｐ591	黒色土器 杯	—— (1.4) —— 8.6	断面逆三角形の貼付高台を有す。平底から内湾して立ちあがる。	磨耗のため観察不可能。	Ａタイプ
342	Ｐ500	須恵器 椀	14.2 5.8 —— 6.8	ベタ高台から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	体部外面ロクロ目顕著，内面は横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	体部外面$\frac{1}{3}$下半及び底部外面は煤ける。
343	Ｐ116	鉄製品 釣針	全長 2.1 全厚 0.6 重量　2ｇ	扁平な棒軸からひねりをもって釣部を作り先端部に及ぶ。		針先のかえりはない。

第30表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 61 344	ＳＢ９ －Ｐ11	土師器 皿	12.0 2.1 —— ——	内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸くおさめる。体部外面下端に１条の沈線が巡る。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。体部外面に指頭圧痕を認める。	
346	ＳＢ11 －Ｐ14	〃 皿	12.0 (2.5) —— ——	内湾気味に立ちあがり，口縁部は直立気味に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。体部は内・外面共に指頭圧痕を認める。	
349	ＳＫ15	土師器 杯	7.7 2.0 —— 3.1	平底から外反して立ちあがり，口縁部は僅かに内湾して口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
350		〃 杯	7.8 2.0 —— 2.8	平底から外反して立ちあがり，口縁部は僅かに内湾して，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
351		〃 杯	7.7 2.2 —— 3.3	平底から外反して立ちあがり，口縁部は僅かに内湾して，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
352		〃 杯	10.2 3.7 —— 3.6	平底から外反して立ちあがり，口縁部は僅かに内湾して，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り及び板目痕を認める。	
353		〃 杯	8.9 3.3 —— 3.4	平底から外反して立ちあがり，口縁部は僅かに内湾して，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
354	ＳＫ18	〃 皿	12.0 (1.5) —— ——	内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	内面は横ナデ調整を施す。外面指頭圧痕顕著。	
355		須恵器 杯	—— (1.7) —— 11.1	断面箱型の貼付輪高台を有す。平底から立ちあがる。	内・外面共ナデ調整を施す。	
357	ＳＫ36	土師器 杯	12.3 3.8 —— 5.4	平底から外反して立ちあがり，口縁部は僅かに内湾する。口唇部は丸くおさめる。	内面はロクロ目顕著。外面は横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
358		〃 杯	11.6 4.0 —— 5.0	平底から外反して立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	内面はロクロ目顕著。外面は横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り及び板目痕を残す。	
361	ＳＤ10－Ａ	〃 杯	10.0 4.5 —— 4.2	平底から外反して立ち上がり，口縁部は僅かに内湾して，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。底部外面は回転糸切り。	
362	ＳＤ17	〃 杯	—— (1.4) —— 6.0	平底から外反して立あがる。	体部外面は横ナデ調整を施す，内面は剝離して観察不可能。底部外面は回転糸切り。	
363	ＳＤ18	瓦質土器 鍋	21.2 (11.8) —— ——	内湾して立ちあがり，口縁部近くに突帯を有す。口縁端部は内側に肥厚して，口唇部は面をなす。	口縁部は摘んで横ナデ調整を施す。胴部内面は右下りのナデ調整，底部内面は横ナデ調整を施す。外面は指頭圧痕顕著。	外面は全面煤ける。
364	ＳＤ19	〃 杯	4.7 1.7 —— 3.9	中央部が僅かに凹んだ平底から直線的に外反し，口唇部は丸くおさめる。	体部は内・外面共横ナデ調整を施す。	
365		〃 皿	16.7 4.4 —— 11.0	平底から内湾気味に立ちあがり，口縁部は外反し，端部は上方に肥厚する。口唇部は外傾して面をなす。	内面は横方向のヘラ磨き，外面は回転ヘラ磨きを施す。口縁端部は摘んで横ナデ調整を施す。	
366		瓦質土器 鍋	35.1 (6.5) —— ——	内湾して立ちあがり，口縁端部は僅かに内傾して口唇部は面をなす。断面三角形の貼付鍔を有す。	内・外面共指頭圧痕顕著	口縁部外面は２次焼成を受けて紅く発色する。
367	Ｐ103	土師器 皿	9.8 1.9 —— ——	内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	口縁端部内面は強いナデ調整で内傾する。外面は指頭圧痕顕著。	

第31表　遺物観察表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手　法	備　考
Fig 61 368	P 105	土師器 皿	11.4 1.8 —— ——	中央部が凹んだ底部から内湾気味に立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は摘んで強い横ナデ調整を施す。内・外面共指頭圧痕顕著。	
370	P 746	〃 羽釜	28.0 (4.5) —— ——	内湾して立ちあがり，口唇部より3.1cm下に断面三角形の鍔を付ける。口唇部は僅かに凹んで面をなす。	口縁部は内湾して，端部は内傾して，胴部外面は叩き調整，他は内・外面共横ナデ調整を施す。	
371	P 778	〃 杯	—— (2.4) —— 5.2	平底から斜上外方に僅かに内湾気味に立ちあがる。	体部は内・外面共ロクロ目顕著。底部外面回転糸切り。	
372	P 1135	〃 皿	10.0 1.9 —— ——	中央部が凹んだ平底から内湾気味に立ちあがり，口縁部は直上外方に直線的に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は摘んで横ナデ調整を施す。体部内・外面共にナデ調整を施す。全面に指頭圧痕を認める。	
373	P 1494	〃 皿	12.0 (2.3) —— ——	内湾気味に立ちあがり，口縁端部外面は段を有す。口唇部は丸くおさめる。	口縁端部は摘んで強い横ナデ調整を施し，爪による凹線が外面にみられる。体部内面は横ナデ調整を施す。内・外面共に指頭圧痕顕著。	
374	P 1544	〃 皿	11.4 1.8 —— 6.0	平底気味の底部から内湾して立ちあがり，口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸くおさめる。	口縁部は摘んで強い横ナデ調整を施す。内・外面共横ナデ調整を施す。外面に指頭圧痕顕著。	
375		〃 皿	15.0 (3.0) —— ——	内湾気味に立ちあがり，口縁部は直立気味に立ちあがる。口縁端部は内傾して，口唇部は丸くおさめる。	口縁部は摘んで強い横ナデ調整を施す。内・外面共に指頭圧痕が顕著。	
377	P 1802	瓦質土器 擂鉢	29.0 (9.0) —— ——	斜上外方に直線的に立ちあがり口唇部は外傾して面をなす。	口縁部は摘んで横ナデ調整を施す。	
378	P 1804	〃 小杯	4.4 1.8 —— 4.8	平底から斜上外方に段をもって立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。	体部外面は強い横ナデ，内面は不定方向のナデ調整を施す。底部外面は糸切り及び板目痕を残す。	全体的に形が歪む。

第32表　土錘・釘・砥石計測表

挿図番号	遺構番号	器　種	法量 全長 cm 全厚 cm 重量 g 孔径 cm	備　考	挿図番号	遺構番号	器　種	法量 全長 cm 全厚 cm 重量 g 孔径 cm	備　考
Fig 62 345	S B 9 －P 4	鉄製器 釘	4.2 0.4 3.1 ——	断面方形を呈す。	Fig 62 359	S D 5	鉄製器 釘	4.5 0.6 3.0 ——	断面方形を呈す。
Fig 61 347	S K 4	土錘	(3.1) (2.1) 7.8 (0.6)		360	S D 10	砥石	11.6 (6.2) 1130 ——	半分程破損する。三面使用。測面は特に滑かな面を有す。
Fig 62 348		鉄製器 釘	5.0 0.6 4.3 ——	断面方形を呈す。	369	P 409	鉄製器 釘	3.8 0.4 6.1 ——	断面方形を呈す。
356	S B 9 －P 4	〃 釘	6.7 0.8 13.9 ——	断面方形を呈す。	Fig 61 376	P 1711	土錘	(3.9) 1.1 4.3 0.5	
					Fig 62 379	P 1135	明銭 洪武通宝		表は「洪武通宝」，裏は「銭」の文字を認める。

ひびのきサウジ遺跡発掘調査
火山灰分析結果報告書

1990年1月19日

*** Grouping Data Sheet ***

90/01/17
16:27:28

Series Name : ﾄｻﾔﾏﾀﾞ ﾁｮｳ
Sample Name : ﾋﾋﾞﾉｷ ｻｳｼﾞ IIIｿｳ
Analist : Yamashita
Material : gl.
Immersion Oil: No.3.8 (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

Group. 1
1.4960 1.4965
Group. 2
1.5087 1.5091 1.5092 1.5095 1.5096 1.5097 1.5097 1.5098 1.5098 1.5098
1.5099 1.5100 1.5100 1.5101 1.5101 1.5101 1.5103 1.5104 1.5104 1.5105
1.5105 1.5107 1.5107 1.5107 1.5108 1.5108 1.5111 1.5118

		count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
Group. 1	:	2	1.4960	1.4965	0.0005	1.4963	0.0001	0.0000
Group. 2	:	28	1.5087	1.5118	0.0031	1.5101	0.0006	0.1562
Total	:	30	1.4960	1.5118	0.0158	1.5092	0.0036	-3.1330

*** Histogram *** * = 1

1.490	=<Nd< 1.491	0	
1.491	=<Nd< 1.492	0	
1.492	=<Nd< 1.493	0	
1.493	=<Nd< 1.494	0	
1.494	=<Nd< 1.495	0	
1.495	=<Nd< 1.496	0	
1.496	=<Nd< 1.497	2	**
1.497	=<Nd< 1.498	0	
1.498	=<Nd< 1.499	0	
1.499	=<Nd< 1.500	0	
1.500	=<Nd< 1.501	0	
1.501	=<Nd< 1.502	0	
1.502	=<Nd< 1.503	0	
1.503	=<Nd< 1.504	0	
1.504	=<Nd< 1.505	0	
1.505	=<Nd< 1.506	0	
1.506	=<Nd< 1.507	0	
1.507	=<Nd< 1.508	0	
1.508	=<Nd< 1.509	1	*
1.509	=<Nd< 1.510	10	**********
1.510	=<Nd< 1.511	15	**********
1.511	=<Nd< 1.512	2	**
1.512	=<Nd< 1.513	0	
1.513	=<Nd< 1.514	0	
1.514	=<Nd< 1.515	0	
1.515	=<Nd< 1.516	0	
1.516	=<Nd< 1.517	0	
1.517	=<Nd< 1.518	0	
1.518	=<Nd< 1.519	0	
1.519	=<Nd< 1.520	0	
1.520	=<Nd< 1.521	0	
1.521	=<Nd< 1.522	0	
1.522	=<Nd< 1.523	0	
1.523	=<Nd< 1.524	0	
1.524	=<Nd< 1.525	0	
1.525	=<Nd< 1.526	0	
1.526	=<Nd< 1.527	0	
1.527	=<Nd< 1.528	0	
1.528	=<Nd< 1.529	0	
1.529	=<Nd< 1.530	0	

*** Original Data Sheet ***

90/01/17
15:54:38

Series Name : ﾄｻﾔﾏｸﾞﾁｮｳ
Sample Name : ﾋﾋﾞﾉｷ ｻｳｼﾞ 音地
Analist : Yamashita
Material : gl.
Immersion Oil: No.3.8 (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

1.5082	1.5096	1.5104	1.5109	1.5116	1.5121	1.5111	1.5113	1.5115	1.5118
1.5149	1.5093	1.5105	1.5109	1.5114	1.5122	1.5135	1.5099	1.5102	1.5108
1.5111	1.5118	1.5125	1.5133	1.5108	1.5112	1.5117	1.5125	1.5134	1.5112

		count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
Total	:	30	1.5082	1.5149	0.0067	1.5114	0.0014	0.2340

*** Histogram *** * = 1

		0 10 20 30 40 50 60
1.500 =<Nd< 1.501	0	
1.501 =<Nd< 1.502	0	
1.502 =<Nd< 1.503	0	
1.503 =<Nd< 1.504	0	
1.504 =<Nd< 1.505	0	
1.505 =<Nd< 1.506	0	
1.506 =<Nd< 1.507	0	
1.507 =<Nd< 1.508	0	
1.508 =<Nd< 1.509	1	*
1.509 =<Nd< 1.510	3	***
1.510 =<Nd< 1.511	7	*******
1.511 =<Nd< 1.512	11	**********
1.512 =<Nd< 1.513	4	****
1.513 =<Nd< 1.514	3	***
1.514 =<Nd< 1.515	1	*
1.515 =<Nd< 1.516	0	
1.516 =<Nd< 1.517	0	
1.517 =<Nd< 1.518	0	
1.518 =<Nd< 1.519	0	
1.519 =<Nd< 1.520	0	
1.520 =<Nd< 1.521	0	
1.521 =<Nd< 1.522	0	
1.522 =<Nd< 1.523	0	
1.523 =<Nd< 1.524	0	
1.524 =<Nd< 1.525	0	
1.525 =<Nd< 1.526	0	
1.526 =<Nd< 1.527	0	
1.527 =<Nd< 1.528	0	
1.528 =<Nd< 1.529	0	
1.529 =<Nd< 1.530	0	
1.530 =<Nd< 1.531	0	
1.531 =<Nd< 1.532	0	
1.532 =<Nd< 1.533	0	
1.533 =<Nd< 1.534	0	
1.534 =<Nd< 1.535	0	
1.535 =<Nd< 1.536	0	
1.536 =<Nd< 1.537	0	
1.537 =<Nd< 1.538	0	
1.538 =<Nd< 1.539	0	
1.539 =<Nd< 1.540	0	

試料名	火山Gr含有率	含有重鉱物	火山ガラスの特徴
ひびのき サウジ 音地	80 %	斜方輝石 Opx 単斜輝石 Cpx 磁鉄鉱 Mt	火山ガラスの含有率が高く1種類のガラスで構成される。特徴的な濃い色付ガラスを含み、高い屈折率値をもつ
ひびのき サウジⅢ層	5～10%	同 上	2種類のガラスから構成される。

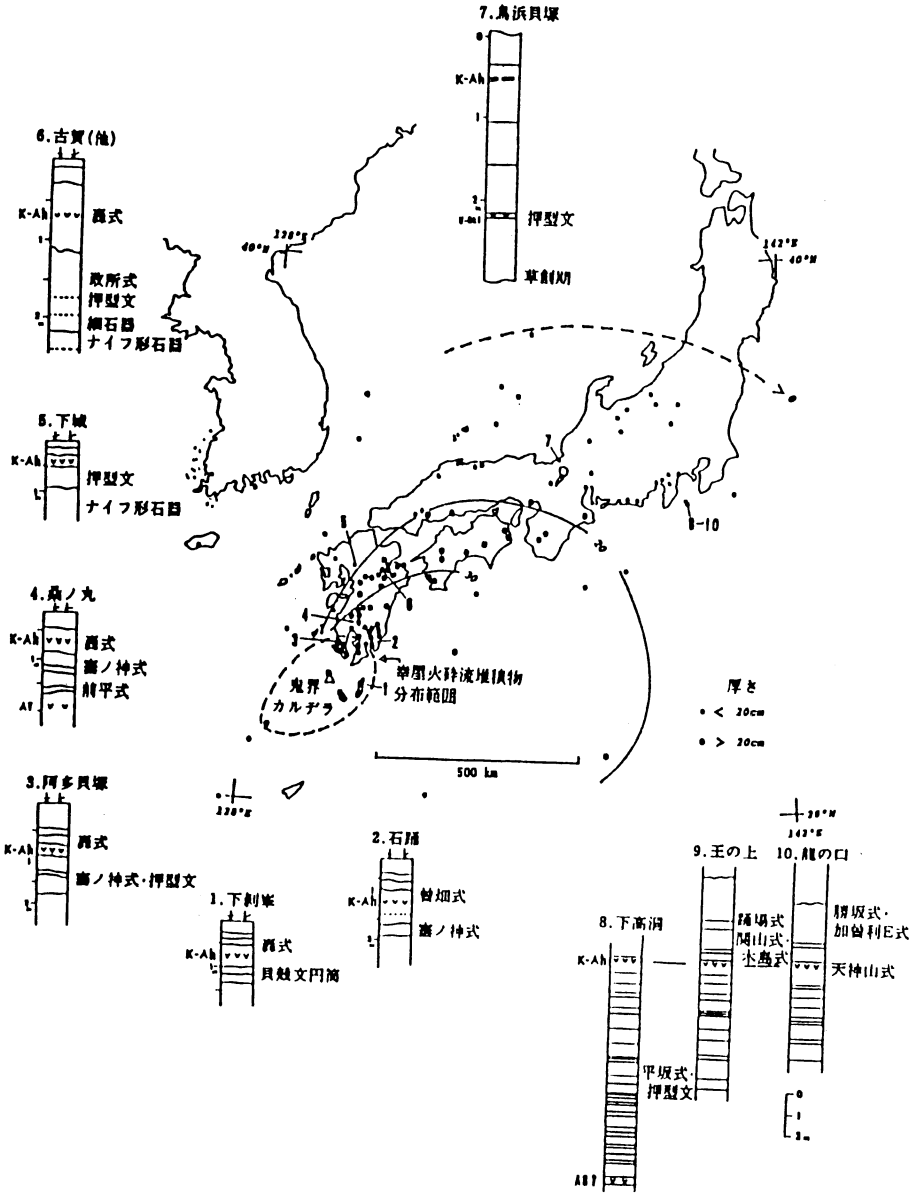


図1　鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の等厚線図および考古遺物との層位関係を示す柱状図
各柱状図は各遺跡発掘報告書に基づいて作成

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重雄（1984）：テフラと日本考古学 ― 考古学研究と関係するテフラのカタログ ― . 古文化財の自然科学的研究. 869-928.

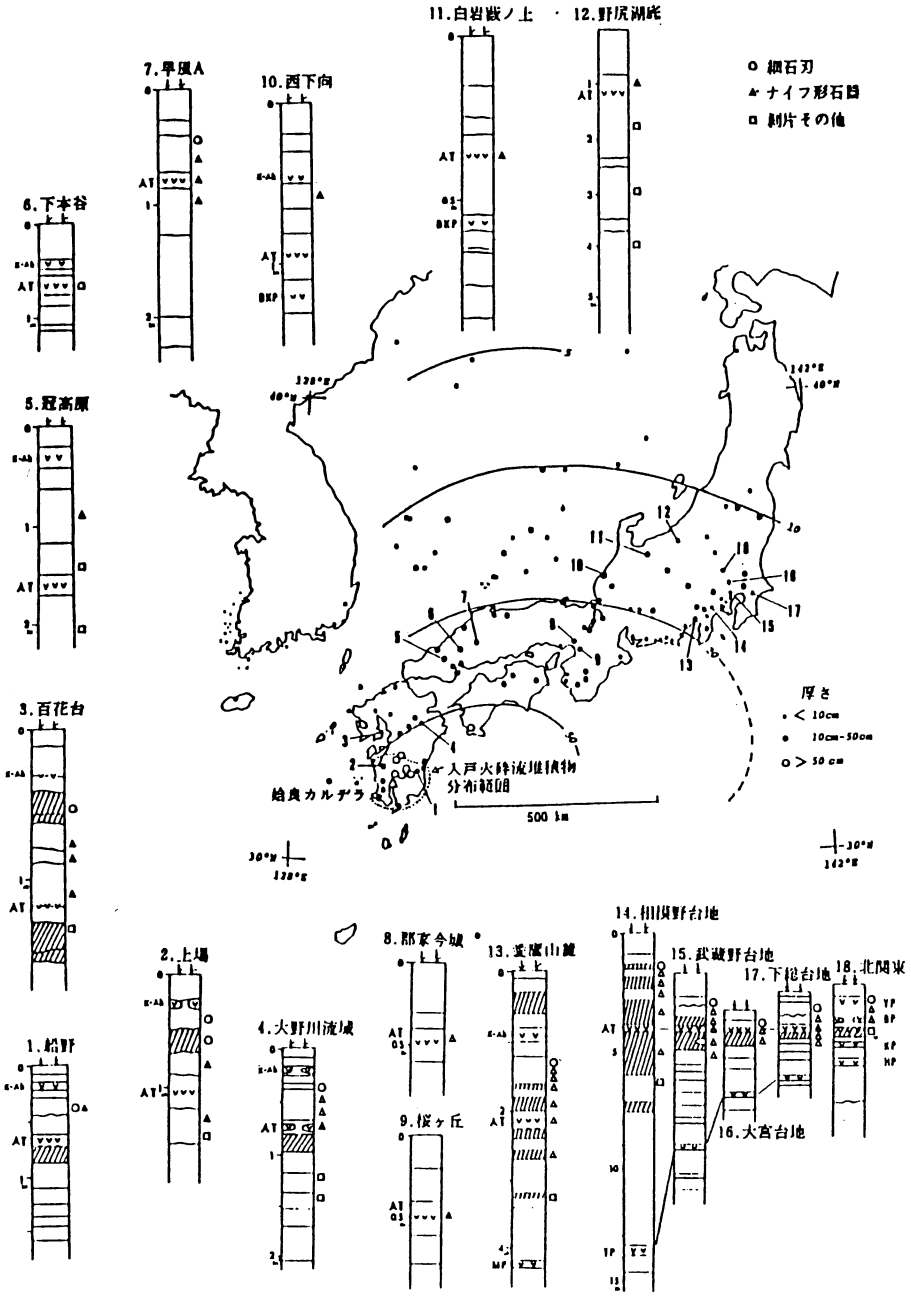


図２　姶良 Tn 火山灰（AT）の等厚線図および考古遺物との層位関係を示す柱状図
各柱状図は各遺跡発掘報告に基づいて作成

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重雄（1984）：テフラと日本考古学 ― 考古学研究と関係するテフラのカタログ ― ．古文化財の自然科学的研究．869-928.

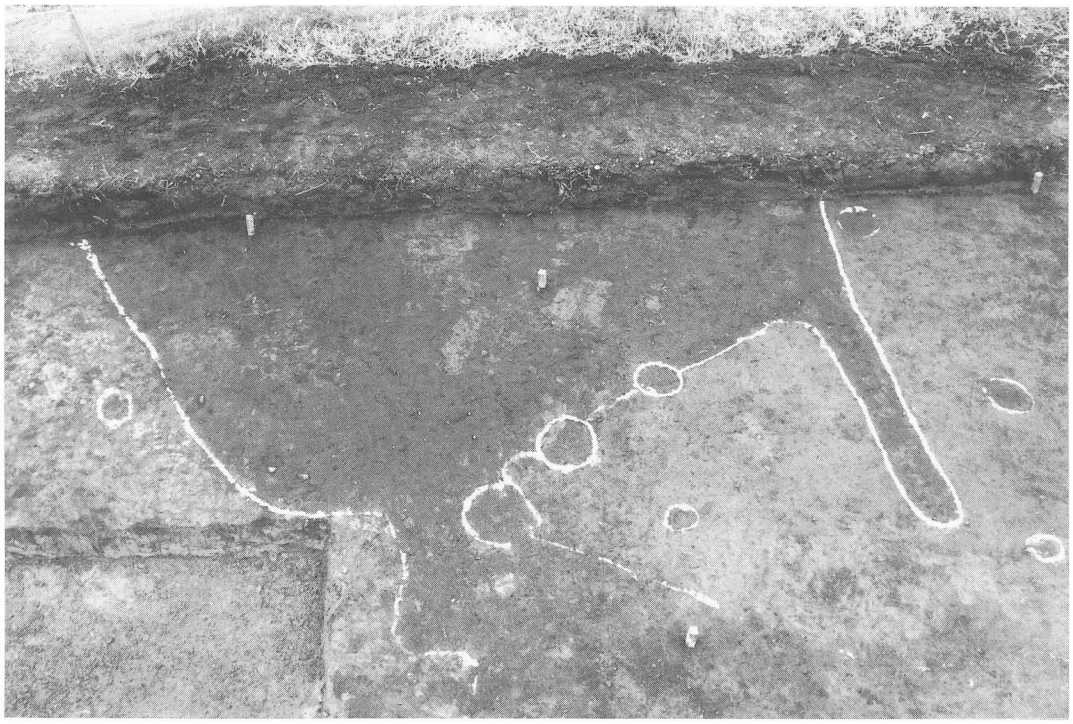
図　　版

A区　完掘状態(北から)

B区　完掘状態(北から)

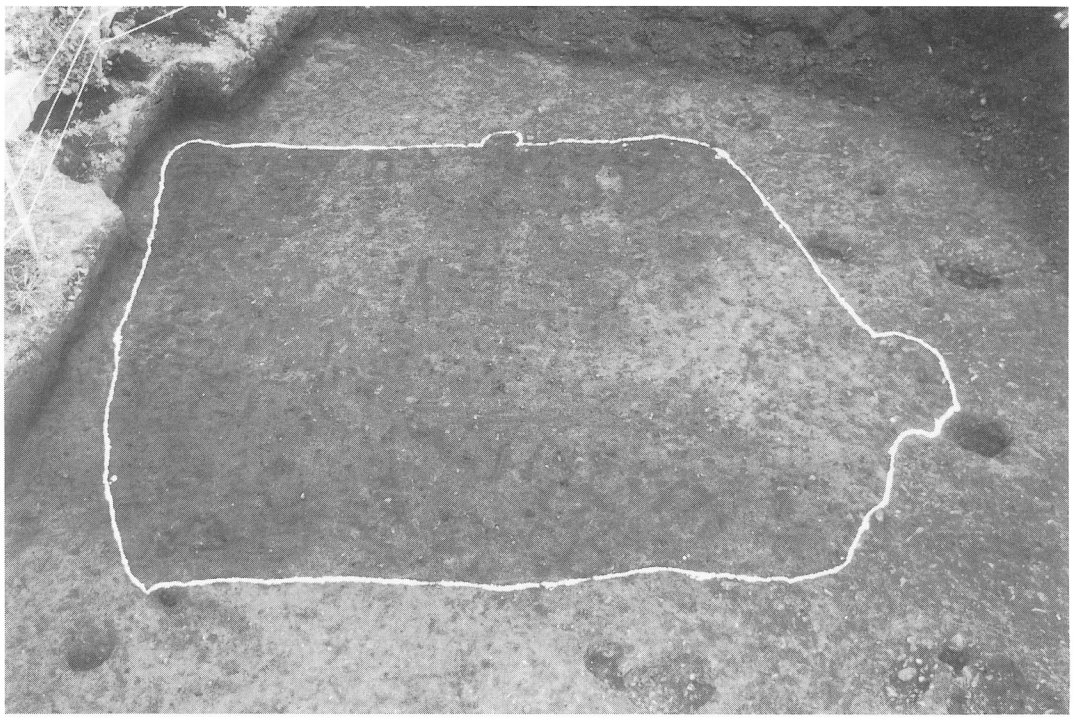
調査前全景(東から)

調査前全景(南から)

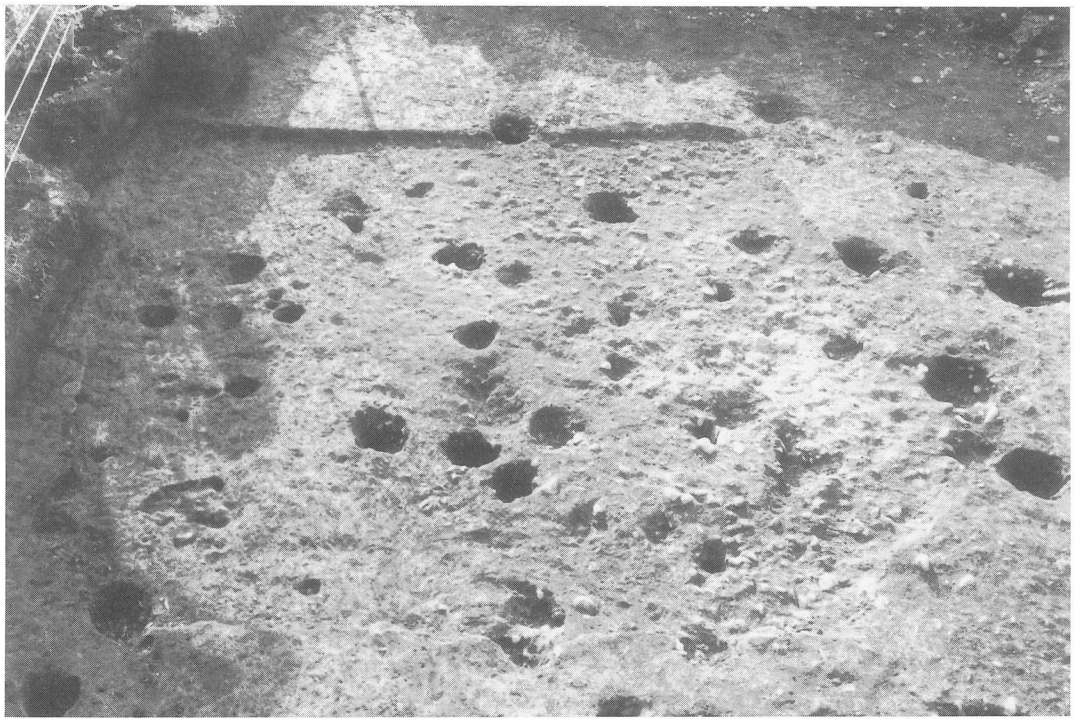


ST 1　検出状態(東から)

ST 1　完掘状態(東から)



ST 2　検出状態(東から)



ST 2　完掘状態(東から)